

令和3年度 日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究報告Ⅴ

身体リテラシー (Physical Literacy) 評価尺度の開発

— 第1報 —

公益財団法人 日本スポーツ協会
スポーツ医・科学委員会

身体リテラシー（Physical Literacy）評価尺度の開発 －第1報－

研究班長	内藤 久士（順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科）
研究班員	伊藤 静夫（東京マラソン財団）、岡出 美則（日本体育大学スポーツ文化学部） 春日 晃章（岐阜大学教育学部）、鈴木 宏哉（順天堂大学スポーツ健康科学部） 鄧 鵬宇（順天堂大学スポーツ健康科学部）、 松尾 哲矢（立教大学コミュニティ福祉学部）、森丘 保典（日本大学スポーツ科学部） 青野 博（日本スポーツ協会スポーツ科学研究室）
事務局	松田 郁加（日本スポーツ協会スポーツ科学研究室）

目 次

はじめに	内藤 久士	3
1. Physical Literacyをめぐる論議		
1-1. Physical Literacy (PL) をめぐる諸外国での論議	岡出 美則	4
1-2. 日本の保健体育科学習指導要領にみるPhysical Literacy	岡出 美則	33
2. Physical Literacyの定義と評価	鈴木 宏哉ほか	50
3. Physical Literacyとスポーツ政策		
3-1. カナダにおけるLTAD作成経緯とフィジカルリテラシー	伊藤 静夫	66
3-2. オーストラリアにおけるフィジカルリテラシーに関する取り組み	森丘 保典	73
4. 我が国におけるPhysical Literacyに関する実態調査	春日 晃章ほか	96
おわりに	内藤 久士	113

はじめに

内藤 久士¹⁾

生涯にわたる健康づくりにおける身体活動・運動・スポーツの重要性がますます高まっている。したがって、子どもから高齢者に至るまで、それらを促進（あるいは阻害）する要因をより深く理解することは重要である。この点に関して、近年、世界では身体活動の促進要因の1つとして、身体リテラシー（Physical Literacy）という概念が着目されている。

身体リテラシー（Physical Literacy）は、研究者や国によってそれぞれに特色をもった様々な捉え方があり、さらに時代とともにその考え方も変化している。したがって、身体リテラシー（Physical Literacy）は、世界共通の統一された概念ではないものの、概ね生涯を通じて身体活動を維持するための動機、自信、身体的資質、知識および理解などに関わることがらであり、日本では第3期スポーツ基本計画に子ども・若者の日常的な運動習慣の確立と体力の向上に関する記述の中で、「生涯にわたって運動やスポーツを継続し、心身共に健康で幸福な生活を営むことができる資質や能力」を「いわゆるフィジカルリテラシー」というように表現している。

しかし、日本では、身体リテラシー（Physical Literacy）がこれまで主に体育科教育あるいはアスリートの育成に関連した領域で扱われており、子どもから高齢者まで一般の人々を含む多くの人々を対象とした研究はあまりなされておらず、またこれを適切に評価する評価尺度はみあたらない。

そこで、本プロジェクト研究では、日本における全ての人々の身体活動やスポーツ活動の促進、また健康や体力の向上への取り組みにつながるような身体リテラシー（Physical Literacy）の評価尺度の開発を行うことを目的として、本研究プロ

ジェクトに取り組むこととした。新しく開発された評価尺度や質問紙が、運動適性テスト（日本スポーツ協会）をはじめ、身体活動・運動・スポーツに関わる様々な調査時に活用できるようになれば、子どもから高齢者に至る日本人の身体リテラシー（Physical Literacy）の現状が把握できるようになり、その向上に必要となる知識の啓発や活動を通じて生涯にわたる身体活動・運動・スポーツの促進につながることを期待される。

本年度は、この目的を達成するために、まず世界各国あるいは日本での身体リテラシー（Physical Literacy）に関わる議論について整理し、世界における主要な身体リテラシー（Physical Literacy）あるいはそれに相当するものの定義と、それに基づいて開発されている評価尺度についてレビューした。また、身体リテラシー（Physical Literacy）とスポーツ政策に関する諸外国のこれまでの時代的変遷についてもまとめた。その上で、日本版身体リテラシー（Physical Literacy）評価尺度の開発に向けた基礎資料を得ることを目的とし、ヨーロッパにおいて一般の人々が身体リテラシー（Physical Literacy）を自己評価するために作成された尺度（Physical Literacy for Life: PL4L）を用いて、オンライン調査を実施し、日本人の身体リテラシー（Physical Literacy）に関する実態を把握することとした。

なお、“Physical Literacy”を日本語でどのように表記するのかは、その定義等も含めて極めて重要な課題であるが、本年度の報告書では、“身体リテラシー”、“フィジカルリテラシー”、“Physical Literacy”、さらにそれらを併記するなど、それぞれの分担研究者に表記方法はまかせることとしあえて統一を行わなかったことをご了解いただきたい。

1) 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科

1. Physical Literacyをめぐる論議

1-1. Physical Literacy (PL) をめぐる諸外国での論議

岡出 美則¹⁾

良質の体育の実現に向けた国際的な取組の過程

Physical Literacy (以下、身体的リテラシー) は、今日、良質の体育の実現を求める動きと切り離して語ることはできない。そのため、身体的リテラシーを国際的な論議の中に位置づけるには、まずは、それが提案、普及されていく過程において、良質の体育 (Quality Physical Education) をめぐる論議がどのように展開されてきたのかを確認する必要がある。

表1は、体育、スポーツの質の充実に向けた国連、ユネスコ等の取り組みを示している。それは、みんなのスポーツを志向した1970年代以降の積み重ねの上に現在があることを示している。この取り組みが加速するのは、1999年以降であることの確認が重要である。それは、情報教育の導入等、教育改革が国際的に進められる中で、学校教育から体育の授業時数が削減されることへの危機感が国際的に共有され、その脱却に向けた国際的な取組が加速し始めた時期でもあった。同時にそれは、ミレニアム開発目標にみるように、スポーツを通じた平和と開発支援の動きがスタートする時期であり、平和構築と開発のための効果的なツールとしてのスポーツという認識が国際的に共有され出す時期でもあった。

このような認識が形成される過程では、1999年にICSSPE主導で第1回世界体育サミットが開催されるとともに、そこで採択されたベルリンアジェンダが第3回体育、スポーツ担当大臣等会議に提案されたこと、2000年に国連でミレニアム開発目標が採択されたことが重要な契機であったといえる。

特に、第1回世界体育サミットは、世界的にみられた体育の授業時数削減に対応し、体育の授業

時数確保に向けた参加者間の合意を体育、スポーツ担当大臣等会議に届けるという意味では重要な動きであった。そこでは、ベルリンアジェンダが採択されるとともに、良質の体育の必要性が次のように指摘されることになる。

- 1) 能力や性、年齢、文化、民族、宗教、社会的出自に関係なく、すべての子どもたちに対して生涯にわたり身体活動並びにスポーツに参加するために必要な技能、態度、価値観、知識並びに理解を提供するものである。
- 2) 心身の健全な発達を支援するものである。
- 3) 身体、身体活動、身体の発達と健康を主たる課題とする唯一の教科である。
- 4) 健全な発達に不可欠であり、成人が健康な生活を営むための基礎を生み出すための行動パターンや関心を子どもたちに培う。
- 5) 自分自身並びに他人の身体に対する尊敬の念を培う。
- 6) 健康の促進に向けて身体活動が担う役割を理解させる。
- 7) 子どもたちの自信や自尊感情を培うことに貢献する。
- 8) 競争、勝敗並びに協同、協同に対応できるように子どもを準備させることで社会性を発達させる。
- 9) 将来、スポーツ、身体活動、レクリエーション、レジャーといった、将来の期待できる労働市場で働くために必要な技能並びに知識を提供していく (ICSSPE, 1999)。

これらの提案は、一方では、体育をめぐる危機的状况に関する調査結果を踏まえつつ、世界各国の協同を促した点で重要であった。1978年に体育・スポーツ国際憲章がUNESCOにより採択され、身体活動並びにスポーツへのアクセスがすべ

1) 日本体育大学

表1 ユネスコによる良質の体育の実現に向けた取組の過程

年	出来事
1952	ユネスコがスポーツ振興活動を開始
1976	第1回体育・スポーツ担当大臣等会議（パリ）、体育・スポーツ国際憲章起草
1978	ユネスコ総会において体育・スポーツ国際憲章が承認される。体育・スポーツ間政府間委員会設立。
1988	第2回体育・スポーツ担当大臣等会議（モスクワ）
1999	第1回世界体育サミット（ベルリン）・ベルリン・アジェンダ採択。
1999	第3回体育・スポーツ担当大臣等会議（プンタ・デル・エステ）、ベルリン・アジェンダの承認。
2000	国連 ミレニアム開発目標の採択
2005	第2回世界体育サミット（マグリゲン）
2005	体育・スポーツ国際年
2005	第4回体育・スポーツ担当大臣等会議（アテネ）、アンチ・ドーピングに関する国際協定締結に向けた交渉プラットフォーム作成
2006	良質の体育、スポーツに関するユネスコセミナー
2013	第5回体育・スポーツ担当大臣等会議（ベルリン）、ベルリン宣言採択
2015	ユネスコによる良質の体育実施に向けた政策指針提案
2015	ユネスコによる体育・身体活動・スポーツに関する国際憲章の採択
2017	第6回体育・スポーツ担当大臣等会議（カザン）
2019	第1回カザンプラン実施に向けたアフリカ教育省会議

ての人々の人権であることが謳われたとはいえ（UNESCO, 1978）、現実には体育の授業時数の削減現象が学校教育の場で進行していたのであり、このような状況は現在でも解消したわけではなく（UNESCO, 2014）、改善に向けた継続的な取組が進められている。それだけに第1回世界体育サミットはこの状況を打破する試みの必要性が世界レベルで共通認識される契機となったといえるためである。

そして2013年にベルリンで第5回体育、スポーツ担当大臣等会議が開催され、Designed to Moveが紹介されるとともに、ベルリン宣言が採択されることになる。さらに、2015年にはUNESCOにより良質の体育実施に向けた政策指針が提案されるとともに、体育、身体活動並びにスポーツに関する新国際憲章が提案がなされることになる。さらには、2017年には第6回体育、スポーツ担当大臣等会議においてカザンアクションプランが採択され、2019年にはそのフォローアップ行動としてアフリカにおいて、アンタナナリボ宣言が採択されることになる。

このような一連の動きの活性化は、2000年以降の持続可能な開発目標の開発、実行に向けた動き

とも無関係ではない。2000年には国連においてミレニアム開発目標が採択され、2005年がスポーツと体育の国際年とされることになる。この過程では、スポーツは持続可能な開発と平和に貢献し得る効果的なツールとして評価されていくことになる。実際、スポーツと体育の国際年のプレスリリースにおいて、開発と平和のためのスポーツ国連事務総長特別顧問アドルフ・オギ事務次長は、次のメッセージを残している。

「一スポーツと体育の国際年2005で、何を達成しようとお考えですか。

スポーツと体育を教育全般、健康、開発そして平和に結びつけるための基盤を各国に提供することが重要です。今日の研究では、身体を動かす機会が減った私たちの生活に質と時間的余裕を持たせるために、スポーツと体育を定期的実践する必要があることが明らかになっています。

スポーツと体育の効用に対する認識を高めるためには、明らかになった科学的データに基づいてこれを推進するとともに、政治家の関心を引かなければなりません。

一貧困、飢餓、紛争など、取り組むべきより重要

な問題があるのではないのでしょうか。

そうは思いません。スポーツは私にとって、世界のもっとも差し迫った問題から関心をそらすようなテーマではありません。それどころか、スポーツは革新的かつ現実的な解決策を提示することで、緊急を要する課題に対する関心を高める役割を果たすのです。

世界的なスポーツ連盟やスポーツ関連産業には、人間性の向上に貢献する用意があります。スポーツという世界共通語は依然として、国際関係改善への取り組みから外されることがあまりにも多くなっています。大きなスポーツ競技会は、現代でもっとも人気の高いイベントの一つです。スポーツ関連産業の成長には目覚ましいものがあります。このことは、スポーツが社会に大きな影響を与えるだけでなく、国連憲章の精神に沿った肯定的な価値観を広めるうえで、大きな可能性を秘めていることも物語っています。

人間開発や貧困対策、さらには健康増進への取り組みは、スポーツの積極的な活用によって大きく促進できるでしょう。」(国連, 2005)

また、スポーツを通して達成可能な平和と開発に関する便益が、ミレニアム開発目標と関連づけて示されている。そこでは、1) 健康促進と疾病予防、2) 障がいを抱える人々の包摂とウェルビーイングの促進、3) 社会的包摂の促進、争いの予防並びに平和の構築、3) 子どもと青少年の発達と教育の強化、4) ジェンダーの平等性促進と女子と女性のエンパワメント (Right to play) が示されている。

この過程では、スポーツの持つ教育的な価値が繰り返し指摘されると同時に、スポーツが抱える問題も指摘され続けてきた。それは、2013年の第5回体育、スポーツ担当大臣等会議において採択されたベルリン宣言においても明記されている。生涯にわたる健康な生活の実現や包摂等の社会的な価値の共有は前者の例であり、ドーピングや汚職等のスポーツの質に関わる問題は、後者の例といえる (UNESCO, 2013a)。

身体的リテラシーがホワイトヘッドにより提案され、英語圏の国際社会において支持を受けてい

く時期は、まさに、体育の危機を乗り越え、体育やスポーツ、身体活動が社会にとってどのような価値を持つのかを論理的に主張することを求められた時期であったといえる。しかも、この時期は、高度に競技化されたスポーツはもはや学校体育のモデルとはなり得ないという主張が明確にみられた時期である一方 (Kirk, 2004)、学校はスポーツの価値をすべての人々に伝えていく最も効率的な機関であるとの認識が共有されていった時期でもあった。

なお、日本では2017年に策定された第二期スポーツ基本計画においてスポーツを通じた開発という視点がスポーツ政策に初めて明示されたと言われている (神谷, 林, 2020p.93)。

Whiteheadによる身体的リテラシー提案の意図

身体的リテラシーという概念は、2001年の国際女子体育連盟大会 (Congress of the International Association of Physical Education and Sport for Girls and Women) におけるMargaret Whiteheadの提案に起因している。彼女は、そこで体育教師にとっての身体的リテラシーの重要性を慎重に指摘した (Whitehead, 2010, p.XV)。

彼女がこのような提案をするに至る背景には、イングランドにおけるナショナルカリキュラム内に位置づけられるための体育の目標をめぐる論議がみられた (Whitehead, 2001, p.127)。また、全体的な存在並びに相互作用的な存在としての人間の属性により適した概念として、masteryやcompetenceに代わりliteracyを用いることにしたという。同時に、コンピテンシーがあくまでリテラシーの下位概念として用いられている。このような彼女の提案の契機は、Whiteheadが1987年に執筆した博士論文であった。それは、サルトルとメルロ・ポンティに依拠した体育の正統化をめぐる論であった (Whitehead, 2001, p.128)。

実際、彼女自身の言葉を借りれば、身体的リテラシーの論議の素地を彼女自身が1987年に自身の学位論文で築いているという。また、1991年にはSport Councilが体育が運動の中でリテラシーを生み出すことを指摘したという。しかし、身体的リテラシーそのものをめぐる論議が最初に行われ

たのは、1993年であったという。彼女自身が、身体的リテラシーが、人間の生活にとって本質的で完全な経験であると主張したのであった。また、身体的リテラシーが身体運動以上のものであり、そこには環境を読み、それに効果的に反応することであると明言したのであった（Whitehead, 1993, p.130）。

そのWhiteheadは、身体的リテラシーを「個人の才能に相応しく、身体的リテラシーは、生涯にわたり身体活動を営むために必要な動機、自信、身体的コンピテンシー、知識並びに理解である。」（Whitehead, 2010, p.5）と定義した。また、その

要素として、次の6点をあげた。

- 1) 本来身につけている運動の可能性を生活の質の改善に向けて活用しようとする動機
- 2) 身体的な挑戦が求められる場面でバランスを取り、効率のかつ自信をもって動く能力
- 3) 身体活動を営む環境状況を読み取り、対応する能力
- 4) 自分に対する自信並びに自尊感情
- 5) 他人に対する感受性を備え、自分を表現し、他人と関わる能力
- 6) 自分自身のパフォーマンスに影響を与える要因についての理解（Whitehead, 2010, pp.12-

表2 身体的リテラシーを身に付けた人物が示す属性（Whitehead, 2019 ,p.12）

属性 身体的リテラシー獲得に向けた独自の道を歩む個人は、次のような属性を示すようになる。	簡易化した属性の表記 身体的リテラシー獲得に向けた独自の道を歩む個人は、次のような属性を示すようになる。
A 身体活動に参加することへの動機、興味と熱意を持って身体活動に関わる課題に取り組もうとする動機、並びに身体活動を営んでいる際に直面する挑戦的な場面でそれを乗り越えようとする動機を身に付けている（情意的領域）	身体活動に参加しようとする（情意的領域）
B 新しい課題や活動の学習に際して自分は上達するという自信をもっていること並びにそのような期待は実現されるという考えを身に付けている（情意的領域）	多様な身体活動に参加する際に自信をもっている（情意的領域）
C 幅広く、多様で挑戦的な状況の中でバランスが取れ、効率的で効果的な動きができる（身体的領域）	様々な身体活動を効率的かつ効果的に行うことができる（身体的領域）
D 物理的環境を取り巻くすべての要因を思慮深く、感受性豊かに理解すること、想像力と創造性をもって適切にそれに対応すること（身体的領域）	様々な身体活動で求められる内容やその可能性を意識する（身体的領域）
E 協同的な状況並びに競争的な状況の双方において身体活動を行う際に主体的に、また人と一緒に取り組む能力を備えていること。（身体的領域）	様々な身体活動を営む場面で主体的かつ他の人と一緒に行動することができる（身体的次元）
F 運動のパフォーマンスに影響を与える本質的な質を特定し、それを言葉で表現する能力を身に付けている（認知的領域）	多様な身体活動を行う際にパフォーマンスを改善する方法を知っている（認知的領域）
G 豊かでバランスの取れたライフスタイルを尊重しながら、全体的で、身体化された健康になるための諸原理を理解している（認知的領域）	身体活動が安寧を向上させる方法を知っている（認知的領域）
H 生活を豊かにするために必要な身体活動を選択することに對し責任を負う自信や自尊感情を身に付けている（情意的並びに認知的領域）	積極的に身体を動かす生活スタイルを営むための計画を立てたり、それを実行するために必要な自信を備えている（情意的領域並びに認知的領域）

*情意的領域は、AとBに関連する。身と体的次元は、C、D、Eに関連する。認知的領域は、FとGに関連する。

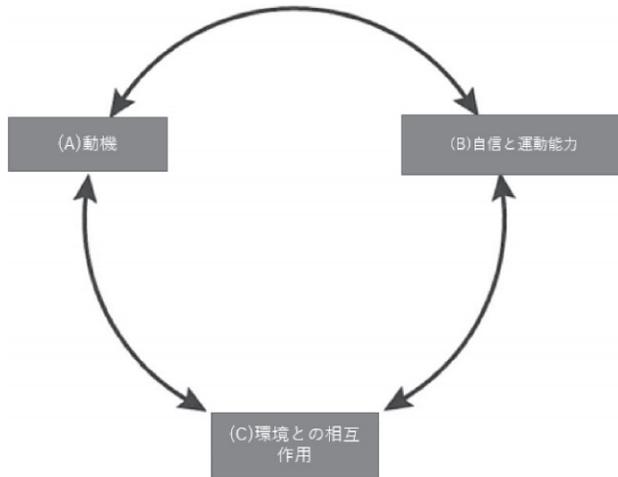


図1 身体的リテラシーの主要な属性間の関係 (Whitehead, 2010, p.15)

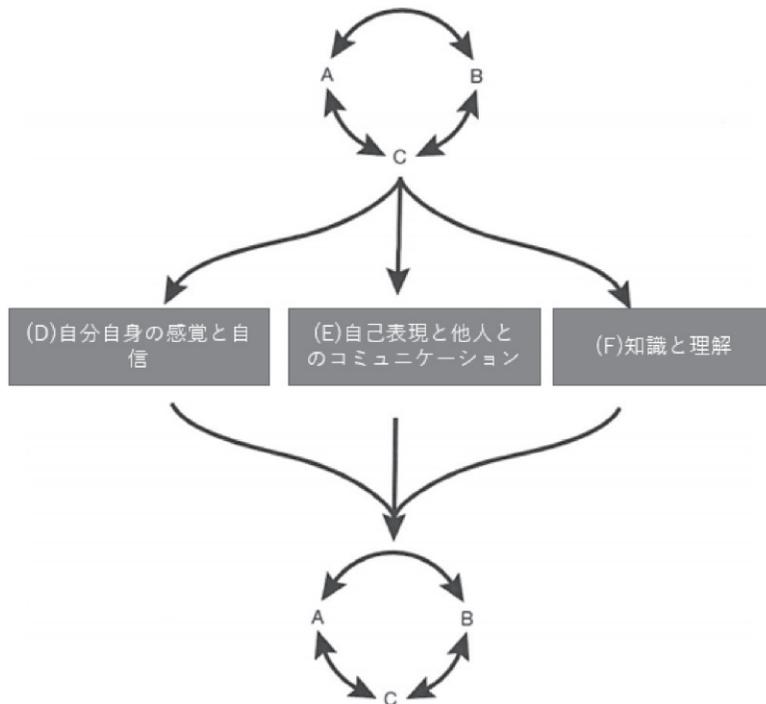


図2 身体的リテラシーの全ての属性間の関係 (Whitehead, 2010, p.16)

14).

彼女はさらに、身体的リテラシーを身につけた人物が示す属性を表2並びに図1～2のように示している。上記5)において他人と関わる能力が明示されていたが、ここでは、社会的領域が明

示されていないことが特徴的である。彼女の指摘する心身二元論の脱却という問題意識との関係とも考えられるが、この点は国際社会における受け止め方とは異なる彼女の記述ともいえる。

もっとも、彼女自身は、身体的リテラシーとい

う概念が、多様な関係者を互いに結びつける可能性を強調している。学校における体育に端を発した提案ではあったが、身体的リテラシーという概念を用いることで、多様なステークホルダーとの関係が生み出されていくという認識である (Whitehead et al., 2018)。

彼女が身体的リテラシーの概念を提案したのは、2001年が初めてではない。すでに、1993年に、メルボルンでの同大会でもそれを提案している (Robinson and Randall, 2017)。また、身体的リテラシーという名称そのものは、彼女が初めて提案したわけでもない。

身体的リテラシーは、Whiteheadの提案と言われるが、歴史的にみると、すでに19世紀末には使用され、それ以降も用いられてきた。

Whiteheadの身体的リテラシーは、literacyという言葉を用いることで、健康、教育、スポーツ並びにレクリエーションの政策作成の基礎となる概念と目されるようになった。また、身体的リテラシーが様々なレベルで急速に採択されるようになったことで、それが運動を抑圧してきた文化を備えた社会から運動を豊かに実施する文化を備えた社会へと変革する潜在的な可能性に関心が示されるようになっていく。実際、2018年にはWHOの身体活動に関するアクションプランの積極的な社会を生み出すという最初の目標にはhealth and physical literacyとphysical literacyが組み入れた。また、The Physical Activity Action Plan for Canada (2018) では万人のための身体活動を促進する5つの原理の最初にphysical literacyが位置づけられた。このように、身体的リテラシーは、多くの国で健康な人口を増加させる重要な要因として見なされるようになっていくとともに、そのようなものとして知性化の時代にとり重要な役割を担うようになっていく (Cairney et al., 2019, p.79)。

実際、身体的リテラシーが最初に使用されたと考えられる一つの例は、1884年のアメリカ工兵隊 (Army Corps of Engineers) に関連した記述であった。また、1920年代には多くの体育教師達が機械化の進行に伴う生活スタイルの変化への危機感に対応してそれを用いるようになる。そこに

は兵士のリクルートへの準備をとという側面も込められていた。そのため、身体的リテラシーでは体力の重要性が強調されていた。また、都市化した生活での健康被害を踏まえ、学校がphysical literacyとmental literacyに責任を持つことが求められた (Cairney et al., 2019, p.80)。加えて、自動車の普及に伴う交通手段の変化やインターネットの普及は、身体性や文化を損なっていくことになる。その結果、学校はmental literacy以上にphysical literacyに責任を持つべきであるという指摘がみられるようになった。1930年代にも、physical literacyを巡っては今日と同様の状況が報告されている。しかしこの時代のphysical literacyは認知的領域や情意的領域への貢献を認知されていないものであり、アメリカでは、他のリテラシーと同等の評価を与えられていない概念であった (Cairney et al., 2019, p.80)。

他方で、1930年代には、身体的リテラシーの概念が多様化していく。例えば、身体的リテラシーは身体以上のものであるといった指摘や身体のみでは不十分であるという指摘、さらには、健康になるように行動できるための知識や能力双方を含むものであるといった指摘や運動以上のものであるといった指摘を生み出した。特定の概念定義がみられないこの時期には、全体としての身体的リテラシーが発達するというよりは、特定の要因に焦点化した指摘がみられるに留まった。それが、今日に至る概念の混乱を生み出している。また、体育は身体的リテラシーと同一視されたり、体育が身体的リテラシーを発達させる鍵となるという指摘もみられた。1930年代には身体的リテラシーは、児童の発達に重要な役割を果たすという認識がみられたとはいえ、そこには身体的リテラシーがカリキュラム内にどのように位置付くのかを示す、特定のモデルが示されていたわけでは無かった。

1945年当時でもbasic human movement skillsが身体的リテラシーの基礎を生み出すと考える研究者もみられた。しかし、当時は、身体的リテラシーを全体として発達させる方法に関する論議はみられなかった。第二次大戦後もmovement skillsの発達を身体的リテラシーと関連づけてい

た。また、フィットネスと身体的リテラシーを区別していた (Cairney et al., 2019, p.81)。他方で1930年代から20世紀半ばまでの時期には、身体的リテラシーは身体活動に取り組むだけでなく、社会に積極的に関与する能力と考えられるようになっていった。このように考えると、身体的リテラシーがイギリス生まれの概念だという理解は間違いであると言える。他方で、Whiteheadの提案とアメリカのこれまでの提案には重要な違いが何点かある。まず、最も顕著な点は、自信と動機を強調している点である。この心理的特徴は、彼女が中核的な要素として定義した。身体的リテラシーは、歴史的に見ると、近代化に伴い派生する疾病を無くし、よりよい健康と広範な社会参加を可能にするための道具と見なされてきた。しかし、Whiteheadは、そのような見解に与せず、他の何かの目標達成に必要な道具とみなすのではなく、実存と同じもの、人間になるために必要なものとみなした (Cairney et al., 2019, p.82)。

このように身体的リテラシー概念は、歴史的、社会的文脈内で多様な意味を付与されてきた。しかし、Whitehead以前は、運動不足や社会参加を促すための体力や運動技能を包括してきた。これに対し、Whiteheadは、自信や動機といった心理的能力をその中に取り込んだ点とそれを何かを達成する手段では無く、人間の実存に根ざすものとして提案した点で過去とは異なる概念を提案した (Cairney et al., 2019)。

他方で、身体的リテラシーは、literacyという言葉を用いることで、健康、教育、スポーツ並びにレクリエーションに関わる政策作成の基礎となる概念と目されるようになった。また、身体的リテラシーが様々なレベルで急速に採択されるようになったことで、それが運動を抑圧してきた文化を備えた社会から運動を豊かに実施する文化を備えた社会へと社会を変革する潜在的な可能性を秘めていることに関心が示されるようになっていく。実際、2018年にはWHOの身体活動に関するアクションプランの積極的な社会を生み出すという最初の目標にはhealth and physical literacyが組み入れられた (Cairney et al., 2019)。

身体的リテラシーの重要な点は、この概念を生

涯に渡り適用したことである。また、この概念が主張した最も重要な定義は、生涯に渡り身体活動を営み、それを価値づけるための動機、自信、身体的能力、知識並びに理解度をあげたことであるとされる (Keegan et al., 2019, p.106)。

そのWhiteheadは、身体的リテラシーを「個人の才能に相応しく、生涯にわたり身体活動を営むために必要な動機、自信、身体的コンピテンシー、知識並びに理解である。」(Whitehead, 2010, p.5)と定義している。また、その要素として、1) 本来身につけている運動の可能性を生活の質の改善に向けて活用しようとする動機、2) 身体的な挑戦が求められる場面でバランスを取り、効率のかつ自信をもって動く能力、3) 身体活動を営む環境状況を読み取り、対応する能力、4) 自分に対する自信並びに自尊感情、5) 他人に対する感受性を備え、自分を表現し、他人を関わる能力、6) 自分自身のパフォーマンスに影響を与える要因についての理解から構成されている、と説明している (Whitehead, 2010, pp.12-14)。

なお、アメリカではAAHPERDが、2013年度のナショナルスタンダードに改訂において、これまで用いていたphysically educated personに代わりphysical literate individualsを用いるようになる。そこでは、身体的リテラシーが次のように説明されている。

「身体的リテラシーとは、他教科で言われるリテラシーと同様であり、運動に関するコンピテンシー、運動の概念に関する理解、体力の保持増進、身体活動を営んでいる場で求められる社会的責任並びに楽しさや自己効力感を積極的に身体活動を行う生活を営むために適用できることを意味している。」(AAHPERD, 2013a)

Whitehead (2010, p.6) は、competence, ability, skillではなく、literacyを用いる。彼女は、その理由として、1) competence, ability, skillは純粋な身体性に結びついた概念から離れること並びに2) 二元論的な態度を延命させることをあげている。また、literacyを最も好ましいと判断する理由として1) 二元論的アプローチから距離を取れること、2) 行為すること、解釈すること、反応することと理解することを含んだ概念であり、一



図3 身体的リテラシーの国際的な受入状況

元論の考え方に一致すること，3) 人間の認識と感情という観点を含みつつ，全体的な取り組みの中に位置づけられること，4) 環境との相互作用を示すこと，5) 誰もが自分の能力に応じてこの属性を達成できることを示す，非排他的な意味をもつこと，をあげている（岡出，2021，pp.57-58）。

身体的リテラシー概念の国際的な受入動向

Whiteheadの提案は，イギリスにおける提案であった。しかし，上述したように，アメリカにおいてもその概念が採択される等，イギリス国外でも受け入れられるようになってきている。Whitehead (2019)のPhysical literacy across the Worldでは，身体的リテラシーが世界にどのように受け入れられているのかが紹介されている。そこで取り上げられている国，地域は，オーストラリア，カナダ，ヨーロッパ大陸，インド，ニュージーランド，スコットランド，アメリカ，ウェールズである。

もっとも，これは，彼女自身が執筆を依頼できる人物がいた国という制約の結果であり，身体的リテラシーがこれらの国以外に知られていないことを意味するわけではない。しかし，その認知度には地域的な偏りがあることを示唆していることも事実であろう。アジアやアフリカ，ラテンアメ

リカの国がそこに含まれていないことは，その例である。図3は，それを視覚的に確認する資料となっている。国を超えて共通に受け入れられている提案と各国が自国の文脈に合わせて受け入れている提案がみられる。

もっとも，同著の各国の執筆者は，各国の身体的リテラシーの中心的推進者であり，彼らの所属は大学や行政のスポーツ部門，スポーツ組織，スポーツ財団，そして公衆衛生関係者と多彩である（Whitehead, 2019, pp.99-100）。それは，この概念に対する多様な期待の反映であるとともに，そこにはその期待を支える多様な事情が存在していることを示唆している。

身体的リテラシーに対する国際的な関心の拡がり，ICSSPEが2013年にJournal of Sport Science and Physical Education, Vol.65.においてPhysical Literacyを特集していることから確認できる。同特集においても各国，地域の身体的リテラシーをめぐる動向が報告されている。その国，地域は，ウェールズ，アイルランド，スコットランド，オランダ，チェコ，スウェーデン，マルタ，アフリカ，オーストラリア，カナダ，ヴェネゼラ，アメリカとなっている。また，関連するテーマとして体育の授業，誕生から幼児期，小学校期，中等教育期，成人，コーチング，初等中等段階の

体育教師教育、評価と多岐にわたっている。また、Journal of Teaching in Physical Educationは、2019年にSpecial Issue on Physical Literacy: Evidence and Interventionを組んでいる。

なお、身体的リテラシーに関する国際会議は2008年に初めて開催され、2回目は2011年、第3回が2013年に開催されている。そして、第3回目の会議のクロージングで国際的な協会設立について論議がなされ、International Physical Literacy Association (IPLA) が設立された。

その意味では身体的リテラシーは、2000年台に入り、国際的な認知を受けるようになってきた概念といえる。

身体的リテラシーの提案を受け入れることのメリット

身体的リテラシーの取り入れ方は、国により異なる。他方で、次の3点の共通点がみられる。

- 1) 4つの領域を包括(身体、認知、社会、情意)
- 2) 年齢を超えて生涯にわたる関与を示唆する
- 3) 他の領域との関係を生み出しやすい：健康、リテラシー、産業、高齢者

他方で、推進主体や対面している課題、文化的背景の違いから身体的リテラシーの構成要素の表記や強調される構成要素には違いが生み出されている。例えば、アメリカ、オーストラリア、カナダでは、その定義や構成要素、表記には違いがみられる。

また、Whitehead自身はaffective, physical and cognitive, all three domains (Whitehead, 2019, p.75)と明記するように、affectiveとsocialを区別していない。また、この立場は、提案の当初から変更されていない。これに対してユネスコのQPEの定義に見るように、情意的領域と社会的領域を明示する定義が採用されるようになっている。

このように、PLの受入方は国により異なる。また、Whitehead自身は、そこにはいくつかの誤解があることを指摘している。次の指摘である。

- 1) 身体的リテラシーは性行 (disposition)、あるいは態度 (attitude) であり、人生のある局面における個人が抱いている考え方 (personal perspective on an aspect of life)

である。そのため、「Are you physically literate」といった質問が不適切である。したがってIPLAは、進歩を評価するというよりは旅として描く方が好ましいと提案している (Whitehead, 2019, p.74)。

- 2) Whitehead自身は、自らが一元論に立つことを強調し、affective, physical and cognitiveの all three domainsが等価であり、互いに関連し合っている (Whitehead, 2019, p.75) と明記するように、領域間の等価性を強調するとともに、affectiveとsocialを区別していない。他方で、身体的リテラシーを増進させる過程からみた場合、動機付けを高めることが重要であるとも指摘している (Whitehead, 2019, p.75)。

以下では、この点を前提に、アメリカ、カナダ、オーストラリアでのその受け入れられ方について確認したい。

アメリカにおけるPLの受入方

身体的リテラシーという概念は、アメリカの学術論文では80年以上まえからみられた。しかし、その概念が見直されたのは近年である。その背景には、他国と同様、子どもの肥満や運動しなくなった人々の問題がある (Whitehead, 2019, pp.200-201)。

アメリカの場合、オーストラリア、カナダ、イギリスで展開された身体的リテラシーの普及運動に追随する形で学会、教育機関並びにスポーツ、リクリエーション、並びに他の身体活動に関連する組織にこの概念が採択されるようになっていった。

例えば、アメリカオリンピック委員会 (USOC) の支援のもとで国内の主要なスポーツ団体が長期的な選手育成との関係でこの概念を採択するようになった。また、Society of Health and Physical Educators (SHAPE) は2014年のナショナルスタンダードの改訂に際してこの概念を導入した。USOCとSHAPEは各々独自の取り組みを展開していたが、今世紀初頭にはいずれも身体的リテラシー関連の要素を取り入れるようになった。さらにThe American Institute (2015) による Proj-

表3 アメリカの体育ナショナルスタンダードに見る目標記述の変化 (NASPE, 1995, 2004 ; SHAPE2014)

年	1995 (physical educated person)	2004 (physical educated person)	2014 (physically literate individuals)
成果	1. 多くの運動形態で有能さを示すとともに、少数の運動形態では熟達を示す。	1. 様々な身体活動を行うために必要な運動技能や運動パターンを上手に行うことができる (これは、有能さと熟達を含んでいた初版との大きな違いである)。	1. 運動技能と運動パターンを上手に行うことができる。
	2. 運動技能を学習し、発達させるために運動の概念や原理を応用する。	2. 学習や身体活動に応用する運動の概念、原理、戦略並びに戦術を理解していることを示す。	2. 運動並びにパフォーマンスに関連している概念、原理、戦略並びに戦術に関する知識を応用する。
	3. 積極的に身体活動を営むライフスタイルを示す。	3. 定期的に身体活動を営む。	3. 健康を増進させる身体活動並びに体力のレベルを達成、維持する知識と技能を身につけている。
	4. 健康を増進させる身体活動のレベルを達成、維持する。	4. 健康を増進させる身体活動のレベルを維持、達成する (これは、身体活動を行う方法並びに便益に関する知識に関連した先のスタンダードを含んでいる)。	4. 自分自身並びに他人を尊重する責任ある個人としての行動並びに社会的行動を示す。
	5. 身体活動を営む場面で責任ある個人的行動並びに社会的行動を示す。	5. 身体活動を営む場面で自分自身並びに他人を尊重する、責任ある個人的行動並びに社会的行動を示す。	5. 健康、楽しさ、挑戦、自己表現並びに／あるいは社会的相互作用を営むことに対して身体活動がもつ価値を認識している。
	6. 身体活動を営む場面にいる人々の間には違いがあることを理解し、それを尊重する。	6. 健康、楽しさ、挑戦、自己表現並びに／あるいは社会的相互作用を営むことに対して身体活動がもつ価値を尊重する。	
	7. 身体活動が楽しさ、挑戦、自己表現並びに社会的相互作用を営む機会を提供することを理解する。		

ect Play physical literacy Reportは、両者が初めて協同してアメリカ国内で身体的リテラシー概念の導入と実施に向けたアイデア開発に取り組むものであった。

そこでは、身体的リテラシーが“the ability, confidence and desire to be physically active for life”と定義された。それは、身体的リテラシーは12歳までに追求すればいいものではなく、生涯に渡り追求されるべきことを認めた上で、この年齢層の子ども達を主たる対象にし、それを促す条件整備を進めることを求めるものであった。その意味では、アメリカにおける身体的リテラシーの試みは、まだ、初期段階のものといえる (White-

head, 2019, pp.202)。

このような流れの中で、アメリカでは体育のナショナルスタンダードにおいて目標を示す際に用いる概念が変更されていくことになる。Physical Educated PersonからPhysical Literate Individualsへの変更である (表3)。この背景には、学校教育内において教科としての安定した地位確保には、Literacyを冠した表現の方が好ましいという政治的判断があったという。確かに、個々の目標記述には多少の修正が加えられている。しかし、大枠において体育が保証すべき学習成果は、同じままとなっている。

なお、体育に関して言えばSHAPEが主導的役

割を果たしてきた。51州中50州でSHAPEのナショナルスタンダードを踏まえた州のスタンダードを採択している。また、体育教師教育の場にもphysical literacyに対する関心が示されるようになってきている。加えて、physical literacyに対応したPE Metricsの開発が進められている(Whiethead, 2019, p.203)。

アメリカにおける身体的リテラシーに関わる政策設定に関して、先導的な州の成功例が求められる。州レベルでの政策の持続可能性を確保するには、政策や法制化が不可欠である。そのためには、州や地方でそれを行うには、physical literacy採択のメリットを広く説明していくことが必要になると言われる。それにより肥満の抑制や身体的不活性の抑制につながり、ひいては医療費削減につながるという説明である。同時に、長期的なエビデンスの蓄積も求められるとも言われる(Whiethead, 2019, p.204)。

もっとも、身体的リテラシー普及の必要性は、軍隊維持という観点からも求められている。肥満により軍役に不適切な若者が増えていることは、軍事力の維持という観点からみてゆゆしき問題になっているという認識が示されているのである(Whiethead, 2019, pp.204-205)。

研究面で言えば、身体的リテラシーの便益を説明する哲学的な論文やその促進を求める論文、さらには他概念との相違を問いかける論文が主であった。この流れの中でSHAPEとACSM (American College of Sports Medicine) が、physical literacy概念の普及に中心的役割を果たすことになる。研究者達は、その導入直後からスポーツ医学のように、社会の他の部門に働きかけていたという。また、健康リテラシーや数学リテラシーといった他教科での用語との類似性と同時に生涯にわたる営みであることを指摘することでphysical educated personをアップデートする理論枠組みを提示することになったとも言われる(Whiethead, 2019, pp.205)。

なお、アメリカのスポーツ界は、スポーツ関係の省庁もなければ、国からも財政的支援も受けていない。その中で主導的役割を果たしているのは、アメリカオリンピック委員会(USOC)であ

る。また、その主たる目的は競技スポーツの振興であり、すべてのアメリカ人に身体的リテラシーを育むことを意図しているわけではない。しかし、大衆スポーツの振興や長期的視点のアスリートの育成(LTAD: long-term athlete development)、さらには子供のスポーツからのドロップアウトが増加していることへの危機感を抱いている(Whiethead, 2019, pp.206)。

このような事情もあり、アメリカオリンピック委員会のコーチ教育部門並びに国内スポーツ団体によるLTDA並びにphysical literacy導入に際して開発されたプログラムは、カナダのスポーツ・フォー・ライフプログラムに依拠して開発された。そして、アメリカ独自のモデル(ADM: American Development Model)が提案されることになる。その主眼は、オリンピック、パラリンピックでの成功のみではなく、継続的な身体活動とスポーへの参加であった。そこでアスリートを成長させるための主要原理が、次の5点であった。

- 1) すべてのアスリートがいつでもどこでも参加できる機会を生み出す。
- 2) 基礎的な運動技能の向上を促す発達に即した活動を生み出すこと。
- 3) 多様なスポーツへの参加
- 4) 楽しく参加でき、成長が感じられる挑戦的な雰囲気
- 5) すべての年齢層での質の高いコーチング(Whiethead, 2019, pp.206-207)

なお、全国レベルでは栄養とphysical literacyを組み合わせたBGCA (Boys & Girls Clubs of America) (Whitehead, 2019, p.209) が、地域レベルではゲームや勉強と身体活動を組み合わせたGIM (Gators in Motion) (Whitehead, 2019, pp.211-212) 等もみられる。

なお、身体的リテラシーは、アメリカにおいては身体活動に関わるコンピテンシーの学習のみならず、動機付けや要望、自信、楽しさ、生涯にわたり身体活動を積極的に営むことから期待できる社会的便益やエコロジカルな便益を主張していくための解決策にもなりえる。また、公衆衛生、ビジネスや産業、レクリエーション、移動やコミュニティのデザイン、高齢者へのアプローチ等へ

の接近を可能にしていく可能性を秘めているとも言われる (Whitehead, 2019, p.212).

カナダにおけるPLの受入方

カナダは、身体的リテラシー概念が早期から導入された国である。また、スポーツ、レクリエーション並びに体育という多様な部署が関わるとともに身体的リテラシーに関わる多額の奨学金団体を抱えている。さらには、地方並びに全国レベルで身体的リテラシーを促進する強力な政策を設定していることも含め、身体的リテラシー促進運動の一つのリーダー国となっている (Whitehead, 2019, p.125).

カナダにおける最初の身体的リテラシーの定義は、2008年にCanadian Sport Centre and Canada Sport Life (CD4L) (現在はSport for Life (S4L)) により示されている。それは、子ども達が健康で生涯にわたり生活を楽しむこととスポーツでの成功を収めるための道具を獲得していくことを保護者は支援できる、というメッセージであった。競技者に成功をもたらす、生涯にわたり積極的な生活を営もうとする気持ちを発達させることを究極の目的とする、スポーツ領域並びに長期的視点に立つ競技者の育成 (the long-term athlete development (LTAD)) という考え方を踏まえつつ (Whitehead, 2019, p.125), Higgsらは、子ども達が基礎的な運動技能 (fundamental movement skills) と基礎的なスポーツ技能 (fundamental sport skills) を発達させなければならないと指摘した。これら両者は、多様な身体活動、リズムダンス並びにスポーツを営む場において子ども達が自信をもって動くことを可能にするものだとされている。Sport for Lifeは、一般の人々が分かり易いように、基礎的な運動技能 (fundamental movement skills) を発達、習得させていくことが身体的リテラシーであると提案した (Whitehead, 2019, p.126).

Sport Canadaが、LTADを国策として承認したことにより、年齢や性等に関わりなく、組織化されたスポーツに参加している全てのカナダ人は、この身体的リテラシーの定義にさらされることになる。このLTADは、技能に焦点化されてい

るとともに、身体活動に健康で生涯にわたりかわっていくために必要な技能、態度並びに知識を提供していくことを求めるとともに才能のある者に対しては、より卓越した成果をあげる機会を提供していくことを求めるものであった。特定の競技の競技者の育成を意図しているとはいえ、多くのLTADプログラムは、身体的リテラシーを身につけた人物になるためには様々のスポーツで求められる多様なスキルを習得していくことが必要になることを示唆していた (Whitehead, 2019, p.126).

LTADモデルは、競技者の発達の最初の3つの段階を通して身体的リテラシーが発達すると示唆している。それは、1) 積極的なスタート (Active Start) (0 - 6歳男女), 2) 楽しむ段階 (FUNdamentals) (女子6 - 8歳, 男子6 - 9歳), 3) トレーニングのために学習する段階 (Learn to Train) (女子8 - 11歳, 男子9 - 12歳) を指している (Whitehead, 2019, p.126).

CS4LのPhysical literacy guide for parents/guardiansが発刊された後に保健体育教師の全国的な専門職組織であるPhysical and Health Education (PHE) Canadaが、自分達独自の、より広範な、次の身体的リテラシーの概念を提案した (Whitehead, 2019, p.126).

「physically literateを身につけた個人は、全人の発達に寄与する幅広い身体活動を上手に行うことができる。身体的リテラシーを身につけた個人は、異なる運動を理解し、それを人に伝え、応用、分析する動機と能力を一貫して発達させている。彼らは、健康関連型の身体活動の範囲を超えて、様々な運動を実際に自信をもって上手に、創造的かつ方略的に人に示すことができる。このような技能は、個人を健康にするとともに生涯に渡り積極的な選択ができるようにしていく。そのような選択はまた、自分自身、他人並びに環境にもメリットがあるとともに、自分自身、他人並びに環境への尊敬の念を生み出すものである。」 (Mandigo et al., 2009 : 6-7) / (Whitehead, 2019, pp.126-127)

PHE Canadaは、このすぐ後に、次のように定義を更新している。

「physical literateな個人は、多様な環境下で健康の増進や全人の育成に貢献する多様な身体活動を上手に、自信をもってできる個人である。」

この発達の過程を排除して基礎的な技能の発達のみ焦点化する定義は、コミュニティについて指導する際に必要な教育学的、教育的な要素の位置づけを制約してしまうという認識を反映したものであった。また、コンピテンシーは標準的な人ではなく、個々人に焦点化すべきことを明記している。PHE Canadaは、さらに、全人並びに（身体、認識、情意並びに社会の）全領域にも言及している（Whitehead, 2019, pp.127）。

このような事情もあり、カナダでは2015年にはスポーツ、レクリエーション、研究並びに教育関係者が一同に会し、政策、実践並びに研究を進めるための明確な定義づくりに取り組むことになる。physical activity, physical education, fundamental movement skills and/or motor skill developmentが身体的リテラシーと同義に使用されている状況に終止符を打つことを意図したものであった。その結果、身体的リテラシーに関する次の合意がえられた。

「身体的リテラシーは、生涯にわたり身体活動を営むことを重視し、責任をもてるようにするための動機、自信、身体的能力並びに知識と理解を指す」（Physical literacy is the motivation, confidence, physical competence, knowledge and understanding to value and take responsibility for engagement in physical activity for life）（ParticipACTION et al., 2015, p.3）

この定義は、情意（動機と自信）、身体（身体的能力）、認識（知識と理解）並びに行動（生涯にわたり身体活動を営むこと）という4つの要素を含んでいる。この定義は、身体的リテラシーは包摂的なものであり、誰もがアクセス可能であることを中核的な原理としている。それはまた、現在、国際身体的リテラシー連盟（International Physical Literacy Association : IPLA）が用いる概念となっている（Whitehead, 2019, pp.127）。

この論議を経る過程では、カナダの身体的リテラシーは、Whiteheadの提案したそれと同じであると明言できないとされている。提案されている

哲学的根拠が難解であり、そのためその定義と実践との間に齟齬が派生していることがその理由である。その結果、身体的リテラシー概念そのものをより分かりやすいものにしていくことが求められている。

このように、カナダ国内でセクターを越えた概念が作成されたことで、それを踏まえたCanadian Sport Policy 2002-2012が作成されたことも事実である。また、その評価を受け2012-2022が作成された。この過程で、スポーツ、教育、健康、都市レクリエーションのセクター間の協同を促すためには、明確な目標と共通のビジョンが必要になることが指摘されている（Whitehead, 2019, pp.128）。

もっとも、このような概念規定が作成されたとはいえ、その成果を評価する指標がバランス良く開発されたわけではない。カナダでは、身体的リテラシーは、児童、生徒や競技者のみに求められるもではなく、父兄やコーチにも求められている。それはまた、父兄やコーチに対して身体的リテラシー育成に向けた教育を誰がどのようにして行うのかという問題を浮上させることになる。また、その成果をどのように評価するのかという問いを生み出すことになる。この問題は、しかし、容易に解決策が見いだされているわけではない。

例えば、カナダは、身体的リテラシーの評価方法開発に積極的に取り組み、現在、1）Passport for life（PHE Canada）、2）Play（Physical Literacy Assessment for Youth）（S4L）並びに3）Canadian Assessment of Physical Literacy（HALO/CAPL）の三つの評価法が採用されている。確かに、これらは成果を測定しやすい評価法と評価されている。しかし、それは測定しやすいものを評価しているとの批判を受けている。身体的領域の評価に評価項目が偏っており、情意領域の成果である動機がうまく評価できるようになっていないという指摘である。そのため、動機の重要性を加味した、評価法の開発が求められている（Whitehead, 2019, pp.132-133）。実際、身体的リテラシーの評価に関連した研究論文が身体的側面に焦点化されやすい原因は、研究者の偏りに求められている。スポーツ関係組織が多く、健康関連、

健康生活、コミュニティや学校の開発、包摂等に関心のある組織の関与が少ないという指摘である (Cornish et al., 2020, p.19).

また、カナダの学校では、身体的リテラシー概念がスムーズに導入されていたわけではなかった。学校内で体育とスポーツを重視することが政策レベルで求められても、それを実行に移す人的配置が保障されていなかったことがその原因であった。他方で、管理職の支援もありそれが導入されていた学校では、導入の効果が認められていくことになる。この過程を経て、現在では、導入の肯定的な効果を示していくには、「運動を学習すること (learning to move)」から「運動を通して学習すること (learning through movement)」へと思考を変えていくことが必要であると言われるようになってきている。また、コーチの資格取得プログラムでは、マイノリティー文化の英知をマジョリティーの人々のスポーツに伝えることが目標として位置づけられるようになってきている。例えば、カナダのナショナルコーチ資格プログラム (Canada's National Coaching Certification Program) (NCCP) には、アボリジニの文化の英知をメインストリームのスポーツに伝えることが目標として挙げられている (Whitehead, 2019, p.135).

オーストラリアにおけるPLの受入方

身体活動の不足に起因する死亡者は世界的に増加している。また、それに伴う医療費も莫大な金額に上る。他方でこのような事態の改善に向けた多様な介入が行われてきたにもかかわらず、事態の改善が見られない。このことは、介入の仕方そのものを変えていく必要性を示唆している。このような認識の元、身体的リテラシーは、不健康にならないためのメッセージや身体活動に関する介入のための非効果的なメッセージから論点を変えていくために提案された。例えば、スポーツで成果をあげるために技能を習得しなければならないといった指摘に対して、競技スポーツに参加するレベルの生徒は少数であることやそのような考え方は競技レベルに参加しない生徒の動機を低下させてしまうことを理由にあげ、反論している。

身体的リテラシーの重要な点は、この概念を生涯に渡り適用したことである。また、この概念が主張した最も重要な定義は、生涯に渡り身体活動を営み、それを価値づけるための動機、自信、身体的能力、知識並びに理解度をあげたことであるとの反論である。それらは、生涯にわたり健康を促進するように身体活動活動を営むようになるために必要な個人の属性や素質といえる。したがって、身体的リテラシーの哲学やそれを支える概念は、世界的にみられる不十分な身体活動問題への取り組みを前進させるものであると評価されている。同時に、Whitehead自身が、身体的リテラシーは多様な文化や国の中で異なる解釈をされる必要があると指摘している。そのためKeeganらは、独自の土着文化をもつオーストラリアの文脈に即して身体的リテラシーの定義並びにスタンダードの枠組みを開発していくことを試みた。

この際に問題になった論点は、身体的リテラシー概念そのものが多様な、場合によっては対立的な定義をその中に含み込んでいたことであった。その結果、混乱も引き起こされた。例えば、それは、自分の身体を内面化すること (physical embodiment) とその学習から得られた形態の二つを意味を包含していた。しかし、採用されている概念が異なろうとも、身体的リテラシーを推進する人々は、全体的な概念定義並びに全体的な便益を強調するアプローチを取ることの重要性について了解していた。そのため、Keeganらは、哲学的な一貫性を担保しながら、オーストラリアの教師や実践家、政策作成者や研究者が活用可能な定義と枠組みの開発に取り組むこととした (Keegan et al., 2019, p.106).

しかし、この概念規定と枠組みの設定に際しては対立する見解がみられた。概念規定の多様性を認めることで予見できる混乱を避けるためには明確な定義が必要になるという指摘と一つの定義に限定することで多様な論議の道が閉ざされること、また多様な概念規定は、異なる概念間の成果の比較を可能にしていくという指摘がみられた (Keegan et al., 2019, p.106). これらの指摘を踏まえKeegan et al. : (2019) は、多くのステイクホルダーや参加者と協力しながら、仮説とその

手続きを明確に設定し、自分たちの目的に対応した、エビデンスを収集できるPhysical literacy initiativeを開発し、その結果を評価するという案がありえると指摘している (Keegan et al., 2019, p.106).

その上で、彼らのプロジェクトが、国レベルで実施するプロジェクトであることを踏まえ、定義や枠組みがオーストラリアの学校や地域社会でのスポーツ場面、競技スポーツ、研究並びに連邦政府や州政府、教育、健康、スポーツ部局の政策作成の場面で即座に実施に移せるものであることを考慮して、身体的リテラシーの概念定義並びに枠組みを次の点を踏まえて新たに開発することにしたという。

- 1) 現在のphysical literacy概念の用語法、それに示されている期待、並びに意図に即したものであること。
- 2) 明確で理解しやすく、内的整合性を担保していること。
- 3) 初期の学習から上位の技能と属性に至るまで発展性があり、細分化可能な定義を含め込むこと。
- 4) 世界中の現在の実践や既存のシステムの長所や授業を踏まえて定義すること。
- 5) カナダ、イギリス、ニュージーランド並びにアメリカといった他国のプログラムを踏まえること。
- 6) オーストラリアの文脈を踏まえ、それに適切であること。
- 7) 学校、スポーツ組織並びに家族の文脈に即したものであること。
- 8) エビデンスを提示できること。現存のエビデンスとの比較や参照が可能であること (Keegan et al., 2019, p.107)

定義と枠組みの設定には段階が設定されている。第一段階はオーストラリアに人々にとって適切な身体的リテラシーの概念規定を行うことであり、それを踏まえエビデンスに基づくスタンダードの枠組み (evidence-informed standards framework) を設定することである (Keegan et al., 2019, p.108).

第一段階の課題は、オーストラリアの文脈に適

しており、教育、健康、コミュニティスポーツ、競技スポーツ、父兄並びに児童を含む全てのステークホルダーに関連した身体的リテラシーに関するエビデンスに基づく概念定義 (an evidence-informed definition of physical literacy appropriate for Australian context) を行うことであった。そのため、1) 身体的リテラシー内で行われている現在の仕事、2) 身体活動、3) 体育、4) 運動学習と運動の発達、5) 動機付け、6) 自信と自尊感情、7) 知識と価値、並びに8) 教育学とコーチング方略に関連した192の文献のシステマティックレビューを行った。その結果、次の知見が得られた。

- 1) 公刊されているphysical literacyに関する論文は、意見表明や論議ベースの傾向がある。
- 2) 身体活動と運動学習に関連した論文にはより多くの量的なエビデンスが示されている。
- 3) (例えば、決定、自制心、情熱といった) 動機付けと (例えば、自尊感情、知覚された有能感、自己効力感といった) 自信に関連した他の概念を既存の定義の中核に位置づけることには問題がある。
- 4) 知識や価値観は定義や概念化することが極めて困難である。
- 5) (例えば、規範的なスタンダードは、エビデンスベースとの一貫性を担保できないという意味で) スタンダードの枠組みで示される内容を達成するために有意義な営みが実施されたにしても、動機、自信並びに知識は、年齢や発達に応じて直線的に向上するわけではない。
- 6) 近年、身体、情意、認識並びに社会的な学習領域 (the physical, affective, cognitive and social domains of learning) に組み込まれた概念や公刊物がみられる傾向がある (Keegan et al., 2019, p.109).

これらを踏まえて作成した定義の妥当性について専門家に検討を依頼した。その過程ではphysical activityとmovementのいずれが好ましいのかも論議された。この点に関しては、専門家の領域により見解が分かれた。そのため、両語を並記することになった (Keegan et al., 2019, p.109)。そ

の結果、三回目の検討において80%以上の合意が得られた。また、その後にはステークホルダーに検討を依頼した。その結果、affectiveに代わり、psychologicalが使われるべきであるという提案がなされた (Keegan et al., 2019, p.110)。

スタンダードの枠組み開発に際しても6つの段階が設定された。その最初が、既存のカリキュラムやスタンダードに関連した文献のレビューであった (Keegan et al., 2019, p.110)。その結果、年齢に対応して示されている期待は不適切であり、今日提示されているエビデンスに対応するものではなかったと判断された。それは特に、心理的な発達に関して顕著であったという (Keegan et al., 2019, p.111)。2回目の対面式ワークショップにおいてパネルメンバーは、1) スタンダードの内容、2) 示唆された特定の言語、3) 4×4のスタンダード案 (4段階でSOLO (the System on Observed Learning Outcomes) のタクソノミーに基づく4つのレベルと身体、心理、認識並びに社会という4つの領域) を提示され、それに関する論議を加えた。その結果、1) スタンダード内でレベルを構造化するためにSOLOタクソノミーを使用するための初発の支援、2) 身体、心理、認識並びに社会という4つの領域を組み込むことへの最初の支援、3) 「私は・・・」という形式で記述するという提案、4) 十分ではないが、学習の可能性を示す5つめの段階を最初に組み込むことが強く推奨された。この提案は、SOLO学習タクソノミー内ですでに特定されていた内容と同様に、すべての年齢と能力レベルをより包摂的に位置づけるものとして同意が得られた。そして、この同意を踏まえて修正された文書に対する同意を得るための調査が実施された。その内容は、1) 身体的リテラシーを特徴付ける4つの学習領域の使用、2) 学習レベルを把握するためのSOLOタクソノミーの利用、3) 4つのレベルを用いるためのラベル並びに4) 進歩であった。その結果、すべての項目に対して80%以上の同意が得られた。また、時期を特徴付けるビジュアルメタファーについても合意がえられた。そのため、異なるステークホルダーから総勢、50人以上のメンバーを集めたワークショップが実施された。研究者、教

育者、コミュニティスポーツ関係者、競技スポーツ関係者、政策作成者が各グループに配置され、グループ内で提示された文書に対する論議を加えた。その結果、最終文書は既存の枠組みとの整合性を強調するとともに、その実施に向けた適切な助言を提供するものとなった。例えば、それを提供することにかけている期待や直線的では無い進歩 (nonlinear progressions) が示されることになった (Keegan et al., 2019, p.111)。

この過程を得て示された合意は、次の通りであった。

- 1) 中核におかれる内容：身体的リテラシーは、運動と身体活動を行う文脈内で獲得、応用される生涯に渡る全体的な学習である。
- 2) 構成：身体的リテラシーは、身体的能力、心理的能力、認知能力並びに社会的能力の変化を反映するものである。
- 3) 重要性：身体的リテラシーは、運動と身体活動を通して健康で生活を豊かにすることを支援するものであるため、重要である。
- 4) 要望：身体的リテラシーを備えた人物 (physically literate person) は、生涯に渡り、自分たちが置かれている状況や文脈に即して、健康を促進し、運動と身体活動を豊かに行えるために必要な身体的能力、心理的能力、認知的能力並びに社会的能力を統合的に身につけることができる能力を備えている (Keegan et al., 2019, pp.111-112)。

身体的リテラシーに対する理解を促すスタンダードの枠組み開発の前には、この提案に対する合意を得る必要があった。そのためパネルは、次の4点に対する合意を確認することになる。

- 1) スタンダードの構造を確定するために定義で示された4つの学習領域を用いること (89%の合意)。
- 2) 身体的リテラシーの構造と進歩を明示するために使用する学習モデル・枠組みを使用すること (94%同意)。
- 3) スタンダードの文書内でレベルを記述するためにSOLOタクソノミーで用いられているグループ・ラベルの名称を用いること (89%の同意)。

4) レベルを年齢や学年で特定しないこと (89%の同意) (Keegan et al., 2019, p.112)

この結果を踏まえ、Keegan et al., (2019, p.112)は、これらの定義が、オーストラリアの関係者にとってより適切な定義となったと指摘している。他方で、IPLAのphysical literacyの概念では身体、情意、認識の領域が位置づけられてはいたが社会の領域が排除されていたこと、これに來してMandigo, Francis, Lodewyk and Lopez (2012)が社会領域を組み込んだこと、Sport New Zealand (2018)はさらに精神的な領域 (spiritual) を組み込んだことを紹介している。それらは、いずれもが複数の領域が関連していることや全体的なものであることを強調しているという。同時に、動機、自信、能力並びに知識という幅広い領域を包括する西洋的な概念は、むしろ、誤解を生み出すリスクを備えているとともにオーストラリアの土着文化や移民文化を踏まえれば、不適切なものとなる可能性があることを指摘している。さらに、個々の要素の集合体ではないものとしてそれを定義することが必要になると指摘している (Keegan et al., 2019, p.112)。

このように、オーストラリアでは自国の文化的文脈を踏まえ、身体的リテラシー概念が批判的に検討された。2017年にSport Australiaは専門家や重要なステークホルダーとともにオーストラリアのためのPLの概念定義に向けたコンサルテーションを開始している。その成果が、2019年に公開されたオーストラリアPL枠組みであった。そこでPLの構成要素が、physical activity and movement, psychologicalと表記されることになる。ここでは、身体的リテラシーを次のように定義し、その構成要素として30項目を挙げている (Sport Australia, 2019, p.5)。

「身体的リテラシーは、運動並びに身体活動を行っている際に獲得、応用され、生涯にわたり、全体的に学習されていくものである。それは、身体的、心理的、社会的、認識的能力を統合する形で変化していく。また、それは、運動並びに身体活動を通して健康で、満ち足りた生活を営めるように支援するものである。身体的リテラシーを備えた人物は、個人の置かれている状況と関連させ

て、生涯にわたり健康を促進し、運動や身体活動を行うことを支援できるように、自らが統合した身体的、心理的、社会的、認識的能力を活用することができる。」 (Sport Australia, 2019a, p.5)

表4からは、Keegan et al. (2019)らが整理したPLの構成要素の大部分は、Sport AustraliaのPLの構成要素になっている。しかし、それが完全に重複している訳ではないことが確認できる。表記上の修正という程度のものであるが、心理領域における運動する環境との結びつきのように、Keegan et al.では示されていない構成要素が新たに採択されている。また、安全とリスクに関しては、Keegan et al. (2019)では社会領域に位置づけられていたが、Sport Australiaでは認知領域に位置づけられるように、領域の位置づけそのものが修正されている要素もみられる。

また、上記のコンサルティングに関わったRichard Keegan (University of Canberra), Lisa Barnett (Deakin University) 並びにDean Dudley (Macquarie University) は、オーストラリアPL枠組の枠組み作成にも関与している (Sport Australia, 2019a)。また、それを踏まえた概念一覧や生徒の達成度を評価する質問紙も開発されている (Sport Australia, 2021)。

Sport Australiaの身体的リテラシーの枠組み (Physical literacy framework) は、身体的リテラシーとは何で、それがどのように発達していくのかに関する共通のビジョンを培い、それを語る共通言語身につけ、一貫した理解を促すものであるという。そのためそれは、1) ひとまとまりの運動に関連した技能、知識並びに行動を互いに関連し合った領域、要素並びに段階に分類するものであり、2) 4つの領域にまたがる個人の能力を特定するとともに自分自身の身体的リテラシーについて判断することを支援するものであり、3) 身体的リテラシーを効果的に発達させるために必要な共通言語を提供し、4) 能力、年齢並びに背景に関わりなくすべてのオーストラリア人に対応するものであるとされる (Sport Australia, 2019a, p.5)。

同時に、この枠組みを提示した際に想定している対象は、1) 個人、2) 父母と家族、3) 学校と教育者、4) コーチとその提供者並びに5) 政

表4 Sport Australia(2019a)並びにKeegen et al., (2019) の示すPLの構成要素

身体的領域		心理的領域		社会的領域		認識領域	
運動を通して個人が獲得、応用できる技能と体力		運動しようとする個人の態度や情動並びにそれらが自信や運動への動機付けに与える影響		運動と関わり、個人が他人と営む相互作用		運動の行い方、理由並びに時期に関する個人の理解	
Sport Australia (2021)	Keegen et al. (2019)	Sport Australia (2021)	Keegen et al. (2019)	Sport Australia (2021)	Keegen et al. (2019)	Sport Australia (2021)	Keegen et al. (2019)
運動技能	運動技能 (陸上)	・従事と楽しさ	従事と楽しさ	・関係	関係	・内容の知識	内容の知識
	運動技能 (水上)	・自信	自信	・協働	協働	・ルール	ルール
・用具を使った運動	用具を使った運動	・動機	動機	・倫理	倫理	・理由付け	目的と理由付け
・対象物の操作	対象物の操作	・自己認知	自己認識	・社会と文化	社会と文化	・戦略と計画	戦略と計画
・コーディネーション	コーディネーション	・自己制御 (感情)	自己制御 (感情)		関わり (コミュニティと環境)	・戦術	戦術
・安定性/バランス	安定性/バランス	・自己制御 (身体)	自己制御 (身体)		安全とリスク	・知覚的な自覚	自覚
・柔軟性	柔軟性	・運動する環境との結びつき				・安全とリスク	
・敏捷性	敏捷性						
・筋力	筋力						
・筋持久力	筋持久力						
・心肺持久力	心肺持久力						
・反応時間	反応時間						
・スピード	スピード						
	パワー						

*表中のマーキング箇所は、表現が同一になっているもの。

表5 Sport Australia (2019, p.9) の構成要素共通の達成基準

レベル	定義
ステージ0 基礎以前	このステージでは、個人は、限定された運動の形態を経験したり、遊んだり、探索したりする。
ステージ1 基礎と探求	このステージでは、個人は自分が運動に対する自身の能力を学習し、探求する。
ステージ2 習得と蓄積	このステージでは個人は、頻繁に練習し、運動に対する自身の能力を洗練化していく。
ステージ3 統合と熟達	このステージでは個人は、運動に対する自身の能力を発揮し、分析することができる。
ステージ4 転移と強化	このステージでは個人は、運動に対する自身の能力を新しい状況や異なる状況に転移させる。

策作成者とされている (Sport Australia, 2019a, p.10). この説明は、オーストラリアにおける身体的リテラシーが、競技力向上のみを意図したものではないことを示している。同時に、土着のスポーツ文化を尊重する姿勢も明確に示されてい

る。

このように定義される身体的リテラシーは、直線的に発達するものと捉えられている訳ではない。その発達の過程は、環境等の影響も受けながら、紆余曲折をめぐると指摘されていくことにな

る。そのため、後退現象もまた、想定されている (Sport Australia, 2019a, p.6)。また、Whitehead の定義は極めて抽象的であり、彼女心は個々の構成要素の達成度を示してはいない。この点を踏まえ、各構成要素の発達の段階が、表5のように設定されている。

オーストラリアの身体的リテラシーの枠組みではこの達成基準を踏まえ、各領域の各構成要素の達成基準が定義、例示とともに示されている。なお、各領域のステージ0とステージ4は、構成要素が異なっても同じ内容が記述されている (表6)。また、このステージ0と4を除いたステージ1～3は、表7～10のように記されている。

身体的リテラシー育成を意図した授業の成果検証の試み

身体的リテラシーの構成要素を構造化して提示し、その成果を評価できる指標や方法、評価基準が設定されていくことにより、包括的な概念である身体的リテラシーの全体像の把握を容易にしていく。また、Sport Australia (2021) による身体的リテラシーの自己評価調査票やThe Physical Literacy for Life projectによるPhysical Literacy for Life self-assessment toolも開発されている。

また、体育専科が行う身体的リテラシーを踏まえた体育授業を実施した小学校において児童が示す運動技能、運動能力に対する知覚並びに身体活動レベルを検討した論文も示されるようになっている。そこでは身体的リテラシーを踏まえた体育授業が身体的リテラシーの向上に貢献したことが報告される一方で、自身のスポーツを行う能力に対する満足度が低下したことも報告されている (Telford, R.M. et al, 2021)。

このような効果検証の試みは、身体的リテラシーの4つの構成領域の学習成果検証の試みとして高く評価される。他方で、身体的リテラシーに影響を与える要因は、長期的な視点のもとで明らかにされていく必要がある。また、それが育まれる環境要因の検討等も求められることになる。このような試みは、身体的領域に限定されがちであった体育やスポーツの可能性をより幅広い視点から検討することを可能にするという点で重要であろう。他方で、身体的リテラシーそのものが、文化的、社会的、歴史的要因の影響を受けながら形成されていくことを踏まえれば、我が国における身体的リテラシーの現状やそれに影響を与えている要因の検討も今後は求められよう。

表6 Sport Australia (2019, p.9) の各領域のステージ0とステージ4の記述内容

領域	ステージ0 基礎以前	ステージ4 転移と強化
身体的領域	運動と身体活動を通して学習する可能性を備えている。この段階では、運動能力は限定されており、支援を必要としている。	運動と身体活動から元気づけられている。私は、自分の技能、知識並びに感情を異なる運動と身体活動を行う場面に継続的に応用する。私は、4つの領域全ての構成要素を組み合わせて、運動と身体活動を通して得た私の学習成果を私の生活の他の場面でも応用する。 例： • 熟達したテニスプレイヤーであったあなたは、自分の感情を決定し、制御することがゲームの重要な要素であることを知っている。 筋力を向上させることは障害の予防にとって重要であることをあなたは、理解している。そのため、あなたの心肺持久力を補足するために1週間に何度もジムでのトレーニングを行っている。テニスをするために必要な身体的、精神的な要求を満たすことを楽しむとともに、コーチコースを履修することで知識を豊かにすることにした。自分がコーチになり、他の人のロールモデルになることであなたのテニスクラブの文化に影響を与えたいと考えている。
心理的領域	運動と身体活動を通して学習する可能性を備えている。現段階では自分自身、運動並びに身体活動に関連した態度や感情を発達させていない。	運動と身体活動から元気づけられている。私は、自分の技能、知識並びに感情を異なる運動と身体活動を行う場面に継続的に応用する。私は、4つの領域全ての構成要素を組み合わせて、運動と身体活動を通して得た私の学習成果を私の生活の他の場面でも応用する。 例： • 参加しない理由（仕事や勉強の締め切り等）が数多くあるとはいえ、フィットネスクラスに参加している。機会があればあなたはその活動に参加することをあなたは知っている。また、授業後には自分の体力やメンタルヘルスにメリットがあることを認識することになることを知っている。自分の目標を維持するように動機づけてくれると感じているため、人気があるとはいえ、強度の高いいくつかのランタイムセッションに参加する。あなたはまた、彼らがクラスで受け入れていると感じるであろうと思うため、同僚や友人にもそこへの参加を促すと考えている。
社会的領域	運動と身体活動を通して学習する可能性を備えている。現段階では他人と効果的に相互作用を営む能力を発達させていない。	運動と身体活動から元気づけられている。私は、自分の技能、知識並びに感情を異なる運動と身体活動を行う場面に継続的に応用する。私は、4つの領域全ての構成要素を組み合わせて、運動と身体活動を通して得た私の学習成果を私の生活の他の場面でも応用する。 例： • 新しいコミュニティに移動し、新しい人間関係を構築するためにグループ/クラブ（例えば、テニス、パークラン）に参加する自信を培う。（例えば、バドミントン、陸上競技のような）類似のスポーツ/活動を以前に楽しんだ経験があるためにこの特定のグループを選択し、そのグループ/クラブで求められる知識や身体的能力をすでに獲得していると感じる。
認知的領域	運動と身体活動を通して学習する可能性を備えている。現段階では運動と身体活動を行う理由、時期並びに方法を理解していない。	運動と身体活動から元気づけられている。私は、自分の技能、知識並びに感情を異なる運動と身体活動を行う場面に継続的に応用する。私は、4つの領域全ての構成要素を組み合わせて、運動と身体活動を通して得た私の学習成果を私の生活の他の場面でも応用する。 例： あなたが身につけている（水泳、サーフィン、パドルリング）水辺活動に関する知識並びに地域の環境に関する知識を他の人に伝えることができるように、地域のサーフィンのボランティアになることにする。個人的には、それによりあなたは、自分の体力や生活スタイルに関する目標達成に向け、ビーチ/水中でより長時間を楽しく過ごすことができるようになる。

表7 Sport Australia (2019, p.9) の身体的領域のステージ1 - 3の記述内容の例

構成要素	定義	例	ステージ1	ステージ2	ステージ3
運動技能	人が（陸上、水上、雪上あるいは氷上で）ある場所からある場所に移動することを可能にする運動技能	<ul style="list-style-type: none"> ・回転する、横に滑る、上る ・歩く、走る、スキップする、ギャロップする ・ジャンプする、ホップする、よける ・泳ぐ、ストローク、グライディング 	<p>新しい運動技能を身につけ、探求する。</p> <p>例示：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・走技能の初歩的な要素を示す。例えば、走るときに膝を高く上げる。 ・跳躍技能の初歩的な技能を示す。例えば、高さや距離を生み出すために腕を振る。 ・浮力を確保する補助具を用いて浮く。 ・座った状態で潜る。 	<p>練習して、運動技能を発達させること。習熟した運動技能を発揮すること。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動きをコントロールして、正確に走ること。例えば、スピードや方向が変わったり、あるいは障害を避けながらそれをする。 ・練習して様々なジャンプの技術を発達させること。例えば、幅跳び、バスケットボールでリバウンドボールをキャッチする。 ・生き残るために水をかいたり、処理したりする技術を発揮する。 ・水の表面をダイビングする。 	<p>様々な運動や身体活動を行うことで運動技能を高め、習得する。</p> <p>例示：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・例えば、丘、砂、山中の小道等走る場所が変わっても同じように走る。 ・例えば、背面跳び、スプリット跳びのような複雑なジャンプ技能をコントロールして発揮する。 ・プールで生き残るための救急技術上手に発揮する。 ・競争的なダイビング技術を発揮する。

表8 Sport Australia (2019, p.9) の心理的領域のステージ1 - 3の記述内容の例

構成要素	定義	例	ステージ1	ステージ2	ステージ3
従事と楽しみ	運動と身体活動から得られる肯定的な感情と経験	<ul style="list-style-type: none"> ・集中して活動に従事する ・幸福、達成、満足 ・間近な活動やイベントに関する興奮した感情 	<p>運動と身体活動に反応する肯定的な感情を培い、探索する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゲームを行っている時やアクティブな状態の時に興奮や楽しさを表現する。 ・運動や身体活動を行う際にそれに従事したり、注意散漫にならないようにする。 	<p>運動と身体活動を楽しむために積極的に取り組む。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会的な性質を備え、友達との相互作用があるため、グループで行うゲームに参加する。 ・間近な身体活動にわくわくする。 	<p>運動と身体活動に参加することから一貫して生み出される肯定的な感情を生み出す要因を特定し、活用する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挑戦的な運動や身体活動であってもそれに取組み、楽しむ。 ・活動に完全に没頭する。
自信	運動や身体活動を行っている際に自分自身の価値やパフォーマンスに対してもつ信念	<ul style="list-style-type: none"> ・一定の確実さを示す。 ・喜んで新しい運動や身体活動に挑戦する。 ・例えば、傷害から復帰した際や敗戦といった挫折を経験後にレジリエンスを示す。 	<p>運動と身体活動から有能感や自分に価値があるという感情を得る。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新しい運動、あるいは身体活動に喜んで挑戦する。 ・自信が高まるなど、 	<p>運動と身体活動に参加するを通して有能感や自己に価値があるという感情を培う。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動と身体活動を行っている際に自分の能力を信じられる。 	<p>運動と身体活動を行っている際に有能さに関するレジリエンスや自分の価値に関する感情を示し、それらを発達させ、維持する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・挑戦し、有能感と自分に価値があるとい

構成要素	定義	例	ステージ1	ステージ2	ステージ3
		すとともに自己への信頼感を維持する。	運動することから肯定的な成果を得る。	・負けたり、上手にできなかった後に肯定的な反応を示したり、レジリエンスを示す。	う感情を維持するための方略を特定する。 ・例えば、否定的なフィードバックやチームに選ばれないといった否定的な経験により有能感が影響されない。
自己認知	運動と身体活動に関わり、自分自身の状態を理解するとともに個人の長所と発達させるべき領域を認識する。	・運動と身体活動に関わり個人の資質、長所並びに発達させるべき領域を知ること。 ・フィードバックを受けたり、求めるタイミングと誰からそれを受けるのかを知ること。	運動と身体活動に関する個人の嗜好性を知るとともにそれを探求する。 例： ・好きなゲームと好きではないゲームを認識する。 ・自分が得意な運動が何かを表現したり、それを示したり、説明したりする。	長所と発達させるべき領域を特定するとともに、それを改善するための方略を実際に試してみる。 例： ・改善に向けて特定の技能の練習をする。 ・長所とその活用の仕方を自覚する。	長所と発達させるべき領域を査定し、成長を支援するための方略を工夫する。 例： ・長所と発達させるべき領域を理解するために自分自身並びに他者からのフィードバックを利用する。 ・改善すべき領域の優先順序を決めるとともにその発達を支援するための適切な方略を選択する。
自己制御(感情)	運動と身体活動に関わる感情やそれが引き起こす行動をマネジメントする能力。	・フラストレーションを動機に変えていく。 ・緊張を克服する。 ・怒りや混乱状態を制御・克服する。	運動と身体活動を行うことから得られる情動的な反応について探求するとともにその制御方法について認識し始める。 例： ・運動と身体活動を実施する前、実施している時並びに実施後の感情を確認する。 ・(例えばスポーツマンらしくない行動のような)行動が情動や感情にどのように影響されるのかを認識する。	感情とそれに関連した反応をマネジメントする方略を確認し、それらを実際に使えるように練習する。 例： ・例えば肯定的なセルフトークのように、情動の反応を上手にマネジメントするための自己制御方略を使えるように練習し、それらを洗練化していく。 ・情動的な障害を克服する。緊張した時や恐怖感を感じた際に何かを試してみることは、その例である。	情動を上手にマネジメントし、利用する。運動と身体活動を行っている際に情動を制御する方略を実際に使用する。 例： ・最適のパフォーマンスを發揮するための一定の方略を知ると共に、それらを実際に適用する。例えば、自己のイメージである。 ・情動のレジリエンスを示す。例えば、ネガティブな情動を感じた際にも上手に継続できることである。
自己制御(身体)	痛み、疲労並びに努力のような身体の発するサインを認識し、マネジメントする。	・持久力の必要なイベント中のペースを調整する。 ・チームスポーツで休養のための交代を求める。 ・自分の身体に限界が来ているにもかかわらず動き続けた	様々な運動と身体活動を行う前、行っている最中並びに行った後の身体の発するサインを確認し、それらをどのように制御するのかを認識し始める。 例：	運動と身体活動を行う前、行っている最中並びに行った後の身体の発するサインを確認し、それをマネジメントする方略を使えるように練習する。 例：	運動と身体活動に対する身体の反応を制御する方略を適用し、それらをマネジメントする。 例： ・暑いコンディションの中で脱水症状を予防することのよ

構成要素	定義	例	ステージ1	ステージ2	ステージ3
		めに自分を鼓舞する方法を知っている。	<ul style="list-style-type: none"> 身体活動を行う前、行っている最中並びに行った後の心拍数並びに呼吸数の変化を認識する。 走っている最中に疲労感が与える影響を探求する。 	<ul style="list-style-type: none"> 運動後の筋肉の痛みを低減させるためのクーリングダウンの一部としてストレッチを行う。 認識した疲労度に応じてスロウダウンしたり、スピードをあげたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 異なるコンディションの中で身体をアクティブな状態に保つための計画を立て、対応できる準備をする。 最も好ましい時間に設定されたイベントを実行しきるためにペースを調整する方略を適用する。

表9 Sport Australia (2019, p.9) の社会的領域のステージ1 - 3の記述内容の例

構成要素	定義	例	ステージ1	ステージ2	ステージ3
関係	人が他人と効果的に関わることを可能にする、敬意を表する関係を培い、維持する。	<ul style="list-style-type: none"> 共感と同情を示す。 信頼と友情を共有し、発展させるといった行動を示す。 他人の感情、ニーズ並びに感心に対する理解を示す。 	<p>他人の感情、ニーズ並びに関心に対する理解を示し、運動と身体活動を通して他人との関係を探り、構築する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> 話しかけたり、話を聞いたり、共有したり反応することを含め、運動をしている際に他人と相互作用を営む。 他人に対する敬意を示すために言語や身体言語を用いる。 	<p>運動と身体活動を通して経験した様々な人間関係の特徴を理解する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> 他人との友情を培う。 運動と身体活動を通してコミュニティ内にいる他の人と関わる方法を模索し、知る。 包摂、尊敬並びに信頼といった肯定的な人間関係を生み出す行動を理解するとともに、実際にそのような行動を取る。 	<p>運動と身体活動に関連して一定の技能を用い、その基礎を培うことで人間関係を分析し、維持する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> チームのメンバー、競争相手、コーチ並びに審判との良好な関係を構築する。 運動並びに身体活動を行っている際の相互作用による行動や行為の変化について省察する。 他人の感情を認める考え、意見並びに信念を表明することでその場での自分の立場、ジレンマ、あるいは判断を表明する。
協働	コミュニケーション、協同、リーダーシップ並びに問題の解決を含めた、他人と上手に相互作用を営むための社会的技能。	<p>コミュニケーションの重要性を理解し、次のような概念を実行に移している：</p> <ul style="list-style-type: none"> 問題の解決 リーダーシップ 共感 協同 差異を受け入れる 	<p>運動と身体活動を行っている最中に他人と建設的かつ協同的に作業をする方法を探求し、身につけている。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> 他の人とボールを共有するなど、協同的な行動を示す。 他人と辛抱強く対応できる。 	<p>運動と身体活動を行っている最中に建設的な協働ができるように支援する方略を理解し、それを実際に適用する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> 運動と身体活動を行っている最中に協同的に作業する。 例えば、相手の得点を阻止する守備の戦略について示唆することのように、肯定的な成果が得られるようにチーム内でアイデアを提案する。 	<p>運動と身体活動を行っている最中に他人と協働し、意味のある、好ましい成果を生み出す。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> 問題を広げたり、あるいは解決する方略を実行する。 グループで活動している場面でリーダーシップを発揮する。

構成要素	定義	例	ステージ1	ステージ2	ステージ3
倫理	フェアネスと正義, 包摂, エクイティ, インテグリティ並びに尊敬に関連した個人の行動を規定する道徳原理.	<ul style="list-style-type: none"> • フェアプレイを示す. • 競争の状況の中でスポーツマンシップを示す. • ゲームと活動の中に他人を包摂する. • 参加者並びに観衆として適切な言葉を用いる. 	<p>運動と身体活動に関連した倫理的諸概念を探索し, 理解する.</p> <p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> • フェアプレイの概念を発達させる. • グループでの活動に他人を包摂する. 	<p>運動と身体活動に関わる自分自身の道徳原理を発達させ, 倫理的な配慮について理解し, それについて説明する.</p> <p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> • フェアネスと包摂とは何かを確認し, それらを認める. • グループのメンバー, コーチ並びに審判の判断を尊重する. 	<p>運動と身体活動に関連し, 道徳原理を根拠とし倫理的配慮について分析し, それを示す.</p> <p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 他人を包摂することが可能な活動を工夫する. • 審判がいない競争的な場面においてフェアプレイを行い続ける. • 観衆として適切な行動を示すとともに, それを提案する.
社会と文化	グループ, 組織並びにコミュニティー内に存在する文化的価値の評価.	<ul style="list-style-type: none"> • チーム, クラブ並びにコミュニティーのもつ文化的価値を理解する. • 人の違いを理解するするとともに他の人の価値観や考え方を尊重する. 	<p>運動と身体活動の経験を通して自分自身の身につけている文化的価値を探索し, 確立する.</p> <p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> • トレーニングをする際に一緒に用具を準備し, 片付けることのように, チームやクラブの価値観を理解する. • 相手と握手をし, 挨拶をすることのように, 運動と身体活動を行う場面で個人に求められる価値観を明確に示す. 	<p>運動と身体活動を経験することを通して自分自身並びに他人の文化的価値を評価する.</p> <p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 例えば, チームの歌を歌うことのように, チーム, クラブ, あるいはコミュニティーのもつ文化的価値を示し, 伝える. • 文化的な伝統についてより一層理解するために, 伝統的な土着のゲーム, ゲーリックフットボール, カポエイラのような異なる文化で生み出されたゲームやスポーツを行う. 	<p>文化内並びに文化間にみられる多様性を尊重するとともに運動と身体活動の経験に文化的価値が与える影響について理解する.</p> <p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> • チームメイト, グループのメンバー並びに対戦相手のもっている文化的価値を認め, 尊重する.

表10 Sport Australia (2019, p.9) の認知的領域のステージ1 - 3の記述内容の例

構成要素	定義	例	ステージ1	ステージ2	ステージ3
内容に関する知識	個人が理解し、伝えることのできる事実に関する知識。それらは、認識、記録の再生並びに計画作成時にしばしば重要になる。	<ul style="list-style-type: none"> • 運動することや不活性の影響を記述する。 • 得点する際の原理について理解する。 • チーム並びにグループ内での役割を理解する。 	<p>運動と身体活動に関わるキーとなる知識を認識する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> • 例えば、持ち上げるために膝を曲げる、バランスを取るために腕を広げることのように、運動がなぜ特定の方法で行われるのか、その理由を認識し、理解する。 • 例えば、健康と楽しみのように、運動と身体活動には便益があることを認識し、理解する。 	<p>原因、結果並びに基礎という観点から運動と身体活動の主要な特徴を説明する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> • 例えば、短距離走は速いが長距離走には優れていないというように、個人の長所と短所を説明する。 • ストロークのスピードを上げるためによりストリームラインを維持するというように、運動課題を解決する方法を記述する。 • 例えば、健康とウェルビーイング、社会化、肯定的な態度と行動に対する便益のよう、身体活動が重要である理由を説明する。 	<p>原因、結果並びに基礎に関わる情報を利用して、異なる運動と身体活動の主たる特徴を根拠を示して説明する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> • 特定の運動や身体活動に熟達するために必要な技能とトレーニングの方略を根拠を示して説明する。 • 精度を高め、飛距離を伸ばすためのゴルフのスイングの技術の調整の仕方のように、複雑な運動課題の解決方法を根拠を示して説明する。 • 心臓の機能、肺の容積、筋肉と骨の強度、メンタルなウェルビーイング、血中コレステロールと血圧を低く抑えるこのように、身体活動が身体に与える肯定的な影響を指摘する。
安全とリスク	運動している際に自分と他人に及ぶリスク、リスクマネジメント並びに安全上の注意事項を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> • 責任ある行動を取り、自分や他人を危険にさらさない。 • 安全上のルールと手続きを理解し、それを遵守する。 • 行う活動と環境に潜むリスクを事前に把握する。 • 例えば、自分や他人に落雷や傷害が派生する等、リスクが高い状況ではプレイを中止する。 	<p>予防的行動を取り、リスクを回避する方法を探り、確立する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> • 幅狭の平均台を歩く際にはコーチに補助を頼む等、挑戦的な運動に取り組む際には支援を求める。 • 例えば、海でフラッグの間を泳ぐ際には安全上のルールを確認し、それを遵守する。 	<p>リスクを生み出す可能性のある状況を理解して、特定するとともにそれを最低限に抑える、あるいは低減させる手続きを取る。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> • 脱水症状に陥らないように、暑い日には水分の補給量を増やす。 • 活動を開始する前に、危険な場所を確認する。 	<p>運動と身体活動を安全に行えるように安全確保の方略を立て、それを実行する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> • ある活動を実施するために必要なリスクの評価方法を開発する。 • 安全に参加できるように、ルールや用具を修正することを求め、実際にそれらを修正する。

構成要素	定義	例	ステージ1	ステージ2	ステージ3
ルール	運動と身体活動を行っている際に行為や手続きを統制するために適用される、明確で了解された規則と原理。	<ul style="list-style-type: none"> 運動している際により楽しく、成功でき、安全になるようにするためにルールを理解し、工夫し、適用すること。 運動経験を最も豊かなものにするための用具と得点システムの配慮。 	<p>運動と身体活動を行う際にルールを意識し、それを遵守すること。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> ある活動やゲームを行う際にルールが必要な理由を理解する。 用具を適切かつ安全に用いる。 ゲームの最後に相手と握手をすることのように、個人の安全を確保することやフェアプレイに関わる指示に従う。 	<p>運動と身体活動に積極的に取り組むことを可能にするルールを理解し、適用する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> 新しいゲームのルールを作り出す。 ゲームのルールを正確かつ適切に適用する。 	<p>複雑なルールを応用する、あるいは運動と身体活動を行う際にフェアプレイを可能にし、誰もが参加できるようにするルールを作り出すことができる。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> より多くの人が楽しく参加できるようにゲームのルールを修正する。 意図されていたようにするためにゲームを行う。 体育館で守るべきエチケットやスポーツマンシップのように、記述されていないルールの価値を認め、それを遵守する。
理由付け	実践と信念を生み出したり、変えたり、正当化するために事実を確認し、そのための論理を適用することにより、事象に意図的に意味を与える。	<ul style="list-style-type: none"> 私はこれが重要である理由を理解しているので、ここに焦点化して全力を尽くす。 運動課題を解決するために既知の知識を活用する。 自分の生活に合った特定の活動を選択する。 	<p>運動と身体活動を行っている際に直面する運動課題を解決するための方略、また、あるいは、信念と実践を変えるための方略を認識し、それを適用する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> 面白そうなのでダンスの授業を選択する。 健康にいいことが知られているので、ウォーキンググループに参加する。 	<p>運動と身体活動を行っている際に直面する運動課題を解決するための論理、また、あるいは、信念と実践を変えるための論理を理解する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> 腕立て側方回転を行う際の自分の長所を理解して体操クラブに加入する。 自分がハイキングからもっと得たいものがあることを知った上で、数日間にわたるハイキングに参加することを決定する。 自分のパフォーマンスを振り返り、その改善方法を確認する。 	<p>運動と身体活動を行っている際に直面する運動課題を解決するための論理、また、あるいは信念と実践を変更するための論理の根拠を明らかにし、それを適用する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> 練習に使える時間が限られていることを確認し、より短時間で実施でき、より強度の高い身体活動を選択する。 生活上の多様なストレスを確認し、精神的なウェルビーイングに焦点を当てた活動に切り替えることを正当化する。

構成要素	定義	例	ステージ1	ステージ2	ステージ3
方略と計画	方略と計画は、省察と利用可能な資源を用いることで設定した目標が達成される方法を記したものである。	<ul style="list-style-type: none"> • ゲームで適用されるチームのフォーメーションを開発する。 • より大きな目標を達成する過程としてより小さな指標を設定する。 	<p>運動と身体活動を行っている際に直面する運動課題を解決するための方略、また、あるいは、信念と実践を変えるための方略を認識し、それを適用する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> • 面白そうなのでダンスの授業を選択する。 • 健康にいいことが知られているので、ウォーキンググループに参加する。 	<p>同じ成果を得るために複数の選択肢を含んだ複合的な方略を作成する。</p> <p>例：</p> <ul style="list-style-type: none"> • 例えば、攻撃チームがプレイする際には守備者の人数を増やすといったように、ゲームの前に攻撃と守備の戦略を工夫する。 • サーフィンを計画する際には、どのような波を捕まえ、いつこぎ出すのかを予め決めておく。 	<p>運動に関する目標を達成するために、不測の事態に対する反応や計画を想定しておく。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 例えば、内野のプレイヤーの上限人数が制限された際にクリケットの守備のフィールドをT20に設定するように、変更されたルールに対応した戦略を工夫する。 • 天候と海の変化、あるいはサーフィン競技会の順位に対応した、代替可能な戦略を立てる。

引用・参考文献

The Aspen Institute Project Play (2015) Physical Literacy in the United States A model, Strategic Plan and Call to Action
<https://www.aspeninstitute.org/publications/physical-literacy-model-strategic-plan-call-action/> (2021.7.15)

Cairney, J., Kiez, T., Roetert, E.P. and Kriellaars, D. (2019) A 20th-Century Narrative on the Origins of the Physical Literacy Construct. *Journal of Teaching in Physical Education*. 38 : 79-83

Cariney, J., Clark, H., Dudley, D. and Kriellaars (2019a) Physical Literacy in Children and Youth-A Construct Validation Study. *Journal of Teaching in Physical Education*. 38 : 84-90

Cornish, K., Fox, G., Fyfe, T., Koopmans, E., Pousette, A., and Pelletier, C.A. (2020) Understanding physical literacy in the context of health : a rapid scoping review.

BMC Public Health volume 20, Article number: 1569 (2020) ICSSPE (1999) Berlin Agenda
<https://view.officeapps.live.com/op/view.aspx?src=https%3A%2F%2Fwww.icsspe.org%2Fsites%2Fdefault%2Ffiles%2FBerlin%2520Agenda-English.doc&wdOrigin=BROWSELINK> (2022. 3. 6)

ICSSPE (2013) Physical Literacy. *Journal of Sport Science and Physical Education*. Vol.65. 2013

IPLA Our History
<https://www.physical-literacy.org.uk/about/?v=24d22e03afb2> (2022. 3. 25)

IPLA Choosing Physical Activity for Life Be your best
<https://www.physical-literacy.org.uk/wp-content/uploads/2020/05/IPLA-Choosing-Physical-Activity-for-Life-web.pdf> (2021. 3. 26)

神谷和義, 林恒宏 (2020) スポーツSGDs概論. 学術研究出版 : 姫路

Keegan, R. et al., (2019) Defining Physical Literacy for Application in Australia : A Modification Delphi Method. *Journal of Teaching in Physical Education*. 38 : 105-118

Kirk, D. (2004) Framing quality physical education : the elite sport model or Sport Education.

- Physical Education and Sport Pedagogy, 9(2) : 185-195
- 国連 (2005) 2005年は「スポーツと体育の国際年」プレスリリース 04/099-J 2004年11月30日
https://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/990/ (2022. 3. 6)
- NASPE (1995) Moving Into the Future National Physical Education Standards : A Guide to Content and Assessment. WCB/McGraw-Hill : Boston
- NASPE (2004) Moving into the Future National Standard for Physical Education. 2nd ed.. McGraw Hill : Boston
- 岡出美則 (2018) 21世紀型能力を踏まえた体育の学力概念の検討. 平成26 ~ 29年度科学研究費補助金 (基盤研究(B)) 科学研究費報告書
- 岡出美則 (2021) ドイツ「スポーツ科」の形成過程. 明和出版 : 東京
- Right to play What is sport for development and peace ?
https://www.sportanddev.org/sites/default/files/downloads/what_is_sport_for_development_and_peace.pdf?msclid=7d801ffaabc211ecb3b8f6762f7d5e82 (2022. 3. 25)
- Robinson, D. and Randall, L. (2017) Marking Physical Literacy of Missing the Mark of Physical Literacy ? A Conceptual Critique of Canada's Physical Literacy Assessment Instruments. Measurement in Physical Education and Exercise Science. 21(1) : 40-55
- SHAPE (2014) National Standards and Grade-Level Outcomes for K-12 Physical Education. Human Kinetics : Champaign
- Shortt, C.A., Webster, C.A., Keegan, R.J., Egan, C.A, and Brian, A.S. (2019) Operationally Conceptualizing Physical Literacy : Result of a Delphi Study. Journal of Teaching in Physical Education. 38 : 91-104
- Sport Australia (2019) Sport Australia Position Statement on Physical Literacy.
https://www.sportaus.gov.au/physical_literacy#:~:text=The%20Australian%20Physical%20Literacy%20Framework%20activates%20this%20commitment,and%20emotions%20that%20motivate%20you%20to%20be%20active (2022. 3. 26)
- Sport Australia (2019a) Australian Physical Literacy Framework version 2
https://www.sportaus.gov.au/__data/assets/pdf_file/0019/710173/35455_Physical-Literacy-Framework_access.pdf (2022. 3. 26)
- Sport Australia Physical Literacy Program Alignment Guidelines
https://www.sportaus.gov.au/physical_literacy/resources (2021. 10. 16)
- Sport Australia (2021) Physical Literacy in Children Questionnaire User Guide.
https://www.sportaus.gov.au/__data/assets/pdf_file/0009/994248/Physical-Literacy-in-Children-Questionnaire-User-Guide.pdf (2021. 10. 16)
- Sport Australia Yulunga Traditional Indigenous Games
<https://www.sportaus.gov.au/yulunga> (2022. 3. 10)
- Telford, R.M., Olive, L.S., Keegan, R.J., Keegan, S., Barnett, L. M., Telford, R.D. (2021) Student outcomes of the physical education and physical literacy (PEPL) approach : a pragmatic cluster randomised controlled trial of a multi-component intervention to improve physical literacy in primary schools. Physical Education & Sport Pedagogy 26(1) : 97-111
- The Physical Literacy for Life project Physical Literacy for Life self-assessment tool.
<https://physical-literacy.isca.org/tools/> (2022. 3. 25)
- UNESCO International Conference of Ministers and Senior Officials Responsible for Physical Education and Sport (MINEPS)
<https://en.unesco.org/themes/sport-and-anti-doping/mineps> (2022. 3. 6)
- UNESCO (2013) MINEPSV MediaE-KIIT

- http://www.mineps2013.de/fileadmin/Dokumente/pdf/MINEPS%20V_Media%20E%20Kit_eng.pdf (2013. 6. 3)
- UNESCO (2013a) Fifth International Conference of Minister and Senior Officials Responsible for Physical Education and Sport (MINEPS V) Berlin, Germany, 29–30 May 2013FINAL REPORT
<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000222898> (2022. 3. 6)
- UNESCO (2014) World-wide Survey of school Physical Education Final Report 2013. UNESCO : Paris
<https://www.bing.com/search?q=World-wide+survey+of+school+physical+education+&form=ANNTH1&refig=5ab46a4d2d524a2c8ee3520509f7401b> (2022. 1. 15)
- UNESCO (2015) Quality of Physical Education Guidelines for Policy-Makers
<http://unesdoc.unesco.org/images/0023/002311/231101E.pdf> (2022. 3. 26)
- UNESCO (2021) How to influence the development of quality physical education policy : a policy advocacy toolkit for youth.
<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000375423> (2021. 3. 22)
- Whitehead, M. (2001) The concept of physical literacy. *European Journal of Physical Education* .6(2) : 127–138
- Whitehead, M. (ed.) (2010) *Physical Literacy*. Routledge
- Margaret E. Whitehead, M. E., Durden-Myers, E.J. and Niek Pot, N. (2019) The Value of Fostering Physical Literacy. *Journal of Teaching in Physical Education*, 37 : 252–261
- Whitehead, M. (2019) *Physical Literacy Across the World*. Routledge

1 - 2. 日本の保健体育科学習指導要領にみるPhysical Literacy

岡出 美則¹⁾

1 分析枠組みとしてのPhysical Literacyの概念

2017年3月(幼稚園, 小学校, 中学校), 同年4月(特別支援学校幼稚部教育要領, 特別支援学校小・中学部学習指導要領)並びに2018年3月(高等学校)に告示された学習指導要領においてに日本において体育に関わる教科の名称は, 小学校では「体育」, 中学校, 高等学校では「保健体育」となっている。高等学校の専門学科における教科名は, 体育となっている。

教科の名称は, 教育制度に基づき決定される。そのため, 国によっては保健と体育が別教科で設定されている国や保健が教科として設置されていない国もある。そのため, 以下では, 我が国における教科としての体育におけるPhysical Literacy(以下 身体的リテラシー)の位置づけを確認するために, まずは, 小学校における体育, 中学校, 高等学校における保健体育の目標を対象とすることとする。

また, 身体的リテラシーの捉え方は, それが記された時期や国による違いがみられる。そのため, UNESCO(2015, 2021), IPLA(International Physical Literacy Association)並びにSport Australia(2019)の定義の共通項を踏まえることとする。具体的には, 次の2点である。

1) 生涯スポーツを志向していること
2) 身体的リテラシーの構成領域として身体的領域(技能と体力), 認知的領域(知識), 情意的領域(楽しさ, 自信, コントロール, 動機等)並びに社会的領域(価値観, 社会的スキル等)を想定していること。

身体的リテラシーを育む場は, 学校教育や教科に閉じている訳ではない。また, 年齢を重ねれば自動的に高まるものもない。生涯にわたり, 個人

がそれを身につけていく旅を続けていく中で育まれていくものとされている。他方で, 特定の教育目標達成のための手段として身体的リテラシーを育成するという発想に立つ概念でもない。人間が人間として全体的に発達していくためには, これら4つの領域に位置づけられている能力を身につけてくことを求めているという点では, スポーツの手段論に立つわけではない。

2 体育の目標をめぐる4つの立場からみた日本の学習指導要領の目標記述と身体的リテラシー

学習指導要領のような, 制度的に提示される体育という教科の目標は, ある時代にある目標論が急に消失し, 新たな目標論が新たに支持されていくという形で変化するものではない。理論的には同時に複数の目標論が並存し得る。また, 個人が抱く体育観という観点からみれば, 過去の体育観が今日でも支持されたり, あるいは, 複数の価値観が個人内でも並存している(Ennis, 1999, 2003)。身体的リテラシーからみた我が国の体育の学習指導要領の目標記述の変遷を検討する際には, この点にも配慮することが必要になる。

例えば, 表1は, 我が国で明治以降にみられた体育の目標をめぐる典型的な4つの立場を示している。

この区分は, Arnoldが運動という名辞を用いて示した, 「関しての教育」「通しての教育」「中の教育」が互いに相互依存的な関係に置かれているとの提案を踏まえたものである。彼は, こ

表1 体育の目標をめぐる4つの立場

身体教育
スポーツを通しての教育
スポーツに関する教育
スポーツの中の教育

1) 日本体育大学

れら三者の違いを次のように説明している。

「運動に「関する」教育とは、学問的に、冷静に研究される理論領域として運動を扱う立場として特徴づけられた。これに対して、運動を「通しての」の教育は、すでに示したように、一般に体育として知られている一連の身体活動を正しいと思われるように利用する立場である。知的教授を伴うそれは、それらの活動に必ずしも本質的ではない価値を利用するように実施することもできる。しかし、この第3の次元、すなわち運動の中という立場の関心は、活動そのものに本来備わっている価値にある。」(Arnold, 1979, p.176)

ここで重要なことは、これら三つの次元が直線的な発展図式に位置づけられるわけではなく、相互依存関係におかれることである。この点を意識しながら、我が国の体育の目標論を振り返りたい。

我が国で身体教育が語られる際には、保健的関心に基づく身体の擁護や富国強兵策のもとで軍事力としての身体の鍛錬、さらには、精神鍛錬の手段として身体を位置づけることを前提としている。それは、精神の思いのままに動く身体の育成を意図した教育を指している。それは、精神に従属させられ、刺激を与えられることで機能を向上させる機械という身体観を前提としている。それはまた、学校教育の目的に関して示された、精神が身体を支配するという身体観に基づく理論であった。しかも、この関係論が、教育制度に反映されるとことにより、教科間のヒエラルキーが派生する。それは、また、教員の地位に対するヒエラルキーを派生させることにもなる。実際、精神の優位を前提とした学校教育制度の中では、身体に対応する教科として位置づけられた体育は、いわゆる知的教科に比べ低く位置づけられることになる。また、身体に加えられる負荷が問題にされるのみであり、そこにはスポーツが学習を必要とする文化財であるとの認識もみられなかった。その結果、体育という教科で学習すべき知識や技術の存在が意識されることもなかった。この関係打破に向けて提案された理論が、「スポーツを通しての教育」であった。

「スポーツを通しての教育」は、スポーツを一般的な教育目標実現の手段として位置づける理論

である。我が国の学習指導要領にもみられた次の指摘は、その典型である。

「健康が教育の基本目標の一つであることは、一般に知られているとおりであるが、学校における健康教育は、その保健指導計画に基づいて生徒の健康の保護・増進をはかりながら、健康生活についての理解・態度・技能・習慣の発達を旨とする教育の分野ということが出来る。これに対して体育は、いろいろな身体活動をとおして教育の一般目標達成に貢献せんとする教育の領域とされる。」(文部省, 1951)

また、当時の学習指導要領の作成に関与した江橋や竹之下は、教科の性格について、次のように指摘している。

「しかしこの場合注意せねばならないことは、「健康教育」は「健康の教育であり、その健康」は教育的な目的であるのに対して、「身体教育」は身体運動による教育であって、身体運動の教育ではなく、その「身体(運動)」は教育の手段であって目的ではないということである。」(江橋, 宇土, 1949, p.8)

「体育が「身体」の教育から「身体活動による」教育に変わって来たことは既に述べた。すなわち、今日では身体活動やこれと関連する学習活動によって身体的、社会的、知的発達を目標とする教育の方法という意味に体育は解されている。体育はこのように教育目標に対する方法的な意味が強いかれども健康はそれ自体教育目標である。」(竹之下, 1949, p.26)

この立場のもとでは、個々のスポーツの価値は一般的な教育目標実現への貢献度から評価されることになる。しかし、この立場からは、教科固有の目標や教科内容が示されることはない。一般的な教育目標はすでに設定されているためであり、個々のスポーツはそれらの目標実現の手段とされるためである。

ここでもまた、学習を必要とする、価値ある文化財としてスポーツという認識はみられない。加えて、そこには、陸上競技といったスポーツ種目を教えることによって期待される効果が自動的に生み出されるとの認識がみられる。これは、まさに機能的な教育観に立脚した立場といえる。さら

に言えば、この立場のもとでは、素材と教材、教科内容の区別の必要性が意識されることもあり得ないことになる。その結果、教科で学習すべき教科内容を提案する必要性が自覚されることもなかったと言える。

これら2つの立場では、いずれも、スポーツは一般的な教育目標達成の道具とされていた。他方で、1970年代に入ると、生涯スポーツという言葉に代表されるように、スポーツそれ自体が学習に値する価値を備えているとの主張が社会的に支持されていく。その結果、スポーツと教育の関係論が大きく変容していく。生涯スポーツの基礎を培う場としての体育という理念の登場である。かつての体育は、学校期の教育を想定していた。しかし、体育は今や、学校終了後や学校外のスポーツや健康で文化的な生活との関係を踏まえて、学校教育内で自らを位置づけることが可能になったといえる。その結果、学習の対象としてのスポーツは単にするものに留まるものではなく、観る、支える、知るといった広がりを与えられることになる。また、職業領域への導入的性格も求められることになる。当然、体育においても、それを可能にする資質能力の保証が求められることになる。他方で、上述したように、「スポーツを通しての教育」は教科としての体育の存在基盤を足下から崩すという危険を備えていた。「スポーツの中の教育」は、このような危機回避のためにも必要とされた。我が国でいえば、体育関係者からのこの点に関連した理論の提案のはしりは、丹下の主張であろう。

丹下は、体育科はスポーツ、保健、ダンスの3つの文化領域からなる混合教科であると指摘した。その上で、教科成立の根拠として1)文化の質、2)子どもの発達素行、3)教授・学習過程との即応、4)学校体制をあげている。そして、混合教科であることは望ましくなく、「体育科はスポーツの文化領域を中核とし、保健科の独立、ダンスは演劇などととも芸術科(仮称)へと発展することが望ましい」(丹下、1987、p.243)と指摘した。1965年のことである。

しかし、このような立場が即座に社会的に支持されたわけではない。それが支持されるには、肯

定的なスポーツ観の提案が不可欠である。本来スポーツは自由なものであり、楽しく、生活を豊かにする文化であるとの認識がそれである。しかし、当時、丹下自身、スポーツが人間疎外を引き起こす可能性を備えていることを前提としていたように、スポーツに対する社会的評価は必ずしも高いものではなかった。だからこそ、丹下は、人間的な文化へと改革を求められる文化としてスポーツの継承と発展の必要性を指摘したのであった。しかしその結果、近代スポーツ批判が前面に押し出されることになった。社会における文化としてのスポーツの変革を学校が担う必要があるという認識に立つ点では、丹下の主張は重要であった。そして、その主張は、中村へと引き継がれていく。しかし、この指摘に対しては、果たして学校はそのような要求に現実的に対応できるのかという反論を招くことになる。加えて、学習の対象となるスポーツ文化の内容が明示されない場合、それが授業づくりに対する生産的な論議を生み出すことは難しい。また、スポーツを教えることに積極的な立場を取る教員からすれば、自らが教えようとしている対象そのものが否定されている印象を与えるというリスクを負うことになる。その意味では、丹下の主張した「スポーツの中の教育」は、社会的に支持されていくための修正が必要であった。その契機を提供したのは、「運動の楽しさ」を目標として掲げる「スポーツの中の教育」であった。実際、1977年指導要領(文部省、1977)は、運動の楽しさを体育の目標として初めて位置づけたが、それは、スポーツの意味論をスポーツを行う人間の心理的欲求という観点から整理した論であった。ここでは、学習者からみたスポーツの意味が注目されることになる(宇土、1986、pp.32-33)。我が国では、「スポーツの中の教育」が、情意目標へと強く方向付けられたと言える。

しかし、「スポーツの中の教育」において、情意目標が強調されることは、それ以前の二つの理論と同様、教科で指導する内容不在との指摘を招きかねない。この点を回避する視点を提供したのは、「スポーツに関する教育」であった。

学校という制度の中で、教科として位置づこうとすれば、他教科と同様に、学習に値する教科内

容が存在することを説得できる論理構成と、実際にその体系を提示すること、さらにはそれらの学習可能性を示すことが求められる。科学的な知識は、その拠り所の一つである。科学の成果を教科内容として位置づける「スポーツに関する教育」という理論は、その先鞭を切るものであった。

実際、アメリカにおいて、専門職としての体育を「ヒューマン・ムーブメントのアートとサイエンスの学習に関する学校プログラム」(Brown & Cassidy, 1963)とするムーブメント教育が1960年代に提案されていった。それは、体育があくまで、美術教育や科学教育と同等の学校教育プログラムであり、同時に、科学ベースで専門職の内容を構築するという宣言でもあった。しかし、このようなアイデアは、アメリカにのみ、みられたわけではない。我が国でも同様の指摘がみられた。

例えば、教育科学研究会（以下教科研）身体と教育分科会では、すでに1958年の大会において「からだづくりと子どもの認識」の関係が問題にされている。「体育の学習において知的理解の学習をすすめていくときには、どのように頭とからだとの分離を統一させていけばいいのかということに、どうしても正面からとりくまざるえないのである。」(正木, 1958, pp.36-38)との指摘が、それである。そこではまた、実践録をもとに、体育の授業で育てている認識が、8点に整理されて示されている(正木, 1958, pp.39-41)。

この正木の指摘は、認識の対象への言及であり、学習の対象を知識に求める点では、「スポーツに関する教育」に位置づけることもできる。しかし、そこでは、認識の対象となる知識の根拠を何に求めるのかが不明瞭である。これに対して、それをスポーツ科学に求めた中村(1976, p.63)の提案は、我が国における「スポーツに関する教育」として明確に位置づけることができる。

しかし、体育で教える内容を科学の成果に限定することへの疑問も当然想定できる。それは、科学を教科設定の根拠とする論理への迎合に過ぎないのであり、むしろ、身体を基盤とするスポーツの知の本質を見失うのではないかとの批判である。実際、我が国において、1947年の学習指導要領以降一貫して「体育に関する知識」や「体育理

論」が位置づけられてきたにもかかわらず、実際には、その実施率は低調であった。このことは、「スポーツに関する教育」が理論レベルや制度レベルで提案されてはいても、授業を行う大多数の教師達には支持されていなかったことを示している(岡出, 2021)。

以上の過程は、体育の授業の目標に対する様々な提案が学習指導要領の目標記述のように制度化される過程には、様々なメカニズムが働くことを示唆している。以下では、この点を踏まえつつ、日本の学習指導要領にみる体育の目標記述の変遷を確認したい。

3 第二次大戦後の体育科の目標変遷

表2は、第二次大戦後の小学校の学習指導要領にみる体育の目標記述の一覧である。小学校を例に取れば、我が国では、第二次大戦後、10回の学習指導要領の改訂が行われている。また、それが法的効力をもった1958年以降、1968年、1977年、1989年、1998年、2008年並びに2017年に学習指導要領が示されている。

学習指導要領が法的拘束力をもつのは、1958年以降であり、それ以前は名称にも違いがみられる。しかし、我が国の体育が何を目標として掲げてきたのかを知る上では、1958年以前の学習指導要領の記述の確認も必要であろう。法的拘束力を持たなかったとはいえ、体育の目指すべき目標は、アメリカの情報や我が国の学校における試行錯誤を経て検討されてきたためである。

なお、今日、「学習指導要領は各学校において編成される教育課程の基準として、すべての児童生徒に対して指導すべき内容を示したものであり、指導の面から全国的な教育水準の維持向上を保障するもの」(中央教育審議会, 2010)とされる。そのため、「児童生徒が学習指導要領の示す目標に照らしてその実現状況を見ることが求められるもの。学習評価は、児童生徒の学習状況を検証し、結果の面から教育水準の維持向上を保障する機能」(中央教育審議会, 2010)を有するとされる。学習指導要領の改訂に際しては学習指導要領の実施状況調査(国立教育政策研究所)が実施されることになる。体育において学習指導要領に基づく

表2 戦後日本の学習指導要領に見る体育の目標論の変遷

公布年	目標記述	特徴
<p>1947 学校体育 指導要綱</p>	<p>一 体育の目的 体育は運動と衛生の実践を通して人間性の発展を企図する教育である。それは健全で有能な身体を育成し、人生における身体活動の価値を認識させ、社会生活における各自の責任を自覚させることを目的とする。</p> <p>二 体育科教育の目標 体育の目的から導き出される主なる目標を示せば次のようになる。</p> <p>(一) 身体の健全な発達 次の事項に関する理解と熟練と態度を養う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 正常な発育と発達 2. 循環, 呼吸, 消化, 排泄, 栄養等の諸機能の向上 3. 機敏, 器用, 速度, 正確, リズム 4. 力及び持久性 5. 神経系の活力と支配力 6. 仕事にも健康にもよい姿勢と動作 7. 自己の健康生活に必要な知識 8. 疾病その他の身体的欠陥の除去 <p>(二) 精神の健全な発達 次の事項に関する理解と熟練と態度を養う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 体育運動に対する広い健全な興味と熟練 2. 勝敗に対する正しい態度, レクリエーションとしてのスポーツの正しい認識 3. 健康活動の広い認識 4. 身体動作を支配する意志力 5. 状況を分析して要点を発見する力 6. 適切な判断力と敢行力 7. 指導力 8. 油断のない活ばつな心のはたらき <p>(三) 社会的性格の育成 次の事項に関する理解と態度と実践力を養う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 明朗 2. 同情 3. 礼儀 4. 誠実 5. 正義感-フェアプレー 6. 団体の福祉及び公衆衛生に対する協力 7. 性に対する正しい理解 8. 克己と自制 9. 法及び正しい権威に対する服従 10. 社会的責任を果たす能力 11. 状況に応じてより指導者となり, よい協力者となる能力 	<p>健全な日常生活を営むために必要な能力の提示している。例えば、精神力の内容としての状況判断力が提示されている。</p>

公布年	目標記述	特徴
<p>1949 学習指導 要領小学 校体育編 (試案)</p>	<p>体育科の性格 教育の目標を達成するために必要な、児童の活動・経験はきわめて多様である。現在の各教科は、これらの活動をその性質にしたがって分類したもので、教科の区別はいわば便宜的なものである。すなわち体育科と他教科との区別は内容となる活動の性質の相違にもとづくものであって追求する一般目標は同一である。したがってこの目標を達成するために体育科は運動と衛生の関連をはかるだけでなく、他教科と責任をわかち合わなければならない。</p> <p>このような立場で体育科の性格を考えると、体育科は教育の一般目標の達成に必要な諸活動のうち、運動とこれに関連した諸活動および健康生活に関係深い活動を内容とする教科であるということが適当であろう。</p> <p>われわれの日々に行う活動はほとんど身体活動といつてよいが、これらのうち、遊戯やその他スポーツ、体操などで組織だてられた身体活動によって身体的、社会的、情緒的などの発達が助長されるとともに余暇の活用に対する基礎も習得されるのである。</p> <p>運動と衛生が緊密に関連して学習が指導される時、体育科はよく教育の一般目標達成に貢献することができるのであるが、衛生に関するものは別に指導の手引書が出されることになっているので本書から省いた。</p> <p>第二節 体育科の目標</p> <p>体育科の目標は、教育の一般目標を目ざしながらなお体育科の性格に応じてさらに具体化される。</p> <p>目標の決定には、社会生活の体育的要求を考えるとともに児童の要求を考慮することが必要である。われわれが目ざしている民主国家を打ち立てるためにも、また現実の社会をながめてみても、そこには体育科の立場から見て改善しなければならない多くのものがある。また同時に、各発達段階にある児童の側にも、正しい発達のためにそれぞれ体育的要求が存する。したがって体育科の目標は、社会と児童のもつこれらの要求のいずれをも満たすものでなければならないのであって、単に児童の立場からのみ、あるいは将来の社会生活の要求のみから目標を決定してはならないのである。</p> <p>体育科の一般目標というべきものは次のように考えることが適当であろう。</p> <p>一、健康で有能な身体を育成する。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 身体を均せいに発達させる。 (2) よい姿勢をつくる。 (3) 筋力や持久力などの身体的機能を高める。 (4) 循環・呼吸・消化・排せつなどの機能を高める。 (5) 筋神経の活力や調整力を発達させ、機敏・器用・速度・正格・リズムミカルな動作の熟練をはかる。 (6) 身体的欠陥の矯正に努める。 (7) 健康生活に必要な知識・態度・習慣を得させる。 (8) いろいろな生活場面で身体を安全に保つことについての知識と能力を高める。 <p>二、よい性格を育成し、教養を高める。</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 責任感を高め、完行の態度を養う。 	<p>一般的な教育目標実現への貢献が強調されている。他教科との違いは内容の違いであることを明記している。また、民主国家の確立をめざすことを明記している。</p> <p>他方で、設定されている価値への服従、その受容が強調されている。そこには、既存の価値への批判的態度を養うことは想定されていない。</p>

公布年	目標記述	特徴
	<p>(2) 他人の権利を尊重し、社会生活における同情の価値を理解実践させる。</p> <p>(3) 礼儀について認識を高める。</p> <p>(4) 勝敗に対する正しい態度を養う。</p> <p>(5) 正義感を高め、正義にもとづいて行動する態度を養う。</p> <p>(6) 状況に応じてよい指導者になり、よい協力者となる態度・能力を得させる。</p> <p>(7) 寛容な態度を養う。</p> <p>(8) 法および正しい権威に対して服従する態度を養う。</p> <p>(9) 自制の能力を得させる。</p> <p>(10) 状況を正確に観察し、分析し、判断するなどの能力を高める。</p> <p>(11) 情緒の安定をはかり、情操を豊かにする。</p> <p>(12) 公衆衛生に対する協力の態度を養う。</p> <p>(13) 体育運動に対する広く健全な興味と熟練を得させ、よい社会生活の基礎をつくる。</p>	
<p>1953 小学校学 習指導要 領体育科 編</p>	<p>第I章 体育科はどんな役割をもつか</p> <p>1 体育科の位置</p> <p>児童の行動や考え方の変化によって、個人や社会の必要を満たそうとする教育の目標は、(1) 個人生活、(2) 家庭および社会生活、(3) 経済および職業生活の三つの側面に分けて学習指導要領一般編（昭和26年改訂版）に書かれているがこのような教育目標に到達するために、学校教育は各方面にわたる学習経験を組織し、計画的・組織的に学習せしめようとする。そして、このような学習経験の組織が、いわゆる教科であって、体育科はその一つである。</p> <p>各教科は、教育目標を達成するために、それぞれ独自の経験組織をもっている。体育科を構成する経験の組織には、他の教科のそれと異なった独自のものがなければならない。いったいそれは何であろうか。いうまでもなく、それは身体活動およびそれに関連する経験の組織である。体育で通常、身体活動というのは遊戯・スポーツのごとき大筋活動であるが、それは、単に身体支配の経験と遊戯・スポーツのごとき大筋活動に対する経験をも含んでいる。</p> <p>ところが、学習指導要領一般編では、体育科は、主として、「健康な生活に導く目標のために」組織立てられた教科であると説明している。もちろんこれには次のような注釈が加えられている。すなわち、これは「主要な点をとらえていったものであって」この教科の「分担をこれだけに限定することはできない」と述べているのであるが、今日の体育科のたいせつなねらいは、ただ教育の全体としての目標のある部分を分担するのではなく、むしろ、身体的運動を中心とする経験の組織をもっと深く考え、それがもつ独自の機能を通して、全体としての教育のさまざまな目標にわたって貢献しようという立場をとっているのである。</p> <p>それでは、体育科が教育に貢献しうるところの独自の機能にはどんなものが考えられるであろうか。詳しくは、体育科の目標のところで述べることにしてここではその大略を示すことにする。</p> <p>(1) 児童の身体活動についての生理的な必要を、社会的に望ましい形で満たす。</p>	<p>一般的な教育目標 実現に向けての教科 からの貢献のみなら ず、教科が独自に発 揮できる機能を備え ていることが明記さ れる。</p> <p>レクリエーショナ ルな目標が指摘され ている。例えば、ス ポーツの企画能力、 鑑賞能力である。</p>

公布年	目標記述	特徴
	<p>(2) 身体活動を通じて、現在および将来の社会の構成員として必要な民主的生活態度を育てる。</p> <p>(3) レクリエーションとして、身体活動を正しく活用できるようにする。</p> <p>以上の諸点は、体育科がもつところの重要な役割であって、一言にしていえば、体育科は、児童生徒の身体活動を、個人的な発達や社会的に望ましい生活に役立たせるための学習経験の組織であり、この独自のはたらきを通して、教育全般に貢献しようとする領域である。</p> <p>・ ・ (中略) ・ ・</p> <p>3 他教科との関係</p> <p>教育全体の目標への到達を目ざしながら、経験の各領域を分担するところのさまざまな教科があることは、すでに述べておいた。この意味で、体育科は独自の領域をもち、その独自の機能をもっているのであるが、体育科が他の教科と無関係であってよいというのではない。</p> <p>実際において、健康の保持増進については、理科や家庭科などでも取り上げているのであるが、特に体育科は、身体活動という経験に結びついて、まず健康を損じないように指導し、さらに積極的に健康をつくり上げねばならないのであるから、これらの教科と当然密接な関係をもつ。したがって健康の保持増進のために、これらの教科は、互いに関連して、当然融合しなければならないのである。</p> <p>また、体育科で重要な部分を占めているところの人間関係については、一応社会科が、そのおもなねらいとしている。しかるに、この人間関係は体育科の重要なねらいでもある。このように、人間関係については、いずれの教科も同じものを目ざしているが社会科と体育科とでは、方法的に異なるところがある。しかもこれを除いては、今日、体育科のもつ重要な機能の一半を失うこととなり、したがって、教育全体としても、それだけ効果を減ずることになる。それゆえ社会科に関しても「健康教育」の場合と同じことがいえるであろう。</p> <p>さらに、リズム運動や表現運動は、音楽的リズムにたよることが多いので、できるかぎり、音楽科で学習したものを利用して、体育科の学習効果を高めるよう、つねに、相互に連絡することが必要である。</p> <p>さらにまた、体育科はクラブ活動や児童会などの教科以外の活動と関係することなく行うことはでない。そこにおける余暇利用についての目標、集団行動についての目標、その他、身体的・社会的・情緒的目標の到達のため、かくことのできない教科以外の活動に対しても、それを方向付け、学習効果をはかるなどきわめて関連をもっている。</p> <p>要するに、教科ならびに教科以外の活動に対して、体育科は、それぞれ重要な関連をもちつつ、独自にその機能を果たしていかなければならないのである。</p> <p>第Ⅱ章 体育科の目標</p> <p>・ ・ (中略) ・ ・</p> <p>2 体育科の一般目標</p> <p>学習者の能力を高めるための体育科のねらいにはいろいろの方面がある。それを人間のはたらきからみると、身体的・知的・情緒的・社会的側面に分けてみることもできよう。しかし現実の問題としては、知的、情緒的、社会的側面は、その関連が密接であるので、はっきりと区別することが困難である。</p>	

公布年	目標記述	特徴
	<p>このような事情のためにこの指導要領では、体育科の目標を、次の三つに分けることにしたのである。すなわち、</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 身体の正常な発達を助け、活動力を高める。 (2) 身体活動を通して民主的生活態度を育てる。 (3) 各種の身体活動をレクリエーションとして正しく活用することができるようにする。 <p>第一の目標は、身体的発達に関係するものであるが、身体活動のねらいは、生物的成長（身体的成長と活動力の発達を含む）が、かたよることなく、正常に進むための発達の刺激を与えることである。そのために、学習指導は、発達の段階や性・個人差などを考え、かつ衛生や安全に考慮を払いつつ行わなければならないのである。</p> <p>第二の目標は、体育科の立場における人間関係を促進する機会を通じて、これを民主的生活態度に方向付けようとする意図を示すものである。現代の社会にとって最も必要なものであり、しかも、体育科が貢献しなければならないものは、「社会的発達」特に「民主的生活態度」である。したがって、身体活動に関係する経験や行動を、端的にこれに方向付けることによって、体育科のもつ人間関係のねらいはいっそうはっきり示することができるであろう。</p> <p>第三の目標は、運動などをレクリエーションに利用する方面である。身体活動は、叙述のごとく、正常な身体発達のための刺激を与えるであろうし、民主的な人間関係をつくるための活動内容ともなるであろうが、それらとならんで生活を楽しく、豊かにするのに、身体活動はなくてはならないものである。したがって、これは、児童の現在および将来の生活に持ち込むことができる運動技術の体得と、余暇活動としてその活用というねらいを示すものである。</p> <p>3 具体的目標</p> <p>さきにあげた一般目標は、その中にいっそう具体的な多くの目標を含んでいる。指導のためにも、さらに具体化してみる必要がある。</p> <p>ここでいう目標は個人個人の立場ではなく、共通に必要なだと考えられるものであるが、指導にあたっては、個人差を考え、共通的な目標を個人の必要にかなうように具体化してみることも必要である。またここでは主として小学校の児童を対象に目標を立てたけれども、教育は継続的な営みであるから、一応の見通しを立てる必要から、必ずしも小学校のみに限定されていない。</p> <p>このような事情から、小学校の、しかもさらに細かく分けた発達段階に即する目標は、次章の学習内容において、いっそう具体的に示すことにした。次に掲げる具体的目標と学習内容を合わせて見るならば、小学校体育科の目標を具体的な児童の行動に近い形で、とらえることができであろう。</p> <p>身体的目標に関連して</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 年齢や性や個人差などに応じて適当な各類型の身体的活動に習熟する。 (2) 筋力・持久力などを発達させる。 (3) いろいろの場面で安全に身を処することができる。 (4) 身体の個癖を予防し、きょう正することができる。 (5) 健康生活の心得を守る。 	

公布年	目標記述	特徴
	<p>(6) 運動の効果について正しい知識をもつ。 (7) 体力の現状を正しく判断し、自身をもつ。</p> <p>民主的態度の目標に関連して</p> <p>(1) 自主的態度をもち、他人の権利を尊重する。 (2) 身体的欲求を正しく満足する。 (3) 建設的態度をもって、グループの計画や実行に協力する。 (4) グループにおいて自己の責任を果たす。 (5) リーダーを選び、これに協力する。 (6) 勝敗に対して正しい態度をとる。 (7) 他人の意見や批評をよく受け入れる。 (8) 礼儀正しく行動する。 (9) 規則をつくり、改善することができる。 (10) 規則やきまりを守って、正しく行動する。 (11) 施設や用具をたいせつに使う。 (12) 冷静、機敏に行動する。 (13) 美的情操を持つ。 (14) 他人の健康や安全に注意する。</p> <p>レクリエーションの目標と関連して</p> <p>(1) それぞれの環境で楽しめる各類型の身体活動を経験し、身体活動による満足と楽しさを味わう。 (2) レクリエーションとして適度な各種の身体活動の技能を上達させる。 (3) 各種の運動や催しに積極的に参加する。 (4) 各種の運動や催しを計画し、運営できる。 (5) 活動に必要な規則をつくり、運用できる（審判なども） (6) よい演技者となり、よい観衆となる。 (7) レクリエーションとして適度な各種の身体活動について知識をもつ。 (8) 自己に適した種目を選び、正しく実行できる。 (9) 施設をよく活用できる。 (10) 施設の意味を理解し、改善に協力する。 (11) 用具を選択し、手入れし、活用できる。 (12) レクリエーションのための余暇をじょうずにつくり、活用する。 (13) よい演技や作品を鑑賞する。 (14) 体育の歴史やその意味を知り、レクリエーションやスポーツとの関係について理解する。</p> <p>以上の各領域ごとの具体的目標は、行動から理解へ、さらに総合的能力へと展開することを旨とするものである。</p>	
1958 小学校学習指導要領	<p>第1 目標</p> <p>1 各種の運動を適切に行わせることによって、基礎的な運動能力を養い、心身の健全な発達を促し、活動力を高める。 2 各種の運動に親しませ、運動のしかたや技能を身につけ、生活を豊かにする態度を育てる。 3 運動やゲームを通して、公正な態度を育て、進んで約束やきまりを守り、互いに協力して自己の責任を果たすなどの社会生活に必要な態度を養う。 4 健康・安全に留意して運動を行う態度や能力を養い、さらに保健の初歩的知識を理解させ、健康な生活を営む態度や能力を育てる。</p>	<p>個別の目標を統合する目標が示されている訳ではない。 基礎的な運動能力が明記される。 運動の仕方や技能が位置づけられる。</p>

公布年	目標記述	特徴
	<p>上に掲げた目標は、相互に密接な関連をもつものである。目標2、3および4は、主として運動を中心とする具体的な学習を通して達成されるものであるが、目標1は、これらの目標を目ざして継続的な学習を行うことによって、はじめて達成しうるものであるから、目標2、3および4の指導の根底には、常に目標1が考慮されなければならない。</p> <p>なお、目標4については、各学年を通じて、各種の運動の実践にあたって必要な態度・安全に関する態度や能力の育成に努めるとともに、特に、第5学年以上において、健康な生活を営むために必要な保健に関する初歩的な知識を得させることを目ざしている。</p>	
<p>1968 小学校学習指導要領</p>	<p>第1 目標</p> <p>適切な運動の経験や心身の健康についての理解を通して、健康の増進と体力の向上を図るとともに、健康で安全な生活を営む態度を育てる。</p> <p>このため、</p> <p>1 運動を適切に行わせることによって、強健な身体を育成し、体力の向上を図る。</p> <p>2 運動のしかたや技能を習得させ、運動に親しむ習慣を育て、生活を健全にし明るくする態度を養う。</p> <p>3 運動やゲームを通して、情緒を安定させ、公正な態度を育成し、進んでまわりを守り、互いに協力して自己の責任を果たすなどの社会生活に必要な能力と態度を養う。</p> <p>4 健康、安全に留意して運動を行う能力と態度を養い、さらに、健康の保持増進についての初歩的知識を習得させ、健康で安全な生活を営むために必要な能力と態度を養う。</p>	<p>体力の向上が明記された。</p> <p>最終目標としての健康で安全な生活と営む態度づくりが求められている。</p> <p>運動に親しむ習慣づくりが求められている。</p>
<p>1977 小学校学習指導要領</p>	<p>第一 目標</p> <p>適切な運動の経験を通して運動に親しませるとともに、身近な生活における健康・安全について理解させ、健康の増進及び体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。</p>	<p>運動に親しませることが、目標の最初に明記される。</p> <p>楽しく明るい生活を営む態度を育てることが、究極の目標とされる。</p>
<p>1989 小学校学習指導要領</p>	<p>第一 目標</p> <p>適切な運動の経験と身近な生活における健康・安全についての理解を通して、運動に親しませるとともに健康の増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。</p>	<p>適切な運動の経験と身近な生活における健康・安全についての理解を通して運動に親しませることが明記される。</p>
<p>1998 小学校学習指導要領</p>	<p>第1 目標</p> <p>心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。</p>	<p>心と体の一体化が強調される。</p>

公布年	目標記述	特徴
2008 小学校学習指導要領	1. 教科の目標 心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。	心と体を一体としてとらえることは維持生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てることを明記。 楽しく明るい生活を営む態度を育てることが究極の目標。
2017 小学校学習指導要領	体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 (1) その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。 (2) 運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。 (3) 運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。	体育や保健の見方・考え方が明記される。 生涯にわたり心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成が究極目標として明示される。 育成すべき資質・能力が、1) 知識及び技能、2) 思考力、判断力、表現力等並びに3) 学びに向かう力、人間性の3点で整理される。

表3 1977年以降の日本の小学校体育の学習指導要領の6年生の目標記述

発行年	6年生の目標記述
1977	(1) 各種の運動の楽しさを体得するとともに、その特性に応じた技能を養い、体力を高める。 (2) 協力、公正などの態度を育てるとともに、健康・安全に留意し、自己の最善を尽くして運動する態度を育てる。 (3) 病気の予防及び健康な生活の仕方について理解させ、健康を保持増進することができる能力と態度を育てる。
1989	(1) 各種の運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにするとともに、その特性に応じた技能を身に付け、体力を高める。 (2) 協力、公正などの態度を育てるとともに、健康・安全に留意し、自己の最善を尽くして運動する態度を育てる。 (3) 体の発育と心の発達、けがの防止、病気の予防及び健康な生活について理解できるようにし、健康で安全な生活を営む能力と態度を育てる。
1998	(1) 各種の運動の課題をもち、活動を工夫して計画的に行うことによって、その運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにするとともに、その特性に応じた技能を身に付け、体の調子を整え、体力を高める。

発行年	6年生の目標記述
	<p>(2) 協力、公正などの態度を育てるとともに、健康・安全に留意し、自己の最善を尽くして運動をする態度を育てる。</p> <p>(3) けがの防止、心の健康及び病気の予防について理解できるようにし、健康で安全な生活を営む資質や能力を育てる。</p>
2008	<p>(1) 活動を工夫して各種の運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにするとともに、その特性に応じた基本的な技能を身に付け、体力を高める。</p> <p>(2) 協力、公正などの態度を育てるとともに、健康・安全に留意し、自己の最善を尽くして運動をする態度を育てる。</p> <p>(3) 心の健康、けがの防止及び病気の予防について理解できるようにし、健康で安全な生活を営む資質や能力を育てる。</p>
2019	<p>(1) 各種の運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方及び心の健康やけがの防止、病気の予防について理解するとともに、各種の運動の特性に応じた基本的な技能及び健康で安全な生活を営むための技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) 自己やグループの運動の課題や身近な健康に関わる課題を見付け、その解決のための方法や活動を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝える力を養う。</p> <p>(3) 各種の運動に積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に留意したりし、自己の最善を尽くして運動をする態度を養う。また、健康・安全の大切さに気付き、自己の健康の保持増進や回復に進んで取り組む態度を養う。</p>

*1989年以降は、第5・6学年の目標として記されている。

*2008年までは小学校の中学年以降は、保健の目標に関する記述が独立した項目として記されている。

実技の実施状況調査が実施されたのは、2013年が初めてである。

表2-3からは、体育の目標記述が次第に簡略化されてきたことが確認できる。同時に、1953年学習指導要領において教科が固有に担うべき課題がすでに明確に意識されていたことも確認できる。

もっとも、その記述内容は、「スポーツを通しての教育」の範疇内であった。その意味では、スポーツの文化的価値に関してどのような評価が加えられてきたのかが問われることになる。「スポーツの中の教育」が主張できるためには、スポーツそのものが学習に値する文化であるとの認識が不可欠であるためである。また、スポーツそのものの内容とは何かが明らかにされ、構造化して示される必要がある。この点に関して言えば、我が国の学習指導要領の改訂過程をめぐる論議を通してスポーツに対して示される社会的評価は高まっていったといえる。次の指摘は、その例である。

「スポーツは現代において欠くことのできない文化的な営みとして、多くの存在意義を有してい

る。まず、スポーツは、体を動かすという人間の本源的な欲求にこたえるとともに、爽快感、達成観、他者との連帯等の精神的充実や楽しさ、喜びを与え、また、健康の保持増進、体力の向上のみならず、とりわけ青少年にとっては、人間形成に大きな影響を与えるなど、心身の両面にわたる健全は発達に寄与するものである。

また、スポーツは人間の可能性の極限を追求する営みという意義を有している。トップレベルのスポーツはそれを見る人たちに深い感動や夢、楽しみを与えてくれるなど、活力ある健全な社会の形成に大きく貢献するものである。

さらに、スポーツは言語の壁を越える世界共通の文化として、国際的な友好と親善を深める上でも、重要な役割を果たしている。」(文部省、1999、p.373)

他方で、混乱する学校教育への対処という観点からは、このようなスポーツへの期待を踏まえ、教科としての体育にも強い期待が寄せられた。例えば、2002年実施の指導要領改訂では体育・健康教育に関して次のコメントが示された。

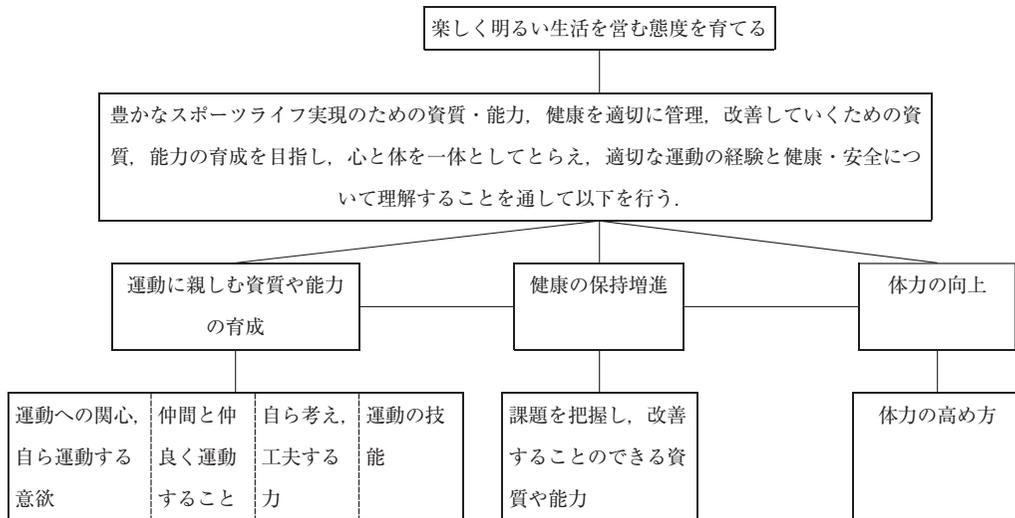


図1 1999年小学校学習指導要領にみる体育科の目標構造（文部省、1999a、11-14）

「生涯にわたって運動に親しみ基礎的体力を高めることを重視したこと、心の健康、望ましい食習慣の形成、生活習慣病の予防、薬物乱用防止などの課題に適切に対応するよう内容を構成したこと。」（文部省、1999、247）

さらに、同学習指導要領からは心と体を一体化して捉えるとの観点から、自分のからだに気づき、体の調子を整え、仲間との交流を行う体ほぐしの運動が導入された。その背景には、日常生活における体を動かす機会の減少、精神的ストレスの増大、体力・運動能力の低下、活発に運動する者とそうではない者の二極化といった状況に対する危機意識がみられる。そのため体ほぐしの導入に際しては、生涯にわたり積極的に運動に親しむ一つの基盤として、生徒が体を動かす楽しさや心地よさを体験することを保障しようとするものであり、心と体をほぐし、リラックスさせるような運動の体験を保障することを意図していると指摘されることになる（文部省、1999a、p.21）。

この趣旨を具体化したものが、小学校を例にとれば、図1の目標構造である。ここでは、従前の生涯スポーツを志向する、スポーツの中の教育という側面を尊重しつつも、健康な日常生活を営むという側面から、スポーツを通しての教育という側面を強く意識した目標が示されている。そして、

このように特徴づけられる目標の実現に向けて、運動領域と保健領域をいっそう関連づけて指導することが求められた（文部省、1999a、pp.11-12）。また、各学年の目標は、学習指導に弾力性をもたせるため、低・中・高学年の三段階で示された。さらに、各段階の目標は、1）運動の特性、運動の学び方及び体力に関する目標、2）協力、公正などの社会的態度及び健康・安全に留意して運動をする態度など運動領域に関連した態度や行動の仕方の目標、3）健康で安全な生活を営む資質や能力を育てるなどの保健領域に関連した目標、の3点から構成されている（文部省、1999a、p.14）。

これらに対し2017年学習指導要領は、学校教育全体を方向付ける資質・能力論を前提に、教科の目標が検討されたことが、従前の改訂と比べた大きな特徴となっている。

2017年改訂は、中央教育審議会（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」で示された次の6点を踏まえて改訂の内容が検討された。

- 1）「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）
- 2）「何を学ぶか」（教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課

程の編成)

- 3) 「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施, 学習・指導の改善・充実)
- 4) 「子供一人一人の発達をどのように支援するか」(子供の発達を踏まえた指導)
- 5) 「何が身に付いたか」(学習評価の充実)
- 6) 「実施するために何が必要か」(学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策)

特に, 教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力が, 次の3点に整理された。

- 1) 何を理解しているか, 何ができるか(生きて働く「知識・技能」の習得)
- 2) 理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)
- 3) どのように社会・世界と関わり, よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)

また, それを踏まえ, 体育科の目標や内容もこれら3点に即して整理して, 示されることになった(文部科学省, 2017, pp.1-3)。

以上の経過は, 我が国の学習指導要領においては, まとめ方が異なるとはいえ, 身体的リテラシーの4つの構成領域に関連した記述が一貫して, バランス良く組み込まれていることも確認できる。社会的領域の目標や認知的領域が態度目標や知識の理解や課題の解決方法に関する目標として, 第二次世界大戦後, 一貫して明示されてきたといえる。このことが, 2017年の学習指導要領の改訂時に, 体育のみが学びに向かう力, 人間性を指導内容として記載することを可能にしたとも言える。

他方で, 生涯スポーツを志向した目標が1977年に「運動に親しませる」(情意目標)と表記されてきた一方で, 生涯スポーツに向けた資質・能力の育成が体育科の究極の目標として明示されるには2017年であることも確認できる。同時に, 身体的領域の目標については, 常に体力が強調されてきたとはいえ, 1977年以降, 表記の仕方としては, 社会的な態度を養うためにスポーツを学習させるという記述は見えなくなっていく。

身体的リテラシーの育成には, 多様性や包摂が含意されている。それはまた, 学校外で展開さ

れる高度に競技化されたスポーツの形態を体育のモデルとするのではなく, 発達の段階や地域や児童の実態を踏まえ, より教育的な価値をもつスポーツを生み出していく必要性を示唆している。スポーツの中の教育を標榜してきた多くのカリキュラム論(Siedentop et al., 2020)やドイツやオランダ等で提案されてきた体育の目標論(Crum, 1992; Grupe, 1982, 1984; Kurz, 1979, 1986, 1997)にも通底する目標論とも言える。

なお, 我が国の学習指導要領は, 目標実現に向けて指導する指導内容を, スポーツ種目といった素材レベルで示してきた。そのことは, 既存の競技化されたスポーツ種目の学習, ひいては技能習熟を意図した学習へと教師の目を向かわせやすい。しかし, 生涯にわたるスポーツとの多様な関わり方という観点からみた場合, 技能習熟は期待される一つの成果に過ぎないことを見過ごすべきではない。また, 競技スポーツの抱える問題と同時に, スポーツの価値を踏まえた教育(values-based education)という観点からも指導内容の検討が求められる。実際, UNESCO(201)は, 活動を通して尊敬, 平等並びに包摂を学習するための指導書も作成している。この検討は, 種目ベースではなく, 期待する資質, 能力から指導内容を特定し, その習得が可能になる教材開発や授業設計を求めるものといえる。

引用・参考文献

- Arnold, P.J. (1979) *Meaning in Movement, Sport and Physical Education*. Heinemann: London
- 中央教育審議会 (2010) 児童生徒の学習評価の在り方について (報告).
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1292163.htm
(2022. 3. 26)
- Brown, C. and Cassidy, T. (1963) *Theory in Physical Education*. Lea and Febiger: Philadelphia
- Crum, B. (1992) The Critical-Constructive Movement Socialization Concept Its Rational and Its Practical Consequences. *International Journal of Physical Education*, 29(1): 9-17

- 江橋慎四郎, 宇土正彦 (1949) アメリカの学校体育の研究. 草美社: 東京
- Ennis, C. (1999) A Theoretical Framework : The Central Piece of a Research Plan. *Journal of Teaching in Physical Education*, 18 : 129-140
- Ennis, C. (2003) Using curriculum to enhance student Learning. In : Silverman, S.J. and Ennis, C.D. (Eds.) *Student Learning in Physical Education*. Human Kinetics:Champaign. 2nd ed. pp.109-127
- Grupe, O. (1982) *Bewegung, Spiel und Leistung im Sport*. Hofmann:Schorndorf
- Grupe, O. (1984) *Grundlagen der Sportpädagogik*. 3. überarb. Aufl. Hofmann : Schorndorf
- IPLA Our History
<https://www.physical-literacy.org.uk/about/?v=24d22e03afb2> (2022. 3. 25)
- IPLA Choosing Physical Activity for Life Be your best
<https://www.physical-literacy.org.uk/wp-content/uploads/2020/05/IPLA-Choosing-Physical-Activity-for-Life-web.pdf> (2021.3.26)
- 国立教育政策研究所 学習指導要領の一覧
<https://erid.nier.go.jp/guideline.html> (2022. 3. 26)
- 国立教育政策研究所 平成24年度・平成25年度小学校学習指導要領実施状況調査
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido_h24/index.htm (2022. 3. 26)
- Kurz, D. (1979) *Elemente des Schulsports*. 2.unveränd. Aufl. Hofmann : Schorndorf (1977)
- Kurz, D. (1986) *Handlungsfähigkeit im Sport-Leitidee einer pragmatischen Fachdidaktik*. In : Spitzer, G. u. Schmidt, D. (Red.), *Sport zwischen Eigenständigkeit und Fremdbestimmung*. Peter Wegener : Bonn. pp.28-43
- Kurz, D. (1997) *Zur pädagogischen Grundlegung des Schulsports in Nordrhein-Westfalen*. In : Aschebrock, H. (Red.) *Curriculumrevision im Schulsport*. Ländesinstitut für Schule und Weiterbildung : Soest. pp.8-42
- 正木健雄 (1958) からだづくりと子どもの認識. 教育, 8 (13) : 36-43
- 文部省 (1951) 中学校高等学校学習指導要領保健体育科編 (試案) 昭和26年 (1951) 戦後教育改革資料研究会編. 文部省学習指導要領13 保健体育科編(1). 日本図書センター: 東京. (1980)
- 文部省 (1977) 文部省発表小学校学習指導要領昭和52年 (1977) 改訂版. 明治図書: 東京
- 文部省 (1999) 我が国の文教政策 (平成11年度). 大蔵省印刷局: 東京
- 文部省 (1999a) 小学校学習指導要領解説体育編. 東山書房: 京都
- 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 体育編.
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_010.pdf (2022.3.26)
- 中村敏雄 (1976) 体育の授業における集団と個人. 季刊国民教育, 27 : 62-72
- 岡出美則 (2021) ドイツ「スポーツ科」の形成過程. 明和出版
- Siedentop, D., Hastie, P.A. and van der Mars,H. (2020) *Complete Guide to Sport Education*. 3rd ed. Human Kinetics : Champaign
- Sport Australia (2019) *Sport Australia Position Statement on Physical Literacy*.
<https://www.sportaus.gov.au/physical-literacy#:~:text=The%20Australian%20Physical%20Literacy%20Framework%20activates%20this%20commitment,and%20emotions%20that%20motivate%20you%20to%20be%20active> (2022. 3. 26)
- Sport Australia (2019a) *Australian Physical Literacy Framework version 2*
https://www.sportaus.gov.au/__data/assets/pdf_file/0019/710173/35455_Physical-Literacy-Framework_access.pdf (2022. 3. 26)
- 竹之下休蔵 (1949) 体育のカリキュラム. 再版. 誠文堂書店: 東京. (1949)
- 丹下保夫先生遺稿集刊行会 (1987) 戦後における学校体育の研究. 不昧堂: 東京
- 宇土正彦 (1986) 体育授業の系譜と展望. 大修館書店

UNESCO (2015) Quality of Physical Education Guidelines for Policy-Makers
<http://unesdoc.unesco.org/images/0023/002311/231101E.pdf> (2022. 3. 26)

UNESCO (2019) Sport Values in every classroom.
<https://www.icsspe.org/system/files/Sport>

[%20Values%20in%20Every%20Classroom.pdf](#)
(2022. 3. 26)

UNESCO (2021) How to influence the development of quality physical education policy : a policy advocacy toolkit for youth.
<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000375423> (2021. 3. 22)

2. Physical Literacyの定義と評価

鈴木 宏哉¹⁾ 鄧 鵬宇¹⁾ 柯 丹丹^{1) 2)}

1. はじめに

近年、Physical literacyという概念は、体育学、スポーツ科学、健康科学の分野において世界中で注目されている。Physical literacyは長い間、軍隊や身体教育場面で使用されてきたが^{1, 2)}、Dr. Margaret Whiteheadが1993年にInternational Association of Physical Education and Sport for Girls and Women CongressにおいてPhysical literacyを再提案し、2001年にその概念に関する最初の論文³⁾を発表したことで、Physical literacyはより多くの注目を集め、今日でもその発展を続けている。Whiteheadの最新のPhysical literacyの定義は、「生涯にわたる身体活動の価値を認め、参加するための動機、自信、身体能力、知識、理解」“the motivation, confidence, physical ability, knowledge, and understanding to value and participate in lifelong physical activity”⁴⁻⁶⁾であり、この定義は広く受け入れられている。様々な国、研究者、組織が様々な定義を提案しているが、その定義と構成要素はまだ更新され続けている⁷⁾。Physical literacyの定義、構成要素、および発展をまとめたレビュー論文^{6, 8)}で報告されているように、Physical literacyの概念は異なる分野、複雑な側面を含み、そのことが実践場面にPhysical literacyを適用させるための国際的なコンセンサスの欠如につながっている。

Physical literacyは、未だにコンセンサスの得られていない概念であり、Physical literacyと健康とを結びつける直接的な証拠はまだほとんどないが、身体教育の目標であり、身体活動の促進を通じて健康に影響を与えると考えられている^{9, 10)}。したがって、Physical literacyの概念とその適切な評価方法を作成することが重要である。そうす

ることで、どのような介入や身体教育がPhysical literacyを向上させるのかを検証することができるようになる。Physical literacyの定義に関する世界的なコンセンサスはないが、行動習慣や身体的能力などのいくつかの重要な要素が一般的に注目されている。その結果、一部の国では、その国の研究者らが考えるPhysical literacyの定義に基づいて測定尺度が開発されている。Physical literacyの測定尺度は、2013年にカナダで最初に開発され、それ以来、さまざまな言語に翻訳されている^{11, 12)}。しかしながら、国によって体育・スポーツ文化や発展のレベルには違いがあり、Physical literacyの概念や評価の仕方に関する議論のレベルも異なる。特に、日本においては、Physical literacyの議論はPhysical literacyの日本語訳すら定まっていない初期段階にあるといえる。したがって、本稿では、世界中のPhysical literacyの定義と評価に関する研究を概観し、国際的に広く用いられているPhysical literacyの定義と子どもを対象に含む評価尺度の特徴をまとめることを目的とした。

研究を概観するために、主に英語の文献データベースを利用したが、一部の情報は、公的な機関が作成したウェブサイトをもとに検索した。また、英語以外の情報源として、日本スポーツ協会が過去に行った中華人民共和国（以下、中国）国家体育総局との研究プロジェクトによって構築された人的ネットワークを活用し、国家体育総局や中国国内の研究者が中国語で公表している報告書や論文情報をもとにまとめた。

2. 英語の文献レビューの方法

2.1 検索方法

文献検索にはPubMedとWeb of Scienceの文献データベースを用い、検索キーワードにはPhysical literacy, Physically literate（論文タイトル検索）を用いた。検索対象は2021年4月30日までに

1) 順天堂大学

2) 復旦大学

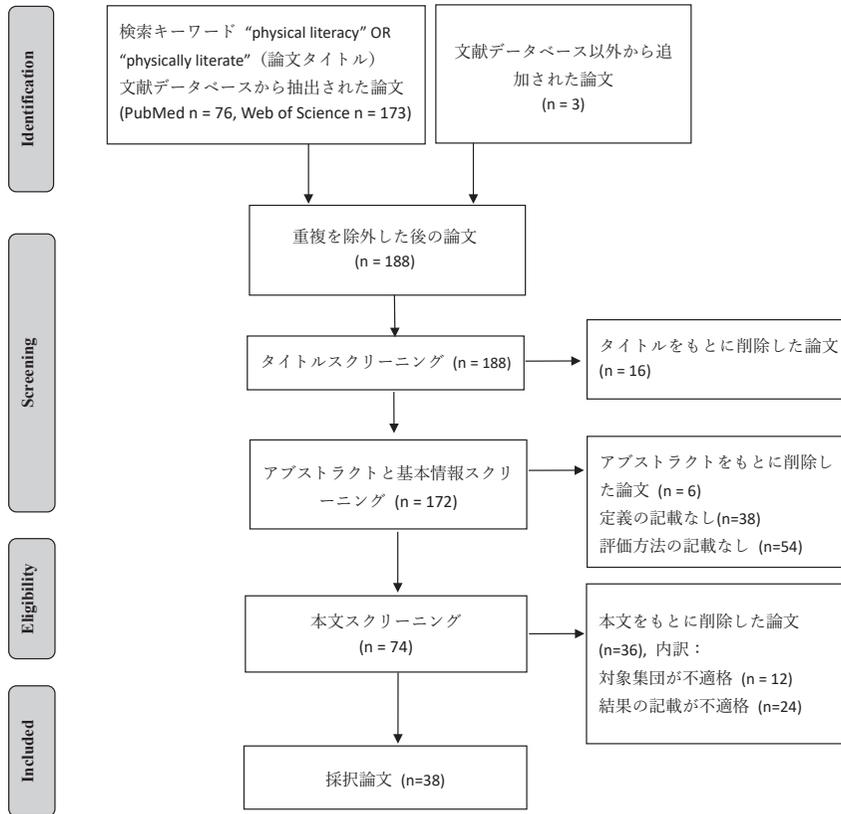


図1 スクリーニングプロセス

収録されたすべての英語論文とし、その他の制限は行わなかった。この他に、Physical literacyに関する書籍や文献検索でヒットした論文の文献リストを参考にした。更には公的な機関が作成したウェブサイトに英語で公表されているガイドラインや声明の中で扱われているPhysical literacyの記述を参考にした。

2.2 追加および除外基準

文献データベースによって検索した論文は、2つのデータベースに重複してヒットした論文を除外した後に、タイトルとアブストラクトを確認してスクリーニングを行った。最終的に文献データベースによって検索した論文の中から採用した論文は、1) 2021年4月30日以前に出版された英語の査読付き論文、2) 疾患または障害のない子どもを対象とした論文、3) Physical literacyの定

義と評価方法がその論文内で提示されている論文であった。選択した論文から、タイトル、著者、筆頭著者の所属機関、国、出版年、対象年齢、テストバッテリー、テスト項目を抽出した。2人の研究者が独立して文献選択とデータ抽出を行った。意見の相違が生じたとき、3人目の研究者が最終決定を行った。選択されたすべての研究情報およびスクリーニング結果は、Microsoft Excelを使用して記録した。

2.3 スクリーニングおよび選択手続き

文献データベースから249件、その他の情報源から3件、合計252件の記録が抽出された。重複論文を削除した後、188の論文を抽出した。タイトルと抄録を確認し、目的に合致しない論文を削除し、残った74の論文について、本文を精読し、Physical literacyを測定するための尺度を整理す

表1 文献レビューにより採択した論文リスト

First author/ Organization	Affiliation	Population	Publication Year	Country	Reference of Definition	Assessment tool
Mandigo, J [28]	Brock University	elementary school age	2019	Canada	IPLA 2017	the Passport for Life
Lodewyk, KR [29]	Brock University	Secondary school age	2019	Canada	IPLA 2017	the Passport for Life
Belanger, K [30]	Children's Hospital of Eastern Ontario Research Institute	children aged 8-12 years	2018	Canada	IPLA 2017	CAPL (Q&P)
Longmuir, PE [13]	Children's Hospital of Eastern Ontario Research Institute	children aged 8 to 12 years	2015	Canada	Whitehead 2013	CAPL (Q&P)
Lizotte, C [14]	Children's Hospital of Eastern Ontario Research Institute	children aged 9 to 11 years	2016	Canada	Whitehead 2010	CAPL (Q&P)
Lang, JJ [15]	Children's Hospital of Eastern Ontario Research Institute	children aged 8 to 12 years	2018	Canada	Whitehead 2013	CAPL (Q&P)
Longmuir, PE [31]	Children's Hospital of Eastern Ontario Research Institute	children aged 8 to 12 years	2018	Canada	IPLA 2017	CAPL-2 (Q&P)
Blanchard, J [40]	Children's Hospital of Eastern Ontario Research Institute	children aged 12 to 16 years	2020	Canada	Canada's Physical Literacy Consensus Statement 2015	CAPL (Q&P)
Delisle Nyström, C [41]	Children's Hospital of Eastern Ontario Research Institute	children aged 8 to 12 years	2018	Canada	Canada's Physical Literacy Consensus Statement 2015	CAPL (Q&P)
Gunnell, KE [42]	Children's Hospital of Eastern Ontario Research Institute	children aged 8 to 12 years	2018	Canada	Canada's Physical Literacy Consensus Statement 2015	CAPL (Q&P)
Tremblay, MS [43]	Children's Hospital of Eastern Ontario Research Institute	children aged 8 to 12 years	2018	Canada	Canada's Physical Literacy Consensus Statement 2015	CAPL (Q&P)
Jefferies, P [44]	Dalhousie University	children aged 8 to 14 years	2020	Canada	Canada's Physical Literacy Consensus Statement 2015	PLAY tools (Q&P)
Jefferies, P [16]	Dalhousie University	children aged 9 to 12 years	2019	Canada	IPLA 2017 & Whitehead 2013	PLAY tools (Q&P)
Barnett, LM [47]	Deakin University	school physical education	2019	Australia	Sport Australia	APLF : Psychological domain (Q) ; Social domain (Q) ; Physical domain (Q) ; Cognitive domain (Q)
Belton, S [17]	Dublin City University	adolescents 12.78 ± 0.42 years	2019	Ireland	Whitehead 2013	CAPL-2 : Daily Behaviour domain) (M&Q), Physical Competence (P), and Psychological Correlates (Q)
Caldwell, HAT [18]	McMaster University	school age	2020	Canada	IPLA 2015 & Whitehead 2010 & Canada's Physical Literacy Consensus Statement 2015	the PLAY Tools (Q&P)
Caldwell, HAT [32]	McMaster University	8.4 to 13.7 years	2020	Canada	IPLA 2014	the PLAY Tools (Q&P) ; the short form of the BOT-2 & the standing long jump item (P).
Dania, A [11]	National and Kapodistrian University of Athens	children aged 8 to 12 years	2020	Greece	Whitehead 2013	CAPL-2 GR (Q&P)
Kaioglou, V [33]	National and Kapodistrian University of Athens	children aged 8 to 12 years	2020	Greece	IPLA 2017	CAPL-2 (Q&P)
Kaioglou, V [19]	National and Kapodistrian University of Athens	school age	2020	Greece	Whitehead 2013	the PLAY tools (Q&P), PFL (Q&P), CAPL (Q&P)
Law, B [45]	Nipissing University	children aged 8 to 12 years	2018	Canada	Canada's Physical Literacy Consensus Statement 2015	CAPL (Q&P)
Chen, ST [34]	Shanghai University of Sport	Grades 1-12	2020	China	IPLA 2017	Chinese Assessment and Evaluation of Physical Literacy (CAEPL)
Robinson, DB [46]	St. Francis Xavier University	-	2017	Canada	Canada's Physical Literacy Consensus Statement 2015	CAPL (Q&P), passport for life, the PLAY tools (Q&P)

IPLA : The International Physical Literacy Association CAPL : The Canadian Assessment of Physical Literacy. CAPL-2 : The Canadian Assessment of Physical Literacy Ver.2. PLAY : Physical Literacy Assessment for Youth. PPLI : Perceived Physical Literacy Instrument. Q : Questionnaire. P : Performance. TGMD : Test of Gross Motor Development. M-ABC : Movement Assessment Battery for Children. BOT-2 : Bruininks-Oseretsky Test of Motor Proficiency Ed. 2.

表1 文献レビューにより採択した論文リスト (続き)

First author/ Organization	Affiliation	Population	Publication Year	Country	Reference of Definition	Assessment tool
Li, MH [20]	The Chinese University of Hong Kong	children aged 4-6 years	2021	China	Whitehead 2010	the Perceived Physical Literacy Instrument (PPLI) (Q); CAPL-2 (Chinese) (Q&P)
Li, MH [12]	The Chinese University of Hong Kong	children aged 8 to 12 years	2020	China	IPLA 2017	CAPL-2 (Chinese) (Q&P)
Li, MH [35]	The Chinese University of Hong Kong	children aged 10.0 (\pm 1.0) years	2020	China	IPLA 2017	PPLI (Q); CAPL-2 (Q&P)
Sum, RKW [21]	The Chinese University of Hong Kong	adolescents aged 11 to 19 years old	2018	China	Whitehead 2010	Perceived Physical Literacy Instrument (PPLI) (Q)
Gu, XL [22]	The University of Texas at Arlington	students grade 3	2019	USA	Whitehead 2013	SHAPE America (Q&P)
Blain, DO [36]	University of Bath and University of Wales Trinity Saint David	early adolescent	2021	UK	IPLA 2017	CAPL (Q&P)
Kriellaars, DJ [23]	University of Calgary	children aged 9 to 12 years old	2019	Canada	Whitehead 2010	the PLAY tools (Q&P)
Giblin, S [24]	University of Central Lancashire	physical education	2014	UK	Whitehead 2010	the PLAY tools (Q&P); TGMD (P); M-ABC (P), BOT-2 (P)
Francis, CE [25]	University of Ottawa	children aged 8 to 12 years	2016	Canada	Whitehead 2010	CAPL (Q&P)
Dutil, C [37]	University of Ottawa	children aged 8 to 12 years	2018	Canada	IPLA 2017	CAPL (Q&P)
Saunders, TJ [38]	University of Prince Edward Island	children aged 8 to 12 years	2018	Canada	IPLA	CAPL (Q&P)
Cairney, J [48]	University of Toronto	preschool children	2018	Canada	Dudley DA 2015	Pre-PLAY
Bremer, E [26]	University of Toronto	children aged 7 to 13 years	2020	Canada	Whitehead 2013	PLAYfun tool (P), PLAYself (Q)
Wright, C [39]	University of Victoria	children aged 7.9 (\pm 1.7) years	2020	Canada	IPLA 2017	the PLAY tools (Q&P)
Coyne, P [27]	University of Windsor	Grades 4-6	2019	Canada	Whitehead 2010	CAPL (Q&P)

IPLA: The International Physical Literacy Association CAPL: The Canadian Assessment of Physical Literacy. CAPL-2: The Canadian Assessment of Physical Literacy Ver.2. PLAY: Physical Literacy Assessment for Youth. PPLI: Perceived Physical Literacy Instrument. Q: Questionnaire. P: Performance. TGMD: Test of Gross Motor Development. M-ABC: Movement Assessment Battery for Children. BOT-2: Bruininks-Oseretsky Test of Motor Proficiency Ed. 2.

るという目的に従って適格性について評価した。最終的に、38の論文が採択基準を満たした。図1に、このスクリーニングプロセスを具体的に示した。

3. 文献レビューの結果

Physical literacyに関する定義と評価方法の両方が掲載されている38の論文について、その基本情報を表1にまとめた。また、38の論文に記載されているPhysical literacyの定義と評価方法を表2と表3に要約した。

3.1 Physical literacyの定義

文献レビューに含まれる38の論文のうち、36はWhiteheadが提案したPhysical literacyの定義を引用していた。具体的には、Whitehead自身の論文内で示された定義^{11,13-27}、International Physi-

cal Literacy Association (IPLA: <https://www.physical-literacy.org.uk/?v=7516fd43adaa>) が示した定義^{12,16,18,28-39}、Canada's Physical Literacy Consensus Statement 2015 (<https://sportforlife.ca/wp-content/uploads/2016/06/Consensus-Handout.pdf>)^{18,40-46}によって公開されている定義であった。ただし、Canada's Physical Literacy Consensus Statement 2015はIPLAの定義を引用していること、また、IPLAの会長がWhitehead自身であることを考えれば、基本的にはすべて同じ起源といえる。38の論文のうち、残りの2つの論文はSport Australia⁴⁷とDudley DA (2015)⁴⁹によって提案された定義を引用していた。ただし、Sport Australiaによってリリースされた定義はDudleyの研究グループによって提案されたものであるため、世界的に普及しているPhysical literacyの定義は、実質的には、Whiteheadと

表2 Physical literacyの定義

Definition of PL	Organization/ Researcher	Year of release	Country	Components/Domains				Social
				Physical compe- tence/physical fitness/motor movement skills	Physical activity (behavior)	Knowledge & Understanding (cognitive)	Motivation & Confidence (affective/psy- chological)	
The characteristics of a physically literate individual are that the person moves with poise, economy and confidence in a wide variety of physically challenging situations. In addition, the individual is perceptive in 'reading' all aspects of the physical environment, anticipating movement needs or possibilities and responding appropriately to these, with intelligence and imagination. Physical literacy requires a holistic engagement that encompasses physical capacities embedded in perception, experience, memory, anticipation and decision making	Whitehead	2001	UK	✓	✓	✓	✓	
The motivation, confidence, physical competence, understanding and knowledge to maintain physical activity at an individually appropriate level, throughout life	Whitehead	2006	UK	✓	✓	✓	✓	
As appropriate to each individual's endowment, physical literacy can be described as the motivation, confidence, physical competence, knowledge and understanding to maintain physical activity throughout the lifecourse.	Whitehead	2010	UK	✓	✓	✓	✓	
The motivation, confidence, physical competence, knowledge and understanding to value and take responsibility for maintaining purposeful physical pursuits/activities throughout the lifecourse	Whitehead	2013	UK	✓	✓	✓	✓	
Physical literacy is defined as the motivation, confidence, physical competence, and knowledge and understanding to engage in physical activity for life.	IPLA	2014	UK	✓	✓	✓	✓	
Physical literacy can be described as the motivation, confidence, physical competence, knowledge and understanding to value and take responsibility for engagement in physical activities for life.	Whitehead IPLA Canadian Sport for Life ParticipAC- TION	2014 2015-2017 2017 2015	UK UK Canada Canada	✓	✓	✓	✓	
Physical literacy is about building the skills, knowledge and behaviors to help us lead active lives. It is the holistic learning that occurs through movement and physical activity and integrates physical, psychological, social and cognitive capabilities.	Sport Aus- tralia	2017	Australia	✓	✓	✓	✓	✓
Physical literacy (PL) encompasses the knowledge, skills, motivation, and feelings related to physical activity (PA) and movement.	Dudley DA	2015	Australia	✓	✓	✓	✓	

IPLA : The International Physical Literacy Association : UK : United Kingdom

Dudleyの二人が示した定義を起源としている。

Whiteheadによる定義は2001年の初版³から現在まで発展しており、現在は次のように定義されている。

「Physical literacyは、人生における身体活動の価値を認め、身体活動に従事することへの対策を講じるための動機、自信、身体的能力、知識、および理解として説明することができる。」(IPLA, 2017) “Physical literacy can be described as the motivation, confidence, physical competence, knowledge, and understanding to value and take responsibility for engagement in physical activities for life.” (IPLA, 2017)

Dudley⁴⁹によって提案された定義は、現在、次のように更新されている⁴⁷。

「Physical literacyとは、我々が活動的な生活を送るのに役立つスキル、知識、行動を構築することである。それは運動動作や身体活動を通して生じ、身体的、心理的、社会的、認知的能力を統合する総体的学習である。」(Sport Australia, 2017) “Physical literacy is about building the skills, knowledge, and behaviors to help us lead active lives. It is holistic learning that occurs through movement and physical activity and integrates physical, psychological, social, and cognitive capabilities.” (Sport Australia, 2017)

なお、本稿のレビューでは、Physical literacyの定義に関するレビューを行った先行研究^{50, 51}とは異なり、Physical literacyの評価方法に焦点をあてたため、Physical literacyの定義だけが示されている文献は対象としなかった。本稿のレビューで採択された論文の中で示されているPhysical literacyの定義を全て示した(表2)。Physical literacyの記述に若干の違いはあるものの、その記載内容に含まれる要素/領域は、身体的能力/体力/運動技能、身体活動(行動)、知識と理解(認知)、動機と自信(情動的/心理的)の領域である。ただし、Sport Australiaによってリリースされた定義だけに、社会的要素が含まれているのが特徴といえる。

3.2 Physical literacyの評価方法

表3に、Physical literacyについて、文献レビューによって採択された論文の中で用いられていた9つの評価方法をまとめた。その9つの中で、Canadian Assessment of Physical Literacy (CAPL) とCAPL-2 (Healthy Active Living and Obesity Research Group, HALO 2013 & 2017, <https://www.capl-eclp.ca>)、Physical Literacy Assessment for Youth (PLAY) (Canadian Sport for Life, CS4L 2013, www.physicalliteracy.ca/play-tools/)、Perception Physical Literacy Instrument (PPLI) (The Chinese University of Hong Kong, 2018)²¹、そしてChinese Assessment and Evaluation of Physical Literacy (CAEPL) (Shanghai University of Sport, 2020)³⁴は、Whiteheadに起源を持つPhysical literacyの定義を参照して尺度を開発している。The Passport for Life (Physical and Health Education (PHE) Canada, 2014, www.phecana.ca/resources/passport-for-life) およびNational Standards & Grade-Level Outcomes for K-12 Physical Education (Society for Health and Physical Educators America, 2014, <https://www.shapeamerica.org/>) は、「Physical literacyとは、全ての人の健全な発達に利益をもたらす様々な環境における多種多様な身体活動において、能力と自信を持って活動するための能力である。」“physical literacy is the ability to move with competence and confidence in a wide variety of physical activities in multiple environments that benefit the healthy development of the whole person”⁵²という定義を参照して尺度を開発している。これらの評価尺度は、主に学齢期の子どもを対象とした尺度であるが、Australian Physical Literacy Framework (Sport Australia, 2019, https://www.sportaus.gov.au/_data/assets/pdf_file/0019/710173/35455_Physical-Literacy-Framework_access.pdf) だけは、すべての年齢集団を対象とした尺度である。また、Preschool Physical Literacy Assessment (Pre-PLAY) (McMaster University, 2018)⁴⁸は、幼児向けに設計されている。今回の文献レビューに含まれる38の論文のうち、23論文(61%)がCAPLま

表3 Physical

Assessment tool/ guidance	Country	Organization	Year of release	Ages	Assessment components
The Canadian Assessment of Physical Literacy (CAPL)	Canada	Healthy Active Living and Obesity Research Group (HALO)	2013	Ages 8-12	<ul style="list-style-type: none"> • Physical competence (P) • Daily Behavior (M) • Knowledge & Understanding (Q) • Motivation & Confidence (Q) Evaluation: total score of PL
The Canadian Assessment of Physical Literacy Ver.2 (CAPL-2)	Canada	Healthy Active Living and Obesity Research Group (HALO)	2017	Ages 8-12	<ul style="list-style-type: none"> • Physical competence (P) • Daily Behavior (M & Q) • Knowledge & Understanding (Q) • Motivation & Confidence (Q) Evaluation: total score of PL
Physical Literacy Assessment for Youth (PLAY)	Canada	Canadian Sport for Life (CS4L)	2013	Ages 7-adults	<ul style="list-style-type: none"> • Motivation & Confidence (Q) • Motor Competence (P) • Cognitive (Q) • Fitness (P) • Engagement in PA (Q) Evaluation: 6 tools for different users; calculate the score separately.
Perceived Physical Literacy Instrument (PPLI) for adolescents	China	The Chinese University of Hong Kong	2018	Children and adolescents	<ul style="list-style-type: none"> • Knowledge and understanding (Q) • Self-expression and communication with others (Q) • Sense of self and self-confidence (Q) Evaluation: total score of Perceived PL
Chinese Assessment and Evaluation of Physical Literacy (CAEPL)	China	Shanghai University of Sport	2020	Grades 1-12	<ul style="list-style-type: none"> • Intention of physical activity (Q) • Knowledge of physical activity (Q) • Behavior of physical activity (M&Q) • Motor/sport skill (P) • Physical fitness (P) Evaluation: no report
Passport for Life	Canada	Physical and Health Education (PHE) Canada	2014	Grades 1-12	<ul style="list-style-type: none"> • Active Participation (Q) • Living Skills (Q) • Fitness Skills (P) • Movement Skills (P) Evaluation: grade separate sets, no report card
National Standards & Grade-Level Outcomes for K-12 Physical Education	America	The Society of Health and Physical Educators (SHAPE) America	2015	K-12	<ul style="list-style-type: none"> • Fundamental motor skills • Knowledge • physical fitness • physical activity (guiding document) Evaluation: 5 Standards
Australian Physical Literacy Framework (version 2)	Australia	Sport Australia	2019	All people	<ul style="list-style-type: none"> • Physical (12 elements) • Psychological (7 elements) • Social (4 elements) • Cognitive (7 elements) (checklist) Evaluation: 5 Stages of each element
the Preschool Physical Literacy Assessment Tool (Pre-PLAy)	Canada	McMaster University	2018	Preschool children	<ul style="list-style-type: none"> • Movement competence (P) • Coordinated movements (P) • Motivation and enjoyment (Q) • Overall physical literacy (Q) Evaluation: total score of PL

Q : Questionnaire. P : Performance. M : Measure. PL : physical literacy

literacyの評価方法

Components/Domains					Referenced PL definition
Physical competence / Physical fitness / Motor · Movement skills	Daily Behavior / Physical activity participation	Cognitive / Knowledge & Understanding	Psychological / Motivation & Confidence	Social/ Relationship/ Connection/ Character	
√	√	√	√		Physical literacy can be described as the motivation, confidence, physical competence, knowledge and understanding to value and take responsibility for engagement in physical activities for life. (IPLA, 2017) ⁵
√	√	√	√		
√	√	√	√		
		√	√	√	
√	√	√	√		
√	√				Physical literacy is the ability to move with competence and confidence in a wide variety of physical activities in multiple environments that benefit the healthy development of the whole person. (Mandigo, 2009) ⁵²
√	√	√			
√	√	√	√	√	Physical literacy should be viewed as an umbrella concept that captures the knowledge, skills, understandings, and values related to taking responsibility for purposeful physical activity and human movement across the life course, regardless of physical or psycho-logical constraint. (Sport Australia, 2017) ⁴⁷
√	√		√		Physical literacy (PL) encompasses the knowledge, skills, motivation, and feelings related to physical activity (PA) and movement. (Dudley, DA 2015) ⁴⁸

たはCAPL-2を使用し、12論文（32%）がPLAYを使用し、10論文（26%）が他の評価ツールを使用していた。

表3に示した9つの評価尺度のうち8つは身体的能力／体力／運動技能と日常行動／身体活動への参加を評価要素に含め、7つは認知／知識と理解、心理的／動機と自信を評価要素に含め、2つは社会的／関係／つながり／性格を評価要素に含めていた。他の尺度よりも比較的遅れて開発されたPPLI²¹とAustralian Physical Literacy Frameworkは、社会的／関係／つながり／性格の領域を考慮しているが、このことは、現代社会における社会的および仲間関係の問題の増加⁵³や身体活動が社会適応の優れた方法であるといった見解⁵⁴とも関連していることがうかがえる。社会的距離の確保が求められるCOVID-19流行下において、このような社会的要素を評価尺度に含めることは重要であるかもしれない。

採点方法の観点では、CAPL、CAPL-2、PPLI、およびPre-PLAyは、各要素の合計スコアを算出しPhysical literacyを評価することができるため、研究や教育管理に適している。おそらくこのことが、評価尺度の文献レビューを行った際に、これらの尺度を使用した論文が多く採択された背景にあるといえる。他方、SHAPE AmericaとSport Australiaの評価尺度は、得点化することせず、要素ごとに設計された5段階の評価スケールがあり、自分がどの段階まで到達できているかを確認することができる。すなわち、評価尺度がPhysical literacyを改善するための指針になっているのが特徴である。

3.3 追加資料：公式文書／ウェブサイト

文献レビューの手続きでは検索できなかったが、いくつかの国の公的機関によって公開されているPhysical literacyに関する解説書や合意声明、ならびにPhysical literacyの向上を目的とした国際的組織のウェブサイトは、以下の通りである。

- (1) Physical Literacy in the United States. The Aspen Institute.
https://www.shapeamerica.org/uploads/pdfs/PhysicalLiteracy_AspenInstitute-

FINAL.pdf

- (2) Physical Literacy Brochure. Physical & Health Education Canada.
https://phecanada.ca/sites/default/files/content/docs/resources/Physical_Literacy_Brochure_2010.pdf
- (3) Canada's Physical Literacy Consensus Statement. The RBC Learn to Play Project.
<https://sportforlife.ca/wp-content/uploads/2016/06/Consensus-Handout.pdf>
- (4) Physical Literacy Assessment in Canada. Canadian Sport for Life.
<http://sportforlife.ca/wp-content/uploads/2016/12/physical-literacy-in-canada-tools-for-assessment.pdf>
- (5) Australian Physical Literacy Framework. Sport Australia.
https://www.sportaus.gov.au/__data/assets/pdf_file/0019/710173/35455_Physical-Literacy-Framework_access.pdf
<https://www.sportaus.gov.au/physical-literacy>
- (6) The International Physical Literacy Association (IPLA).
<https://www.physical-literacy.org.uk/>
- (7) The Physical Literacy for Life Project.
<https://physical-literacy.isca.org/>
- (8) Canadian Physical Literacy for Life.
<https://physicalliteracyforlife.org/>
- (9) Three approaches, physical literacy approach. Sport New Zealand
<https://sportnz.org.nz/about/publications/three-approaches/>
- (10) Education and teachers, Physical Literacy. Sport Wales
<https://www.sport.wales/content-vault/physical-literacy/>

4. 中国の社会背景を踏まえたPhysical literacyの考え方

英語による情報検索では確認できない中国国内

のphysical literacyに関する情報について、中国語を第1言語、日本語を第2言語とし、日本でスポーツ健康科学の博士号を取得したバイリンガル研究者らによって叙述的レビューを行った。情報源は、中国国家体育総局が実施したPhysical literacyに関する調査研究や国家体育総局体育科学研究所張彦峰研究員の論文であった。特に、Physical literacyの中国語訳や定義に関する説明は張研究員の中国語論文⁵⁹を拠り所とし、該当箇所を日本語に意識した。なお、中国語から日本語への翻訳について不明瞭な点はバイリンガル研究者が張研究員に確認を行った。

4.1 中国の社会背景とPhysical literacy

2014年に中国国務院が「スポーツ産業の発展を加速し、スポーツ消費を促進するためのいくつかの意見」⁵⁵を発表し、初めて万人向けの健康増進、身体活動の促進、体力づくりが国家戦略に引き上げられた。また、2015年の第18期中国共産党中央委員会第5回全体会議で採択された「国家経済社会発展第13次5カ年計画」⁵⁶では、「全民健身計画（健康な中国）」を国家戦略として、スポーツの発展、万人のための健康増進、身体活動の促進、そして国民の体力向上を掲げている。国家体育総局では、国内外の体育、スポーツ、健康の分野における研究と実践を、中国の政策や国民体力の実情と結び付け、国民の総合的価値と総合的発展の観点から、体力向上の捉え方を広げ、すべての人々の幸福、健康、福祉をよりよく促進することを目指し、「科学的健身素養（Scientific fitness literacy）」という概念を打ち出した。

そして、英語圏で用いられているPhysical literacyは、中国の研究者間でも議論されており、政策レベルでも既に類似した概念が用いられている。例えば、2016年に国務院は「学校における体育教育の強化と生徒の心身の健康の全面的発展の促進に関する意見」⁵⁷を発表し、今後の中国の学校体育活動の基本方針の一つとして生徒の身体素養を総合的に高めることを提案した。

4.2 Physical literacyの中国語訳

中国の研究者がPhysical literacyを中国語へ翻

訳するとき、「身体素養」と「体育素養」の2つが主流である^{58,59}。前者は直訳で、後者は中国の事情を考慮した意識である。中国語に翻訳、再定義する際の論点がいくつかある。Whiteheadは著書の中で、この概念を最も正確に表す言葉はEmbodied LiteracyまたはMotile Literacyであるが、EmbodiedもMotileも哲学的な言葉であり、一般的に普及させることを考慮してphysicalを選択したと記している。中国語ではphysical（身体）は文字通り、物質的な肉体を意味し、英語や日本語とも共通する。他方、中国語の体育は学校の体育授業の意味だけでなく、競技スポーツ、レクリエーションスポーツ、生涯スポーツ、身体運動などの意味もある。そのため、直訳して身体literacy（素養）としてしまうのではなく、体育literacy（素養）とすると、その概念は拡大する。したがって、「身体素養」を用いる研究者は狭義な意味、「体育素養」を用いる研究者は広義な意味でPhysical literacyを取り扱おうとする意図がうかがえる。国家体育総局や一部の研究者の中では、健身literacy（素養）という表現も用いられている。中国語の健身は、身体活動、すなわち中国語の体育が意味することを包含し、さらにfitnessの意味も含む用語である。したがって、体育素養よりもさらに広義な意味でPhysical literacyを捉えようとする研究者らは健身素養という用語を使うと考えられる。以上のように、中国ではPhysical literacyの中国語が統一されているわけではなく、中国版Physical literacyをどのように再定義するのかによって、その訳語も必然的に異なるといえる。

4.3 科学的健身素養

（Scientific fitness literacy）

国家体育総局の調査研究に従事する研究者らによって用いられている科学的健身素養（Scientific fitness literacy）⁶⁰という概念がある。科学的健身素養を高めることで、人々が自分自身への気づきから行動へ、そして最終的には生涯身体活動に参加することを可能にすることが究極の目標である。したがって、重要なのは「行動」である。健身という用語は、健身素養の究極目標に応じ、literacy（素養）の実践に向かう（行動の）ため

の重要な動詞表現である。健身は、単に身体的な活動や行動にとどまらず、それに対応する認知や心、環境も含まれ、また、健康増進や体力の向上にとどまらず、身体活動やスポーツそのものへの興味や自己価値の追求も含まれる用語として捉えられるようになった。その意味では、中国語の健身素養をfitness literacyと英訳してしまうと、中国語が意味する概念よりも狭い意味になってしまうので適切ではないかもしれない。

さらに、科学的健身素養が取り扱う身体活動について、健身が主体性を伴うからこそ動機、態度、認知といった一連の構成要素を含む。そのため、身体活動の中でも仕事上必要な肉体労働などの身体活動は、科学的健身素養の定義には含まれない。

4.4 Literacyの中国語訳

Literacyを中国の研究者らは素養と訳したが、literacyが意図する核心の意味をより正確に捉えている。中国の研究者の中には、英語のcompetenceやskillに相当する中国語をあてはめる者もいる。しかし、literacyは、単なるcompetenceやskillではなく、精神的、概念的、態度的なことと、身体的なcompetenceやskillといった能力の両方を含んでいる。言い換えると、literacy（素養）の高い人は、それに対応するcompetenceやskillの習得だけでなく、動機や自信といった様々な心理的要素、生涯を通じて身体活動を継続するための内発的な力に優れている人である。さらに、素養は行動の永続性を重視する。「養」という言葉自体には、世話をする、長い時間をかけるという意味がある。長期的な行動習慣を維持するためには、日々の実践の中でポジティブなフィードバックを積み重ねる動機と自信が必要である。

まとめると、英語のliteracyと中国語の素養は同じようにcompetenceとskillを含み、さらに、fitness literacyは身体の状態そして健康を維持するための認知、態度、行動すべてを包含するといえる。具体的には、この科学的健身素養（scientific fitness literacy）には、認知、態度、能力・技能、行動・習慣の4つの側面が含まれる。そしてそれらの側面を評価する尺度は、認知に関する知識と理解の2つの尺度、態度に関する価値判断、

感情、行動傾向の3つの尺度、能力・技能に関する動作技能、精神技能の2つの尺度、行動・習慣に関する健身学習習慣と健身行動習慣の2つの尺度で構成されている⁵⁹。なお、健身素養ではなく、科学的健身素養という用語を用いている背景には、国家体育总局が打ち出した用語として、理論的根拠や科学的根拠があることを強調したい意図があるということを示すことを張研究員と我々との私信により確認した。

5. さいごに

英語の文献レビューの結果から以下の3点が明らかとなった。

- 1) Physical literacyの定義は主にイギリスで開発されており、現在最も広く受け入れられている定義はIPLA (2017) である。
- 2) 評価尺度の研究は主にカナダに集中しており、世界的に一定の影響を持っている。
- 3) Australian Physical Literacy Frameworkは、最も多くの評価要素を含み、最も広い年齢層を対象とした尺度である。

国内の体育・スポーツ・健康科学分野の専門家の間では、Physical literacyの定義や評価尺度について、いまだ共通理解が得られていない。本稿の文献レビューは、日本独自のPhysical literacyの定義と尺度を検討する上で重要な役割を果たす。CAPLのようなPhysical literacyの合計スコアを計算できる尺度は、日本におけるPhysical literacyの現状や介入効果を客観的に示すうえで有用である。他方で、教育関係者は、Australian Physical Literacy Frameworkのように合計スコアを計算することなく、Physical literacyの各要素の評定表に基づく定性的な評価を好むかもしれない。学習指導要領では、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することが、保健体育科の目標に掲げられている。本稿で紹介した諸外国のPhysical literacyに関するウェブサイトのひとつであるSport Walesの記述を紹介したい。教育と教師に向けたメッセージの冒頭に、“Sport Wales works closely with the education sector in Wales to provide advice, resources and

funding to develop active individuals who can have a lifelong enjoyment of sport.”そして，“Our objective is simple – that every person in Wales is Physically Literate.”とある。日本の保健体育科の目標とほぼ同じである。しかし、日本にはその目標が達成できたかを評価する共通の尺度がない。日本にはphysical competenceを把握するための、広く普及している体力テストと調査⁶¹がある。しかし、これはPhysical literacyの一部に過ぎない。育成しようとしている能力と評価方法の不一致がここにある。世界的に広く受け入れられているPhysical literacyの定義は、少なくとも日本の保健体育科の目標には極めて近い。中国での議論にもあるように、定義をどのように定めるのかについては、各国の社会・文化的背景や課題が影響する。したがって、今後、Physical literacyを日本でどのように定義するのか、日本語訳をどうするのか、そして定義した概念をどのように測定評価するのかについては、目指すべき目標や解決すべき課題を念頭に議論が必要である。

付 記

本稿は、Ke D, Suzuki K, Kishi H, Kurokawa Y, Shen S : Definition and Assessment of Physical Literacy in Children and Adolescents : a literature review. *Journal of Physical Fitness and Sports Medicine* 11(3), 149-159, 2022をもとに、情報を追加、改変した。

文献リスト

1. Cairney J, Kiez T, Roetert EP, Kriellaars D. A 20th-century narrative on the origins of the physical literacy construct. *J Teach Phys Educ.* 2019 ; 38(2) : 79-83. doi : 10.1123/jtpe.2018-0072.
2. Twentieth anniversary – 1918-1938. *J Health Phys Educ.* 1938 ; 9(7) : 424-458. doi : 10.1080/23267240.1938.10619844.
3. Whitehead M. The concept of physical literacy. *Eur J Phys Educ.* 2001 ; 6(2) : 127-138. doi : 10.1080/1740898010060205.
4. Goss H. Physical literacy across the world. *Sport Educ Soc.* 2021 ; 26(6) : 692-695. doi : 10.1080/13573322.2021.1931773.
5. International IPLA, Physical Literacy Association. <https://www.physical-literacy.org.uk/?v=1c2903397d88> ; 2017 [Cited February 22, 2022].
6. Young L, O'Connor J, Alfrey L. Physical literacy : A concept analysis. *Sport Educ Soc.* 2020 ; 25(8) : 946-959. doi : 10.1080/13573322.2019.1677586.
7. Bailey R. Defining physical literacy : Making sense of a promiscuous concept. *Sport Soc.* 2022 ; 25(1) : 163-180. doi : 10.1080/17430437.2020.1777104.
8. Edwards LC, Bryant AS, Keegan RJ, Morgan K, Jones AM. Definitions, foundations and associations of physical literacy : A systematic review. *Sports medicine.* 2016 2016/06/30 ; 47(1) : 113-126.
9. Andy Sprake SW. ‘Strike while the iron is hot’ : The duty of physical education to capitalize on its compulsory position with a holistic curriculum underpinned by physical literacy. *ICSSPE Bull J Sport Sci Phys Educ.* 2013 ; 65 : 43-50.
10. Tremblay MS, Lloyd M. Physical literacy measurement – The missing piece. *Physical and health Education Canada Journal.* 2010 01/01 ; 76 : 26-30.
11. Dania A, Kaioglou V, Venetsanou F. Validation of the Canadian Assessment of Physical Literacy for Greek children : Understanding assessment in response to culture and pedagogy. *Eur Phys Educ Rev.* 2020;26(4) : 903-919. doi : 10.1177/1356336X20904079.
12. Li MH, Sum RKW, Tremblay M, Sit CHP, Ha ASC, Wong SHS. Cross-validation of the Canadian Assessment of Physical Literacy second edition (CAPL-2) : The case of a Chinese population. *J Sports Sci.* 2020 2020/12/16 ; 38(24) : 2850-2857. doi : 10.1080/02640414.2020.1803016.

13. Longmuir PE, Boyer C, Lloyd M, et al. The Canadian Assessment of Physical Literacy : Methods for children in grades 4 to 6 (8 to 12 years). *BMC Public Health*. 2015 2015/08/11 ; 15(1) : 767. doi : 10.1186/s12889-015-2106-6.
14. Lizotte C, Larouche R, Leblanc AG, Longmuir PE, Tremblay MS, Chaput J-P. Investigation of new correlates of physical literacy in children. *Health Behav Policy Rev*. 2016/01 ; 3(2) : 110-122. doi : 10.14485/HBPR.3.2.3.
15. Lang JJ, Chaput JP, Longmuir PE, et al. Cardiorespiratory fitness is associated with physical literacy in a large sample of Canadian children aged 8 to 12 years. *BMC Public Health*. 2018 2018/10/02 ; 18(Suppl 2) : 1041. doi : 10.1186/s12889-018-5896-5.
16. Jefferies P, Ungar M, Aubertin P, Kriellaars D. Physical literacy and resilience in children and youth. *Front Public Health*. 2019;7. English : 346. doi : 10.3389/fpubh.2019.00346.
17. Belton S, Issartel J, McGrane B, Powell D, O'Brien W. A consideration for physical literacy in Irish youth, and implications for physical education in a changing landscape. *Ir Educ Stud*. 2019 ; 38(2) : 193-211. doi : 10.1080/03323315.2018.1552604.
18. Caldwell HAT, Di Cristofaro NA, Cairney J, Bray SR, MacDonald MJ, Timmons BW. Physical literacy, physical activity, and health indicators in school-age children. *Int J Environ Res Public Health*. 2020 ; 17(15) : 5367. doi : 10.3390/ijerph17155367.
19. Kaioglou V, Venetsanou F. How can we assess physical literacy in gymnastics? A critical review of physical literacy assessment tools. *Sci Gymnastics J*. 2020 ; 12(1).
20. Li MH, Sum RKW, Sit CHP, Liu Y, Li R. Perceived and actual physical literacy and physical activity : A test of reverse pathway among Hong Kong children. *J Exerc Sci Fit*. 2021 ; 19(3) : 171-177. doi : 10.1016/j.jesf.2021.03.001.
21. Sum RKW, Cheng CF, Wallhead T, Kuo CC, Wang FJ, Choi SM. Perceived physical literacy instrument for adolescents : A further validation of PPLI. *J Exerc Sci Fit*. 2018 ; 16(1) : 26-31. doi : 10.1016/j.jesf.2018.03.002.
22. Gu X, Chen S, Zhang X. Physical literacy at the start line : Young children's motor competence, fitness, physical activity, and fitness knowledge. *J Teach Phys Educ*. 2019 ; 38(2) : 146-154. doi : 10.1123/jtpe.2018-0069.
23. Kriellaars DJ, Cairney J, Bortoleto MAC, Kiez TKM, Dudley D, Aubertin P. The impact of circus arts instruction in physical education on the physical literacy of children in grades 4 and 5. *J Teach Phys Educ*. 2019 ; 38(2) : 162-170. doi : 10.1123/jtpe.2018-0269.
24. Giblin S, Collins D, Button C. Physical literacy : Importance, assessment and future directions. *Sports Med*. 2014 ; 44(9) : 1177-1184. doi : 10.1007/s40279-014-0205-7.
25. Francis CE, Longmuir PE, Boyer C, et al. The Canadian assessment of physical literacy : Development of a model of children's capacity for a healthy, active lifestyle through a Delphi process. *J Phys Act Health*. 2016 ; 13(2) : 214-222. doi : 10.1123/jpah.2014-0597.
26. Bremer E, Graham JD, Cairney J. Outcomes and feasibility of a 12-week physical literacy intervention for children in an after-school program. *Int J Environ Res Public Health*. 2020 ; 17(9) : 3129. doi : 10.3390/ijerph17093129.
27. Coyne P, Vandeborn E, Santarossa S, Milne MM, Milne KJ, Woodruff SJ. Physical literacy improves with the Run Jump Throw Wheel program among students in grades 4-6 in southwestern Ontario. *Appl*

- Physiol Nutr Metab. 2019 ; 44(6) : 645-649. doi : 10.1139/apnm-2018-0495.
28. Mandigo J, Lodewyk K, Tredway J. Examining the impact of a teaching games for understanding approach on the development of physical literacy using the Passport for life assessment tool. *J Teach Phys Educ.* 2019 ; 38(2) : 136-145. English. doi : 10.1123/jtpe.2018-0028.
 29. Lodewyk KR. Early validation evidence of the Canadian practitioner-based assessment of physical literacy in secondary physical education. *Phys Educ.* 2019 Summer ; 76(3) : 634-660. doi : 10.18666/TPE-2019-V76-13-8850. Summer 2019 ; 76(3) : 634-60. PubMed PMID : 2423035074. English.
 30. Belanger K, Barnes JD, Longmuir PE, et al. The relationship between physical literacy scores and adherence to Canadian physical activity and sedentary behaviour guidelines. *BMC Public Health.* 2018 2018/10/02 ; 18(2) : 1042. doi : 10.1186/s12889-018-5897-4.
 31. Longmuir PE, Gunnell KE, Barnes JD, et al. Canadian Assessment of Physical Literacy. 2nd ed : a streamlined assessment of the capacity for physical activity among children 8 to 12 years of age. *BMC Public Health.* 2018 2018/10/02 ; 18(2) : 1047.
 32. Caldwell HA, Di Cristofaro NA, Cairney J, Bray SR, Timmons BW. Measurement properties of the physical literacy assessment for youth (play) tools. *Appl Physiol Nutr Metab.* 2021 ; 46(6) : 571-578. doi : 10.1139/apnm-2020-0648.
 33. Kaioglou V, Dania A, Venetsanou F. How physically literate are children today? A baseline assessment of Greek children 8-12 years of age. *J Sports Sci.* 2020 ; 38(7) : 741-750. doi : 10.1080/02640414.2020.1730024.
 34. Chen ST, Tang Y, Chen PJ, Liu Y. The development of Chinese Assessment and Evaluation of Physical Literacy (CAEPL) : A study using Delphi method. *Int J Environ Res Public Health.* 2020 ; 17(8) : 2720. doi : 10.3390/ijerph17082720.
 35. Li MH, Sum RKW, Sit CHP, Wong SHS, Ha ASC. Associations between perceived and actual physical literacy level in Chinese primary school children. *BMC Public Health.* 2020 ; 20(1) : 1-9.
 36. Blain DO, Curran T, Standage M. Psychological and behavioral correlates of early adolescents' physical literacy. *J Teach Phys Educ.* 2020 ; 40(1) : 157-165. doi : 10.1123/jtpe.2019-0131.
 37. Dutil C, Tremblay MS, Longmuir PE, Barnes JD, Belanger K, Chaput JP. Influence of the relative age effect on children's scores obtained from the Canadian assessment of physical literacy. *BMC Public Health.* 2018 ; 18(Suppl 2) : 1040. doi : 10.1186/s12889-018-5895-6.
 38. Saunders TJ, MacDonald DJ, Copeland JL, et al. The relationship between sedentary behaviour and physical literacy in Canadian children : A cross-sectional analysis from the RBC-CAPL Learn to Play study. *BMC Public Health.* 2018 ; 18(Suppl 2) : 1037. doi : 10.1186/s12889-018-5892-9.
 39. Wright C, Buxcey J, Gibbons S, Cairney J, Barrette M, Naylor PJ. A pragmatic feasibility trial examining the effect of job embedded professional development on teachers' capacity to provide physical literacy enriched physical education in elementary schools. *Int J Environ Res Public Health.* 2020 ; 17(12) : 4386. doi : 10.3390/ijerph17124386.
 40. Blanchard J, Van Wyk N, Ertel E, Alpous A, Longmuir PE. Canadian Assessment of Physical Literacy in grades 7-9 (12-16 years) : Preliminary validity and descriptive results. *J Sports Sci.*

- 2020 2020/01/17 ; 38(2) : 177-186. doi : 10.1080/02640414.2019.1689076.
41. Delisle Nyström C, Traversy G, Barnes JD, Chaput JP, Longmuir PE, Tremblay MS. Associations between domains of physical literacy by weight status in 8- to 12-year-old Canadian children. *BMC Public Health*. 2018 2018/10/02 ; 18(2) : 1043. doi : 10.1186/s12889-018-5898-3.
 42. Gunnell KE, Longmuir PE, Barnes JD, Belanger K, Tremblay MS. Refining the Canadian Assessment of Physical Literacy based on theory and factor analyses. *BMC Public Health*. 2018 2018/10/02 ; 18(2) : 1044. doi : 10.1186/s12889-018-5899-2.
 43. Tremblay MS, Longmuir PE, Barnes JD, et al. Physical literacy levels of Canadian children aged 8-12 years : Descriptive and normative results from the RBC Learn to Play-CAPL project. *BMC Public Health*. 2018 2018/10/02 ; 18(2) : 1036. doi : 10.1186/s12889-018-5891-x.
 44. Jefferies P, Bremer E, Kozera T, Cairney J, Kriellaars D. Psychometric properties and construct validity of PLAYself : A self-reported measure of physical literacy for children and youth. *Appl Physiol Nutr Metab*. 2021 ; 46(6) : 579-588. doi : 10.1139/apnm-2020-0410.
 45. Law B, Bruner B, Scharoun Benson SM, et al. Associations between teacher training and measures of physical literacy among Canadian 8- to 12-year-old students. *BMC Public Health*. 2018 ; 18(Suppl 2) : 1039. doi : 10.1186/s12889-018-5894-7.
 46. Robinson DB, Randall L. Marking physical literacy or missing the mark on physical literacy? A conceptual critique of Canada's physical literacy assessment instruments. *Meas Phys Educ Exer Sci*. 2017 ; 21(1) : 40-55. doi : 10.1080/1091367X.2016.1249793.
 47. Barnett LM, Dudley DA, Telford RD, et al. Guidelines for the selection of physical literacy measures in physical education in Australia. *J Teach Phys Educ*. 2019 ; 38(2) : 119-125. doi : 10.1123/jtpe.2018-0219.
 48. Cairney J, Clark HJ, James ME, Mitchell D, Dudley DA, Kriellaars D. The preschool physical literacy assessment tool : Testing a new physical literacy tool for the early years. *Front Pediatr*. 2018 ; 6 : 138. doi : 10.3389/fped.2018.00138.
 49. Dudley DA. A conceptual model of observed physical literacy. *Phys Educ*. 2015 ; 72(5) : 236-260.
 50. Hyndman B, Pill S. What's in a concept? A Leximancer text mining analysis of physical literacy across the international literature. *Eur Phys Educ Rev*. 2018 ; 24(3) : 292-313. doi : 10.1177/1356336X17690312.
 51. Liu Y, Chen S. Physical literacy in children and adolescents : Definitions, assessments, and interventions. *Eur Phys Educ Rev*. 2021 ; 27(1) : 96-112. doi : 10.1177/1356336X20925502.
 52. Mandigo J, Francis N, Lodewyk K, Lopez R. Physical literacy for educators. *Phys Health Educ J*. 2009 ; 75(3) : 27-30.
 53. Woodward LJ, Fergusson DM. Childhood peer relationship problems and psychosocial adjustment in late adolescence. *J Abnorm Child Psychol*. 1999 ; 27(1) : 87-104. doi : 10.1023/a : 1022618608802.
 54. Cooper K, Hards E, Moltrecht B, et al. Loneliness, social relationships, and mental health in adolescents during the COVID-19 pandemic. *J Affect Disord*. 2021 ; 289 : 98-104. doi : 10.1016/j.jad.2021.04.016.
 55. 国务院. 国务院关于印发加快发展体育产业促进体育消费的若干意见 (国发 [2014] 46号). 2014-10-20. [http : //www.gov.cn/zhengce/content/2014-10/20/content_9152.htm](http://www.gov.cn/zhengce/content/2014-10/20/content_9152.htm).
 56. 中国共产党第十八届中央委员会第五次全体会议. 中共中央关于制定国民经济和社会发展第

- 十三个五年规划的建议. 2015-11-3.
57. 国务院. 国务院办公厅关于强化学校体育促进学生身心健康全面发展的意见 (国办发[2016]27号). 2016-05-06. http://www.gov.cn/zhengce/content/2016-05/06/content_5070778.htm.
58. 吴阳. 我国青少年科学健身素养存在的问题及对策. 福建体育科技, 2019, 38(03) : 25-27.
59. 張彦峰. 构建儿童青少年科学健身素养测量模型及其影响因素的社会生态学结构模型 - 运用结构方程模型. 体育科技杂志, 2021(06) : 54-68.
60. Zhang Y, Li S, Naito H, Wu D, Wang J, Deng P. Analysis of the influencing factors of Chinese children and adolescents' scientific fitness literacy. J Sports Med Phys Fitness. 2020 Dec ; 60(12) : 1604-1606. doi : 10.23736/S0022-4707.19.10165-X.
61. Kidokoro T, Tomkinson GR, Noi S, Suzuki K. Japanese Physical Fitness Surveillance : A Greater Need for International Publications That Utilize the World's Best Physical Fitness Database. J Phys Fitness Sports Med, 2022 ; 11(3) : 161-167.

3. Physical Literacyとスポーツ政策

3-1. カナダにおけるLTAD作成経緯とフィジカルリテラシー

伊藤 静夫¹⁾

I はじめに

カナダでは、世界に先駆けジュニア競技者育成モデルである「Canadian Sport for Life : Long-Term Athlete Development (以下, LTAD)」を策定しその普及につとめている。LTADでは、育成の理論的なよりどころとして、いち早くフィジカルリテラシーを取り入れた。それは、LTADがジュニア競技者の育成をめざすと同時に、生涯スポーツの振興をめざしたプログラムだからでもある。

今日、世界的な身体不活動パンデミックが長く続く中、多くの人が生涯にわたって身体活動に親しむ生活設計のできることが望まれる。そのためには、発育段階においてスポーツや身体活動に慣れ親しむことができる基礎教養、すなわちフィジカルリテラシーを育てることが重要であると考えようになってきた。この理念実現のために、カナダはLTADの中核にフィジカルリテラシーを取り入れたのである。

今日、LTADはジュニア競技者育成と生涯スポーツ振興の融合したスポーツ政策の規範的存在として世界的に広く知られるようになった。我が国におけるジュニアスポーツのあり方、あるいはフィジカルリテラシーの普及を考えると、カナダにおけるLTADの成立過程、およびフィジカルリテラシーとの関連について概観しておくことは意義あることであろう。

II LTAD成立の経緯

1) タレント発掘という発想

1970～80年代、旧東ドイツをはじめ旧東欧社会主義諸国は、国家主導のスポーツ政策としてタレント発掘・育成システムを導入した。タレント発

掘という発想は国の人口規模に深く関わる。人口の多い国ほど優れたタレントを生み出す可能性(タレントプール)が高くなり国家間のメダル争いで有利に働く。他方、人口の少ない国が人口大国と伍して戦うには、少ない人口から人為的に優れた人材(タレント)を見出す手立てを講じる必要がある。そうした考えから、タレント発掘という発想が生まれた。その具体的な事例として、旧東ドイツのスポーツ専門学校を基盤とするタレント発掘・育成システムがある。旧東ドイツは、1968年メキシコオリンピックから独立国家として参加し順次成績を向上させながら1988年ソウルオリンピックでは総メダル数102個を獲得し、アメリカを抜いてソビエト連邦に次ぐ世界第2位に躍進した。人口1,700万人足らずの小国でありながら、3億の人口を擁するアメリカを凌駕した。この成功の大きな要因として、タレント発掘・育成システムが想定された。

1990年代以降、東欧社会主義国の崩壊とともに旧東ドイツに代表されるタレント発掘・育成システムは消滅するが、そのアイディアは形を変え自由主義諸国に継承されていった。なかでも人口が2,300万人に過ぎないオーストラリアは、いち早くこれに取り組んだ。1987年から、オーストラリアスポーツコミッション(ASC)およびオーストラリア国立スポーツ科学研究所(AIS)が連携し、旧東ドイツのモデルを手本に全国規模でのタレント発掘・育成事業を展開した。特に2000年の自国シドニーオリンピック開催が決まった1994年から、同システムの強化をはかり着実に成果を出した。1976年モントリオール・オリンピックでわずか5つのメダル獲得であったものをシドニーオリンピックでは60個のメダル獲得へと押し上げた。この成果によって、オーストラリアのスポーツ政策=タレント発掘育成システムは大いに脚光を浴び、諸外国のジュニア競技者育成政策にも大きな

1) 東京マラソン財団

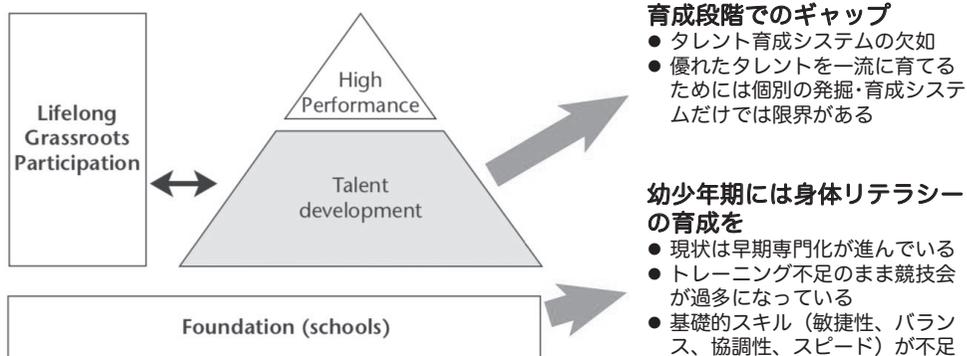


図1 イギリスのLTADモデル (DCSM, 2002⁴⁾)

刺激となった。日本も例外ではなく、2000年に作成した「スポーツ振興基本計画」では、競技スポーツ施策の柱として一貫指導システム「発掘－育成－強化」を基本モデルに設定し、各競技団体にもこの基本モデルに則って個別の育成モデルを作るように働きかけた。

2) deliberate practice理論

タレントプールにおける人的劣勢を克服した旧東ドイツならびにオーストラリアの活躍は世界の耳目を引き、タレント発掘・育成システムは成功モデルとして認識されるようになった。そこに学問的根拠を与えたのがEricssonら(1993)の理論であったと言えるであろう。スポーツに限らず、科学、芸術、ビジネスなど幅広い分野にわたって世界一流に到達した人たちの経歴を調べ、早期から専門的練習「deliberate practice(集中練習)」を長期間継続することの有効性を論じたものである。deliberate practiceとは、ただ漫然と練習を継続するのではなく高度に構造化された意図的、計画的練習を意味し、「タレント発掘・育成モデル」を支持する裏付けともなった。また長期間の継続が重視されていることから、「10年1万時間の法則」とも言われ、早期専門化の効果が正当化され助長されることにつながった。

ただし、Ericssonの理論は実際の青少年競技者の育成にはそぐわないという批判もあり^{1), 2)}、また青少年競技者の早期専門化による様々な弊害が指摘され、その実態調査も盛んに行われるように

なった³⁾。その結果、青少年期の早期から一つのスポーツに専門的に取り組むことの是非をめぐって、スポーツ現場においても国家のスポーツ政策においても、考え方が二分し整理されないまま今日に至っている。

3) LTADの策定

以上の経緯から、ジュニア競技者の育成についての考え方は、21世紀をまたいで大きな転機を迎えることになった。一つは、タレント発掘育成モデルを志向し発展させる従来の方向性である。もう一つは、このモデルによって生じる早期専門化の弊害を回避する方向性である。後者の考え方に基づき、世界に先駆けていち早く新たな青少年競技者育成モデルとして創出されたのが、イギリスおよびカナダのLTADモデルであった。すなわち、LTADはタレント発掘・育成モデルに対するアンチテーゼとしての歴史的意義があるとも言える。

そもそも、20世紀末は子どものスポーツの過熱化、早期専門化による弊害が顕在化してきた時代でもあった。そこで、ジュニア競技者の効果的かつ健全な育成方法を世界各国が模索し始めた。まずイギリスでは1997年、保守党から労働党へ政権交代があり、ブレア政権はスポーツ政策でも大胆な改革を進めた。2002年にスポーツ政策「ゲームプラン」を打ち出し⁴⁾、その中に後述するIstvan Balyiが考案したLTADモデルを提示した(図1)。この流れを受け、カナダではさらにLTADを発展させたのである。

1976年のモントリオールオリンピックにおいて、開催国のカナダは金メダルを一つも獲得できず、この屈辱がカナダ・スポーツ界の積年の課題になっていた。人口の少ないカナダでは、当然、タレント発掘・育成モデル導入に食指が動いた。先行の成功事例として、東欧やオーストラリアのシステムを導入することも検討された。しかしながら、カナダはあえてこの方向性を選択しなかった。

人的資源の限られるカナダでは、逆に、少ない子どもたちを如何に注意深く、効果的に育てるかという視点に関心が高いように想像される。それは、研究分野にも反映されているように思われる。カナダの才能開発研究で知られる教育心理学者のGagne⁵⁾は才能（生来の素質）とタレント（成果要素）とを分けた「才能タレント分化モデル：Differentiated Model of Giftedness and Talent (DMGT)」を提示し、才能教育を複合的、多元的に捉えるべきことを提唱している。同じくカナダのスポーツ心理学者であるCote⁶⁾は、タレント発掘育成および早期専門化に対して否定的な立場から、Ericssonの「deliberate practice」に対比させ「deliberate play」という概念を示し、思春期前には非組織的スポーツ活動であるdeliberate playを豊富に経験（sampling）することを勧めた「スポーツ参加の育成モデル」(Developmental model of participation；DMSP)を提唱している。

こうした早期専門化に対する批判的理論が背景にあつたことと想像されるが、カナダはジュニア競技者の育成モデルとしてタレント発掘・育成モデルとは対照的なLTADモデルを考案したのであろう⁷⁾。LTADモデルの構想はハンガリーから帰化したIstvan Balyiに負うところが大きく、Balyiを中心としたカナダのワーキングチーム（後に非営利団体“Sport for Life”として組織化）はアスリートを発育発達段階から生涯にわたって長期的に育成して行くというフレームワークを完成させていった。この間、LTADの先駆けであったイギリスのスポーツ行政組織Sport Englandとの交流もあり、フィジカル・リテラシーの提唱者であるMargaret Whiteheadとも接し、フィジカ

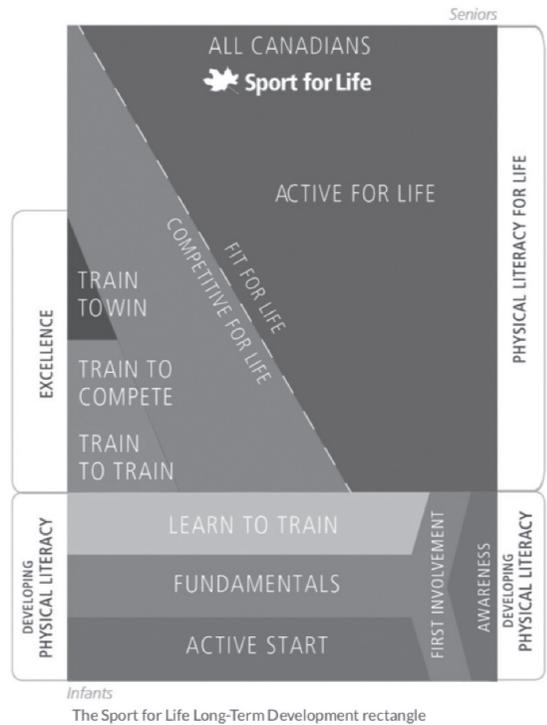


図2 カナダのLTDモデル (Sport for Life, 2019¹²⁾)
(LTADからLTDに名称変更)

ルリテラシーをLTADモデルの中核的概念に位置づけたのである⁸⁾。

イギリスで提唱されたLTADは、長期的な展望に立って、発育段階ではフィジカルリテラシーの育成を中心に生涯スポーツへと発展させる構想ではありながら、競技スポーツは旧来のピラミッド型が描かれ、やはりタレント発掘・育成モデルをも重視する姿勢が図2の絵柄からもうかがわれる。一方カナダのLTADになると、競技スポーツと生涯スポーツとの融合を強く意識し、図2のように両者を包含した四角形でこのモデルを描いているところに特徴がある。

以上のように、LTADにおけるフィジカルリテラシーは早期専門化とは対照的な概念となった。フィジカルリテラシーは、タレント育成（才能教育）を長い視点で動的、多角的に捉えるべきとしたGagneのDMGTモデル、あるいは幼少年期には専門的訓練（deliberate practice）ではなく遊びを基調にした自発的プレー（deliberate play）を

重視すべきとしたCoteのDMSPモデルに通底する、青少年期におけるスポーツ経験の基礎的、中核的な概念と解釈できるのである。

4) LTADにおけるフィジカルリテラシーの定義

21世紀を迎えた当時、ジュニア育成の主流は間違いなく「タレント発掘」であった。そうした時流にあえて対峙し、ジュニア競技者育成の根幹にフィジカルリテラシーを据えたことは、極めて斬新な試みであった。ただし、Whiteheadのフィジカルリテラシー理論をジュニア競技者育成の現場に落とし込むことにはかなりの工夫を要した。スポーツ現場での普及をめざすため、何よりわかりやすく咀嚼して伝えなければならず、フィジカルリテラシーの概念も大胆に簡略化することになった。そこで、LTADの補完文書“Developing Physical Literacy : A Guide for Parents of Children Ages 0-12”⁹⁾を出版し、フィジカルリテラシーの普及啓発につとめた。この文書では、フィジカルリテラシーを次のように表現している。

身体リテラシーとは、「基礎的運動スキル及び基礎的スポーツスキルを発達させることを意味し、これにより子どもはさまざまな身体活動、リズム運動（ダンス）、スポーツ活動において、自信を持って、うまくコントロールしながら活動できる。また身体リテラシーは、その場の活動において回りで何が起きているかを“読む”能力でもあり、またその状況に適切に対応できる能力でもある (P.5)」

本定義およびLTADでの表現においても、スポーツ現場での普及を考慮し、それゆえ運動スキルやスポーツスキルの修得に偏っていることは否定できない。その分、Whiteheadのオリジナルな理論から隔たる傾向にもあったが、LTADではより現実的な選択をしてきたということであろう。

一方、こうしたスポーツ界でのLTADの取り組みとは別に、カナダの体育教育の立場からは異なる考え方が示されている。カナダ保健体育局(Physical and Health Education (PHE) Canada)では、フィジカルリテラシーを次のように表現し

ている¹⁰⁾。

フィジカルリテラシーが身についた人は、有能感を持ってさまざまな身体活動を行うことができ、そうした活動を通して全人的な発育がもたらされる。身体リテラシーが身についた人は、さまざまな運動を理解し、伝え、応用し、分析する能力を常に意欲的に高めようとする。また、そうした人たちは、さまざまな健康的な身体活動を、自信を持って、的確に、創造的に、計画的に行うことができる。こうしたスキルが身につくことによって、生涯を通して健康的なライフスタイルを積極的に選択できるようになり、その結果、自分自身にも他者にも、そして周りの環境にも、有益になると同時にそれらを尊重するようになる。

スポーツ現場と教育現場のフィジカルリテラシーの定義に際だった差異は見られないようにも思えるが、実際の現場ではフィジカルリテラシーの捉え方の違いが問題になることもあるだろう。なにより、フィジカルリテラシーの育成は長期的な展望でなければならない。必然的に、スポーツ（我が国では部活やクラブ活動）と学校体育の融合が求められる。そこでカナダではこの10年間、フィジカルリテラシーをめぐるスポーツと体育の融合に腐心してきた。

2015年6月、カナダのバンクーバーにおいて国際フィジカルリテラシー会議が開催されたが、これを機にカナダでのこの融合ムーブメントは大きく前進することになった。同会議において、カナダのフィジカルリテラシーに関して国内のコンセンサス・ステートメントが発表された¹¹⁾。上記の融合ムーブメントの一応のまとめを見ることができる。

スポーツ、体育、レクリエーション、健康、スポーツ政策などの各分野が協力してこのコンセンサス・ステートメントの作成に当たった。従来、フィジカルリテラシーは「身体活動」、「体育」、「基本的動作スキル」、「基本的スポーツスキル」といった用語と混同してきた嫌いがあり、そうした誤用を避けることも目的の一つであった。ここでは、

フィジカルリテラシーの定義をWhiteheadのものに準じて次のようにした。

フィジカルリテラシーとは、生涯にわたって身体的活動を継続することに価値を見出し責任をもって行動できるための、動機付け、自信、身体能力、知識、理解を意味する。

この定義には、感情要素（動機と自信）、身体要素（身体能力）、認知要素（知識と理解）、行動要素（生涯にわたって身体的活動を実践）の4つの要素が含まれる。また、本定義の背景として、フィジカルリテラシーの育成は、全ての人のためのものであり、また全ての人が達成でき、それは言わば各個人の旅のようなものであり、さまざまな文脈や環境で経験することができ、生涯を通じて培われるものであり、全人格の発達に寄与するものである、ことが示唆されている。なおこの定義は、現在、国際フィジカルリテラシー協会（IPLA）においても用いられている。

5) LTADの普及

2005年、カナダの国家スポーツ行政局であるSport Canadaは、カナダスポーツ政策2002（2002～2012の10年計画）にLTADを国のスポーツ政策として組み込み、LTADを公式文書として公表した。以後、カナダのほぼ全ての競技団体は、それぞれの競技特性に応じたLTADモデルを作成しジュニア競技者育成の基本政策に据えることになった。これまでにないユニークなスポーツ政策であるLTADが、わずか10年足らずで国の基本政策として普及、浸透したのは異例の速さと言っていい⁸⁾。

しかしカナダのこうした動きは、とどまることなく、常に前進している印象を受ける。LTADの基本方針の一つとして、日本語の「KAIZEN」をあげている。スポーツ現場での日々の改善はもとより、スポーツ政策としてのLTADの改善にも余念がないようである。

2019年版のLTAD文書では、LTADそのものを改名したのもその表れである¹²⁾。従来の長期競技者育成計画“Long Term Athlete Development”

から競技者“Athlete”を外し、長期育成計画“Long Term Development ; LTD”とした。

2019年のLTD文書では、改名について次のように説明されている。LTADの「すべての子どもは生まれながらにしてアスリートである」という基本理念に変わりはないが、“Long Term”という幼少年期から高齢まで生涯を包含するという展望、あるいは、スポーツ分野だけでなく教育をはじめ様々な分野が関与するという社会的な合意がこの育成モデルの基盤となるだろう。しかしこのとき、“Athlete”という言葉は、むしろそうした共通認識に誤解を生じさせ、この育成モデルのめざすところを競技スポーツに矮小化させる恐れがあると考え、あえて“Athlete”を外したという。

今日、カナダが主導するLTADモデルは世界的な広がりを見せ、認知されている。その名称を変えるというこの大胆な判断の適否は、今後の成り行きを見守るより他はない。しかし、身体発達は長期にわたるプロセスであるという認識、スポーツパフォーマンス向上も生涯にわたる健康生活をめざすうえでも長期的視点が重要であるという認識、そして、社会全体でそうした理念を醸成して行かなければならないという認識にたてば、この名称変更も英断と評されるべきだろう。

Ⅲ ま と め

ジュニアアスリートの育成をめぐる、早期に専門的に育成するという方向性とこれに対峙する後期専門化の方向性がある。一人の子どもに限れば、この二つの方向性の中庸は成立し得ない。しかし実際のスポーツ現場では、国によって、スポーツ種目によって、あるいは学校体育と運動部活動といった教育現場において、両方向性は二極化したり、中庸的な選択をしたりとさまざまである。

この混沌は、時代の影響も多分に受けてきた。20世紀の後半まで、ジュニア競技者育成は、「タレント発掘・育成」が象徴的なモデルであった。優れたタレントを早期に見出し専門的に育てるという育成モデルは、間違いなくその時代の世界を代表するものであり、我が国を含め、各国は競って国のスポーツ政策にこのモデルを取り入れてきた。しかし、結果的にこのモデルはスポーツパ

パフォーマンスに優れた子どもとそうでない子どもを分離させ、同時に早期専門化による弊害を招くことにもなった。

21世紀をまたいで、この流れを大きく変えたのがカナダのLTADであった。LTADの根本思想には「すべての子どもはアスリートである」という考え方が根底にあることはすでに触れた。すべてのジュニアアスリートすなわちすべての子どもにとって、発育期にこそスポーツや身体活動の基礎を培うことがもっとも重要であり、それを基盤に競技スポーツへ発展し、また生涯スポーツへと発展するという構想から出た表現であった。そして、その基礎づくりこそがフィジカルリテラシーなのである。LTADは競技スポーツと生涯スポーツの融合モデルであり、その融合の核になっているのがフィジカルリテラシーに他ならない。

21世紀以降、わずかな期間でLTADはカナダ国内において普及するばかりでなく、世界を代表するモデルにまで発展した。従来とは異なる発想の育成モデルを定着させるには多くの困難をともなったことと想像される。しかし、発育期においてフィジカルリテラシーを育てるという明確な目標設定を示したことが多くの共感を呼び、子どものスポーツを従来型から大きく変革できた要因ではなかっただろうか。

反面、スポーツ現場におけるフィジカルリテラシーへの理解は未だ不十分であることも否定できない。簡便に伝えようとすれば、逆に誤解を招くという反省もある。LTADでは、スポーツ現場にフィジカルリテラシーの概念を如何に普及啓発できるかが目下の課題であるだろう。カナダでは、そのためにあえてLTADの名称変更までして、この難題に取り組んでいる。おそらく、フィジカルリテラシーという概念の普及と同時に、具体的理解を深めるためにはフィジカルリテラシーを評価するツールを普及させることで理解が深まることが期待できよう。理念の普及と評価ツールの普及をセットで進めることが効果的であるに違いない。

ひるがえって我が国のジュニアスポーツ政策では、ジュニア競技スポーツと、学校体育・生涯スポーツとが二分されている傾向が色濃いと言わな

ければならない。しかし、その見直しが始まっていることも事実である。日本陸上競技連盟は、2018年に競技者育成指針を提示し、発育段階でのフィジカルリテラシー育成の重要性をあげている。そしてその指針に基づき、具体的には、2019年より全国小学生陸上競技交流大会の実施種目を従来の個人種目から混成種目へと大幅に変更した¹³⁾。走・跳・投という多様な運動特性で構成される陸上競技の特徴を活かし、発育期の子どもに多様な競技を体験させ、早期専門化を回避し、フィジカルリテラシー育成を狙ったものといえる。また2022年、全日本柔道連盟は全国小学生学年別柔道大会を廃止した¹⁴⁾。行き過ぎた勝利至上主義が廃止の理由と説明された。日本柔道の根本精神は柔道創始者の嘉納治五郎が唱えた「精力善用、自他共栄」であり、それは勝ち負けにこだわらない全人的教育に通ずる、まさにフィジカルリテラシーに通じる考え方である。柔道の小学生全国大会廃止も、この根本精神に立ち返っての決断であったとのことであり、柔道ジュニア育成のこれからの方向性を注視したい。

今後、我が国におけるジュニア育成を中心とする競技スポーツと生涯スポーツとの融合モデルは、競技団体はもとより日本のスポーツ界が取り組むべき大きな課題である。そうしたなかで、これを先駆的に進めてきたカナダには学ぶことが多い。無論、カナダの改革がすべて順調であったわけではない。日本にはなじまないところもあるだろう。参考にすべきは参考にし、その良否をかみ分けて取り入れて行けば良い。

文 献

- 1) Lombardo MP, et al. : You can't teach speed : sprinters falsify the deliberate practice model of expertise. *PeerJ*, 2 : 2014
- 2) Tucker R, et al. : What makes champions? A review of the relative contribution of genes and training to sporting success. *Br J Sports Med*, 46 : 555-61, 2012
- 3) Malina RM : Early sport specialization : roots, effectiveness, risks. *Curr Sports Med Rep*, 9 : 364-71, 2010

- 4) DCSM : Game Plan : a strategy for delivering Government's sport and physical activity objectives. http://www.cabinetoffice.gov.uk/media/cabinetoffice/strategy/assets/game_plan_report.pdf, 2002
- 5) Gagne F : Constructs and models pertaining to exceptional human abilities. In : Heller KA Monks FJ, Passow AH, editors. International handbook of research and development of giftedness and talent. Oxford : Pergamon Press, 63-85, 1993
- 6) Cote J, et al. : Practice and Play in the Development of Sport Expertise. in Eklund & Tenenbaum (ed) "Handbook of Sport Psychology", 184-202, 2007
- 7) Canadian Sport Centres : Long-Term Athlete Development - Canadian Sport for Life. http://www.sasksport.sk.ca/CS4L/pdf/LTAD_ResourcePaper.pdf, 2005
- 8) Sport for Life : A BRIEF HISTORY OF SPORT FOR LIFE. <https://sportforlife.ca/blog/a-brief-history-of-sport-for-life/>
- 9) Canadian Sport Centres : Developing Physical Literacy : A guide for parents of children ages 0 to 12. <http://www.sasksport.sk.ca/CS4L/pdf/DPL.pdf>, 2008
- 10) Mandigo J : Position Paper Physical Literacy for Educators. http://www.phcanada.ca/developingphysicalliteracy/pdfs/pl_position_paper.pdf, 2009
- 11) RBC Learn to Play Project : Canada's Physical Literacy Consensus Statement. <https://sportforlife.ca/wp-content/uploads/2016/06/Consensus-Handout.pdf>, 2015
- 12) Sport for Life : LONG-TERM DEVELOPMENT IN SPORT AND PHYSICAL ACTIVITY 3.0. <https://sportforlife.ca/wp-content/uploads/2019/06/Long-Term-Development-in-Sport-and-Physical-Activity-3.0.pdf>, 2019
- 13) 伊藤静夫 : 陸上競技青少年育成モデルを再考する : 身体リテラシー育成との関連から日本小学校陸上を展望 (特集企画 ジュニア競技者育成における身体リテラシーの意義). 陸上競技研究紀要, 14 : 4-11, 2018
- 14) 日本柔道連盟 : 全国小学生学年別柔道大会について. <https://www.judo.or.jp/news/9766/>, 2022

3-2. オーストラリアにおけるフィジカルリテラシーに関する取り組み

- Physical Literacy: Informing a Definition and Standard for Australia -

森丘 保典¹⁾

はじめに

2017年9月、Australian Sports Commission (ASC) は、「フィジカルリテラシー (Physical Literacy)」に関する定義とスタンダードの作成に向けたテクニカルレポート (Physical Literacy: Informing a Definition and Standard for Australia: https://www.researchgate.net/publication/321310128_Physical_Literacy_Informing_a_Definition_and_Standard_for_Australia) を発刊した。

本レポートの冒頭、ASCのCEOであるKate Palmerは、「定期的な身体活動やスポーツへの参加がもたらすメリットはよく知られているにもかかわらず、人々は座位行動を減らしてより多く動くという健康的な選択には向かわず、予防可能な疾病を増加させている」ことを懸念している。また、「人生の早い段階で身体活動(スポーツを含む)に必要なスキルを身につけることが、生涯を通じてその参加率を高めることから、すべてのオーストラリア人が、スポーツに参加するために必要な身体的スキルに加えて、継続するための社会的、認知的、感情的スキルを身につける機会を得ることが重要である」としている。

ASCは、学校活動のなかで子どもたちのスポーツへの参加機会を増やし、子どもたちと地域スポーツをつなぐために、2015年にスポーティング・スクールプログラム (Australian Government's Sporting Schools Program) を導入して以降、スポーツと教育との相互関係をよりよく理解し、スポーツが全てのオーストラリア人 (特に若者) の健康とウェルビーイングに貢献するために必要な

ことについて、教育、健康およびスポーツの関係者間で協議を重ねてきた。そして2019年、生涯にわたって活動的で健康的なライフスタイルを実現するための様々なスキルを特定し、その発展をサポートするためのフレームワーク (Australian Physical Literacy Framework (Version 2): https://www.sportaus.gov.au/__data/assets/pdf_file/0019/710173/35455_Physical-Literacy-Framework_access.pdf) を作成するに至る。

本稿では、本レポートの内容 (キーセンテンス) を概観しながら、上記のフレームワーク (スタンダード) 作成に至る過程で行われた議論について確認する。

背景

- 「フィジカル・リテラシー」 (Whitehead, 2001; 2007) は、人間の身体活動や運動において、生涯にわたる継続的な参加および卓越した競技パフォーマンスの基礎であり、優れたフィジカルリテラシーを持つ人は生涯現役である可能性が高いと考えられている。
- 近年、国際的にも注目されつつあるが (Edwards, Bryant, Keegan, Morgan & Jones, 2016)、その定義、測定や評価・モニタリングの可能性については議論の余地も残されている。
- 学術的に開発、承認されたフィジカル・リテラシーのスタンダードは、子どもや若者の身体活動やスポーツへの長期的な参加促進に取り組むことで、肥満からメンタルヘルスの幅広い健康アウトカムにプラスの影響を与える可能性を持っている。
- このようなスタンダードの開発は、すべてのオーストラリア人の健康と福祉を向上させるた

1) 日本大学

Level of Evidence	Grading Criteria	Grade of Recommendation
1a	Systematic review of RCTs including meta-analysis	A
1b	Individual RCT with narrow confidence interval	A
1c	All and none studies	B
2a	Systematic review of cohort studies	B
2b	Individual cohort study and low quality RCT	B
2c	Outcome research study	C
3a	Systematic review of case-control studies	C
3b	Individual case-control study	C
4	Case-series poor quality cohort and case-control studies	C
5	Expert Opinion	D

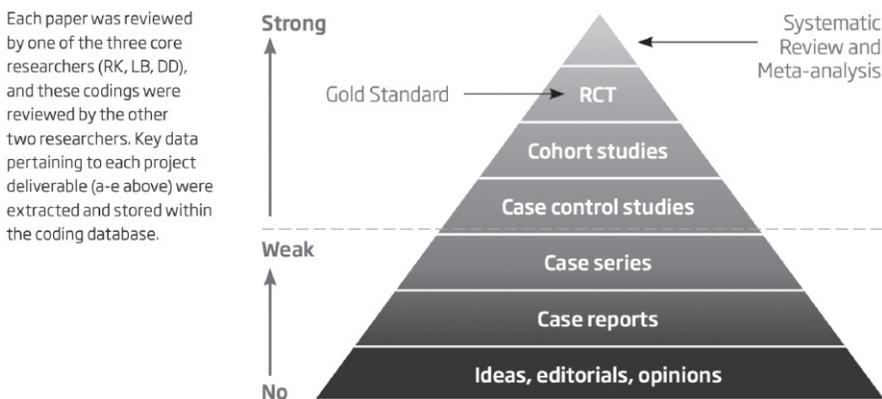


Figure 1 Illustration of the coding system adopted for evidence-quality, from OCEBM

めの基礎を築くことになる。

- 本研究プロジェクトは、フィジカル・リテラシーそれ自体と、モチベーション、自信、身体的自己認識、体力や運動能力、スポーツや身体活動の促進など、より広い分野のトピックについての包括的にレビューを行った。

サンプリング方法

- システマティックレビューの戦略は、フィジカルリテラシーに密接に関連するトピックから、利用可能な最善のエビデンスを収集するように設計された。
- Canadian Sport for LifeやInternational Physical Literacy Associationなど、既存のフィジカ

ルリテラシーの定義から情報を得るとともに、関連するトピックも含めて探索した。

- (i) 運動能力（基礎的な運動技能やコーディネーションを含む）の幅広い研究領域。
- (ii) 身体活動・スポーツに対するモチベーション。
- (iii) 身体活動・スポーツにおける自信、自己効力感、身体的自己認識またはコンピテンス
- (iv) 身体活動および／またはスポーツに対する知識、態度、価値観
- (v) 座位行動の減少を含む身体活動の促進
- (vi) 体育教育法（フィットネスとゲーム中心のモデルを含む）。

- (vii) 学校のスポーツ及び体育のプログラム
- (viii) 上記すべての要因の測定及び評価

- MEDLINE, EBSCOhost, SPORTDiscusなどの電子データベースを用いて、査読ありの学術論文を検索した。
- Oxford Centre for Evidence-Based Medicine (OCEBM - 2004 - 図1) が作成したガイドラインを参考に、質の高いシステマティックレビューを優先し、それらが存在しない場合は、無作為化対照試験、コホート研究などの研究を探索した。

フィジカルリテラシー

- フィジカル・リテラシーについては、一般的にホワイトヘッドアプローチとよばれる「スポーツや身体活動に従事するためのモチベーション、自信、身体的能力、知識・価値観を反映した能力である」という定義がなされており、多くの定義はこれらの概念の統合であることを示唆している (図2)。
- しかし、これまでの研究では、しばしばこれらの要素が別々に参照され、その後の議論や測定方法に反映されていることから、「統合的」または「全体的」な視点で再検討する必要がある。
- さらに、いくつかの研究では、フィジカル・リテラシーは動的で相互作用的であり、環境と内的プロセス (学習、内省など-Murino, 2013 ; Robinson et al, 2016参照) の両方に関連して常に進化していると述べている。
- フィジカルリテラシーの定義の歴史は、運動スキルや知覚・判断に強く焦点を当てるなど、スポーツ参加に重点を置いていることが特徴として挙げられる。
- その後、より広く身体活動に参加し、生涯にわたって健康であるために十分な身体活動につながる何らかの属性や資質のレベルを達成することが強く意識されるようになった。
- この変化に関連して、自信、モチベーション、知識・価値観といった言葉が追加され、心理社会的要因も重要であるとの認識が示されたが、

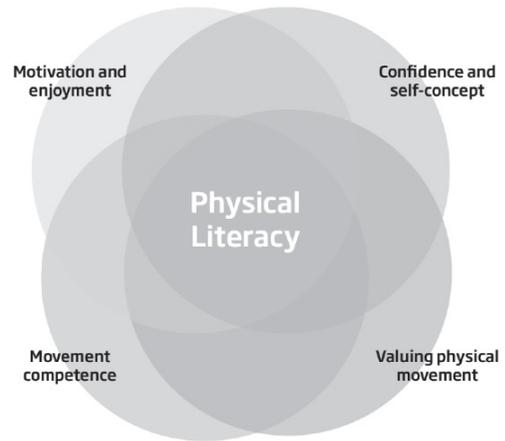


Figure 2 A schematic diagram representing the proposed integration between physical literacy concepts, as presented in a 2014 conference poster (Keegan, 2014)

これらを選んだ理由は不明であり説明も乏しい。

- おそらく、モチベーションや自信といった言葉は、多様な読者に広く理解されていると想定されているが、これらの領域でよくある誤解の可能性も明らかになっている。
- 例えば、モチベーションや自信については「多ければ多いほど良い」という考え方は適切とはいえず、知識／価値観は特に曖昧な概念で、不合理な信念から批判的推論、合理的論理、根拠に基づく意思決定まで様々なものがある。
- このような選択を批判的に問い直し、これらに変わる案を模索する必要がある。
- また、フィジカルリテラシーが、身体活動、運動、またはその両方に関係するのかという点についても課題が残されている。
- 最近の健康調査では、「身体活動」の定義が比較的正確であり、ある種の運動は除外されていることから、今後の作業では両方を意識する必要があるかもしれない。
- 例えば、瞑想やヨガなどのように、呼吸に関わるような知覚できないほど小さな動きであっても、その活動の目的が、自己に関する学習、内

的状态や感情（身体的、感情的、認知的）についての学習に関連することを考えると、「身体活動」だけでなく「運動」の定義もより広く考える必要があるかもしれない（健康にとっては十分であるということ）。

運動能力

- 一般に、運動能力は、関連する概念との関係において「2つ以上の体節の運動パターンの組み合わせを含む、組織化された一連の基本動作」(Morgan et al., 2013) と定義される。
- フィジカルリテラシーと同様に、運動能力および運動発達は、動的で進化する現象であるとされている (Stodden et al., 2008)。
- 運動能力の変化がダイナミックなプロセスであるという考え方は、それほど新しいものではない。
- Newellは、制約モデルを提唱し、運動能力は幼児期に自然に現れるのではなく、「課題」「学習者」「環境」という動的なサブシステムが協力しあった結果として現れると考えた。
- したがって、個人の運動能力は、これらのダイナミックで協力的なサブシステム内およびサブシステム間の相互作用の産物である (Newell, 1985 ; 1991 ; 2003 ; Newell & Vaillancourt, 2001)。
- 運動能力と健康に関連する行動や成果（身体活動、フィットネス、体重の状態など）との関連を支持するエビデンスは幅広く存在する (Cattuzzo et al, 2016 ; Holfelder & Schott, 2014 ; Lubans, Morgan, Cliff, Barnett, & Okely, 2010)
- 運動能力の測定は、通常は客観的なものであり、「プロセス」（質的測定とも呼ばれ、運動の形態を指す）または「プロダクト」（運動の結果、例えば、ボールが的に当たるかどうかを指す）のどちらかになる傾向があるが、最近の研究では、スキルのプロセス面とプロダクト面の両方を測定することが推奨されている（例：Logan, Barnett, Goodway, & Stodden, 2016 ; Rudd et

al., 2016)。

- 客観的な測定は、通常、一人ずつの子どもに対して行われるが、カナダとヨーロッパでは、子どもをグループで評価できる障害物タイプの評価方法を開発している。
- 子どもの運動能力をよく表しており、実現可能で費用対効果や信頼性が高く、多くの子どもにとって最適な評価方法を決定することが課題だろう。

モチベーション

- モチベーションに関しては、ほぼすべての論文がDeciとRyanの自己決定理論 (Deci & Ryan, 2008 ; Ryan & Deci, 2000) を採用している。
- この文脈では、活動の主体が本質的な価値を認識し、外部からの誘引や期待を必要とせず、楽しさなどの内発的報酬を得たときに、モチベーションは常に最適かつ長期にわたって維持されるという。
- ほとんどの研究が、自己決定理論で規定されている中核的な心理的欲求としての、有能さの欲求（タスクの進展や成功を経験する）、関連性の欲求（友情・親しみやグループの一員・所属を感じる）、自律性の欲求（選択肢とコントロール感を経験する）を高めることによって、内発的なモチベーションを開発するよう努めるべきだと提言している。
- 学校における期待や基準のもつ典型的な性質が、自律性を損なう可能性があることも指摘されている（例：Morgan, Bryant & Diffey, 2013)。
- モチベーションは、スポーツ教育や教育学的モデルとの関連で検討され、フィジカルリテラシーや運動能力と同様にダイナミックで進化する経験として説明される。
- モチベーションは、心理学的研究において、一般的に質問紙を用いて測定されてきたが、このような調査では、内発的、外発的、意欲的・非意欲的など、さまざまなタイプのモチベーション調節レベルを評価することに重点を置く傾向がある。

•これはモチベーションの「量」を示すものではなく、むしろモチベーション調節の「タイプ」または「プロファイル」の概要を示すものであり、通常は特定のタスクまたはコンテキスト（例えば、「サッカーをするとき...」など）に関連して行われる。

•生理学では、モチベーションの「強度」というレンズを通して、量としてのモチベーション、すなわち「多ければ多いほどよい」ということに焦点が当てられてきており（Brehm & Self, 1989；Richter, Gendolla, & Wright, 2016）、活力、気分、感情などの概念と並ぶ、感情的な構成要素として解釈される。

•そして、モチベーションの強度は、ポジティブな状況や事象に近づく、またはネガティブな状況や事象から遠ざかるとうとする傾向の強さと定義される（Gable & Harmon-Jones, 2010；Harmon-Jones & Gable, 2008；Harmon-Jones, Gable, & Price, 2013）。

•一般的にモチベーションの強度は、アンケートなどではなく、課題内の目標や報酬、罰などを操作して測定されている。

•ここで重要なのは、モチベーションは少なくとも認知領域と感情領域（Schunk, 2000）、そして社会的な領域にもまたがるものと解釈できることである（例えば、（Keegan, Spray, Harwood, & Lavallee, 2014）。

•フィジカルリテラシーの定義には、一般的にモチベーションという言葉が含まれているが、心理学や教育研究において、欲求、決意、意欲、情熱など、高度に関連した構成要素があることに留意すべきである（Philippe, Vallerand, Houliort, Lavigne, & Donahue, 2010；Vallerand, 2004）。

•それぞれは、別々に定義、概念化、測定されているが、この類似性は看過できない。

•同様に、教育現場においても、成長（vs固定）マインドセット（Dweck, 1986）、レジリエンス（Fletcher & Sarkar, 2013；Kinman & Grant, 2011）、グリット（Hochanadel & Finamore, 2015；Pappano, 2013）など、密接に関

連する考え方が多数存在する。

自信と自己肯定感

•自信と自己肯定感に焦点を当てた研究では、一般に「成功への期待」という定義が採用されているが、なかには単に成功した結果ではなく「投資に対する期待」、つまり参加者が「ここから何かを得られる」と考えていることに言及したものもある。

•これは、タスクへの参加の価値ある成果として、学習や良い経験、人間関係の改善などを達成する見通しを開くという、考慮すべき重要なポイントかもしれない。

•より認知的な「信念／期待」だけでなく、感情的な経験を通して自信を定義する傾向も強みられた。

•例えば、Nasuti and Rhodes(2013)は、自信を「活動の実施や過去の活動の振り返りから期待される全体的な快・不快、楽しさ、感情の状態」と定義している。

•自己効力感は、タスクを完了する（または何らかの望ましい結果を得る）能力を指す場合と、障壁を乗り越えられるという信念を指す場合があり、この区別は多くの研究で明らかにされている。

•ある研究では、特定のタスクや結果を追求するために、うまく助けを求めることができるという信念についても調査している。

•自信は、一般的に質問紙を用いて測定され、最もよく用いられるのは2つの尺度（特性および状態）である。

•特性尺度は、成功・達成できるという一般的な信念を評価するのに対し、状態尺度は、より具体的な課題または事象に言及するものである。

•自信の評価方法として、Bandura（1977）が提唱した単純な「ものさし」（または Visual Analogue Scale）や、「パフォーマンスプロファイリング」（Butler & Hardy, 1992）などの手法も、数値データは得られるがより主観的な指標となる。

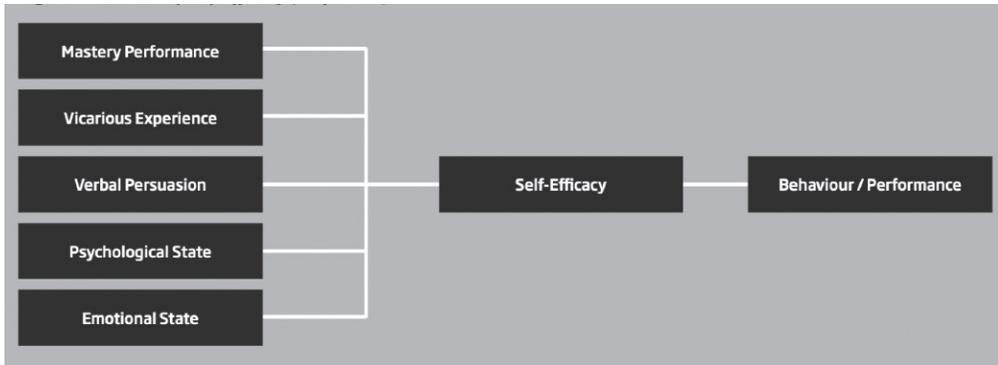


Figure 3 Sources of self-efficacy (confidence)

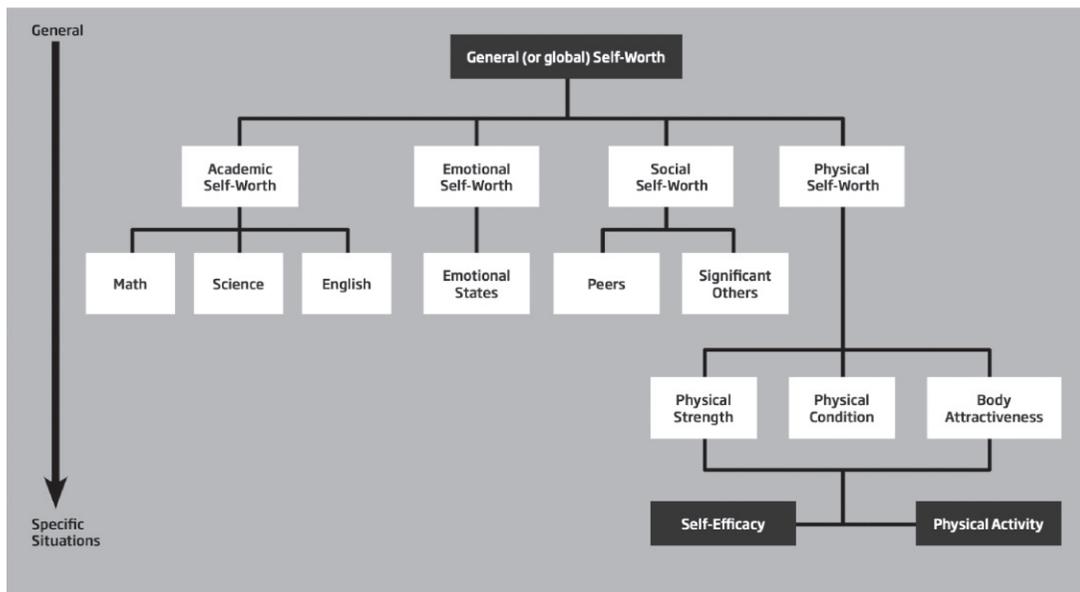


Figure 4 The construction of self-esteem (i.e., confidence) from various sources / domains

- 「状態」の形の自信は、特定のタスクで成功できるという信念に関連した自己効力感や、時には「知覚された能力」とも類似しており、これも典型的には質問票を使用して測定される。
- より一般的な形の自信である、自己に対する全体的な肯定的評価は「自己肯定感」と呼ばれ、特定のタイプの自己肯定感（体格イメージ、学業、身体的スキルなど）から「グローバル」レベルまで階層的に整理することができる（図3および4）。
- 自信を測定する際の第一の問題は、心理的な測定尺度に大きく依存していることで、日常的な設定（教室や家庭）では実用的かつ有用ではない可能性がある。
- 第二に、いくつかの研究では、自信は「投資」（例：「ここから何か役に立つことが得られると思う」）の形で言及されているが、この概念は現在の測定尺度には反映されていない。
- 能力を高めようとしている人々にとっては、成功するとは思っていないくても、学習や努力に価値を見出すのは非常に重要なことだと思われる

(Dweck, 1986 ; Nicholls, 1984 ; 1989を参照).

身体活動やスポーツに関する知識，態度，価値観

- これらの概念は，通常，国のガイドラインまたはカリキュラムの内容に関する具体的な知識として定義されている。
- 感情的な態度，信念，期待などは，モチベーションや自信に関する研究でも把握されている。
- 社会認知モデル，理由づけ行動理論（または計画的行動理論），トランスセオレティカルモデルのいずれかを採用した研究には，何らかの教育的要素が含まれていることが多いが，この明確な知識が理解され想起されたかを評価することはあまり一般的でない。
- このように，まず参加者が何を知り，何を理解することを期待しているのか（明示的な意味において），どのような信念を育てるべきと考えているのかを明確にする必要がある。
- 一般的に，能力や属性は開発できるものであり訓練や練習に反応するという信念は，暗黙（無意識）のものとしてされているが，モチベーション，課題選択，課題において採用する戦略を予測するものである（Dweck, 1986 ; Dweck & Leggett, 1988）。
- 身体活動やスポーツへの参加者が，特定の態度は固定的で変化しないと考えている場合，回避的行動，外発的モチベーション，スポーツ的でない行動（例えば，何としても勝つ）という不適応パターンが観察される。
- 「フィジカル・リテラシー」のこの側面は，特定の知識を調べるための短いクイズか，タスクに対するモチベーション/自信の概要のどちらかであり，これまでの研究ではあまり強調されていないため，どのような明示的知識と暗黙的信念を採用したいかを明確にすることは，価値ある成果の一つになるだろう。

身体的な自己認識

- 身体的自己認識に関連して，ほとんどの研究者は，Shavelsonら（Marsh, 1990 ; Shavelson, Hubner, & Stanton, 1976）の多次元の，階層

的自己認識モデルを取り入れている。

- FoxとCorbin（1989）も，身体的自己概念の多次元のかつ階層的モデルを提案しているが，これはShavelsonらのアプローチと一致する。このモデルでは，グローバルな自己肯定感を頂点とし，領域レベルでは身体的自己肯定感，サブドメインレベルではスポーツ能力，魅力的な身体，体力，体調と続くと仮定している。
- さらに，このモデルに関連して，身体的自己概念の4つの側面とグローバルな自己肯定感，身体的自己価値を評価する身体的自己認識プロフィール（PSPP）が考案された。PSPPは，身体的自己肯定感の多次元を測定するために設計された自己報告式の尺度である。
- このモデルは，身体的自己認識がグローバルな自己肯定感と自己価値に貢献できるとするが，学業成績や人間関係など，他の自己肯定感の源泉と並行してのみ貢献することを明確にしている。
- Harter（1982）の一連の研究は，身体的自己認識と知覚能力の他の側面を区別することができるという概念に言及している。
- 運動発達分野では，知覚を測定する器具と評価される実際の技能を一致させ，それによって自分自身の運動能力に対する肯定的な知覚の影響を検証する動きがある（Barnett, Ridgers, Zask, & Salmon, 2016 ; McGrane, Belton, Powell, Woods, & Issartel, 2015）。
- この分野でも，身体的あるいは運動的な自己認識と実際の運動能力，さらには身体活動やフィットネス行動との関連を調査しており（Barnettら，2009など），フィジカル・リテラシーを形成する多くの構成要素を結びつけている。
- 他のいくつかの概念と同様に，自己認識を研究するために採用される測定アプローチは，学校，家庭，レクリエーションの場において日常的に活用することが難しいと考えられるので，科学的妥当性と日常の実用性のバランスをさらに検討する必要がある。

身体活動と座位行動

- 身体活動の促進や座位行動の減少を目的とした研究では、一般に、エネルギー消費を必要とする身体運動という広い定義が採用されている。
- 身体活動とは、歩く、走る、自転車に乗る、踊る、スポーツをするなど、呼吸が荒くなったり、汗をかいったり、筋肉が疲れたりするような活動を含む、体を動かすこと全般を指す。
- 一方、座位行動は、起きてはいてもエネルギーをほとんど消費しない、座ったり、横になったりしている状態のことを指しており、一般にテレビ視聴、テレビゲーム、パソコンの使用、車の運転、読書などが含まれる。
- 多くの研究は、身体活動に関する既存のガイドライン、特に適度で活発な身体活動に言及しているだけであった。
- 基本的な健康を維持するのに十分な身体活動と、低レベルの身体活動、心血管系フィットネスや体力を向上させる可能性のある高レベルの身体活動が区別されていた。
- ほとんどのスポーツは身体活動の定義に含まれるが、すべての身体活動がスポーツに分類されるわけではない。
- 身体活動の測定は、加速度計や歩数計を使った客観的なもの、自己報告や回想調査を使った主観的なもの、あるいはその両方が一般的であり、客観的な測定はより正確とされているが、水中、サイクリング、コンタクトスポーツなど、特定のタイプの活動は適切に測定できない。
- 主観的な自己報告による測定は、身体活動の状況や種類などを測定することができるが、自己報告の偏り（例：自己顕示、身体活動の過剰報告）がある。
- 座位行動については、モニターを装着することで、より客観的な指標として把握できる。
- フィジカルリテラシー評価における身体活動や座位行動の測定は、これらの検討事項のバランスを取りつつ、多数の子どもたちに対して実行可能で費用対効果の高いものでなければならない。

体育教育学

- 体育教育に関する研究の大部分は、異なるアプローチを定義し、比較し、物語を提供する傾向にあったため、エビデンスレベルはOCEBMスケールでほぼ「D」であった。
- Kirk (2005) は、フィジカルリテラシー自体が教育学的モデルというわけではなく、新しい教育学的モデルの開発を必要とし、正当化する可能性があるという論拠を提示している。
- フィジカルリテラシーは、主にホワイトヘッドの仕事から派生した、体育に関する特別で独特な哲学的立場である…彼女は、すべての人間は不可分の全体であり、体現と人間性は切り離せないと主張し、同時に彼女は、「生きたままの身体」という概念が、身体における生きた経験と、身体の道具的な使用の両方を含むことを認めている。
- 様々な教育法の間には、実証可能な一貫性と矛盾があるが、それらは互いにテストされることはほとんどないことから、証拠のほとんどは単なる物語的な議論にすぎない。
- モデルがうまく表現されていない、実践での運用が一貫していないなど、その比較や評価が難しくなっている（いくつかの論文では、相違点や誤解を明らかにしようとしている）。
- フィジカルリテラシー概念を考慮することは、指導・伝達方法と同様に（典型的な）カリキュラム内容の再考を促すかもしれないという強い主張があり、これは新しい自己完結型の教育学モデルを構成することになるだろう。
- 学校における外部提供の専門体育プログラムが幼児の生理的・心理的な健康や発達に与える影響を調査したLOOK研究（Lifestyles Of Our Kids）は、一定の成果を上げている（Telford et al. 2013a ; Telford et al. 2012 ; 2013b ; Telford & Cunningham, 2012）。
- システマテックレビューのエビデンスは、学校内の体育における教師主導のプログラムが、身体活動や運動スキルの能力を高めるという点で成功を取めうることを明確に示している

(Lander, Eather, Morgan, Salmon, & Barnett, 2016).

- 学校のスポーツプログラムは、体育の中でスポーツ活動を増やす、課外活動としてスポーツを導入する、地域のスポーツ組織との連携を促進するなどの傾向にあった。
- このようなプログラムは、身体活動の促進、運動能力の向上、身体的自己認識の向上、モチベーション、自信、知識・価値観に影響を与えるために採用されている。
- これらの研究では、実施に際しての障壁や困難が指摘されており、同様に、スポーツ補填の形態も研究によって大きく異なる可能性がある。
- 学校と連携したスポーツの取り組みを通じて、フィジカルリテラシーを促進するために利用できる戦略を明確にし、異なるアプローチや異なる文脈での評価や比較を容易にすることは意義があると思われる。
- フィジカルリテラシーに関する早期介入と児童期発達の意義は、国際的な条約でも十分に裏付けられている。
- 国連児童基金（UNICEF）が支持する「子どもの権利条約」（1989年）は、教育は子ども全体の最善の利益と継続的な発達に取り組みなければならないと述べている。
- つまり、子ども中心であることに加え、教育とは認知能力の発達だけでなく、子どもの社会的、感情的、身体的な発達にも注意を払い、従来の統合的なアプローチ以上のものが求められている。
- むしろ、教育は子どもの視点から、個人の発達レベルに応じた異なるニーズの相互関連性を理解した上で、概念化されなければならない。
- 国連教育科学文化機関（UNESCO）の幼児期の保育と教育（ECCE；Malcolm Institute of Educational Research, 2015）でも、子どもの社会的、感情的、認知的、身体的ニーズに対応しながら、生涯学習と幸福のための強固で幅広い基盤を確立し、子どもの全人格的な発達に特に重点を置いている。

- UNESCOは、教育2030のアジェンダに沿って、すべての子どもたちが人生で最高のスタートを切れるように、ECCEの提供を公平に拡大・改善する国内・地域・国際的な取り組みを支援している。

フレームワーク、スタンダードおよびモデル

- フィジカルリテラシーを説明したり、その発達を支援するための明確なフレームワークを提供している研究は比較的少ない。
- 多くの批判を受けている（例えば、Bailey & Collins, 2013）Long-Term Athlete Development model (Balyi, Cardinal, Higgs, Norris, & Way, 2006) は、改訂と更新が続けられているものの、フィジカルリテラシーに関連する活動や能力を適切に反映していないと考えられる。
- 例えば、自分ではフィジカルリテラシーがあり、身体的活動への持続的な関与を達成していると考えている人の多くは、非常に緩やかな解釈を除いて、自分を「アスリート」とは考えないだろう。
- Youth Physical Development (YPD) Model (Lloyd & Oliver, 2012) もアスリートモデルであり（図5）、幼児期から成人期までの能力とフィットネスに焦点が当てられている。このモデルでは、特定のフィットネス要素のトレーニングが、いつ、なぜ強調されるべきかを特定しており、中心にある考え方は、思春期前の時期に、筋力、運動能力、スピード、敏捷性を主な身体的資質として目標とすべきであるということである。思春期を過ぎると、パワーなど他の要素も重要になる。
- この時点で紹介すべきもうひとつのモデルは、ガニエの「Gagné's Differentiated Model of Giftedness and Talent (Gagné, 2004 - DMGT)」である。
- DMGTは、知的、創造的、社会的・感情的、感覚運動的の4つの適性領域 (intellectual, creative, socio-affective, and sensorimotor) で構成されており、これらの領域で生まれつきの能力（才能）を持つことができることと「タレント」を区別している。

Youth Physical Development (YPD) Model for Males																				
Chronological Age (Years)	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21+
Age Periods	Early Childhood			Middle Childhood						Adolescence						Adulthood				
Growth Rate	Rapid Growth			Steady Growth						Adolescent Spurt						Decline in Growth Rate				
Maturation Status	Years Pre-PHV						PHV			Years Post-PHV										
Training Adaptation	Predominantly Neural (Age-related)						Combination of Neural and Hormonal (Maturity-related)													
Physical Qualities	FMS		FMS			FMS			FMS											
	SSS		SSS			SSS			SSS											
	Mobility			Mobility						Mobility										
	Agility			Agility						Agility			Agility							
	Speed			Speed						Speed			Speed							
	Power			Power						Power			Power							
	Strength			Strength						Strength			Strength							
	Hypertrophy						Hypertrophy			Hypertrophy			Hypertrophy							
	Endurance & MC		Endurance & MC						Endurance & MC			Endurance & MC								
Training Structure	Unstructured			Low Structure			Moderate Structure			High Structure			Very High Structure							

Figure 5 The Youth Physical Development Model (Lloyd et al., 2012)

- 「才能」は、少なくとも1つの領域において、同年代の上位10%に入るレベルの優れた自然能力（適性と呼ばれる）を持っていることを指し、「タレント」は、人間の活動の少なくとも1つの分野において、少なくとも同年代の上位10%に入る程度に、体系的に開発された能力（またはスキル）と知識を優れた形で習得していることを指す。
- スポーツやアスリートの育成に重点を置く場合、運動領域における「才能および／またはタレント」がある可能性があるといえる。
- FTEMモデル（図6）は、アスリート育成プロセスの枠組みを提供するもう一つのモデルであるが、アクティブなライフスタイルへの経路を示し、生涯を通じてそれに参加することの動的な性質を示すため、おそらくスポーツ「ピラミッド」の外側の「その他の」活動をより詳細に正当化するものでもある。
- FTEMは、スポーツに参加する人のスキルとパフォーマンスの発達の4つの段階（Foundation,

Talent, Elite and Mastery）の頭文字をとったものであり（Gulbin, Croser, Morley, & Weissensteiner, 2013）、そのフレームワークは、アスリート育成における以下の10段階で構成されている（ファンデーション（基本動作の学習と習得、動作の多様と洗練、スポーツ特有の取り組みや競技）、タレント（潜在能力の発揮、検証、練習と達成、突破と報酬）、エリート&マスター（代表、成功、そして持続的成功）。

- McKeeら（2013）による同様のモデルは、北アイルランドで開発されたLifelong Involvement in Sport and Physical Activityモデル（図7）と呼ばれ、ハイパフォーマンススポーツへの進展と、その他の身体活動の形態も認めています。
- (1)アクティブリビング（可能な限り歩く、自転車通勤など、身体活動を日常生活に取り入れる）、(2)アクティブレクリエーション（適度なエネルギー消費を必要とし、健康や社会的利益をもたらす活動で、通常は非競争的な環境で行

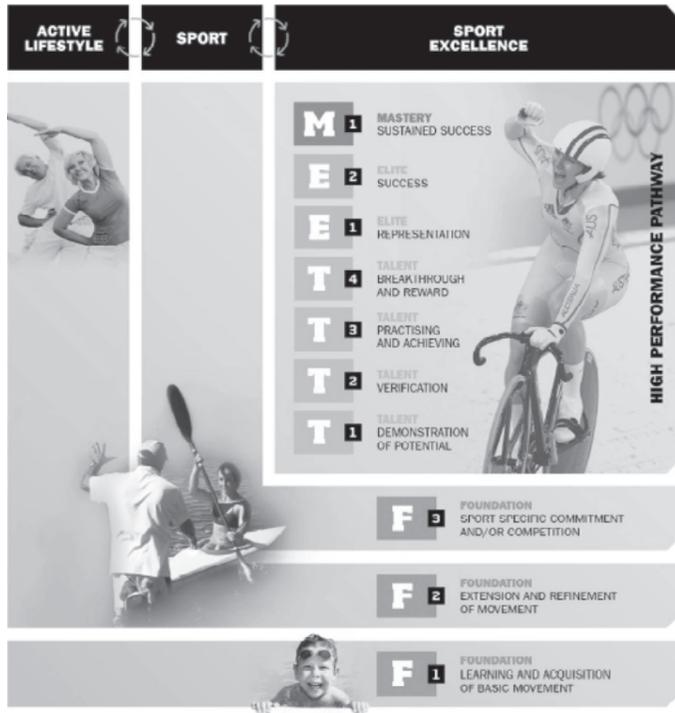


Figure 6 The FTEM model

う余暇時間の活用), (3)レクリエーション目的の組織スポーツ (高い競技水準に向かってレベルを「上げる」ことは望まない)。

- Hulteenら (2015) は, 生涯にわたる身体活動の重要性についても検討した. 彼は, 生涯身体活動評価のシステマティックレビューを行い, 生涯活動の定義を「最小限の構造を伴い, 身体的接触を避け, 様々なレベルの強度と競争力を持ち, 成人期や高齢期まで続けられる, 通常個人または小グループで行うスポーツや余暇活動」として提示した.
- Dudley (2015) は, (1)運動能力, (2)ルール, 戦術, 戦略, (3)個人のモチベーション, (4)社会的責任という4つの中核的要素に基づく分類法で異なるアプローチを提示している.
- 全体として1つの重要な考察は, 図6と7に示したモデルの左側 (すなわち, FTEMとMcKeeらの非エリートスポーツ側, および関連するフレームワーク) を適切に記述するため

にかなりの作業が必要となるが, 他の関連分野のフレームワークやモデルを利用することで, このような課題を解決することは可能である.

- 例えば, 運動能力の研究では, 運動能力, その評価方法, 時間の経過に伴う運動能力の進歩(発達・成熟など)について比較的確立された説明がある.
- Stoddenら (2008) のモデル (図8) は, 近年よく用いられており, 運動能力と身体活動の間には循環的な関係があり, 時間とともに強化されることが説明されている.
- このモデルでは, 知覚された能力とフィットネスが仲介役として位置づけられ, 健康的な体重の状態をもたらす正の循環的軌道を描くか, 不健康な体重の状態をもたらす負の軌道を描くかのいずれかであると考えられている. このトピックの研究は非常に発達しているため, フィジカルリテラシーの議論において相対的に優位に立つことになったのかもしれない.

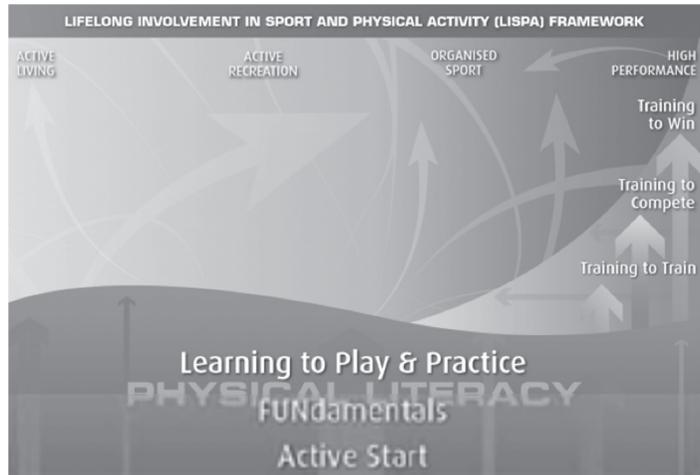


Figure 7 Lifelong Involvement in Sport and Physical Activity' model

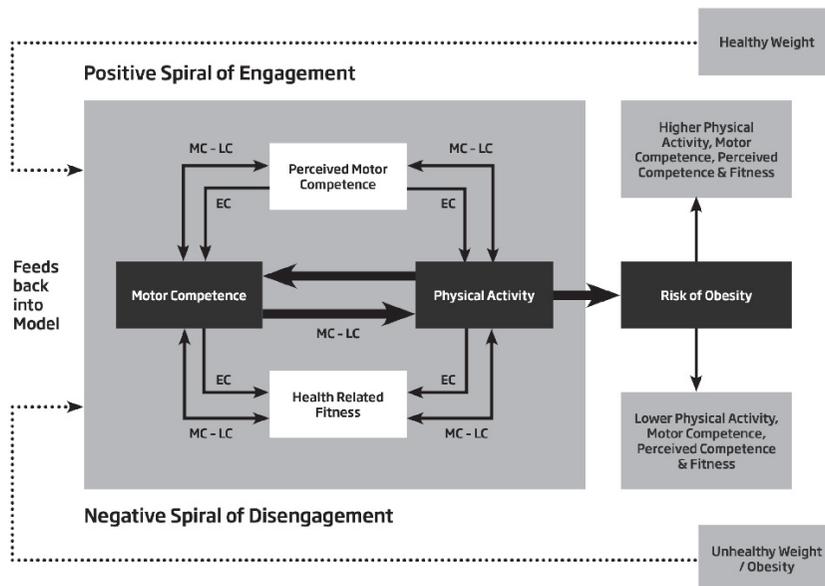


Figure 8 The Stodden et al model, 2008

- これとは別に、身体活動やスポーツに対するモチベーションは、一般に内発的・外発的モチベーションを用いて研究されており、これはフィジカルリテラシーの枠組みに情報を提供する有望な方法と思われる。
- この特定のフレームワークは、外部的に決定された基準、期待、および要件を使用する教育環境の傾向によって引き起こされる緊張に光を当てている。
- 加齢に伴うモチベーションの変化について、規定されたパターンはみられないが、PAやスポーツに対するモチベーションは思春期を通じて低下すると報告される傾向にある（この傾向は、本プロジェクトで逆転させようとするものである）。
- しかし、やる気の低下から外発的・内発的なモチベーションに光を当てている。

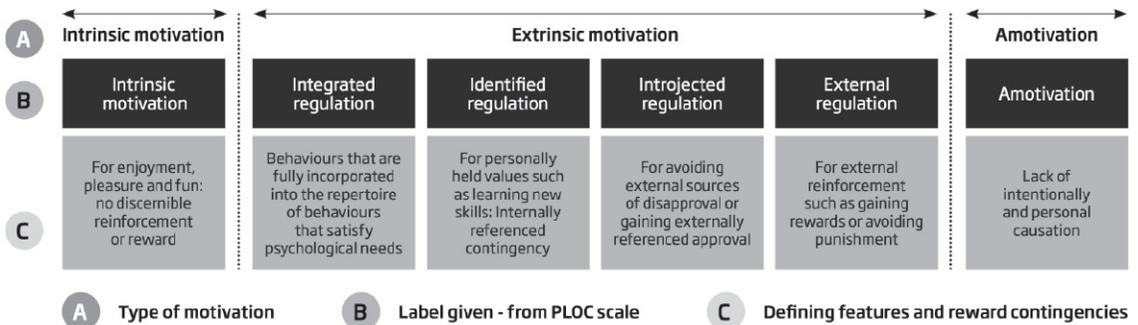


Figure 9 The different forms of motivational regulation describe by Self-Determination Theory

モチベーションに至るまでには、明確な連続性があり（図9）、参加者のやる気をより適応的かつ内発的にするための推奨事項が示されている。

- 同様に、身体活動やスポーツにおける自信、自己効力感、有能感（perceived competence）についてもよく研究されており、(a)自信/自己効力感の開発方法や、(b)これらの概念の性質/構成についての明確なモデルも提示されつつある（図3および4）。
- モチベーションと同様、また上述のように、主観的評価尺度を用いて自信や自己効力感などを定量化し、サブドメインを集計して総スコアにすることは可能であるが、処方的または記述的に明確な発達プロセスは存在しない。
- 知識、態度、価値観に関するフレームワークやビジュアルモデルは限定的であった。(1) Vygostkian Scaffolding and Zones-of-Proximal Development (Vygotski, 1929), (2) Bloom's Taxonomy of Learning Objectives (Bloom, 1956), (3) the SOLO taxonomy (Biggs, 1989; Biggs & Collis, 2009; Biggs & Tang, 2007) and (4) 小テストによる基礎知識の簡易テスト (=学習評価)、に限られていた。
- このように、フィジカルリテラシーに関連する知識・価値観をどのように概念化し表現するか、また、明示的知識と暗黙的信念の違いについて、さらなる合意を形成する余地が残っている（図

10）。

- フィジカルリテラシーの文献に浸透し始めているもう一つの思考回路は、この概念がポストピアジェの発達の概念と一致するのではないかというものである。
- Dudley (2015) は、フィジカルリテラシーの発達には、認知、感情、精神運動にわたるピアジェのモード（感覚-運動、直感、具体的象徴、形式）が観察されると主張した。
- フィジカルリテラシーとの関連では、フィジカルリテラシーの向上により、フォーマルモードの学習反応を出せるようになることは合理的な期待であると主張した。
- しかし、彼はまた、Boulton-Lewis (1998, p. 206) の提案、-新しく困難な概念に直面したとき、人はしばしばより単純化した具体-象徴の操作様式に戻る-を反映している。
- 身体的自己認識に関しては、すべての論文が採用している比較的明確なモデル（図11）があり、これは子ども、青年、大人、文化圏を超えて適応されている。
- このモデルは、身体的自己認識の階層的構成を規定し、一般に、特定の属性に対する認識と、その評価・認識に対する満足度の両方を評価しようとするものである。
- 文献によると、身体運動に対する知覚された能力は、最初は高く、その後、子どもたちが仲間と比較し、自分の能力を周囲の世界との関係で理解し始める頃（Harter, 1982によると8歳頃）

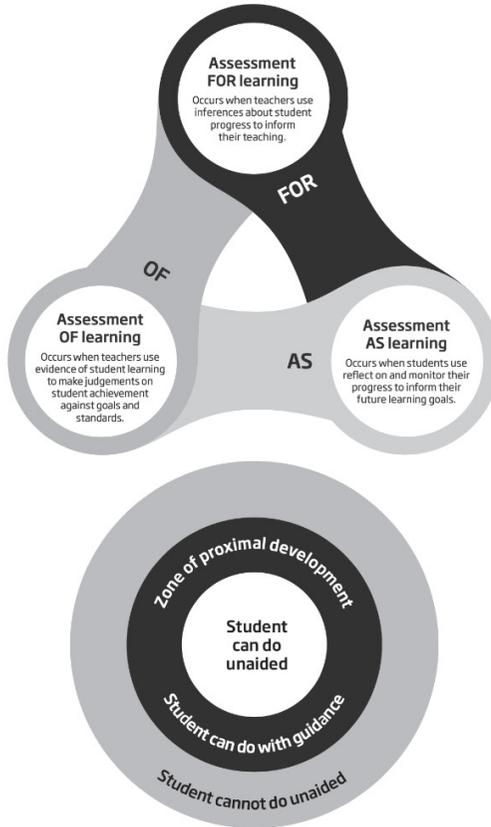
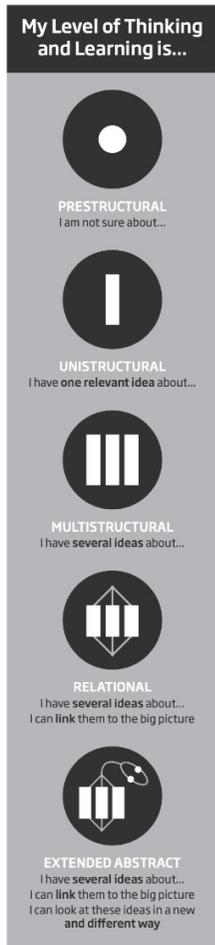


Figure 12: Visual models to represent the SOLO taxonomy (left), 'assessment OF learning' (top, right), and Vygotski's 'zone of proximal development' (right, bottom).

Figure 12 (continued): Bloom's taxonomy

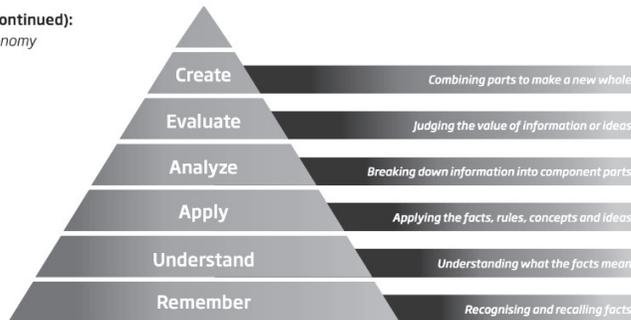


Figure 10 Visual models to represent the SOLO taxonomy (left), 'assessment of learning' (top, right), and Vygotski's 'zone of proximal development' (right, bottom).

に減少し始めるとされている。

- 最近の文献では、このモデルを拡張して、知覚された身体的自信のサブセットとして知覚され

た運動能力を含めることも示されている。

- これは、Stoddenら（2008）によって仮説が立てられ、現在では、測定の発展、すなわち幼児

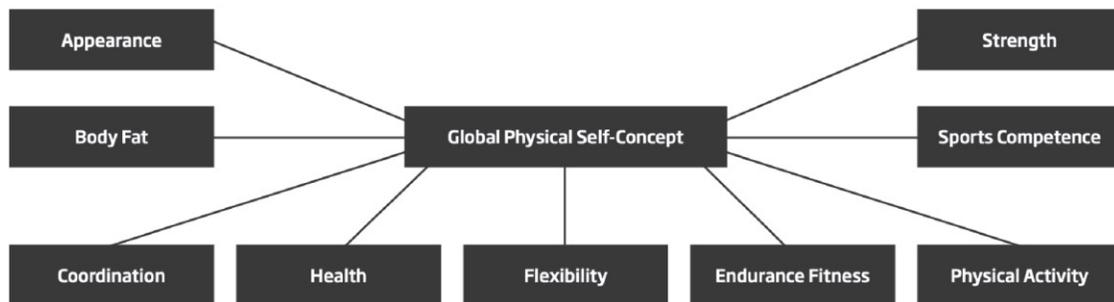


Figure 11 Fox and Corbin's model of self-concept and self-perceptions

(Barnett, 2015), および青年において、特に知覚的運動自信 (McGrane, 2016) に関して運用可能という根拠もある。

- モチベーション、自信、知識などのトピックを再現し、自己認識の測定では、読解力や理解力に関連したさまざまな質問アプローチ（絵、言葉、項目数）が行われた。
- もちろん、これらすべてのケースにおいて、年齢や成熟度と厳密に関連づけるべきか、あるいは予測可能な直線的な順序で進行するかには疑問の余地がある。
- フィジカルリテラシーに関連する多くの中心的構成要素の定義は、個人、文脈、文化によって異なる、ダイナミックで複雑かつ発展的な発達パターンを強調する傾向がある。
- 身体活動の促進（または座位行動の減少）のためのフレームワークは、行動変容の理論に重点を置く傾向にあり、(1)社会的認知理論 (Bandura, 1991), (2)社会生態モデル (Bronfenbrenner, 1994), (3)トランスセオレティカルモデル (Prochaska & Velicer, 1997); (4)理性的行動理論 (and/or 計画的行動理論) – (Ajzen & Fishbein, 1980, 2005; Azjen, 1991; Fishbein & Ajzen, 1975) (see figure 14); および(5)自己決定理論 (as described earlier – Ryan & Deci, 2000) を含む。
- 他の場所と同様、これらのモデルによって予測される明確な発達プロセスはみられないが、いくつかのケースで識別可能な変化パターンがある – 例えば、トランスセオレティカルモデルに

おける「前思考」(無関心) から活動と適応行動の維持へなど。

- 各モデルとも、行動の原因（この場合は身体活動）にそれぞれ異なる重点を置いている。
- あるものは社会的・環境的要因に焦点を当て、参加者にほとんど代理権を与えない。
- 同様に、情報と知識の役割も、あるアプローチでは比較的明示的な教育的焦点になり、他のアプローチではより暗黙的で態度的なものになるなど様々であるが、自分たちのアプローチで明示的に展開したいメッセージと暗黙的に展開したいメッセージを明確にすることの重要性を再認識した。

議論と省察（主な成果）

- フィジカルリテラシーに関するエビデンスの質は極めて低いが、広範な関連研究の検討により、いくつかの関連概念について強力な研究基盤が確認された。
- フィジカルリテラシーの中核的要素と、関連するトピックの研究結果の間には、明確な一貫性とそれを補強するテーマがある。
- 特定の要素の貢献度や相対的な重要性は明確ではない。
- フィジカルリテラシーを統合的な概念として捉えることが重要であり、個別の構成要素に縮小または単純化しようとする、この概念の完全な理解が損なわれる。
- フィジカルリテラシーは、様々な分野の知見を解釈するための一貫した「系統的なフレームワーク（枠組み）」を形成する可能性がある。

○特定の心理的な構成要素の選択にとらわれるのではなく、身体、感情、認知、社会といった分析レベルや学習ドメインを記述する方が、より強固で包括的なものになるだろう。

○現在の測定方法は、何かを測定しているかもしれないが、おそらく多くのフィジカルリテラシー支持者が意図する根本的なものにはなり得ないだろう。

○フィジカルリテラシーとその構成要素の多くは、一貫した発達プロセスを提供しない。

○フィジカルリテラシーは常に進化し続けるダイナミックなプロセスであるため、どの時点においても各個人に固有のものである。

• 本レポートでは、オーストラリアのフィジカルリテラシーの定義とスタンダードを確立するために、学術的に確かな研究基盤を構築するためのアプローチを詳述し、その研究基盤から生まれたテーマについて概説している。

• このプロセスにおいて、フィジカルリテラシーを直接的に扱った研究だけでなく、フィジカルリテラシーに関連しそうなトピックにも検索範囲を広げた結果、運動能力、身体的自己概念、身体活動促進に関する研究などが質の高いエビデンスを生み出しているが、全体的にフィジカルリテラシーに関するエビデンスの質は非常に低い状況にある。

• フィジカルリテラシーの定義に関連して、身体的・運動的能力、動機、自信、知識・価値観が重要な役割を果たすことは明らかであるが、これらの用語の特定の選択、それらの貢献、相対的重要度はほとんど認識されていないままである。

• 特定の心理的な構成要素を選択することに縛られるのではなく、身体、感情、認知、社会といった分析レベルや学習ドメインを記述する方が、より強固で包括的なものになる可能性がある。このような区別は、フィジカルリテラシーを明確にする最近の声明（例えば、表1）、オーストラリアの教育カリキュラム、および最近のいくつかの系統的レビュー（例えば、Bailey,

2006, Eime, Young, Harvey, Charity, & Payne, 2013, Janssen & Leblanc, 2010）と一致するだろう。

• 同様に、多くの定義では、フィジカルリテラシーをテーマの全体的な統合として捉えることの重要性を強調しており、フィジカルリテラシーを個別の構成部分に縮小または単純化する試みは、この概念の完全かつ完璧な理解を損なうと論じられている。

• この観点から、現在の測定方法は何かを測定しているかもしれないが、おそらくフィジカルリテラシーの多くの支持者が意図する根本的な「もの」にはなり得ない。

• さらに、フィジカルリテラシーは、常に進化する動的プロセスであり、どの時点でも各個人に固有のものであると主張されている。フィジカルリテラシーのこれらの属性は、フィジカルリテラシー、および発達/進歩のパターンを理解し、マッピングするためのフレームワークを構築する必要がある、おそらく厳格な絶対的（または規範的）基準を強制することは困難である。

• フィジカルリテラシーとその構成要素の多くは、そのような一貫した発達プロセスを提供しない（おそらく早期運動発達はこの例外で、発達はいくつかのパターンに従うように見えるが、最近の論文- Robinson et al 2016で誤解を招く可能性もあると見なされていることに留意すべき）。

• しかし、このような傾向は、明確な学習成果と発達の進行を毎年指定するカリキュラムを作成する必要性と相反することに留意する必要がある。

• 心強いことに、フィジカル・リテラシーの中核的要素と、関連するトピックの研究結果の間には、明確な一貫性と補強するテーマがあるように思われる。実際、モチベーション、自信、知識・価値観などの境界線は、図2のように重なり合い、定義が難しくなっている。

• さらに、これらの知見やテーマがフィジカル・リテラシーの理解を深める一方で、フィジカル・リテラシーは様々な分野の知見を解釈するため

の一貫した「組織的枠組み」を形成し、時には矛盾した知見をもたらす可能性がある。

- 例えば、コーチや教師、保護者が客観的な測定値や達成基準に基づいて、褒めることで生徒やアスリートの自信を高めようとする状況（自己効力感理論）において、それが逆に、自律性の感覚を損なうと感じる参加者がいる（自己決定理論）かもしれない。
- 同様に、このレビューの準備と完了に際して、モチベーションに関する研究と態度・価値観に関する研究が密接に絡み合っていることも示唆的であり、明示的・宣言的な知識と暗黙的・手続き的な知識の不一致など、重要な問題を提起している。
- このレビューを終えて、私たちは、このような相乗的な関連性と、より幅広い文献のサンプルを含めることによって生まれる新しい洞察を探求することによって、オーストラリアのフィジカルリテラシーに関する成果物は、より強固で、より効果的で、早く世界をリードする可能性を提供することになると感じている。
- 最後に、今回レビューしたいいくつかのテーマで得られたエビデンスの質を振り返ると、将来的にフィジカルリテラシーに関する質の高い研究を促進・奨励する重要な機会があるように思われる。
- 現在のプロジェクトは、取り込みと実施を促進する定義、モデル、フレームワークを強調するだけでなく、確かな定義、検証可能な明確なモデル／フレームワーク、評価／モニタリングに対する一貫した有効なアプローチ、そして究極的には、地域の文脈への適応を考慮した、効果の高い介入の推奨を開発するのに適した位置にある。
- 実際、Kurt Lewinが指摘するように、優れた理論ほど実用的なものはないが、私たちが目指すことのひとつは、フィジカルリテラシーが論争的となる概念であるという議論に終止符を打つことである。
- 私たちは、既存のアプローチを単に選択し支持するのではなく、フィジカルリテラシーに関す

るあらゆる情報を理解し、分析し、統合し、最も防衛的で証拠に基づく提案を抽出し、専門家の合意を形成することによって、これを追求していきたい。

訳出を終えて

本稿では、オーストラリア（ASC）におけるフィジカルリテラシーの定義およびスタンダード作成に関するテクニカルレポートを訳出しながら、その過程で行われた詳細な検討や議論について概観してきた。レポートの最後にリストアップされた主な成果に関する議論を整理すると、フィジカルリテラシーが多くの構成要素からなる統合的な概念であるという前提に立ち、それは常に進化し続けるダイナミックなプロセスであることを意識しながら、身体、感情、認知、社会といった分析レベルや学習ドメインからなる「系統的なフレームワーク（枠組み）」を形成する必要性が指摘されているといえるだろう。このようなフィジカルリテラシーに関する取り組みから見出された問題意識は、2019年に作成されたフレームワーク（Australian Physical Literacy Framework (Version 2)）に反映されている。

日本では、学校における運動部活動改革が待ったなしの課題であり、昨今立案された第3期スポーツ基本計画においては、東京オリ・パラ大会のスポーツ・レガシーの継承・発展に資する重点施策や、スポーツの価値を高めるための新たな「3つの視点」として、①スポーツを「つくる／はぐくむ」、②スポーツで「あつまり、ともに、つながる」、③スポーツに「誰もがアクセスできる」などが示されている。このような体育・スポーツ界の文脈においては、日本版のフィジカルリテラシーの定義づけやスタンダードおよび独自のフレームワークの作成が急務であるとともに、それらを活用しながら質の高いエビデンスを作り、伝え、使っていくことが求められるといえるだろう。

参考文献

Ajzen, I., & Fishbein, M. (1980). Understanding attitudes and predicting social behavior. Englewood Cliffs NY Prentice Hall. <http://doi>

- org/Z
- Ajzen, I., & Fishbein, M. (2005). The influence of attitudes on behavior. In *The Handbook of Attitudes* (pp.173-221). <http://doi.org/10.1007/BF02294218>
- Alexander, K., & Luckman, J. (2001). Australian Teachers Perceptions and Uses of the Sport Education Curriculum Model. *European Physical Education Review*, 7(200110), 243-267. <http://doi.org/10.1177/1356336X010073002>
- Azjen, I. (1991). The theory of planned behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 50, 179-211. [http://doi.org/10.1016/0749-5978\(91\)90020-T](http://doi.org/10.1016/0749-5978(91)90020-T)
- Bailey, R. (2006). Physical education and sport in schools : A review of benefits and outcomes. *Journal of School Health*. <http://doi.org/10.1111/j.1746-1561.2006.00132.x>
- Bailey, R., & Collins, D. (2013). The Standard Model of Talent Development and Its Discontents. *Kinesiology Review*, 2(4), 248-259. Retrieved from http://www.ayfcoaching.com/Acu-Custom/Sitename/Documents/DocumentItem/03_Bailey_KR_20130011_248-259_ej.pdf
- Balyi, I., Cardinal, C., Higgs, C., Norris, S., & Way, R. (2006). Long-term athlete development – Canadian Sport for Life.
- Bandura, A. (1991). Social cognitive theory of self-regulation. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 50(2), 248-287. [http://doi.org/10.1016/0749-5978\(91\)90022-L](http://doi.org/10.1016/0749-5978(91)90022-L)
- Barnett, L. M., Ridgers, N. D., Zask, A., & Salmon, J. (2016). Face validity and reliability of a pictorial instrument for assessing fundamental movement skill perceived competence in young children. *Journal of Science and Medicine in Sport*, 18(1). <http://doi.org/10.1016/j.jsams.2013.12.004>
- Barnett, L. M., van Beurden, E., Morgan, P. J., Brooks, L. O., Zask, A., & Beard, J. R. (2009). Six year follow-up of students who participated in a school-based physical activity intervention : A longitudinal cohort study. *International Journal of Behavioral Nutrition and Physical Activity*, 6. <http://doi.org/10.1186/1479-5868-6-48>
- Biggs, J. (1989). Towards a Model of School-Based Curriculum Development and Assessment Using the SOLO Taxonomy. *Australian Journal of Education*, 33(2), 151-163. Retrieved from <http://eric.ed.gov/?id=EJ399245\&nfiles/1855/eric.ed.gov.html>
- Biggs, J., & Collis, K. F. (2009). Evaluating the Quality of Learning: The SOLO Taxonomy. *A Handbook for Teaching and Learning in Higher Education : Enhancing Academic Practice*. <http://doi.org/10.1177/089202068700100412>
- Biggs, J., & Tang, C. (2007). Using constructive alignment in outcomes-based teaching and learning. *Teaching for Quality Learning at University*, 71-84.
- Bloom, B. (1990). Bloom's Taxonomy. Learning, 2010, 1956.
- Brehm, J. W., & Self, E. a. (1989). The intensity of motivation. *Annual Review of Psychology*, 40(1982), 109-131. <http://doi.org/10.1146/annurev.psych.40.1.109>
- Bronfenbrenner, U. (1994). Ecological models of human development. *Readings on the Development of Children*. <http://www.psy.cmu.edu/~siegler/35bronfenbrenner94.pdf>
- Bunker, D., & Thorpe, R. (1982). A model for the teaching of games in secondary schools. *Bulletin of Physical Education*, 18(1), 5-8.
- Bunker, D., & Thorpe, R. (1986). The curriculum model. *Rethinking Games Teaching*, 7-10. <http://doi.org/10.1145/1414558.1414560>
- Cattuzzo, M. T., dos Santos Henrique, R., Ré, A. H. N., de Oliveira, I. S., Melo, B. M., de Sousa Moura, M., ... Stodden, D. (2016). Motor competence and health related physical fitness in youth : A systematic review. *Journal of Science and Medicine in Sport*, 19(2), 123-129. <http://doi.org/10.1016/j.jsams.2014.12.004>

- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2008). Self-determination theory: A macrotheory of human motivation, development, and health. *Canadian Psychology/ Psychologie Canadienne*, 49(3), 182-185. <http://doi.org/10.1037/a0012801>
- Doune Macdonald and Eimear Enright. (2014). Physical literacy and the Australian Health and Physical Education curriculum. *ICSSPE Bulletin*, 352-361.
- Dudley, D. (2015). A Conceptual Model of Observed Physical Literacy. *The Physical Educator*, 72 (SEPTEMBER 2015), 236-260. <http://doi.org/10.18666/TPE-2015-V72-I5-6020>
- Dweck, C. S. (1986). Motivational processes affecting learning. *American Psychologist*, 41 (10), 1040-1048. <http://doi.org/10.1037/0003-066X.41.10.1040>
- Dweck, C. S., & Leggett, E. L. (1988). A social-cognitive approach to motivation and personality. *Psychological Review*, 95(2), 256-273. <http://doi.org/10.1037/0033-295X.95.2.256>
- Edwards, L.C., Bryant, A.S., Keegan, R.J., Morgan, K., Jones, A. M. (2016). The Definitions, Foundations and Associations of Physical Literacy: A Systematic Review. *Sports Medicine*, in press (in press), in press. <http://doi.org/10.1007/s40279-016-0560-7>
- Eime, R. M., Young, J. A., Harvey, J. T., Charity, M. J., & Payne, W. R. (2013). A systematic review of the psychological and social benefits of participation in sport for children and adolescents : Informing development of a conceptual model of health through sport. *International Journal of Behavioral Nutrition and Physical Activity*, 10, 98-119. <http://doi.org/10.1186/1479-5868-10-98>
- Fishbein, M., & Ajzen, I. (1975). *Belief, Attitude, Intention and Behaviour : An Introduction to Theory and Research*. Reading MA Addison-Wesley. <http://doi.org/10.2307/2065853>
- Fletcher, D., & Sarkar, M. (2013). Psychological Resilience. *European Psychologist*, 18(1), 12-23. <http://doi.org/10.1027/1016-9040/a000124>
- Fox, K. R., & Corbin, C. B. (1989). The physical self-perception profile : Development and preliminary validation. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 11, 408-430. Retrieved from <http://psycnet.apa.org/psycinfo/1990-11267-001>
- Francis, C. E., Longmuir, P. E., Boyer, C., Andersen, L. B., Barnes, J. D., Boiarskaia, E., Tremblay, M. S. (2015). The Canadian Assessment of Physical Literacy: Development of a Model of Children's Capacity for a Healthy, Active Lifestyle through a Delphi Process. *J Phys Act Health*, 214-222. <http://doi.org/10.1123/jpah.2014-0597>
- Gable, P., & Harmon-Jones, E. (2010). The motivational dimensional model of affect : Implications for breadth of attention, memory, and cognitive categorisation. *Cognition & Emotion*, 24(2), 322-337. <http://doi.org/10.1080/02699930903378305>
- Gagné, F. (2004). A Differentiated model of giftedness and talent (DMGT). *Personal Notes*, 1-3.
- Glazier, P.S., Davids, K., Bartlett, R. M. (2003). DYNAMICAL SYSTEMS THEORY : a Relevant Framework for Performance-Oriented Sports Biomechanics Research. *SportScience*, 7, 1-8.
- Gulbin, J. P., Croser, M. J., Morley, E. J., & Weissensteiner, J. R. (2013). An integrated framework for the optimisation of sport and athlete development : a practitioner approach. *Journal of Sports Sciences*, 31(12), 1319-31. <http://doi.org/10.1080/02640414.2013.781661>
- Harmon-Jones, E., & Gable, P. a. (2008). Incorporating motivational intensity and direction into the study of emotions: implications for brain mechanisms of emotion and cognition-emotion interactions. *Netherlands Journal of Psychology*, 64(4), 132-142. <http://doi.org/10.1007/BF03076416>

- Harmon-Jones, E., Gable, P. a., & Price, T. F. (2013). Does Negative Affect Always Narrow and Positive Affect Always Broaden the Mind? Considering the Influence of Motivational Intensity on Cognitive Scope. *Current Directions in Psychological Science*, 22(4), 301-307. <http://doi.org/10.1177/0963721413481353>
- Harter, S. (1982). The Perceived Competence Scale for Children. *Child Development*, 53(1), 87. <http://doi.org/10.2307/1129640>
- Hellison, D. (2000). Physical activity programs for underserved youth. *Journal of Science and Medicine in Sport / Sports Medicine Australia*, 3(3), 238-42. [http://doi.org/10.1016/S1440-2440\(00\)80032-8](http://doi.org/10.1016/S1440-2440(00)80032-8)
- Hochanadel, A., & Finamore, D. (2015). In Education And How Grit Helps. *Journal of International Education Research*, 11(1), 47-50.
- Holfelder, B., & Schott, N. (2014). Relationship of fundamental movement skills and physical activity in children and adolescents : A systematic review. *Psychology of Sport and Exercise*, 15(4), 382-391. <http://doi.org/10.1016/j.psychsport.2014.03.005>
- Hulteen, R. M., Lander, N. J., Morgan, P. J., Barnett, L. M., Robertson, S. J., & Lubans, D. R. (2015). Validity and Reliability of Field-Based Measures for Assessing Movement Skill Competency in Lifelong Physical Activities : A Systematic Review. *Sports Medicine*, 45(10), 1443-1454. <http://doi.org/10.1007/s40279-015-0357-0>
- Janssen, I., & Leblanc, A. G. (2010). Systematic review of the health benefits of physical activity and fitness in school-aged children and youth. *The International Journal of Behavioral Nutrition and Physical Activity*, 7, 40. <http://doi.org/10.1186/1479-5868-7-40>
- Joan L. Duda. (2001). *Advances in Sport and Exercise Psychology Measurement*. (Joan L. Duda, Ed.) (1st ed.). Champaign : IL : Human Kinetics, Fitness Information Technology. Retrieved from <https://www.amazon.com/Advances-Sport-Exercise-Psychology-Measurement/dp/1885693117>
- Keegan, R. J., Spray, C. M., Harwood, C. G., & Lavalley, D. E. (2014). A qualitative synthesis of research into social motivational influences across the athletic career span. *Qualitative Research in Sport, Exercise and Health*, 6(4), 537-567. <http://doi.org/10.1080/2159676X.2013.857710>
- Kinman, G., & Grant, L. (2011). Exploring stress resilience in trainee social workers : The role of emotional and social competencies. *British Journal of Social Work*, 41(2), 261-275. <http://doi.org/10.1093/bjsw/bcq088>
- Kirk, D. (2005). Educational value and models-based practice in physical education. *Educational Philosophy and Theory*, 1(1), 1-18. <http://doi.org/http://10.1080/00131857.2013.785352>
- Lander, N., Eather, N., Morgan, P. J., Salmon, J., & Barnett, L. M. (2016). Characteristics of Teacher Training in School-Based Physical Education Interventions to Improve Fundamental Movement Skills and/or Physical Activity : A Systematic Review. *Sports Medicine*. <http://doi.org/10.1007/s40279-016-0561-6>
- Lloyd, R. S., Csics, D., & Oliver, J. L. (2012). The Youth Physical Development Model : A New Approach to Long-Term Athletic Development. *Strength & Conditioning Journal*, 61-72. <http://doi.org/10.1519/SSC.0b013e31825760ea>
- Logan, S. W., Barnett, L. M., Goodway, J. D., & Stodden, D. F. (2016). Comparison of performance on process- and product-oriented assessments of fundamental motor skills across childhood. *Journal of Sports Sciences*. <http://doi.org/10.1080/02640414.2016.1183803>
- Lubans, D. R., Morgan, P. J., Cliff, D. P., Barnett, L. M., & Okely, A. D. (2010). Fundamental movement skills in children and adolescents: review of associated health benefits. *Sports*

- Medicine (Auckland, N.Z.), 40(12), 1019–35. <http://doi.org/10.2165/11536850-000000000-00000>
- Malcolm Institute of Educational Research, W. (2015). A Review of international and national surveys relevant to early childhood care and education provision and the teaching workforce : Early childhood care and education working papers series; Vol. : 5 ; 2015.
- Mallett, C., Kawabata, M., Newcombe, P., Otero-Forero, A., & Jackson, S. (2007). Sport motivation scale-6 (SMS-6): A revised six-factor sport motivation scale. *Psychology of Sport and Exercise*, 8(5), 600–614. <http://doi.org/10.1016/j.psychsport.2006.12.005>
- Markland, D., & Tobin, V. (2004). A modification of the Behavioural Regulation in Exercise Questionnaire to include an assessment of amotivation. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 26, 191–196. <http://doi.org/10.1123/jsep.26.2.191>
- Marsh, H. W. (1990). The structure of academic self- concept : The Marsh/Shavelson model. *Journal of Educational Psychology*, 82, 623–636. <http://doi.org/10.1037/0022-0663.82.4.623>
- Martinek, T., Schilling, T., & Hellison, D. (2006). The development of compassionate and caring leadership among adolescents. *Physical Education & Sport Pedagogy*, 11(2), 141–157. <http://doi.org/10.1080/17408980600708346>
- McAuley, E., Duncan, T., & Tammen, V. V. (1989). Psychometric properties of the Intrinsic Motivation Inventory in a competitive sport setting: a confirmatory factor analysis. *Research Quarterly for Exercise and Sport*. <http://doi.org/10.1080/02701367.1989.10607413>
- McGrane, B., Belton, S., Powell, D., Woods, C. B., & Issartel, J. (2015). Physical self-confidence levels of adolescents : Scale reliability and validity. *Journal of Science and Medicine in Sport*, 1–5. <http://doi.org/10.1016/j.jsams.2015.07.004>
- Merom, D., Bauman, A., & Ford, I. (2004). The public health usefulness of the exercise recreation and sport survey (ERASS) surveillance system. *Journal of Science and Medicine in Sport / Sports Medicine Australia*, 7(1), 32–7. Retrieved from <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/15139162>
- Metzler, M. W., McKenzie, T. L., van der Mars, H., Barrett- Williams, S. L., & Ellis, R. (2013). Health Optimizing Physical Education (HOPE) : A New Curriculum for School Programs-Part 1 : Establishing the Need and Describing the Model. *Journal of Physical Education, Recreation & Dance*, 84(4), 41–47. <http://doi.org/10.1080/07303084.2013.773826>
- Morgan, P. J., Barnett, L. M., Cliff, D. P., Okely, A. D., Scott, H. A., Cohen, K. E., & Lubans, D. R. (2013). Fundamental Movement Skill Interventions in Youth : A Systematic Review and Meta-analysis. *Pediatrics*, 132(5), e1361–e1383. <http://doi.org/10.1542/peds.2013-1167>
- Mullan, E., Markland, D., & Inglelew, D. K. (1997). A graded conceptualisation of self-determination in the regulation of exercise behaviour : development of a measure using confirmatory factor analytic procedures. *Personality and Individual Differences*, 23(5), 745–752. [http://doi.org/10.1016/S0191-8869\(97\)00107-4](http://doi.org/10.1016/S0191-8869(97)00107-4)
- Nasuti, G., & Rhodes, R. E. (2013). Affective judgment and physical activity in youth: Review and meta-analyses. *Annals of Behavioral Medicine*, 45(3), 357–376. <http://doi.org/10.1007/s12160-012-9462-6>
- Newell, K. M. (1985). Coordination, Control and Skill. *Advances in Psychology*, 27(C), 295–317. [http://doi.org/10.1016/S0166-4115\(08\)62541-8](http://doi.org/10.1016/S0166-4115(08)62541-8)
- Newell, K. M. (1991). Motor skill acquisition. *Annual Review of Psychology*, 42, 213–237. <http://doi.org/10.1146/annurev.ps.42.020191.001241>

- Newell, K. M. (2003). Change in Motor Learning: A Coordination and Control Perspective. *Motriz*, 9(1), 1–6. <http://doi.org/10.1111/j.1398-9995.2007.01597.x>
- Newell, K. M., & Vaillancourt, D. E. (2001). Dimensional change in motor learning. *Human Movement Science*, 20(4–5), 695–715. [http://doi.org/10.1016/S0167-9457\(01\)00073-2](http://doi.org/10.1016/S0167-9457(01)00073-2)
- Nicholls, J. (1989). *The Competitive Ethos and Democratic Education*. Harvard University Press. Retrieved from <http://www.hup.harvard.edu/catalog.php?isbn=9780674154179>
- Nicholls, J. G. (1984). Achievement motivation: Conceptions of ability, subjective experience, task choice, and performance. *Psychological Review*, 91(3), 328–346. <http://doi.org/10.1037/0033-295X.91.3.328>
- Osberg, D., & Biesta, G. (2010). Complexity Theory and the Reinvention of Reality of Education. Proceedings of the 2004 Complexity Science and Educational Research Conference, 121–146. Retrieved from <http://www.amazon.com/Complexity-Theory-Politics-Education-Deborah/dp/9460912389>
- Pappano, L. (2013). 'Grit' and the New Character Education. *Ed Digest*, 29 (February), 4–9.
- Pelletier, L. G., Rocchi, M. A., Vallerand, R. J., Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2013). Validation of the Revised Sport Motivation Scale (SMS-II). *Psychology of Sport and Exercise*, 14(3), 329–341. <http://doi.org/10.1016/j.psychsport.2012.12.002>
- Philippe, F. L., Vallerand, R. J., Houffort, N., Lavigne, G. L., & Donahue, E. G. (2010). Passion for an activity and quality of interpersonal relationships : the mediating role of emotions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 98(6), 917–932. <http://doi.org/10.1037/a0018017>
- Prochaska, J. O., & Velicer, W. F. (1997). The transtheoretical model of health behavior change. *American Journal of Health Promotion*, 12(1), 38–48. <http://doi.org/10.4278/0890-1171-12.1.38>
- Renshaw, I., Araújo, D., Button, C., Chow, J. Y., Davids, K., & Moy, B. (2015). Why the Constraints-Led Approach is not Teaching Games for Understanding : a clarification. *Physical Education and Sport Pedagogy*, 8989 (October), 1–22. <http://doi.org/10.1080/17408989.2015.1095870>
- Richter, M., Gendolla, G. H. E., & Wright, R. A. (2016). Chapter Five—Three Decades of Research on Motivational Intensity Theory : What We Have Learned About Effort and What We Still Don't Know. *Advances in Motivation Science*, 3, 149–186. <http://doi.org/10.1016/bs.adms.2016.02.001>
- Robinson, L. E., Stodden, D. F., Barnett, L. M., Lopes, V. P., Logan, S. W., Rodrigues, L. P., & D'Hondt, E. (2015). Motor Competence and its Effect on Positive Developmental Trajectories of Health. *Sports Medicine*, 45(9), 1273–1284. <http://doi.org/10.1007/s40279-015-0351-6>
- Rudd, J., Butson, M. L. L., Barnett, L., Farrow, D., Berry, J., Borkoles, E., & Polman, R. (2016). A holistic measurement model of movement competency in children. *Journal of Sports Sciences*, 34(5), 477–485. <http://doi.org/10.1080/02640414.2015.1061202>
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55(1), 68–78. <http://doi.org/10.1037//0003-066X.55.1.68>
- Shavelson, R. J., Hubner, J. J., & Stanton, G. C. (1976). Self-Concept : Validation of Construct Interpretations. *Review of Educational Research*, 46(3), 407–441. <http://doi.org/10.3102/00346543046003407>
- Siedentop, D. (2002). Sport Education : A Retrospective. *Journal of Teaching in Physical Education*, 21, 409–418.
- Stodden, D. F., Goodway, J. D., Langendorfer,

- S. J., Robertson, M. A., Rudisill, M. E., Garcia, C., & Garcia, L. E. (2008). A Developmental Perspective on the Role of Motor Skill Competence in Physical Activity : An Emergent Relationship. *Quest*, 60(2), 290-306. <http://doi.org/10.1080/00336297.2008.10483582>
- Telford, R. D., & Cunningham, R. B. (2012). Schools With Fitter Children Achieve Better Literacy and Numeracy Results : Evidence of a School Cultural Effect, 45-57.
- Telford, R. D., Cunningham, R. B., Fitzgerald, R., Olive, L. S., Prosser, L., Jiang, X., & Telford, R. M. (2012). Physical education, obesity, and academic achievement: a 2-year longitudinal investigation of Australian elementary school children. *Am J Public Health*, 102(2), 368-374. Journal Article. <http://doi.org/10.2105/ajph.2011.300220>

4. 我が国におけるフィジカルリテラシーに関する実態調査

春日 晃章¹⁾ 青野 博²⁾

はじめに

本研究は、世界各国で開発されつつあるフィジカルリテラシーに関する研究論文や評価尺度を参考にして、日本で活用できるよう新たにフィジカルリテラシーの評価尺度を開発することを目的としている。そこで本稿では、ヨーロッパにおいて一般の人々がフィジカルリテラシーを自己評価するために作成された尺度を用いて、日本人のフィジカルリテラシーに関する実態を把握するとともに、日本版フィジカルリテラシー評価尺度の開発に向けた基礎資料を得ることを目的として実施されたオンライン調査の結果について報告する。

Physical Literacy for Life

本調査に用いた評価票は、International Sport and Culture Associationによりヨーロッパにおいて展開されている“Erasmus+ Sport Physical Literacy For Life”プロジェクトの一環として、一般の人々向けに作成された“Physical Literacy for Life (PL4L)”自己評価ツールを用いた。この自己評価ツールは、①自身のフィジカルリテラシーがどのレベルにあるのかを判定すること、②ヨーロッパの人々におけるフィジカルリテラシーに関する自己認識の実態を調査することを目的として作成された。なお、PL4Lは、オーストラリアとヨーロッパにおける基礎研究を参照しており、フィジカルリテラシーの構成概念となる4領域について、すなわち、①身体領域、②感情領域、③認知領域、④社会領域についての質問項目が設定されている。本調査における評価票は、このPL4Lを和訳するとともに、日本人が回答しやすいよう一部の表現をアレンジした(表1)。

PL4Lの質問項目は、身体活動量に関する質問

に加えて、身体領域6問、感情領域4問、認知領域3問、社会領域3問により構成される。4領域に関するそれぞれの質問については、選択肢としてレベル1(低い)からレベル3(高い)まで示されており、自身に最も当てはまる回答を一つ選択することとしている。そして、レベル1を1ポイント、レベル2を2ポイント、レベル3を3ポイントとして、領域毎に合計ポイントを算出して評価する。なお、身体領域については、8ポイント以下をレベル1、9~14ポイントをレベル2、15ポイントをレベル3として評価する。同様に、感情領域については、5ポイント以下をレベル1、6~9ポイントをレベル2、10ポイント以上をレベル3とし、認知領域並びに社会領域については、4ポイント以下をレベル1、5~7ポイントをレベル2、8ポイント以上をレベル3として評価する(表2)。

オンライン調査の実施

全国47都道府県に在住する18~65歳の男女4,000名を対象に、和訳版PL4Lを用いて調査を実施した。本調査は、2022年1月28日(金)~1月30日(日)の期間に行い、調査会社(株式会社クロス・マーケティング)の登録モニターに対するインターネット定量調査として行った。なお、本調査対象者の地域区分、年齢および性別は表3の通りであった。

身体活動量に関する調査結果

日常生活における身体活動量として、直近7日間において身体活動を30分以上行った日数(日/週)および平日1日あたりの座って過ごした時間(分/日)について表4に示した。なお、男女別では、身体活動を行った日数は、男性 3.13 ± 2.14 (日/週)、女性 2.84 ± 2.16 (日/週)、座位行動時間は、男性 319 ± 243 (分/日)、女性 339 ± 240 (分/日)であった。

1) 岐阜大学

2) 日本スポーツ協会

表1 Physical Literacy for Life (PL4L) における質問項目 (英文オリジナルおよび和文版)

英文	和文
<p>1. Physical Activity Number of Days On how many of the last 7 days did you walk quickly, do sports or other physical activity for 30 minutes or longer?</p>	<p>○身体活動 (日数) 過去7日間のうち、早歩きなどの運動や各種スポーツのような身体活動を30分以上行った日数は何日ですか。</p>
<p>2. Sedentary Behaviour Hours and minutes per day The following question is about the time you spent sitting on weekdays during the last 7 days. Include time spent at work, at home, while doing course work and during leisure time. This may include time spent sitting at a desk, visiting friends, reading, or sitting or lying down to watch television. During the last 7 days, how much time in hours did you usually spend sitting on a weekday?</p>	<p>○座位行動 (1日あたりの時間：○時間○分) 過去7日間のうち、平日に座って過ごしていた時間は1日平均どのくらいありましたか。 ※なお、職場や自宅で、何か作業をしていた時や趣味などを楽しんでいた時を含みます。 ※また、机に向かって座っていた時、友人のもとを訪ねた時、あるいは読書やテレビを視聴するために座ったり横になったりしていた時なども含まれます。</p>
<p>3. PHYSICAL DOMAIN The Physical Domain is about being able to: - apply various combinations of movement competencies that a situation or environment requires; - manipulate the body and different objects across a variety of movement environments (land, water, air) ; - acquire components of fitness to successfully participate in a range of physical activities.</p>	<p><身体領域> 「身体領域」では、以下のことがどの程度できるかについてうかがいます。続く質問をお答えください。 ・状況や環境に応じ、さまざまな動作を組み合わせて運動することができるか。 ・さまざまな環境（地上、水中、空中など）で自身の身体やいろいろな物（道具）を操作できるか。 ・さまざまな身体活動に問題なく参加できる体力があるか。</p>
<p>1) Strength Capacity of muscle (s) to exert force against an object A I have difficulty using my strength in simple daily activities (e.g. can't carry shopping bags or do a sit up; can't keep correct posture while seated). B I can use my strength in general contexts of physical activity (e.g. push-ups, sit-ups, pull-ups, gardening/shovelling). C I'm able to use my strength in challenging contexts of physical activity (e.g. lifting heavy weights, rock climbing, circuit training, vigorous activity).</p>	<p>○筋力 あなたの筋力（筋肉が力を発揮する能力）について最もあてはまるレベルをお答えください。 レベル1 日常生活の場面で、力を発揮することが難しい（例：買物袋を持ち運ぶことができない、起き上がることができない、座っている時に適切な姿勢を維持できないなど） レベル2 通常の身体活動の場面で、力を発揮することができる（例：日常的な家事作業や、腕立て伏せ、腹筋運動、懸垂運動など） レベル3 激しい身体活動の場面で、より大きな力を発揮することができる（例：重い物を持ち上げる、ウエイトトレーニングやサーキットトレーニングといった激しい身体活動など）</p>
<p>2) Stamina Capacity to sustain prolonged physical effort A I have difficulty making light efforts (e.g. can't go up a flight of stairs without getting out of breath; have to take breaks while walking around). B I can participate in activities that take moderate physical effort and make me breathe somewhat heavier than normal (e.g. carrying light loads, running/bicycling at a regular pace). C I can participate in diverse challenging activities that take</p>	<p>○スタミナ あなたのスタミナ（長時間にわたり身体活動を持続する能力）について最もあてはまるレベルをお答えください。 レベル1 軽い身体活動でも継続することが難しい（例：休憩を取りながらでないと階段を登ったり歩き回ることができないなど） レベル2 少し息がはずむような身体活動ができる（例：軽い荷物を運ぶ、一定のペースで走る/自転車をこぐなど） レベル3 身体的にきつと感じ、息がかなりはずむような身体活動ができる（例：重い荷物を運ぶ、エアロビクス、長時間に</p>

英文	和文
hard physical effort and make me breathe much harder than normal (e.g. heavy lifting, digging, aerobics, fast running/bicycling for extended periods of time).	わたり速く走る/自転車をこぐなど)
3) Movement skills Movement skills that allow the person to move independently from one spot to another A I have difficulty moving (e.g need assistance walking). B I can move using different skills in general contexts of physical activity (e.g. rolling, jumping, running, climbing). C I can move using different skills in challenging contexts of physical activity (e.g. running in a competitive game or race, climbing a difficult wall, sprinting to catch a bus).	○自力での移動 あなたのある地点から別の地点へ移動する能力について最もあてはまるレベルをお答えください。 レベル1 人の助けを借りずに移動することが難しい(例:歩行のために補助が必要であるなど) レベル2 通常の身体活動場面で、さまざまな動作で移動できる(例:走る, 跳ぶ, 登るなど) レベル3 激しい身体活動の場面であっても、さまざまな動作で移動できる(例:試合やレースで走る, バスに乗るために疾走する, 登りにくい壁を登るなど)
4) Movement using an object Movement skills used to move on, in or with equipment from one place to another A I have difficulty using objects/an apparatus to move from one place to another (e.g. can't ride a bicycle or skate). B I can use objects/an apparatus to move from one place to another in general contexts of physical activity (e.g. bicycle, skateboard, surf, ski, roller skates). C I can use objects/an apparatus to move in challenging contexts of physical activity (e.g. cycling on a hilly trail, skiing on a difficult course, riding a horse).	○道具を使った移動 あなたの用具を使用してある地点から別の地点へ移動する能力について最もあてはまるレベルをお答えください。 レベル1 用具を使用して移動することが難しい(例:自転車に乗ることができないなど) レベル2 通常の身体活動場面で、用具を使用して移動することができる(例:自転車, キックボード, スケートボード, スキーなど) レベル3 用具を使用した身体活動が難しい場面であっても、移動することができる(例:坂道で自転車をこぐ, 難しいコースでスキーをするなど)
5) Coordination & balance Capacity to move two or more body parts in a controlled, smooth and efficient manner A I have difficulty coordinating my movements and balancing myself (e.g. can't hold myself upright without assistance). B I can coordinate my movements and balance myself in general contexts of physical activity (e.g. dance, batting a ball, walking on a beam, gymnastics). C I can coordinate my movements and balance myself in challenging contexts of physical activity (e.g. dancing a fast choreography, balance on a moving platform).	○コーディネーションとバランス あなたのコーディネーション(調整)能力とバランス(平衡)能力について最もあてはまるレベルをお答えください。 レベル1 自分の動きを調整したりバランスをとったりすることが難しい(例:補助なしで立っていることができない) レベル2 通常の身体活動場面で、自分の動きを調整したりバランスをとったりすることができる(例:ダンスをする, 平均台の上を歩く, 体操をするなど) レベル3 難易度の高い身体活動場面であっても、自分の動きを調整したりバランスをとることができる(例:スピードのある振り付けでダンスをする, 動く台の上でバランスをとる)
6) Object manipulation skills Movement skills that use a body part(s) to move or manipulate an object A I have difficulty manipulating objects in physical activities (e.g. can't throw or catch an object).	○操作能力 あなたの物を操作する能力について最もあてはまるレベルをお答えください。 レベル1 身体活動において、物を操作することが難しい(例:物を投げられない, キャッチできない)

英文	和文
<p>B I can use/manipulate objects in general contexts of physical activities (e.g. throw/catch/dribble/kick a ball, twirl a baton, bata ball).</p>	<p>レベル2 通常の身体活動場面で、物を操作することができる（例：ボールを投げる/キャッチする/ドリブルする/キックする、バトンを回す、ボールを打つ）</p>
<p>C I can manipulate objects in challenging contexts of physical activity (e.g. control a ball in a competitive game, use an object in a choreography).</p>	<p>レベル3 難易度の高い身体活動場面であっても、物を操作することができる（例：試合でボールをコントロールする、物を操作しながら踊る）</p>
<p>4. EMOTIONAL DOMAIN The Emotional Domain is about being able to: - acquire satisfaction and enjoyment from different movement experiences - understand emotional responses, such as empathy and sensitivity, during movement and physical activities - manage physical responses, such as fatigue or pain, during movement and physical activities - persist with movement in the face of difficulty, challenge or failure, in the belief that improvement will come with persistent learning and effort</p>	<p><感情領域> 「感情領域」では、以下のことについてうかがいます。続 く質問をお答えください。 ・さまざまな運動経験から満足感と楽しみを得ることが できるか。 ・身体活動を行っている際に、共感や感受性などの、感情 を理解できるか。 ・身体活動を行っている際に、疲労または痛みなどの身体 的な反応に対応できるか。 ・困難、難題、または失敗に直面しても努力して学習し続 けることによって向上すると信じて、身体活動を続けられ るか。</p>
<p>1) Motivation Reasons for engaging in movement and physical activity A I don't feel like participating in physical activities/ movement. B I participate in physical activity because it brings me approval, recognition or rewards from others. C I participate in physical activity because it brings me joy, pleasure and self-realisation.</p>	<p>〇モチベーション あなたが身体活動を行う理由について最もあてはまるレベ ルをお答えください。 レベル1 身体活動を行う気にならない レベル2 身体活動を行うのは、他者からの承認、評価、報酬が得ら れるからである レベル3 身体活動を行うのは、喜び、楽しみ、自己実現が得られる からである</p>
<p>2) Confidence A belief in your capacity to perform in movement and physical activity setting/s A I'm not confident I can participate in physical activities. B I'm confident I can participate in general contexts of physical activity (e.g. housekeeping activities, active communiting, sports participation, fitness activities). C I'm confident I can participate in physical activities in challenging situations (e.g. new or unknown contexts, lack of time, feeling tired).</p>	<p>〇自信 あなたの身体活動場面における（自分の能力を発揮できる） 自信について最もあてはまるレベルをお答えください。 レベル1 身体活動を行う自信がない レベル2 通常の身体活動場面（例：自転車や徒歩による通勤・通学、 スポーツ、フィットネスなど）であれば、自分ならでき るという自信がある レベル3 身体活動を行うことが難しい場面（例：新しい、未知の状況、 時間がない、疲れているなど）であっても、自分ならでき るという自信がある</p>
<p>3) Physical regulation Perceiving, adjusting and controlling internal physical signals, such as fatigue and pain, in movement and physical activity contexts During Physical Activities: A I have difficulty recognising when I'm fatigued.</p>	<p>〇身体的な調整・制御 あなたの身体活動場面における身体の変化（疲労や痛みな ど）への気づきおよびその調整・制御について最もあては まるレベルをお答えください。 レベル1 身体活動場面において自分が疲れていることに気づくのが 苦手である</p>

英文	和文
<p>B I can recognise when I'm fatigued.</p> <p>C I can manage my fatigue using different strategies (e.g. pacing myself, controlling my breathing).</p>	<p>レベル2 身体活動場面において自分が疲れていることがわかる</p> <p>レベル3 身体活動場面において様々な方法（例：ペース配分、呼吸のコントロールなど）で自分の疲労を管理できる</p>
<p>4) Emotional regulation Capacity to adjust and control emotions (e.g. happiness, sadness, fear, anger) and resulting behaviours in relation to movement and physical activity contexts During Physical Activities:</p> <p>A I have difficulty recognising my emotions.</p> <p>B I can recognise my emotions.</p> <p>C I can manage my emotions using different strategies (e.g. focusing on positive thoughts, calming down before reacting).</p>	<p>○感情的な調整・制御 あなたの身体活動に関連する感情（例：喜び、悲しみ、恐れ、怒りなど）とその結果としての行動の調整・制御について最もあてはまるレベルをお答えください。</p> <p>レベル1 身体活動場面において自分の感情の変化に気づくのが苦手である</p> <p>レベル2 身体活動場面において自分の感情の変化を認識できる</p> <p>レベル3 身体活動場面において自分の感情をコントロールすることができる（例：ポジティブな考え方に意識を向ける、感情のまま行動する前に心を落ち着かせる）</p>
<p>5. COGNITIVE DOMAIN The Cognitive Domain is about being able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> - Reason and make appropriate decisions, knowing how, when, and why to perform certain movement skills - Adhere to rules and to apply tactics within a game - Set and implement goals within Physical Activities - Use knowledge regarding Physical Activities 	<p><認知領域> 「認知領域」では、以下のことについてうかがいます。続く質問をお答えください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • どのように、いつ、何のために、どのような動きをするのかを知り、適切な判断を下すことができるか。 • ルールを守り、ゲームの中で戦術を利用できるか。 • 身体活動の中で目標を設定し、実行できるか。 • 身体活動に関する知識を活用できるか。
<p>1) Knowledge Factual knowledge and information that a person knows and can convey about physical activities (e.g. knowing that benefits of physical activity include physical, emotional, social and cognitive benefits)</p> <p>A I have difficulty recognising benefits of physical activity.</p> <p>B I know the general benefits of physical activity.</p> <p>C I can relate different types of physical activities with their specific benefits (e.g. sports, rhythmic activities, active commuting).</p>	<p>○知識 あなたが身体活動に関する知識や情報（例：身体的、感情的、社会的、認知的なメリットなど）を知っているか、また、伝えることができるかについて最もあてはまるレベルをお答えください。</p> <p>レベル1 身体活動のメリット（効果）を理解していない</p> <p>レベル2 身体活動の一般的なメリット（効果）を理解している</p> <p>レベル3 さまざまな種類の身体活動（例：自転車や徒歩による通勤・通学、リズムカルに身体を動かす、各種スポーツなど）とそれぞれのメリット（効果）を関連づけることができる</p>
<p>2) Rules (& tactics) Regulations, guidelines or principles governing conduct or procedure within activities. May be explicit, spoken or unspoken (e.g. safety and hygiene rules, rules in games). Planned and ad hoc decisions and actions, employed in the moment for the pursuit of goals</p> <p>A I have difficulty recognising the rules or tactics of the physical activities I participate in.</p> <p>B I know and adhere to the rules and tactics of the physical activities I participate in.</p>	<p>○ルールと戦術 あなたが身体活動の場面で遵守すべき規則、ガイドライン、原則、あるいは手続き（例：安全や衛生面のルール、試合中のルールなど。それらは、明示的なもの、口頭で言われるもの、あるいは暗黙の了解の場合がある）、また目標達成のために、その場で行われる計画的かつ臨機応変な意思決定や行動について最もあてはまるレベルをお答えください。</p> <p>レベル1 身体活動に参加するためのルールや戦術を認識することが苦手である</p>

英文	和文
<p>C</p> <p>I can adjust rules and tactics to the specific physical activity contexts I'm in.</p>	<p>レベル2 行っている身体活動のルールや戦術を理解し守っている</p> <p>レベル3 自分が行う身体活動の場面や状況に合わせて、ルールや戦術を調整できる</p>
<p>3) Strategy</p> <p>Capacity to set and implement goals within activities (e.g. planning route to school/work in active commuting, developing an exercise plan, winning a game)</p> <p>A</p> <p>I have difficulty planning or reaching my goals in physical activities.</p> <p>B</p> <p>I know how to plan and reach my goals in physical activities.</p> <p>C</p> <p>I can adapt my plans to unknown circumstances (e.g. adapt a training plan to train at home, change a practice location according to weather conditions).</p>	<p>○戦略</p> <p>あなたが身体活動において目標を設定して実行する能力 (例：自転車や徒歩による通勤・通学のルートを計画する、エクササイズを立てる、試合に勝つ) について最もあてはまるレベルをお答えください。</p> <p>レベル1 身体活動において、計画を立てて自分の目標を達成することが苦手である</p> <p>レベル2 身体活動において、計画を立てて自分の目標を達成する方法を知っている</p> <p>レベル3 状況にあわせて自分の計画を柔軟に変えることができる (例：自宅でトレーニングするためにトレーニング計画を柔軟に変える、天候に応じて練習場所を変えるなど)</p>
<p>6. SOCIAL DOMAIN</p> <p>The Social Domain is about being able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> - utilise the natural and built environment for connection to others and place through movement and physical activity - lead others in collaborative, ethical and inclusive behaviours in physical activity, including understanding when to be a team member or a leader - share and learn from experiences from your own and other cultures - exhibit fair play and ethical behaviour in a variety of physical activities and environments. 	<p><社会領域></p> <p>「社会領域」では、以下のことについてうかがいます。 続く質問をお答えください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 身体活動を用いて他の人と関わり合えるように自然環境を利用したり、環境を整えることができているか。 • チームメンバーとして、またはリーダーとしての役割を理解することを含め、身体活動において協動的、倫理的、インクルーシブ（共に支え合う）な行動で他者を先導できているか。 • 自国や他国の文化から得た経験を共有し、そこから学ぶことができているか。 • さまざまな身体活動や環境において、フェアプレーと倫理的な行動を示すことができているか。
<p>1) Ethics</p> <p>Moral principles that govern a person's behaviour relating to fairness and justice.</p> <p>A</p> <p>I have difficulty recognising principles of fairness, respect and inclusion in physical activities.</p> <p>B</p> <p>I generally apply principles of fairness and inclusion in physical activities.</p> <p>C</p> <p>I can use strategies to improve conditions for respect, fairness and inclusion in physical activities.</p>	<p>○倫理</p> <p>あなたの公平さや正義に関わる道徳的原理について最もあてはまるレベルをお答えください。</p> <p>レベル1 身体活動において、公正であり、他者を尊重し、インクルーシブ（共に支え合う）であることが苦手である</p> <p>レベル2 身体活動において、公正であり、インクルーシブであろうとしている</p> <p>レベル3 身体活動において、他者の尊重、公正、インクルーシブの状況を改善に向かわせることができる</p>
<p>2) Society & culture</p> <p>Appreciation of cultural values that exist within groups, organisations and communities (e.g. symbols, chants, traditional dances and games, salutations, habits)</p>	<p>○社会と文化</p> <p>あなたの文化的な価値観（シンボル、ゲーム、礼儀作法、習慣など）の正しい理解について最もあてはまるレベルをお答えください。</p>

英文	和文
A I have difficulty recognising cultural values and practices in physical activities. B I can recognise and participate in cultural values and practices in physical activities. C I respect and encourage dive.	レベル1 身体活動における文化的な価値観や習慣を認めることが難しい レベル2 身体活動における文化的な価値観や習慣を認識し、それに参加することができる レベル3 身体活動における文化的な価値観や習慣を尊重して積極的に取り組む姿勢でいる
3) Collaboration Social skills for successful interaction with others, including communication, cooperation, leadership and conflict resolution. A I have difficulty collaborating with others during physical activities. B I respect and collaborate with others during physical activities (e.g. respect another participant's space, share equipment or ball). C I actively support and encourage the success of others during physical activities (e.g. help another participant).	○協力 あなたの他者と上手に交流する社会的スキル（コミュニケーション、協力、リーダーシップ、争いごとの解決など）について最もあてはまるレベルをお答えください。 レベル1 身体活動において、他者と協力・協調することが苦手である レベル2 身体活動において、他者を尊重して協力・協調できる（例：身の参加者のスペースを尊重する、道具やボールを共有する） レベル3 身体活動において、他者がうまくいくように積極的にサポートし、励ますことができる

表2 各領域の合計ポイントに基づくレベル評価
(ポイント)

領域名	設問数	レベル1	レベル2	レベル3
身体領域	6	~8	9~14	15~
感情領域	4	~5	6~9	10~
認知領域	3	~4	5~7	8~
社会領域	3	~4	5~7	8~

表3-2 調査対象者の性別・年齢

性別	年齢	人数
男性	18~29歳	519
	30~49歳	1,035
	50~65歳	603
女性	18~29歳	439
	30~49歳	848
	50~65歳	549

※性別について「その他」と回答した者7名を除く

表3-1 調査対象者の地域区分

地域区分	人数	%
北海道	183	4.6
東北	264	6.6
関東	1,655	41.4
北陸	121	3.0
中部	484	12.1
近畿	718	18.0
中国	197	4.9
四国	88	2.2
九州	290	7.3

表4 日常生活における身体活動量

質問項目	平均値	標準偏差
身体活動(日/週)	3.00	2.16
座位行動(分/日)	328	243

PL4Lにおける標準値

各設問および各領域の調査結果について表5の通りであった。各設問について概ねレベル2が選択されており、これに伴い各領域における評価については、いずれもレベル2であった。

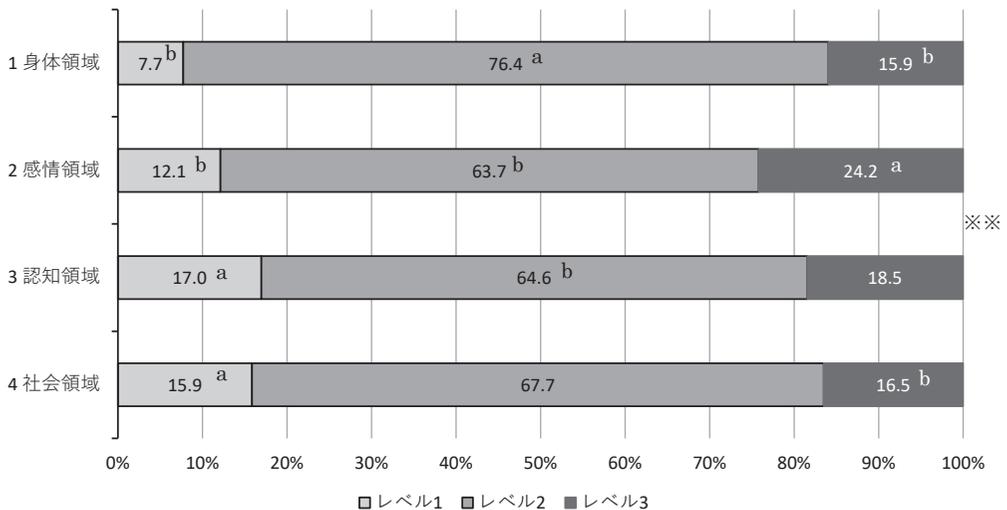
表5 各領域における調査結果

領域	各設問			領域合計		
	設問	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	レベル
1 身体領域	1-1	2.03	0.53	12.35	2.62	2
	1-2	2.08	0.58			
	1-3	2.10	0.54			
	1-4	2.08	0.56			
	1-5	2.02	0.51			
	1-6	2.04	0.53			
2 感情領域	2-1	2.14	0.80	8.22	2.19	2
	2-2	1.96	0.60			
	2-3	2.06	0.62			
	2-4	2.06	0.64			
3 認知領域	3-1	2.08	0.60	6.05	1.65	2
	3-2	2.00	0.63			
	3-3	1.98	0.66			
4 社会領域	4-1	2.01	0.61	6.02	1.61	2
	4-2	2.02	0.60			
	4-3	1.99	0.60			

各領域における評価

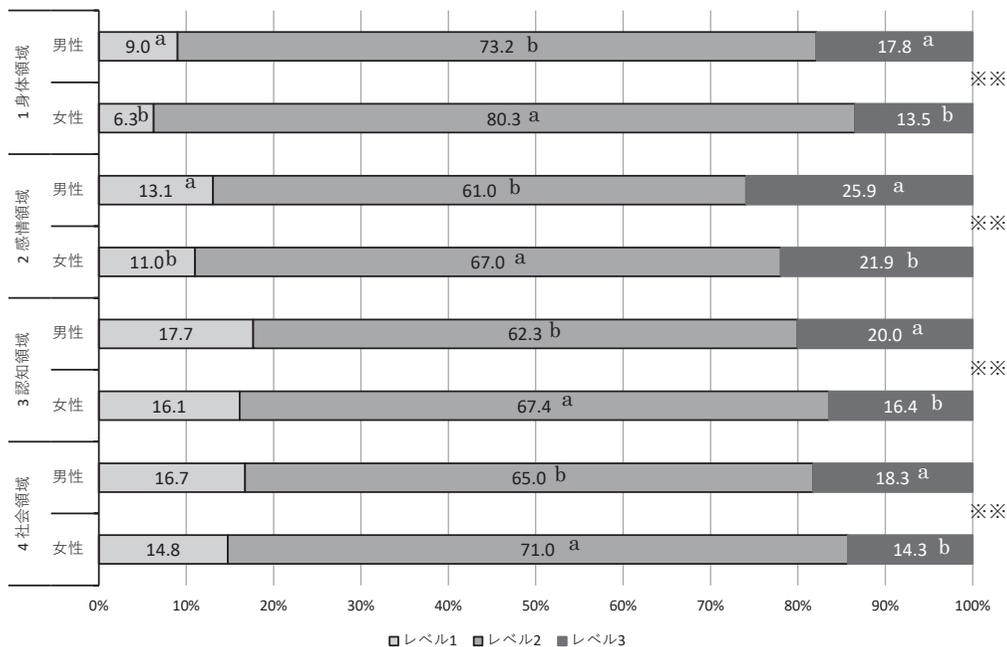
フィジカルリテラシーの構成概念となる4領域について、それぞれレベルの分布を図1-1に示した。今回の全対象者の総合的なフィジカルリテ

ラシーを領域別にみると、レベル3の割合が最も多いのは感情領域であり、レベル1の割合が最も多いのが認知領域であった。また、身体領域のレベル1とレベル3の割合はいずれも他領域に比べ最も少なく、我が国の体力・運動能力レベルの個



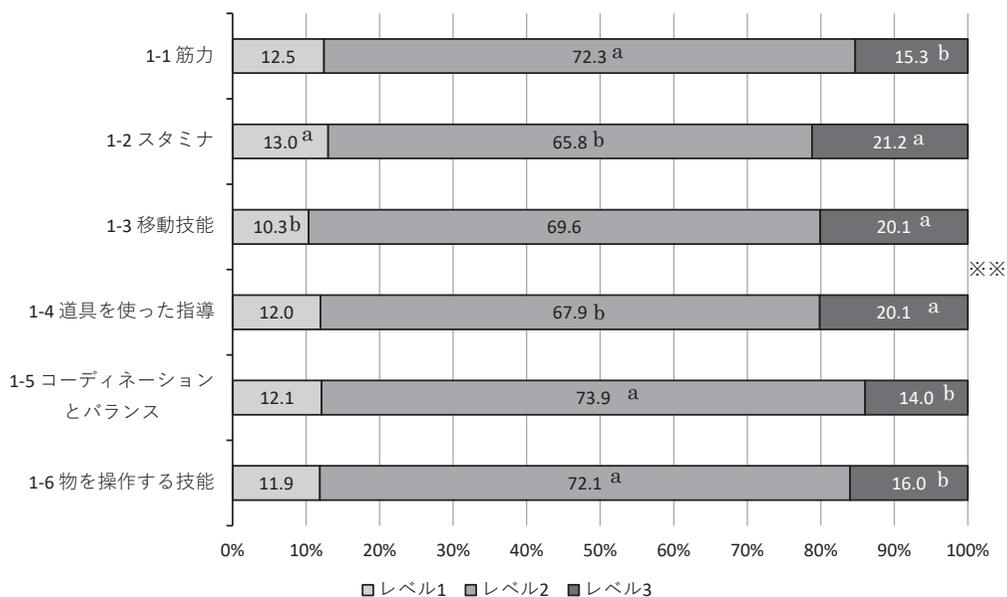
※※：p<0.01, a：調整済み残差>1.96, b：調整済み残差<-1.96

図1-1 各領域における評価



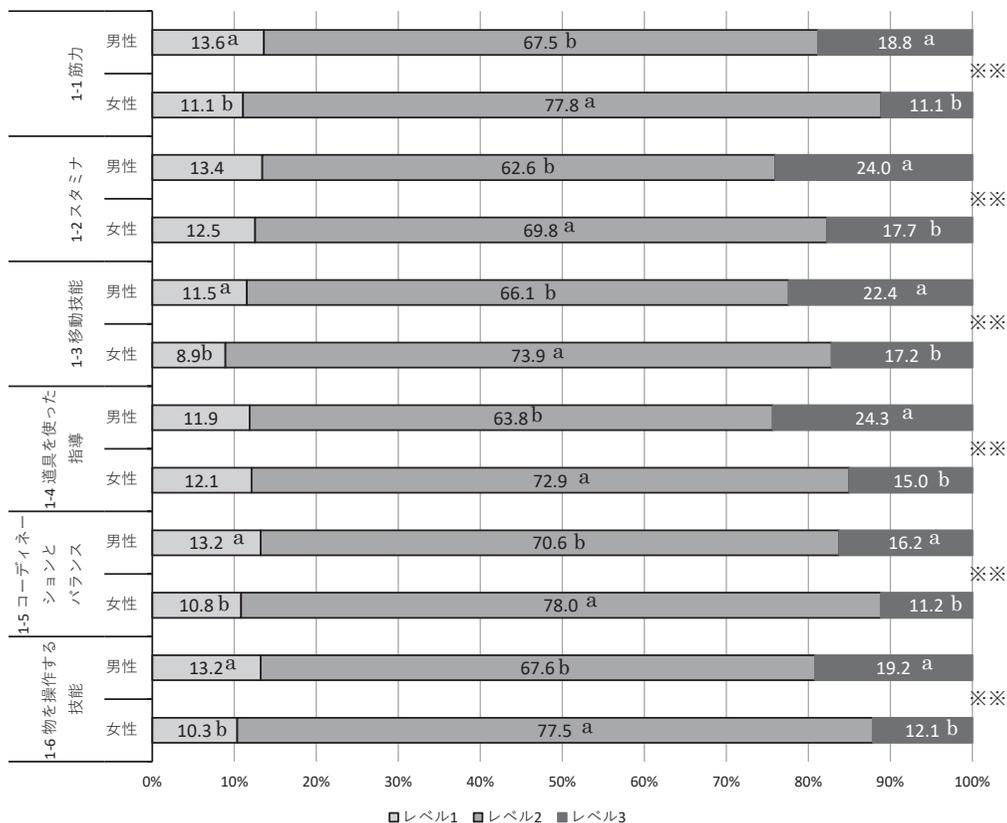
※※ : $p < 0.01$, a : 調整済み残差 > 1.96 , b : 調整済み残差 < -1.96

図1-2 各領域における評価 (男女別)



※※ : $p < 0.01$, a : 調整済み残差 > 1.96 , b : 調整済み残差 < -1.96

図2-1 身体領域における各設問の回答結果



※※ : $p < 0.01$, a : 調整済み残差 > 1.96 , b : 調整済み残差 < -1.96

図2-2 身体領域における各設問の回答結果 (男女別)

人差は他領域に比べて大きくはなく、多くが一定のレベルを維持していることが窺える。

図1-2に各領域におけるレベルの分布を性別に示した。これによると、我が国のフィジカルリテラシーに関する4領域に関して、全ての領域でレベル1とレベル3の割合は、女性に比べて男性の割合が有意に多い。つまり、男性の方がフィジカルリテラシーレベルの個人差が大きいことが窺える。

身体領域における各設問に基づく評価

身体領域における各設問の回答結果を図2に示した。身体領域に関して、全6項目いずれもレベル3の割合は男性の方が女性に比べて多く、男性の方がやや良好なフィジカルリテラシーを有していることが窺える。しかし、6項目のうち4項目

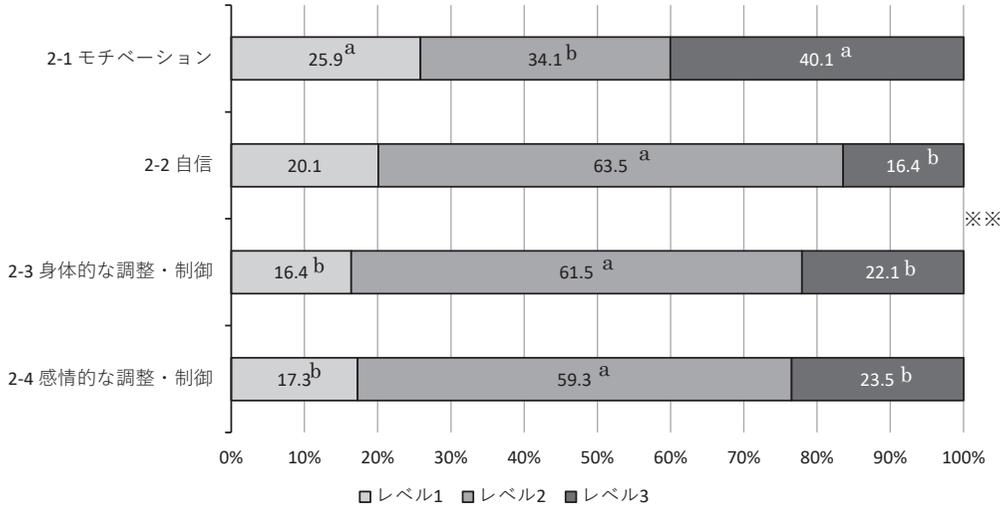
でレベル1の割合も女性に比べて男性が有意に高く、男性の方が身体領域フィジカルリテラシーの二極化が見られる。

感情領域における各設問に基づく評価

感情領域における各設問の回答結果を図3に示した。男女ともに、モチベーションに関するレベル3の割合が他の項目に比べ突出して高く、多くの方が身体活動を行うことが自身の喜びや楽しみになることを実感しているようである。そして、感情領域の「自信」では、男性の方がレベル3の割合が高く、レベル1の割合は女性の方が有意に高かった。

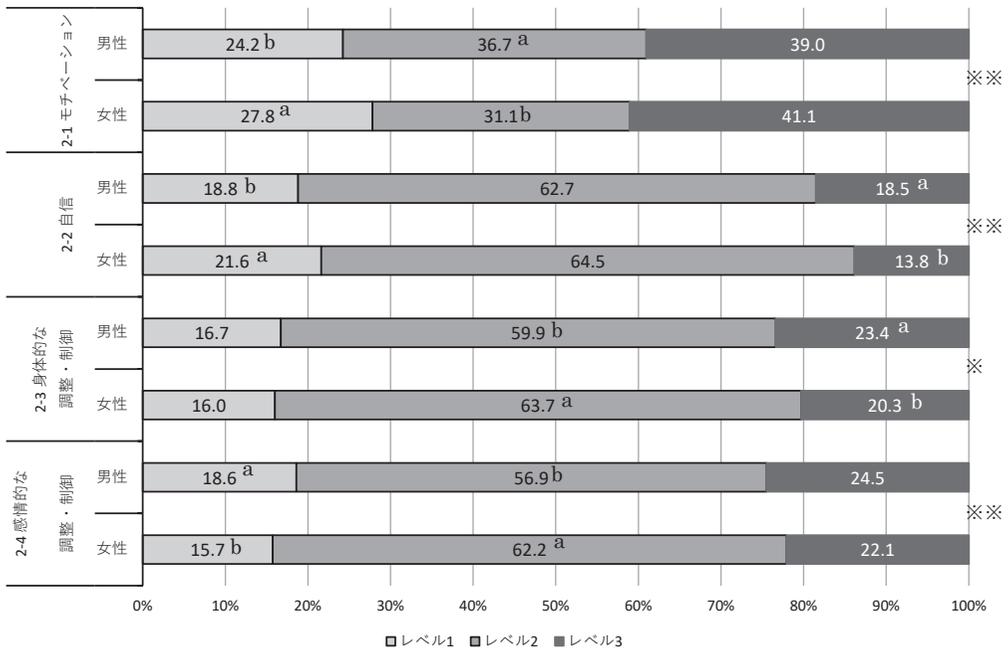
認知領域における各設問に基づく評価

認知領域における各設問の回答結果を図4に示



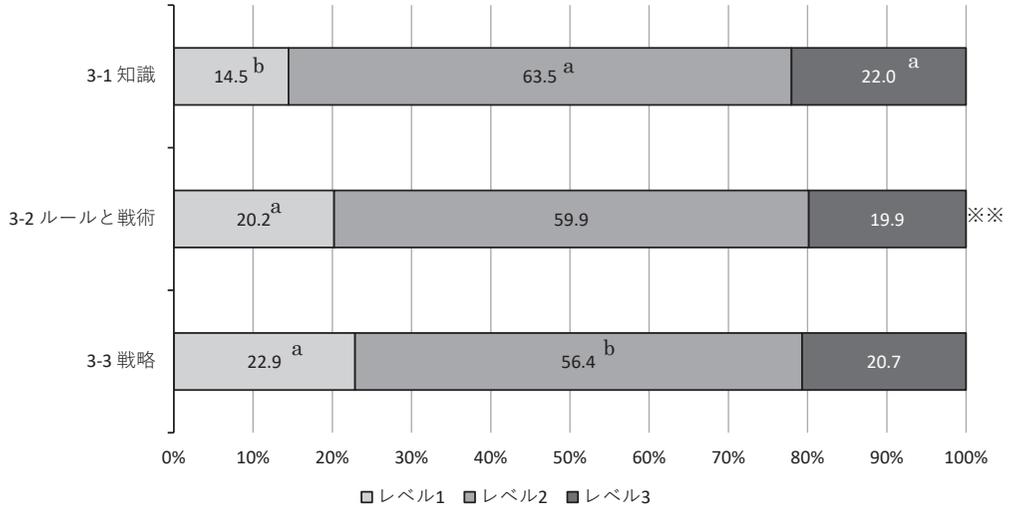
※※: $p < 0.01$, a: 調整済み残差 > 1.96 , b: 調整済み残差 < -1.96

図3-1 感情領域における各設問の回答結果



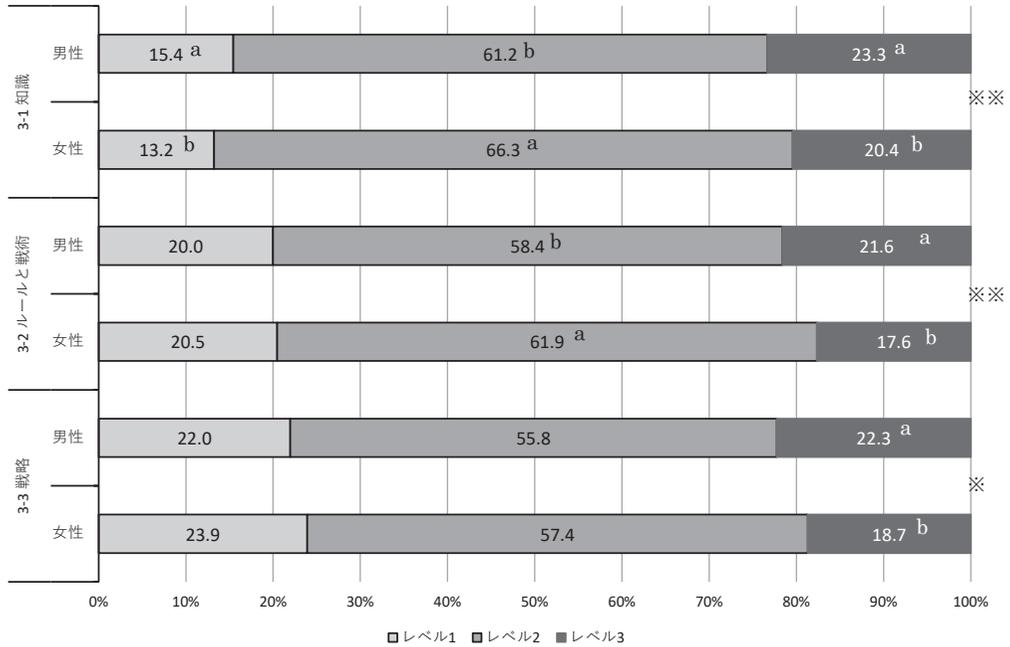
※ $p < 0.05$, ※※: $p < 0.01$, a: 調整済み残差 > 1.96 , b: 調整済み残差 < -1.96

図3-2 感情領域における各設問の回答結果 (男女別)



※※ : $p < 0.01$, a : 調整済み残差 > 1.96 , b : 調整済み残差 < -1.96

図4-1 認知領域における各設問の回答結果



※ $p < 0.05$, ※※ : $p < 0.01$, a : 調整済み残差 > 1.96 , b : 調整済み残差 < -1.96

図4-2 認知領域における各設問の回答結果 (男女別)

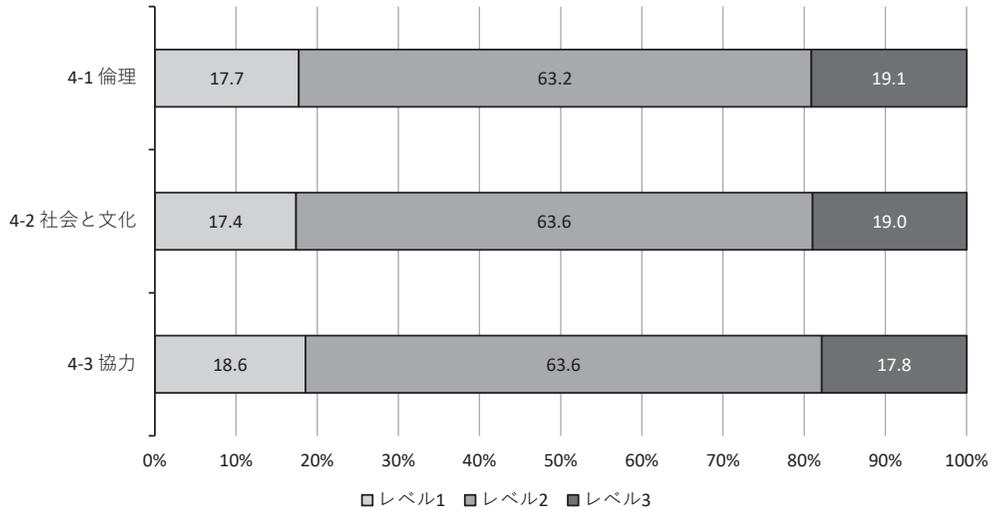
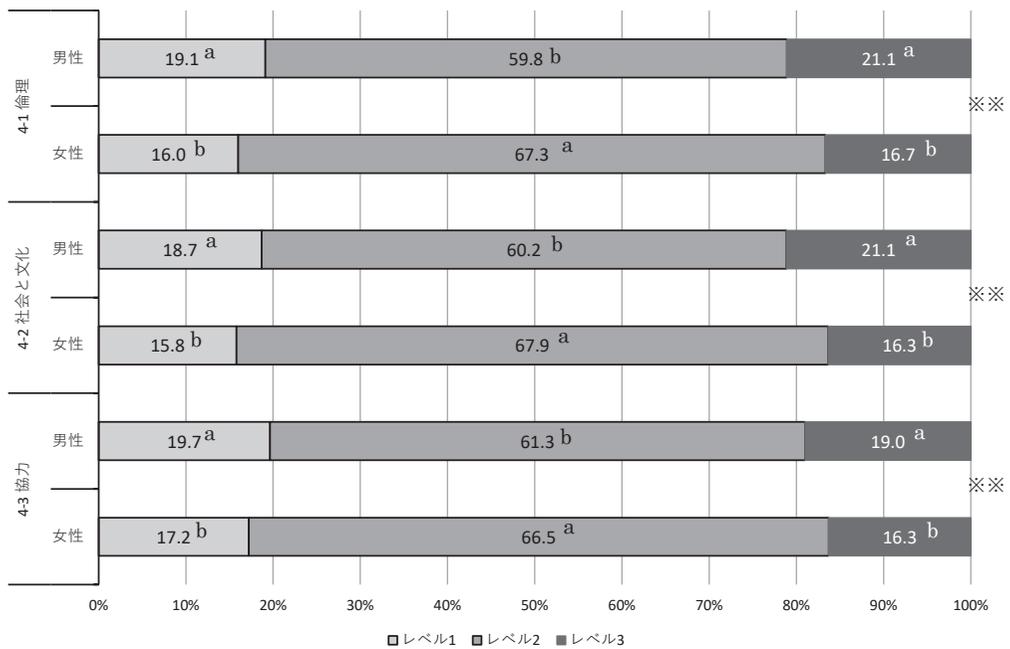


図5-1 社会領域における各設問の回答結果



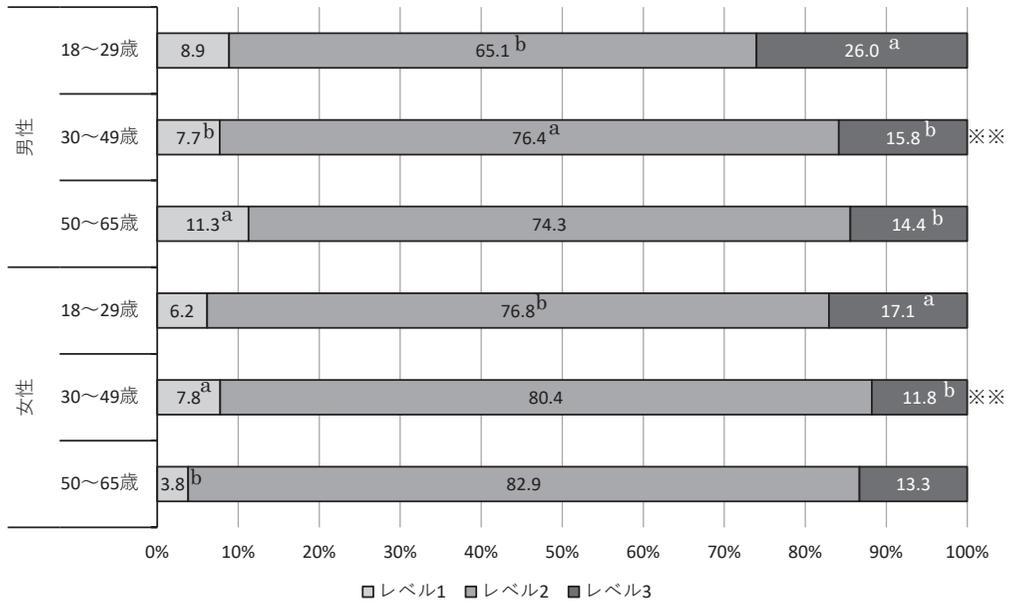
※※ : p<0.01, a : 調整済み残差>1.96, b : 調整済み残差<-1.96

図5-2 社会領域における各設問の回答結果 (男女別)

した。認知領域の全3項目でレベル3の割合は男性の方が女性に比べて有意に高かった。一方、「知識」においてはレベル1の割合も男性の方が有意に高かった。

社会領域における各設問に基づく評価

社会領域における各設問の回答結果を図5に示した。社会領域の全3項目において、レベル3と



※※ : p<0.01, a : 調整済み残差>1.96, b : 調整済み残差<-1.96

図6 身体領域における性別・年代別の評価

レベル1の割合は男性の方が女性に比べて有意に高く、女性に比べて男性の社会領域フィジカルリテラシーの二極化が示唆された。

身体領域における性別・年代別の評価

図6に、身体領域における性別・年代ごとにレベルの分布を示した。

男性の身体領域における総合評価に関して、レベル3の割合は18歳から29歳（以降、青年）が、30歳から49歳（以降、壮年）や50歳から65歳（以降、中年）に比べて有意に高い値を示したが、壮年と中年間に差は認められなかった。また、中年はレベル1の割合が他の年齢群より有意に多く、壮年群が最も低い割合を示し、レベル2の割合も他の年齢群より高い割合を示した。身体領域に関するフィジカルリテラシーは通常低年齢群の方がレベルは高いと思われる。確かに身体領域におけるレベル3に関しては、青年群の割合が突出して高いが、レベル1や2の割合も年齢相応に低いわけではなく、身体領域に関する二極化の傾向が見て取れる。

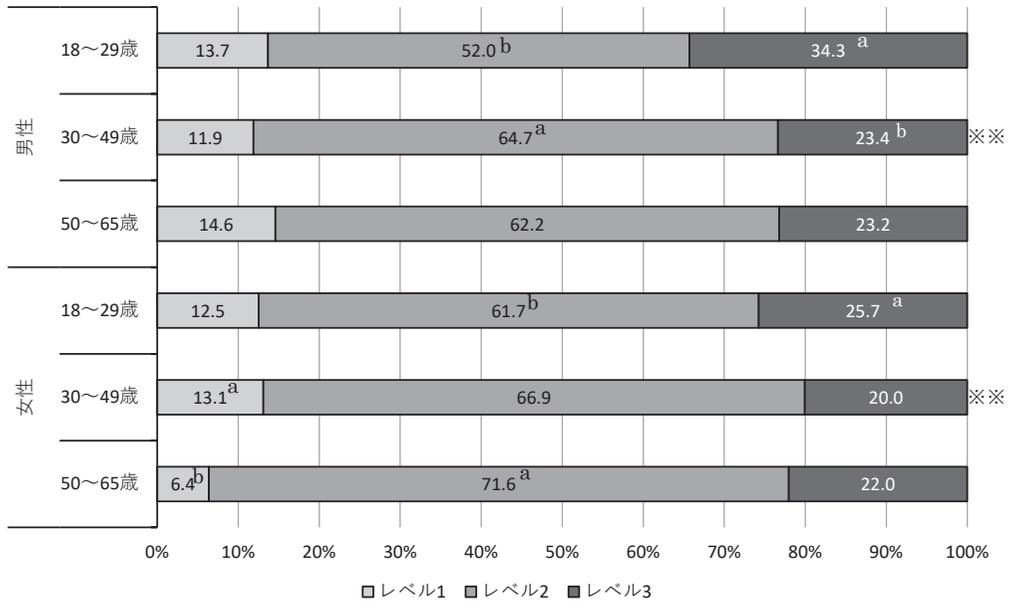
女性の身体領域における総合評価に関して、レ

ベル3の割合は、青年が他群に比べて有意に高く、壮年が有意に低かった。一方、レベル1の割合は、壮年が有意に高く、中年が低かった。したがって、我が国の女性における身体領域に関するフィジカルリテラシーは比較的年代間に大きな差はなく、中年も一定のレベル（レベル2，3）を高い割合で維持している。また、男性の割合に比べるとほとんどの年代で最もフィジカルリテラシーが低いレベル1と最も高いレベル3の割合が少なく、レベル2の割合が多い。つまり、我が国の女性におけるフィジカルリテラシーの身体領域については、男性ほど個人差が少ないとも言えよう。

感情領域における性別・年代別の評価

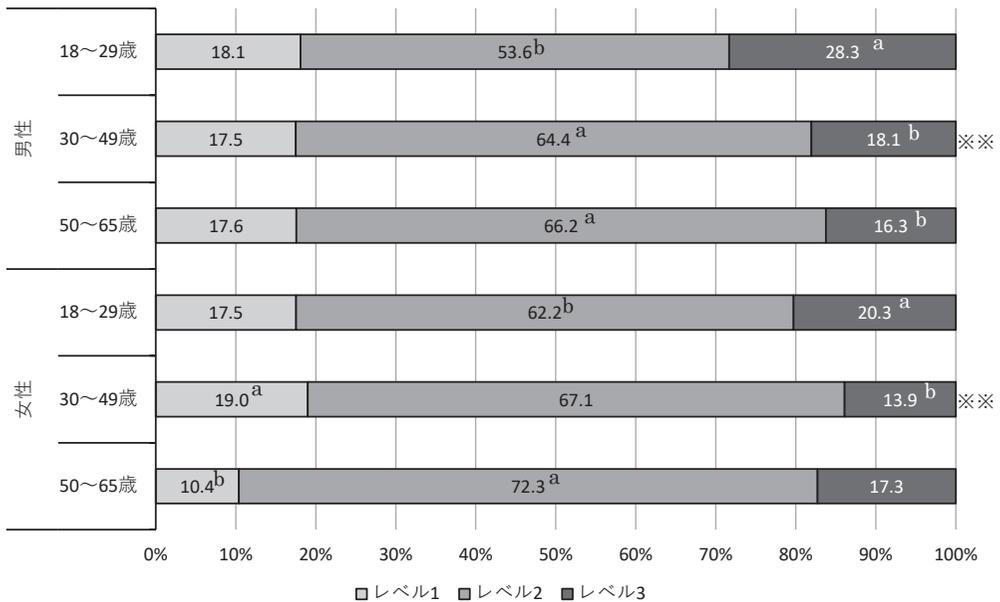
図7に、感情領域における性別・年代ごとのレベルの分布を示した。

男性の感情領域の総合評価に関して、青年が他の年齢群に比べてレベル3の割合が有意に高く、中年が有意に低かった。一方、レベル2の割合は青年が低く、中年が高かった。また、レベル1の割合には年代間の差は見られなかった。身体活動を通して共感したり、課題を克服する意欲などの



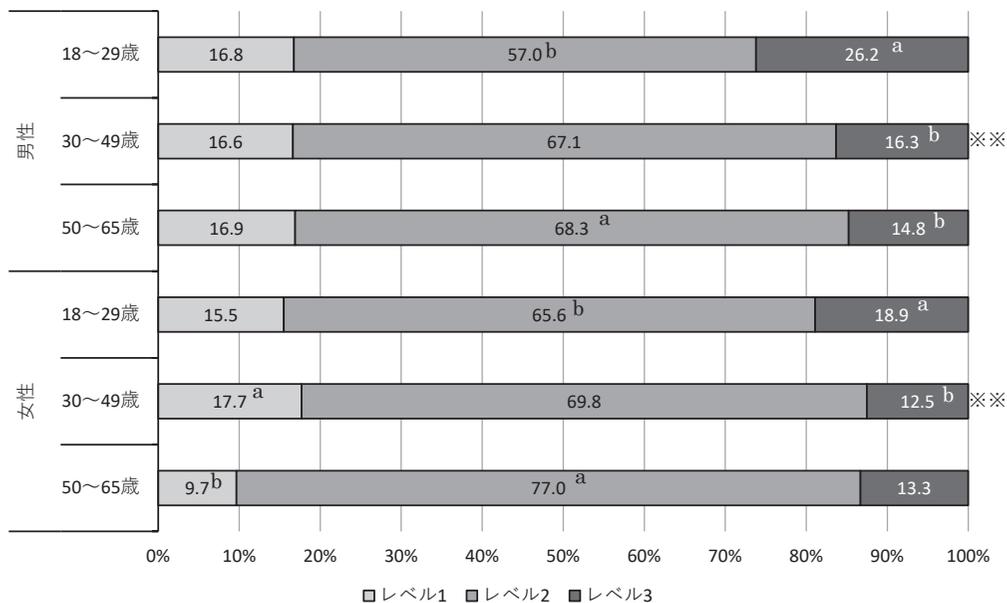
※※ : $p < 0.01$, a : 調整済み残差 > 1.96 , b : 調整済み残差 < -1.96

図7 感情領域における性別・年代別の評価



※※ : $p < 0.01$, a : 調整済み残差 > 1.96 , b : 調整済み残差 < -1.96

図8 認知領域における性別・年代別の評価



※※ : p<0.01, a : 調整済み残差>1.96, b : 調整済み残差<-1.96

図9 社会領域における性別・年代別の評価

前向きな感情を持っている割合は、青年期までは高く、その後はやや低下しており、加齢に伴う生理的、身体的な低下に直面すると感情領域のフィジカルリテラシーも低くなりがちなのだろう。

女性に関して、青年がレベル3の割合が有意に高く、レベル2の割合が低かった。また、壮年のレベル1の割合が有意に高く、全年代間で中年のレベル1が最も低かった。つまり、若い世代の女性には感情領域のフィジカルリテラシーが低い集団が一定数存在しているが、50歳以上の世代ではかなり少ない。これは単に加齢による感情変化ということよりも、現在の世代間の身体活動に対するモチベーション、有能感などの違いが表れていると推測できる。

男女間の違いでわかることは、青年期ではレベル3の割合は男性の方が女性に比べて高く、我が国の若者の身体活動に対するモチベーションや有能感などは男性の方が高いようである。また、全世代を比べて、中年女性のレベル1の割合が突出して低いことから、現中年世代の女性の身体活動に対するモチベーション、自信、心身の自己調整力などが高いことが窺われる。

認知領域における性別・年代別の評価

図8に、認知領域における性別・年代ごとのレベルの分布を示した。

男性の認知領域の総合評価に関して、レベル3の割合が青年において他の年代より有意に高く、壮年と中年は有意に低かった。一方、レベル2の割合は青年で有意に低く、壮年と中年において有意に高かった。また、レベル1の割合に年代差はみられなかった。

女性に関しては、レベル3の割合が青年において他の年代より有意に高く、壮年は有意に低かった。中年でレベル2の割合が他の年齢群より有意に高く、レベル1の割合が他の年齢群より有意に低かった。また、壮年のレベル1は有意に高かった。

男女ともにレベル1の割合は近似しているものの、女性における中年のみ突出して低く、50歳以上の女性においては身体活動のメリットやルール遵守、目標達成の術に関するフィジカルリテラシーが低い集団は少なく、レベル2以上のフィジカルリテラシーを他の年齢群に比べて有してい

る。まさに、運動・スポーツが盛んな世代に育った女性の身体活動に対する認知領域のフィジカルリテラシーが平均的に高いことは特記するに値する。また、青年の男性は3割近くがレベル3のフィジカルリテラシーであり、身体活動を通じた身体活動における認知が育まれている。これは、同性の他年代や女性に比べて現役で運動・スポーツに従事している割合が多く、認知領域の質問項目が現在もしくは近い過去であったことから高いと推察される。一方で男性の認知領域におけるフィジカルリテラシーは加齢と共に低くなって行く傾向にある。

社会領域における性別・年代別の評価

図9に、社会領域における性別・年代ごとのレベルの分布を示した。

男性の社会領域の総合評価に関して、レベル3の割合が青年において他の年代より有意に高く、壮年と中年は有意に低かった。一方で、レベル2の割合は青年で有意に低く、中年で有意に高かった。また、レベル1の割合に年代差は見られなかった。

女性に関しては、レベル3の割合が青年におい

て他の年代より有意に高く、壮年は有意に低かった。中年でレベル2の割合が他の年齢群より有意に高く、レベル1の割合が他の年齢群より有意に低かった。また、壮年のレベル1は有意に高かった。

男女ともに社会領域のフィジカルリテラシーは、前述の認知領域の結果と非常に類似しており、両領域の性別・年代別の特徴の関係性が窺える。男女ともにレベル1の割合は近似しているものの、女性の中年のみ突出して低く、50歳以上の女性においては、身体活動を通じた他者との良好な関わりや文化的な価値観を共有しており、大半がレベル2以上のフィジカルリテラシーを他の年齢群に比べて有している。また、青年の男性は3割近くがレベル3のフィジカルリテラシーであり、現在もしくは近い過去に運動・スポーツに従事していたものほど社会領域のフィジカルリテラシーが育まれていると推測できる。

引用文献

International Sport and Culture Association :
Physical Literacy for Life. <https://physical-literacy.isca.org>

おわりに

内藤 久士¹⁾

身体リテラシー (Physical Literacy) の概念は古くより存在していたが、Whitehead氏 (英国) による定義以来、時代とともに修正が施されているものの、比較的多くの研究がこれをベースに行われ、評価尺度の開発などがなされているようである。その一方、世界のいくつかの国々では、その国における教育やスポーツ政策にあわせて、Whitehead氏による定義とはやや異なる定義を定めて評価尺度や方法などの開発が行われている。また、評価の対象を子どもに限定したもの、あるいはその評価をスコア化して行うものなど、様々な方法や質問紙があることが明らかとなった。さらに、日本における評価尺度の開発の観点からは、学校教育・体育 (学習指導要領)、体力テスト、

アスリート育成システムなどとの関連性にも一定の配慮をすべきであると考えられる。

これらのことから、日本版身体リテラシー (Physical Literacy) 評価尺度の開発にあたっては、次年度以降、その定義とその日本語表記、対象とすべき年齢や区分を明確にし、実際に用いる場面を想定しながら関連する要因を考慮して開発をすすめ、その妥当性・信頼性の検証に取り組む必要があると考えられる。

なお、本年度の研究では、全体で8回のプロジェクト会議を行った。ここに記された報告書の内容以外に、多くの有意義な議論がなされたので、最後に資料としてその議事録を付しておくので、そちらも参照していただきたい。

1) 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科

身体リテラシー (Physical Literacy) 評価 尺度の開発

令和3年度プロジェクト会議#1 議事録

日時：4/23(金) 18:00~20:00

会場：各所属先 (Zoomによるオンライン会議)

議題：

1. 事業概要

1) 事業概要

本研究プロジェクトの事業概要について、資料に基づき説明した(資料1)。

2. Physical Literacyに関するこれまでの取り組み

1) Physical Literacyの定義と評価に関するシステマティックレビュー

Physical Literacy (PL) をテーマとする国際的な定義と評価に関するシステマティックレビューを行っている。

資料記載の検索方法に基づき、検索～スクリーニングまで完了したところである。そのうえで、レビューの進捗について報告された。ここ数年で論文の発表数が急増している。PLに関するテキストも発表されている (Whitehead, 2010/2019, UK)。

PLの定義について、前述 (オリジナル) のWhitehead氏に加え、複数の多少異なる内容が発表されている。ほぼ共通する要素 (標準的な考え方) は、①体力、②生活 (運動) 習慣、③知識、④意欲、と整理される (資料3)。

2) 日本体育・スポーツ・健康学会等

日本体育・スポーツ・健康学会では、これまでほとんど議論してこなかった。

スポーツ振興のあり方について (提言2010) において、スポーツリテラシー指標やライフステージに応じたスポーツライフの質的指標の開発を急ぐ必要があると提言した。

“Physical” とすると体力を強調し過ぎてしまうくらいがあるため、身体と表現した。

スポーツ政策としてのLong Term Athlete Development (LTAD) の中核をなすものがPLであると認識している。スポーツ選手、あるいは

学校体育を中心とした身体リテラシーモデルが存在する (資料5)。

3) 日本陸上競技連盟

(1) 競技者育成指針

LTADやAmerican Development Model (ADM) を参考に策定した競技者育成指針では、「陸上競技を通じた身体リテラシーの育成に関する調査研究」や「身体リテラシー育成の重要性を理解した指導者」の必要性を示すとともに、競技者育成のためのステージモデル (幼少期から高校期まで) においても「身体リテラシーの (継続的な) 育成」の重要性を強調している。

(2) 指導者養成指針

2020年に策定した指導者養成指針においては、「全ての運動・スポーツの基礎となる身体リテラシーを育むために、走・跳・投種目の運動特性を理解し、各種目を指導するための幅広い知識・技能を身につけること」や「身体リテラシーを育む上で最適なスポーツという特性を踏まえて、陸上競技以外のさまざまな競技スポーツのパフォーマンス向上にも寄与できるコーチの養成および活用を推進する」などの方向性を示しており、これらの指針に基づいて、競技者の育成環境の整備や指導者養成システムの再構築などを推進している。

陸連紀要の特集では、「身体リテラシーの定義づけ」「測定・評価法の開発」「ステークホルダーとの理念の共有」「ネットワークの構築」が課題としてあげられている (阪南大学 早乙女先生/<https://www.jaaf.or.jp/about/publish/2018/>)

※なお日本陸連では、両指針に共通する身体リテラシーの定義 (注釈) として「さまざまな身体活動、リズム活動 (ダンス)、スポーツ活動などを、自信をもって行える基礎的な運動スキルおよび基礎的なスポーツスキル。身体リテラシーには、運動を楽しく、有能感 (Competence) をもって、意欲的に行えるといった心理的な側面、あるいは仲間と協調したりコミュニケーションしたりできる社会的側面も含まれる。」を採用している。

4) 中国における身体リテラシーの定義と政策

国家体育総局の研究プロジェクトとしてPLに関する研究に取り組んでいる。

“Scientific Fitness Literacy”として、その要素を定義している。中国全土で小4～高3を対象に調査を実施した（N=147,245!）。実際に使用した調査用紙については、今後翻訳したうえで本研究班において情報共有することとしたい。質問紙の構成について8つの柱立てに基づいている。国のスポーツ政策を検討するためのエビデンスとするべく本調査を実施した。内的要因（ライフスタイル、個々の社会性）と外的要因（家族環境、学校環境、地域環境）に分けられる。PLへの影響要因として、1.生活習慣、2.家族環境、3.個々の社会性、4.地域環境、5.学校環境、が認められた（資料9）。

5) その他

(1)身体リテラシーのとらえ方および学校体育との関係性について

- PLを幅広く定義するべきではないか。
- 学校教育に適正に位置づけることができないか（学習指導要領の記載内容と学校体育の実践内容に齟齬があると思われる）。

a. 身体リテラシーをとらえる視点について 独立行政法人 日本スポーツ振興センター（JSC）

https://www.jpnsport.go.jp/corp/Portals/0/joukoku/jsc_insight_kodomo_1903brochure.pdf

「生涯にわたるスポーツ参画を通じ、心身ともに健康で幸福な社会生活を営む上で持っておくべき基礎的素養」

- アタマ（認知）：スポーツに関する知識や理解
- ココロ（心理）：意欲や動機
- カラダ（身体）：基礎的動作
- カカワリ（社会性）：スポーツを通じた人とのつながりや関わり

➢ ココロ、カカワリの部分をどのように入れていくのか、視点として考える必要あり

b. 学習指導要領との関係について

これまでの体育学習：自分の体の調子を把握し、

それに合わせて運動を実施する力ではなく、人と競争して負けない身体へのまなざしが強調されすぎてきた。

➢ 「競争する身体」「マイペースではなく、ユアペース」

- 新学習指導要領においては、心身一体ととらえること、自分の体の調子に気づき、改善できることが謳われている（小・中・高校共通）。

➢ 自らの身体の状態に気づき、改善できる力

→ 身体リテラシーの重要な課題ではないか

例：小学校体育目標

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

（下線部松尾）

■ 体づくり運動 5年生・6年生 抜粋

A 体づくり運動

体づくり運動について、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

- (1) 次の運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方を理解するとともに、体を動かす心地よさを味わったり、体の動きを高めたりすること。

ア 体ほぐしの運動では、手軽な運動を行い、心と体との関係に気付いたり、仲間と関わり合ったりすること。

- (2) 自己の体の状態や体力に応じて、運動の行い方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること。

c. 心とカラダのとらえ方

➢ 自らの身体の状態に気付ける力をとらえる視点として、どの程度自らの身体の状態に対して意識を向けられるか、どのように判断しているか 等も重要な視点となるかもしれない

例：村上春樹

人間におけるインテレクチュアルなものとのフィジカルなものとの呼応

⇒ 身体が言ってくる言葉に対して耳をすませる

⇒総体として身体にどれだけコンシャスになれるかが重要

例2) 丘沢静也(ドイツ文学者)

- 「からだの教養」は、自分の限界ではなく、限度をわきまえ、無理をせず、ほどほどを美德とし、争いごとを好まない。
 - からだを動かしていると自分が世界に対立しているのではなく、世界の一部だと感じることが出来る。
 - 体調にあわせてスポーツを調整できる。それがフィットネスの教養だ。
- ※ 以上、別添資料参照(松尾先生ご提供)
- 健康教育リテラシーとして大学生を対象にしてアンケート調査を実施した。子どもと大人では異なる評価尺度を用いるべきではないか。(春日先生)

<以下、委員各位からのコメント>

PLは、スポーツ現場と学校教育(競技力向上と生涯スポーツ推進)が共通して目指すものとなるのではないかと。アスリート育成と学校教育に共通する要素と個々の要素が存在しているのではないかと。

第3期スポーツ基本計画の柱として位置づけられないか。

“Awareness”をキーワードとして使えないか。

“Sport Literacy”という表現は、諸外国では見られない。“Physical Literacy”をどう定義するかが重要ではないか。

3. 事業計画、作業分担

- 1) 文献研究
- 2) オンライン調査
- 3) 予備調査
- 4) その他

今年度は、文献研究を中心に取り組む。

加えて、以下を検討する。

- オンライン調査
→体育授業でどんなことを学んだ?自由記述で回答してもらえないか?

→質問項目について、班員各位から提案いただきたい。

→保護者や指導者向けの調査項目候補を提案いただく。

- 東京オリンピック(1964年)代表選手を対象とする質問紙調査
→調査の実施や内容について検討する。

4. 研究成果の公開方法

- 1) 研究報告書
- 2) HP(JSPO/ACP総合サイト)への情報掲載(Physical Literacyとは!?)
- 3) 壁新聞の発行
- 4) 質問紙の制作、公表
- 5) JSPO公認スポーツ指導者養成テキストへの掲載
- 6) 関係機関との連携(スポーツ庁、教育機関、NF)

会議資料

1. 事業概要
2. 班員名簿
3. Definition and Assessment of Physical Literacy: A Systematic Review(鈴木班員ご提供資料)
4. スポーツ振興のあり方について(提言2010): https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo5/010/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2011/11/11/1312448_13.pdf
5. スポーツ振興基本計画、競技力向上方策の検討(伊藤班員ご提供資料)
6. 体育科教育特論-体育科における人間形成論-(日本体育大学大学院教育学研究科紀要第2巻第1号2018)
7. 日本陸上競技連盟 競技者育成指針: <https://www.jaaf.or.jp/pdf/development/model/350dpi.pdf>
8. 日本陸上競技連盟 指導者養成指針: <https://www.jaaf.or.jp/pdf/development/model-coach/350dpi.pdf>
9. 中国における身体リテラシーの進捗について

(鄧班員ご提供資料)

身体リテラシー (Physical Literacy) 評価 尺度の開発

令和3年度プロジェクト会議#2 議事録

日時：6/9 (水) 18:00~20:00

会場：各所属先 (Zoomによるオンライン会議)

議題：

1. 文献研究ほか

1) Physical Literacyの定義と評価に関するシ
ステマティックレビュー

資料に基づき、カナダ、アメリカ、オーストラ
リアにおける以下5つのPhysical Literacy (PL)
の定義と評価を説明した (資料1)。

①The Canadian Assessment of Physical Litera
cy (CAPL)：カナダ

- 対象：8~12歳
- 4つの要素から構成され、各要素のトータル
スコアにより評価する。
- 約200件のPLに関する研究の中で、この
CAPLが最も多く引用されている。

②Physical Literacy Assessment for Youth
(PLAY)：カナダ

- 対象：7~12歳
- 4つの要素から構成され、それぞれ対象や目
的の異なる6つに分類して評価する。

③Passport for Life：カナダ

- 対象：Grade 1~12
- 自己評価と客観的評価、それぞれ2つの観点
から評価する。

④The Society of Health and Physical Educators
(SHAPE) America：アメリカ

- 対象：Grade K~12
- 4つの要素から構成され、全体を5段階で評
価する。

⑤Australian Physical Literacy Framework
(APLF)：オーストラリア

- 対象：全年齢
- 4つの要素から構成され、それぞれ5段階
に分類して評価する。
- 社会性に関する要素が含まれる。

<鈴木班員より>

- 最終的に、年度別・国別の報告件数(量的な指標)
に加え、PLの定義および定義の共通項、対象
年齢、評価方法を整理する (資料2)。

<班員各位より>

- 社会性 (Social) に関する要素が非常に重要で
あると考えるが、カナダの研究には含まれてい
ないのか。Whitehead氏によるPLの定義では、
心理的、認知的、身体的要素が中心であるが、
社会性に関する要素を含めても良いかもしれな
い。

⇒岡出美則氏 (日本体育大学) の研究によると、
カナダにおけるPLの研究は、客観的にスコ
アリングされている一方で、Whitehead氏が
定義したPLの概念 (特に情意面) の十分な
評価ができていないという課題がある。

⇒社会性については、⑤オーストラリア
(APLF) におけるPLに含まれているが、PL
の定義においては知識 (Knowledge) や行
動 (Behavior) を評価することが多い。身体
活動には社会性が大いに関係していると考え
られるが、実際には身体活動量として定量的
な評価が行われている。

⇒国ごとにPLを定義しているため、日本にお
いては、例えば体育の学習指導要領の内容に
重点を置くなど、独自の考え方が存在しても
良いのではないかと。

- 子どもに対するPLは、運動スキルや (生活)
環境が評価の要素になると思うが、大学生や大
人に対しても同様に評価すると考えてよいの
か。

⇒⑤オーストラリア (APLF) は、全年齢に関
する (生涯を通じた体育・スポーツへの関わり
を) 評価をしている。

⇒①カナダ (CAPL) は、発育に伴い身につけ
てほしい要素を評価する (=対象年齢が子ども
に限られる)。

- PLはより広義の意味でのリテラシーとして考
えるのが主流なのか。

⇒概念としてはWhitehead氏が提唱するよう
に広い範囲での定義になるが、それを評価する
際に定義との乖離が起こる。

- 低年齢の子どもにおいては、知識や環境の自己評価が難しいと考えられるため、子どもの能力と保護者の評価を組み合わせることで評価していくこともできるのか。

⇒②カナダ (PLAY) では、保護者に関する評価が含まれているように、組み合わせることで評価を行うことになると思う。

⇒④アメリカ (SHAPE America) の中で基礎的な運動能力 (Fundamental motor skills) を評価する際には、既存の評価尺度 (PGMD) を用いている。評価の構成要素を提示できれば、妥当性のある既存のテストを用いて評価することもできるのではないかと。

- ③カナダ (Passport for life) における Living Skill の要素も取り入れて良いのではないかと。
- ①～⑤の折衷案のような内容で定義できないか。
- 新体力テストを活用した評価尺度にできないか。
- 子どもを主な対象としつつ、生涯にわたって評価できる尺度が開発できるとよい。
- 日本で PL の概念を普及する際の表現を検討する必要がある。

⇒からだリテラシー、からだの教養、からだの素養

⇒中国：科学的な健身・素養、JSC：基本的な素養

⇒キーワード：教養、素養、積み上げる、磨き上げる、育む

- PL を体育における学力のような位置付けにすると、教育現場で普及しやすいのではないかと。
- PL の国際比較 (国ごとの PL スコア：CAPL などを活用) に関する研究はないか。
- ⇒現在のレビューの中にはない、岡出氏より情報提供していただけたらと思う。

2) 関連情報の整理

JSC 子どものフィジカルリテラシー習得に関する家庭環境調査 (2018) について

- 上記⑤オーストラリア (APLF) を参考している (資料3)。
- 最近、独立行政法人日本スポーツ振興センター

(JSC) ではオーストラリアから多く情報収集しているようなので、その一環で作成した資料だと思われる。

子どもたちのヘルスリテラシー

- 本PJで協議しているPLと少し異なる内容だと思うが、良い内容があれば取り入れることもできるのではないかと (資料4)。

2. オンライン調査

アクティブチャイルドプログラム (JSPO-ACP) 普及・啓発PJで取り組んでいる「子供の運動遊び定着推進のための官民連携推進事業」で保護者を対象としたオンライン調査 (JSPO-ACP の認知度、JSPO-ACP 普及のためのプラス・マイナス要因) を実施する予定である。その中で、JSPO-ACP に関する内容に加え、PL に関して調査したいと考えている。

時期は、今年度下半期を予定しているが、本PJの進捗状況によっては、年末年始に実施することも考えられる。サンプル数は10万人。子どもの有無や指導者等の条件でスクリーニング調査することも考えている。

- 子ども自身が答えた内容を保護者が入力することも想定される。
- ①カナダ (CAPL) の評価尺度を活用してはどうか。
- 社会性 (⑤オーストラリア (APLF) の尺度) についても調査する。

3. その他

1) 今後の課題

- (1) Physical Literacy の定義
- (2) ジュニアスポーツにおける Physical Literacy の重要性
- (3) 指導者育成における Physical Literacy の位置づけ
- (4) Physical Literacy と学校体育との関係性
- (5) Physical Literacy 評価尺度の開発に向けた予備研究

- PL の日本語の表現を検討する。現在は、「身体リテラシー (仮称)」と考える。

- ⇨「身体リテラシー」や「フィジカルリテラシー」と片仮名で表記し、その中に様々な意味合いを持たせるのはどうか。
- ⇨保護者を含め広く一般の方に普及することを考えると、分かりやすい言葉にした副題が必要ではないか（例：身体リテラシー～からだの教養～）。

2) 研究成果の公開方法（成果物のイメージ）

(1) 研究報告書

- 1) 文献研究, 2) 海外の評価尺度（上記①～⑤）の解説・比較, 3) オンライン調査の結果, 4) 本PJで決定したPLの定義を記載する。

(2) HP（JSPO/ACP総合サイト）への情報掲載（Physical Literacyとは）

(3) 教育機関向けポスター（壁新聞）の発行

- 令和3年度に全国の小中学校に向けてJSPOが制作・配布（年5回）する予定のJSPO-ACP壁新聞の中で、PLに関する情報を掲載することが可能である。その場合、本PJからの支出経費は発生しない。

(4) 質問紙の制作, 公表

(5) JSPO公認スポーツ指導者養成テキストへの掲載

(6) 関係機関との連携（スポーツ庁, 教育機関, NF)

→学習指導要領, スポーツ基本計画, 競技者育成・指導者養成指針ほか

- 第3期スポーツ基本計画の策定状況も考慮し、同計画の検討部会においてJSPOから本PJの情報発信を行うなど、PLに関する施策が取り入れられるよう働きかけを行ってはどうか。
- 中央競技団体（NF）、都道府県競技団体（PF）、都道府県体育・スポーツ協会、スポーツ少年団におけるPLに関する取り組みを整理し、課題を明らかにする。
- 体育系大学（あるいは教育学部、UNIVAS加盟大学）の学生を対象とする実態調査を行い、課題を明らかにすることも検討する。

- 上記(1)～(6)の他、Sport Japanへの情報掲載（特集記事）を検討する。

3) その他

- 令和3年度第1回スポーツ医・科学委員会において、「身体」の定義は多様であるため、東洋的思想の身体観に基づくリテラシーの定義についても考察の一端に加えてもよいのではないか、という意見があった。

⇨今後、菊幸一氏（筑波大学）から情報提供いただいてはどうか。

⇨「からだ」の捉え方の観点から、「野口体操」を考案した野口三千代氏の弟子である羽鳥操氏（立教大学）から情報提供いただくことも考えられる。

- 今後の研究課程で必要な書籍等があれば、JSPOが購入し班員各位に配布することも可能である。

会議資料

1. PLの定義と評価（Definition and Assessment of Physical Literacy）（鈴木班員ご提供資料）
2. 文献リスト（鈴木班員ご提供資料）
3. 子どものフィジカルリテラシー習得に関する家庭環境調査（2018）（JCS）：https://www.jpnsport.go.jp/corp/Portals/0/joukoku/jsc_insight_kodomo_1903brochure.pdf
4. 子どもたちのヘルスリテラシーの育成（健康づくり2019.6）

参考. PJ会議#1 議事録

身体リテラシー（Physical Literacy）評価尺度の開発

令和3年度プロジェクト会議#3 議事録

日時：7/16(金) 17:00～19:00

会場：各所属先（Zoomによるオンライン会議）

議題：

1. Physical Literacyをめぐる論議

岡出氏から資料に基づき情報提供（プレゼンテーション）をいただき、その後、岡出氏および班員各位による意見交換を行った（資料1）。

<岡出氏の補足説明等>

- 国によってPhysical Literacy (PL) 構成要素の区分が若干違う。
- “Competence” は, “literacy” の下位概念である。
- PLは生涯にわたるスポーツへの関わりを表現した。
- Whitehead氏: 3domain, オーストラリア・ユネスコ: socialを含む4 domain.
- Whitehead氏: affectiveの中に, affectiveとsocialの概念が含まれている。
- アメリカでは, 教科としての体育のステイタスを安定させる^{*}ことを目的としてPL概念を取り入れた(それまでの用語の使い方を一部改変した)。
 ※評価する必要がある: 知識テストの開発を試み, 授業中の行動を観察評価, 自己評価, 生徒同士での他者評価を検討した。
- また, 長期的アスリート育成モデルの一環としてPL概念を取り入れた。
 →同じ国(アメリカ)の中でも用語の使い方(PLを構成する概念)が統一されていない。
- カナダでは, Long Term Athlete Development (LTAD) の一環として競技団体においてPLを取り入れた。学校教育の体育の場には, それらを再構成して取り入れられた。また, 学校教育・地域の指導現場だけでなく, コーチ・保護者への教育においても意識改革がなされた(多様な価値観を認める)。
- PLを日本語で表現すると, Literacy (リテラシー) は, 他の情報やメディアリテラシーと差別化されないよう, そのまま使うのが望ましいと考える。Physicalについては, 身体的やフィジカルと表現すれば良いと考える。
- 目的を達成させる: 教科としての体育の価値を確保する, 長期的アスリート育成課程に取り入れる。
- 1) 学校で育てるPL, 2) 地域で育てるPL, 3) アスリート育成過程を通して育てるPLにおける価値観・概念を一貫させる必要がある。
- よりよいPLのあり方を異なる立場の人々が, その価値観を共有できるよう配慮するべし。
- PLとは, 身体的活動を価値づける(動機づける・気づかせる・身につける)もの。
- 体育科教育において, PLの構成概念としての4領域を育むことが重要である。
- スポーツを通して, 社会を変える, 生活を豊かにする, 他者との関わり方を学ぶ等, スポーツをツールとして活用することは必要だと考える。
- 4domainに主従関係はない(並列に位置づけられる)とはいえ, 身体活動量の確保(増強)が主要な目的となる!?
- 学校体育とスポーツの現場とでPLの概念が異なる。基礎となる概念は, 学校体育とスポーツとで統一させるべきである。
 →学校体育: 最低限必要とされる素養を誰もが学べる。
 →スポーツ: アドバンスドな内容も含まれる。
- PL: 生涯にわたって身につけるべき素養
 →年代に応じて身に付けるべき異なる能力が存在する。
 →子ども: 発達段階による制約を排除した内容を届けるべき。
 →学校体育で達成すべき(身につけさせるべき)PLを定義してもよいのではないか。
- 学校体育と学校外のスポーツ現場の双方でPLを育むべき。双方における最低限の共通理解は必要である(カナダがロールモデルになり得るかもしれない)。
- 体育科教育: 保健体育なのでHealth and Physical Literacyとして育むべし健康に関する要素を取り入れることは問題ない。

2. 文献研究

文献研究の進捗について口頭で報告された。

- PLの定義だけでなく, 評価法についての記述がある論文を精査している。
- 5domain: Physical, cognitive, affective (オーストラリアは+social)+behavior(評価尺度として)が定義されている。
- 台湾(台湾師範大学)において独自の取り組みがされているかもしれない。
- Athlete developmentに係るPLのレビューが不足しているため, PubMedやWeb of Science以

外に掲載されている論文も整理する。

3. 諸外国におけるPLの評価尺度

議題1で協議した内容と同様。

4. 我が国におけるPLの定義

議題1で協議した内容と同様。

5. オンライン調査実施計画

オンライン調査の実施計画について事務局より報告した。

次回会議以降、調査項目について整理する。

スケジュール：8～10月調査票制作、11～12月調査実施、R4.1～2月レポート作成

6. 我が国におけるPLに関する実態調査

1) 中央競技団体 (NF)、都道府県体育・スポーツ協会やスポーツ少年団におけるPLに関する取り組み

2) 体育系大学 (あるいは教育学部、UNIVAS加盟大学) の学生を対象とする実態調査

・独立行政法人日本スポーツ振興センター (JSC) における調査等、今ある情報を整理し、改めて共有する。

7. その他

1) 今後の課題

- ・NFの実態調査 (公認スポーツ指導者やスポーツ少年団も可能)
- ・日本版PLの定義 (諸外国との定義と基礎は共通する、一部は日本独自の概念) の検討
- ・PLの定義・概念に関する啓発法 (対象:子ども、指導者、保護者) の検討
- ・体育とスポーツにおいて共通して (あるいは、それぞれに) 育むべきPLの概念の検討
- ・オンライン調査における調査票の検討 (学校体育やスポーツ現場で育てるPL、価値観)

2) 研究成果の公開方法 (成果物のイメージ)

- (1) 研究報告書
- (2) HP (JSPO/JSPO-ACP総合サイト) への情報掲載 (Physical Literacyとは)
- (3) 教育機関向けポスター (壁新聞) の発行

(4) Sport Japanへの情報掲載 (特集記事)

(5) 質問紙の作成、公表

(6) JSPO公認スポーツ指導者養成テキストへの掲載

(7) 関係機関との連携 (スポーツ庁、教育機関、NF)

→学習指導要領、スポーツ基本計画、競技者育成・指導者養成指針ほか

会議資料

1. Physical Literacyをめぐる論議 (岡出氏ご提供資料)

参考: PJ会議# 2 議事録

身体リテラシー (Physical Literacy) 評価尺度の開発

令和3年度プロジェクト会議# 4 議事録

日時: 9/11(土) 13:00~15:00

会場: 各所属先 (Zoomによるオンライン会議)

議題:

1. 文献研究

・最新版Canadian Assessment of Physical Literacy (CAPL) について、資料に基づき説明した (資料1, 2)。

→子どもを対象とする質問紙による運動習慣、運動有能感、知識や意欲に関する質問とスコアリングについて紹介した。

→対象年齢は、8～12歳を推奨している。なお、先行研究では、もう少し上の年齢にも適した事例がある。

→知識について、日本版では、学習指導要領とのすり合わせが必須となる (心拍数など学んでいない?)。

→CAPLではその構成要素を、知識、技能、行動 (+心理指標を少し) に偏重している (教養として学ぶべき領域が狭い) 印象を受ける～今後、スポーツ少年団 (ジュニアスポーツ) 活動ではより広い意味でのPhysical Literacy (PL) の啓発が重要となる～自分の身体に対する気づきや対処法 (意識) を学ぶことにこそ価値がある (体育の本来の目的～最も身近

な自然である自らの身体を教材とする学び)、
→社会性に関する要素(フェアプレイ、マナー、
チームワーク、思いやりなど)がPLとして
重要ではないか。

→質問項目について、文言の表現にブレが見ら
れる(修正の余地あり)。

→教育現場におけるPLに関する認識が薄い
のではないか～パフォーマンスが評価基準とな
りがち。

• 高齢者のPLについて研究している

→先行研究がほとんどない。

→高齢者を対象とする取り組みも必要ではない
か？

→今後のあるべき生涯スポーツとは、年代や活
動フィールドに切れ目のない、あまねく人々
を対象とするスポーツ活動を提供すべき。
この根幹となるものがPLの概念となり得る
のではないか～スポーツ基本計画にPLの概
念を記載したい。

→まずは子どもを対象とするPLに関する研究
を進めたい。

2. 実態調査

1) 公認スポーツ指導者やスポーツ少年団にお ける調査

• American Development Model (ADM) の基準
を参考に調査項目を作成し、スポーツ少年団
における実態調査を行った(2019年10～12月)(資
料3)。

→スポーツ少年団に所属する子どもについて
3,452名(小学1年生～中学3年生)から回
答が得られた。

• 実態調査により、スポーツ少年団活動にお
ける課題が明らかとなった。

→フェアプレイに関する直接的な質問が必要
だったのではないか。

→子どもの指導者に対する評価が高い指導者
の特徴を明らかにできないか(その逆も)。

2) 中央競技団体(NF)における実践事例(好 事例)の収集

• 「発育期のスポーツ活動の在り方に関する研究
プロジェクト」において、5つのNFにおける

取り組みについてヒアリング調査を行った。そ
の概要は、資料記載の通りである(資料4)。

→必要があれば、改めてこれらの団体、あるい
は別の団体に調査協力を要請する。

3) JSPO-ACP 普及に関するオンライン調査

• 調査票作成(～10月末)、調査実施(11～12月)、
分析作業、レポート作成(1～2月)(資料5)

• 調査票作成に際して

→CAPLの質問項目をそのまま使うことは難し
い。

→ADMの質問項目を応用できないか。

→親から見た、子どもの実態や、子どもの成長
に伴う運動習慣等の変化等について調査す
る。

→具体的に、何問程度PLに関する質問項目を
設定できるか確認する。

4) 体育系大学の学生を対象とする調査

• 来年度以降の課題となる予定。

3. 日本版PLの定義

• 学校体育やスポーツ現場で育むべきPLとは、

→体育とスポーツにおいて共通して(あるいは、
それぞれに)育むべきPLの概念

• 最終年度に日本版PLの定義を固めることを目
的とする。

→1年目は、カナダの取り組み(CAPL)をベー
スにして調査、検討する。

4. PLの啓発法

対象：子ども、指導者、保護者

• スポーツ指導者の専門性について

→指導者が専門的なことを教えることが重要
ではあるが、日本ではシステムとして複数
種目を楽しむような活動を推奨していない。
ジュニア期における複数種目、多様な活動へ
の取り組みをスポーツ組織が主体となり普及
させる必要があるのではないか。

→スポーツ指導者はスポーツ活動に関するジェ
ネラリストであり、そのうえで、それぞれの
専門分野をもつべきではないか。

• 学校期ではなく、年齢に基づくスポーツ活動や
啓発が求められるのではないか。

- 現状、スポーツ現場では相対年齢効果の弊害がある。
- パフォーマンスによる評価の偏重が見られる(課題)。
- パフォーマンスに代わる評価尺度としてPLが有効となるのではないか。

5. その他

- 1) 今後の課題
- 2) 班員の追加委嘱等(日本体育大学 岡出美則氏)
- 3) 研究成果の公開方法(成果物のイメージ)
 - (1) 研究報告書
 - 今年度末に発行する。
 - (2) HP(JSPO/JSPO-ACP総合サイト)への情報掲載(Physical Literacyとは)
 - (3) 教育機関向けポスター(壁新聞)の発行
 - ACP壁新聞(2022年1月発行号を想定)へPLに関するコラムを掲載する。
 - (4) Sport Japanへの情報掲載(特集記事)
 - 特集原稿としてPLに関する原稿をエントリーさせたい~計画的に準備を進める(2022年度中に特集原稿を掲載できないか)。
 - JSPO-ACPに関する連載企画において、PLをテーマとするコラムを掲載することは可能である。
 - (5) 質問紙の作成、公表
 - (6) JSPO公認スポーツ指導者養成テキストへの掲載
 - (7) 関係機関との連携(スポーツ庁、教育機関、NF)
 - 学習指導要領、スポーツ基本計画、競技者育成・指導者養成指針ほか

会議資料

1. Canadian Assessment of Physical Literacy (CAPL) 質問票(英文, 和文案)(鈴木班員ご提供資料)
2. Canadian Assessment of Physical Literacy (CAPL) テスト実施マニュアル抜粋版(和文案)(鈴木班員ご提供資料)
3. スポーツ少年団実態調査 調査用紙(事務局

提供資料)

4. 発育期のスポーツ活動ガイド: https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/supoken/doc/ltld/ltld_guide_20210331.pdf
5. ACP普及に関するオンライン調査実施概要(事務局提供資料)

参考: PJ会議#3 議事録

身体リテラシー(Physical Literacy) 評価尺度の開発

令和3年度プロジェクト会議#5 議事録

日時: 10/14(木) 18:00~20:00

会場: 各所属先 (Zoomによるオンライン会議)

議題:

1. 文献研究

→ Australian Physical Literacy Framework (APLF) (資料1)

- Physical Literacy (PL) の構成要素として、Canadian Assessment of Physical Literacy (CAPL) に加えて、Socialの領域が追加されている。
- CAPLのような定量的な得点評価ではなく、(生涯を通じて身につけるべき) それぞれの要素について、定性的にステージ0~4で評価する。
- この利点は、指導者があらゆる年代の指導対象者の発達段階を観察評価することができる点にある(自己評価することも可能である)。
- CAPLとの共通点について、後日確認する。PLのとらえ方について、国によって異なる。
- オーストラリアは、身につけるべき構成要素をそのまま採用したと思われる(評価することを前提としていない!?)。評価するとなれば、既存の研究を用いることとしている。

→ CAPLに関する進捗があれば

- 得点評価することを前提に構成要素を検討したものと思われる。

→ ヨーロッパ(PL for Life Project)で開発された自己評価システムが存在する。

- <https://physical-literacy.isca.org/tools/>
- 市民、教師、コーチを対象とする評価法。
- 次回会議において確認する。

2. JSPO-ACP普及に関するオンライン調査

→スポーツ少年団指導者対象調査項目を紹介する
(資料2, 3).

- 指導者を対象とする調査項目を一般の方にも調査することで、比較・検討できないか。
- オーストラリアの4領域に関わる質問項目を設定する。
- 保護者自身のこと、保護者から見た子どものことを調査する。
- 全体で25~30問設定可能。そのうち、PLに関する設問は、12問程度を設定可能である。
- 中国における取り組み実績(質問項目)を参照する。

→指導者を対象とするPLに関する調査を改めて実施できないか?

→今後の部活動制度構築に関わる調査など。

- 公認スポーツ指導者を対象として、改めて計画する(少し時間をかけて準備する)。

→質問項目を協議する。

3. 日本版PLの定義

→学校体育やスポーツ現場で育むべきPLとは。

→最終年度に日本版PLの定義を固めることを目的とする。

- オーストラリアの4領域による構成、生涯を通じて学び続けることを強調したい。
- 現状の体力テストは、学習指導要領に記載された「生涯を通じたスポーツライフの実現」に関して、そのごく一部しか評価できていない。
- 子ども(アスリート)、指導者(教師)や保護者を対象として、身につけるべきことを整理する。
- 指導者養成制度の3要素(思考判断、態度行動、知識技能)×リテラシーを構成する4領域のマトリクスを整理する。
- カナダにおいて、Long Term Athlete Development (LTAD) とCAPLは連携している?: 次回会議までに確認・整理する。
- オーストラリアにおいて、FTEM^{*}とAPLFは連携している?: 次回会議までに確認・整理する。
- 日本陸上競技連盟やJSPOにおける先行研究と本プロジェクトの方向性に齟齬はないと思われる

る: 整合性を確認することで、より説得力をもたせられるのではないか。

- 中国におけるPLの定義(構成要素)を参照する: 次回会議において紹介する。

※F (Foundation), T (Talent), E (Elite), M (Mastery)

4. PLの啓発法

→対象: 子ども, 指導者, 保護者

- 子ども(アスリート)、指導者(教師)や保護者を対象とする啓発(さらには大人、高齢者を対象とする: すべての人々を対象とする): カナダやオーストラリアでは必ずしも子どもに焦点化している訳ではない~全国民を対象としている。
- 生涯を通して身につけるべき教養であることを強調したい。
- エビデンスとエピソードを組み合わせた啓発。

5. 研究成果の公開方法

1) HP (JSPO/JSPO-ACP総合サイト) への情報掲載 (Physical Literacyとは)

2) 教育機関向けポスター(壁新聞)の発行

→PLに関するコラムの掲載。2022年1月発行号を想定?

3) Sport Japanへの情報掲載(特集記事)

4) JSPO公認スポーツ指導者養成テキストへの掲載

5) 関係機関との連携(スポーツ庁、教育機関、NF)

→学習指導要領、スポーツ基本計画、競技者育成・指導者養成指針ほか

- 指導者マイページやJSPOスポーツニュース、フェアプレイニュースを活用して、PLを啓発している。

6. その他

0) 体育学会におけるPLに関する取り組み実績

→学校体育の方向性(あり方)についての要望

1) 今後の課題

- APLFの読み込み

- ヨーロッパにおける評価システムの読み込み
- JSPO-ACP普及オンライン調査の質問項目案の検討～オーストラリアの4領域をカバーする
- カナダのLTADとCAPL, オーストラリアのFTEMとAPLFの連携について整理
- 中国におけるPLの定義(構成要素)の紹介

会議資料

1. Australian Physical Literacy Framework : https://www.sportaus.gov.au/__data/assets/pdf_file/0019/710173/35455_Physical-Literacy-Framework_access.pdf
2. スポーツ少年団実態調査(ADM for Sports Coaches) 関連資料(事務局提供資料)
3. 発育期のスポーツ活動ガイド: https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/supoken/doc/ltld/ltld_guide_20210331.pdf

参考: PJ会議#4議事録

身体リテラシー(Physical Literacy) 評価尺度の開発

令和3年度プロジェクト会議#6 議事録

日時: 11/16(水) 15:00~17:00

会場: 各所属先 (Zoomによるオンライン会議)

議題:

1. 文献研究

中国におけるPLの定義(構成要素)

- 鄧班員より資料に基づき報告された(資料1-1, 1-2).
- これまで, 身体素養, あるいは体育素養として定義された.
 - この度, 新たに, 科学健身素養(=Scientific Fitness Literacy)として定義された.
 - 素養(リテラシー)を個人性, 行動の持続性, 顕在意識・潜在意識とする.
 - 認知, 体力, スキル, 行動・習慣の4つのカテゴリーについて, 質問紙により調査した.
 - 対象: 1,112校の小学生~高校生147,245人
 - 健身知識の選択肢3つ: 1. そうである, 2. ちがう, 3. 分からない

選択肢にポイントが設定され, 合計ポイントが高いとLiteracyが高いとみなす.

※質問(和訳)については, 資料1-2を参照(会議終了後に鈴木班員より提供).

→ 健身スキル: 参加したスポーツと得意なスポーツ

選択したスポーツが多いとLiteracyが高いとみなす(と考えられる).

→ 外部の環境: 家族のスポーツ参加, 自身のスポーツ参加への支援

→ 内部要因(生活習慣, 社会性)と外部要因(環境)

→ アンケート結果からPhysical Literacy(PL)に影響を及ぼすものの順序を提示(スライド17).

- 科学健身素養(Scientific Fitness Literacy)は, Physical Literacyを中国語に翻訳し, さらに研究者の解釈(オリジナリティ)を加えた定義であると推察される.
- PLの定義について, 諸外国の定義を参照に, デルファイ法を用いて検討する(絞り込む).
- テスト~リテストや, 因子分析により構成概念(調査項目)を検討する(絞り込む).
- 点数化するという意味では, ヨーロッパの中ではカナダにおけるPLの定義に近いかもしれない.
- 子どもから大人まで国民の理解度が高まらない限り, 疫学的な健康レベルは上がらない. そのための新たな施策のための調査である印象. 調査の実施規模においても国の特性を生かした調査ではないか.
- 外部要因(環境)についてはエコロジカルモデル(個人→社会への影響)の要素を調査していると考えられ, ヨーロッパでは同様のカテゴリーにおける調査は見受けられない.

ヨーロッパにおける評価システム

鈴木班員, 岡出班員より資料に基づき説明・報告された(資料2, 3).

- Physical Literacy for Life(PL4L)のプロジェクトは, ヨーロッパとオーストラリアでの基礎研究を参照.

- The project will deliver a common concept and definition of PL.
- Program for International Student (PASA) にPLの概念を組み込むことが目的。
- 教育全般にPLのもつ価値を認識してもらえ、効果的な指導法を提案した。
- 対象：市民、教師（トレーニングツールが付属）、コーチ
- 領域：身体、情緒、認識、社会
- 回答するドメインごとに質問項目が若干異なる（回答者に合わせた内容）。
- テスト回答後にレベル（1～3）のフィードバックが回答者に送付される。
- 点数によるレベルの設定根拠、テストを日本版に和訳し利用して良いか調査団体に確認する。

<質問項目>

①身体分野

- 身体活動：30分以上歩いた日数
- 座位行動：平日に座って過ごした時間（iPaqのまま）
- 筋力
- 全身持久力
- からだを移動させる技術
- 用具を使って移動する技術

②心理（感情）領域

- モチベーション
- 自信
- 身体活動の制御
- 感情の制御

③認知領域

- 知識
- ルール（+戦術）
- 戦略：計画性！?

④社会領域

- 倫理
- 社会・文化
- 協力

2. JSPO-ACP普及に関するオンライン調査

アクティブ チャイルド プログラム (JSPO-ACP) 普及に関するオンライン調査の質問項目について協議し、下記の通り取り進めることとした

(資料4)。

- オーストラリアの4領域に関わる質問項目（資料2：16問（市民対象））を設定し、日本人のPLの標準値を測る（18歳～65歳の一般人をランダムに10万人）。
- JSPO-ACPに関する調査とPLに関する調査をクロス集計する方向で準備する。
- 設問16問について、日本人が回答しやすいよう和訳を適宜アレンジし、不要な設問があればブラッシュアップする。

3. 日本版PLの定義

→学校体育やスポーツ現場で育むべきPLとは

→最終年度に日本版PLの定義を固めることを目的とする

4. PLの啓発法

→対象：子ども、指導者、保護者

5. 研究成果の公開方法

- 1) HP (JSPO/JSPO-ACP総合サイト) への情報掲載 (Physical Literacyとは)
- 2) 教育機関向けポスター (壁新聞) の発行
→PLに関するコラムの掲載. 2022年1月発行号を想定?
- 3) Sport Japanへの情報掲載 (特集記事)
- 4) JSPO公認スポーツ指導者養成テキストへの掲載
- 5) 関係機関との連携 (スポーツ庁, 教育機関, NF)
→学習指導要領, スポーツ基本計画, 競技者育成・指導者養成指針ほか

6. その他

1) 今後の課題

- 来年1月上旬にオンライン調査を実施することとする。
- 質問紙の和訳を整え、鈴木班員から各班員へ展開し、12月中旬（12,13日）を目処に整理を完了させる（原盤が確認しやすいように整える）。
- 和訳して調査に使用して良いか調査団体に確認する。

会議資料

1. 中国におけるPhysical literacyの定義（鄧班員ご提供資料）
2. Physical Literacy for Life（鈴木班員ご提供資料）
3. Physical Literacy in Europe : Physical Literacy for Life (PL4L)（岡出班員ご提供資料）
4. JSPO-ACP普及に関するオンライン調査質問項目（事務局提供資料）

参考. PJ会議# 5 議事録

身体リテラシー（Physical Literacy）評価尺度の開発

令和3年度プロジェクト会議# 7 議事録

日時：12/24(金) 14：00～16：00

会場：各所属先（Zoomによるオンライン会議）

議題：

1. JSPO-ACP普及に関するオンライン調査

オンライン調査の概要について、資料に基づき飯野氏より説明し、調査の取り進めについて協議した（資料1）。

- アクティブ チャイルド プログラム（JSPO-ACP）の認知度について、10万人を対象にスクリーニング調査を実施する。スクリーニング調査の結果から、JSPO-ACPを認知している方を対象に、本調査を実施する。
- スクリーニング調査に、Physical Literacy (PL) に関する質問（18問+領域説明4）を追加する。
- 調査対象者が混乱しないよう、JSPO-ACPとPLについての実態調査であることを明記する。
- スクリーニング調査～本調査において、回答者は紐付けされる（PLに関する回答も、同様に紐付け可能と考える：今後調査会社に確認する）。

<スクリーニング調査の項目について>

- 性別について、回答に「その他」を追加する。
- 職業分類（SC4）について、回答を世論調査に対応する選択肢としてはどうか。
- 家族の勤務先をここまで詳細に問う必要はないのではないか（SC6）。

- 子どもの年齢について（SC8）、複数人の子どもがいる場合の回答方法を明記する（もしくは、一人についてのみ回答させる？）。
- 子どもの生活習慣について（SC9）、複数人の子どもがいる場合の回答方法を明記する（もしくは、一人についてのみ回答させる？）。
- 習い事について（SC11）、回答の選択肢を増やしてもいいのではないか（スポーツ少年団の選択肢が目立ちすぎているのではないか）。
- JSPO-ACP認知（JSPO-ACP名称認知度）を問う質問（SC14）について、何を持って「確かに知っている」とするのか。より具体的に記載してはどうか（「内容について理解している」等）。
- SC15について、それぞれの項目の回答を横軸のスケール（例えば1ネガティブ～3ニュートラル～5ポジティブ）にしては、
- 調査対象者のスポーツ歴を問う質問を追加する。

<本調査について>

- JSPO-ACPを認知している方を対象に実施する。
- JSPO-ACPの価値をどのように感じているか聞いてはどうか。
- JSPO-ACPに期待すること、要望や感想も聞いてはどうか。
- Physical Literacy for Life (PL4Life)（議題2参照）の教師・コーチ向けの調査項目を追加する。

2. Physical Literacy for Life：日本版調査

鈴木班員より、International Sport and Culture Association (ISCA) からPhysical Literacy for Life (PL4Life) の和文を作成すること、それを用いて国内の調査を行うことの許可が得られたことが報告された（資料2）。

また、鈴木班員に作成いただいた調査項目の和文について、以下の通り協議された（資料3）。

- 三段階による自己評価のため回答しやすいのではないか。
- 全体に共通する冒頭の説明文を明記する。
- 回答を恣意的に誘導するような文言でなければ、意識・追記して問題ないと考え。直感的

に回答してもらえようように促すことを意図した表現にする。

- スクロール画面であれば領域毎の説明で十分。設問毎のページ表記であれば都度説明が必要。
- 選択肢の例示は、文末の括弧書きに集約させる。
- 実際の回答画面を見ながら修正することが可能か、調査会社へ確認する。

3. その他

1) 今後のスケジュール・課題

- 年内にご意見をいただく（班員各位→鈴木班員）
- 1月7日(金)：鈴木班員から質問全文を班員各位へ再提案
- 1月11日(火)：調査書式確定
- 1月15日(土)～29日(土)：調査実施
- 2月末：調査結果第一報の報告

会議資料

1. JSPO-ACP普及に関するオンライン調査（事務局提供資料）
2. Physical Literacy for Life（原文）（鈴木班員ご提供資料）
3. Physical Literacy for Life（日英比較表）（鈴木班員ご提供資料）

参考. PJ会議# 6 議事録

身体リテラシー（Physical Literacy）評価尺度の開発

令和3年度プロジェクト会議# 8 議事録

日時：2/17(木) 14:00～16:00

会場：各所属先（Zoomによるオンライン会議）

議題：

1. JSPO-ACP普及に関するオンライン調査

- オンライン調査の概要について改めて確認し、その集計結果を報告した（資料1）。
→スクリーニング調査17問を10万人に対して実施した。ここにはアクティブチャイルドプログラム（JSPO-ACP）のコンセプトに関する説明も含まれる。
→そのうち、JSPO-ACPを認知している人2,000

人に対して、本調査を実施した。

- Physical Literacy（日本語版Physical Literacy for Life（PL4L））に関する実態調査は、4,000名（JSPO-ACP認知者2,000名と非認知者2,000名）を対象に実施した。
- JSPO-ACP認知者と非認知者とに分けて、それぞれの項目について比較した。
- 今後の分析方法について協議した。
→身体、感情、認知、社会領域毎の傾向を分析する。
→JSPO-ACP認知者、非認知者年代を区別せず、性別毎のPhysical Literacy（PL）の傾向を分析する。
→誕生月をPLの関係性を分析する。
→会議後に班員各位にローデータを共有し、分析方法についてご意見があれば事務局までお寄せいただく。
- 調査結果について、4月上旬にスポーツ庁へ報告する。
- また、JSPOのHPやプレスリリースでも公開する。

2. 諸外国におけるPhysical Literacyを用いたジュニアスポーツに関する取り組み

1) カナダ：CAPLとLTAD

Canadian Assessment of Physical Literacy（CAPL）とLong Term Athlete Development（LTAD）について資料に基づき説明した（資料2）。

- 2005年～LTAD
- 2019年～LTD in Sport and Physical Activity
→競技者に限定したガイドラインではないこと強調した
- “Developing Physical Literacy”
→2005年版：ジュニア期にフォーカス
→2019年版：生涯にわたる取り組み
- 現在、カナダでは4つのPL評価法が（4つの団体がそれぞれの立場から）提案されており、混乱気味の様相。
- この4団体が中心となり、“Canada’s PL Consensus Statement”が2015年に作成された。
→ジュニア育成において競技（スポーツ関係）

団体中心のLATDから生涯スポーツ、PLを強化する方針へシフトされたような印象を受ける。

- 2000年頃のDeliberate Practice（熟考された練習：集中練習～早期専門化推奨モデル）から、2007年頃のDeliberate play（楽しむためのスポーツ参加）へ
- 2000～2005年に、カナダ（元々はイギリス）で提唱されたLTAD
 - ×早期専門化，競技会過多，基礎的スキルの不足
 - 幼少期に「身体リテラシー」を育成
- 2015, 2016年ジュニア・アスリート育成モデル～エビデンスに基づく検証
 - 超エリート競技者の条件
 - ・幼児期によく遊んでいる
 - ・スポーツへの専門化がより遅い
 - ・専門の練習時間は変わらないが，専門外の遊びや練習時間が多い
 - ・いろいろなスポーツを経験している
- ジュニア・アスリートのトレーニングが体力，体組成，認知能力，学業成績に及ぼす影響（ドイツの研究）。
 - トレーニングについて
 - ・LTADに基づいてトレーニング内容を決めた。
 - ・被験者の年齢から，LTADの“Leran to train”ステージに該当。
 - ・基礎的動作スキルのトレーニングを主体とする。
 - 結果，体力向上，体脂肪減少，筋量増加が見られる一方，学業成績には差が見られなかった。
 - LTADに基づくトレーニングであれば，かなり高いトレーニング量であっても，スポーツ障害がなく，高い継続率を示し，認知・学業面での悪影響も見られなかった。
- 障がい者スポーツにおいてもPLの育成という概念が重要となる。
- 青少年と成人を対象とする場合，評価方法が変わる？
 - 根幹は変わらないのではないか。

2) オーストラリア：APLFとFTEM

森丘班員からAustralian Physical Literacy Framework (APLF) とFTEM^{*}について資料に基づき説明した（資料3）。

※F (Foundation), T (Talent), E (Elite), M (Mastery)

- Australian Institute of Sport (AIS) が，PLに関するポータルサイトを運営している。
<https://www.sportaus.gov.au/physical-literacy>
 - 4領域に基づくPLの概念
 - 実践事例
 - 方策，ガイドラインなどを紹介
- PLに関するレビュー（Australian Sports Commission, 2017）
 - 幼少年期に培われるものがPL。その後の活動は多岐にわたるべき。
 - フィジカルリテラシーのエビデンスの質は極めて低い。
 - フィジカルリテラシーを全体的な統合概念として捉えることが重要。
 - フィジカルリテラシーは，様々な分野の知見を解釈するための首尾一貫した「系統的枠組み」を形成する可能性がある。
 - 特定の心理的構成要素の選択に拘束されるのではなく，身体，感情，認知，社会といった分析レベルや学習領域を記述する方が，より強固で包括的なものになるだろう。
 - 現在の測定方法は，何かを測定しているかもしれないが，おそらく多くのフィジカルリテラシーの支持者が意図する根本的な「もの」ではないだろう。
 - フィジカルリテラシーは常に進化し続けるダイナミックなプロセスであり，そのためどの時点でも各個人に固有のものである。
 - これらの知見が，オーストラリアにおけるPL定義のベースとなっている!?
- Australian Physical Literacy Framework (APLF)
 - 4つのドメイン毎にエレメント（ステージ0～4）が示される。
 - 4つの領域を統合的に活用できるようなりテ

ラシーを身につける。

→生涯スポーツにわたるステージモデルとして、各領域のステップアップを示した。

3) その他

- カナダ：発育発達段階に応じた評価？
- オーストラリア：生涯を通じたステージ評価？
- 日本版PL評価法を検討する際に、障がい者に対する配慮（障がい者にも活用いただける内容にすること）が必須ではないか。
- 発育発達段階とスポーツへの関わり方を統合させたモデルが求められる。

3. 研究報告書の作成

1) コンテンツ案

2) 作業分担

3) 作成スケジュール

- 目次案について協議し、別添の通り修正した。
- 用語の表記：身体リテラシー？フィジカルリテ

ラシー？

→令和5年度末までに日本語表記を固める。

- 報告書原稿について、3月末日までを提出期日とする。

4. その他

1) 今後の課題

会議資料

1. JSPO-ACP普及に関するオンライン調査 資料（事務局提供資料）
2. From LTAD to LTD in Sport and Physical Activity（伊藤班員ご提供資料）
3. PL Australia（ASC）, PL Framework（森丘班員ご提供資料）
4. 令和3年度研究報告書目次案（事務局提供資料）

参考. PJ会議#7 議事録

令和3年度 日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究報告V
身体リテラシー（Physical Literacy）評価尺度の開発 - 第1報 -

◎発行日：令和4年4月30日

◎編集者：内藤 久士（身体リテラシー（Physical Literacy）評価尺度の開発研究班長）

◎発行者：公益財団法人日本スポーツ協会 <https://www.japan-sports.or.jp>

〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号

JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE

◎印刷：ホクエツ印刷株式会社 <https://hokuetsup.co.jp>

〒135-0033 東京都江東区深川2-26-7
